第 68 回

読売教育賞

最優秀受賞者 実践報告書集

「実践活動の概要」

2019年（令和元年）

読売新聞社

高円宮妃殿下と第68回最優秀賞受賞者、関係者

（2019年11月26日、読売新聞東京本社で）

読売教育賞は、読売新聞社が教育の発展の一助にと創設し、
1952年に第1回募集が行われました。
対象は教育の現場で意欲的な研究や創意あふれる指導を行い、
優れた成果をあげている教育者や団体です。
各部門最優秀賞受賞者に賞状、盾と副賞(1件50万円)を、
優秀賞受賞者には盾、選外の方には記念品を贈ります。

第68回読売教育賞は以下の13部門の募集を行いました。
①国語教育②算数・数学教育③理科教育④社会科教育⑤生活科・総合学習⑥健康・体力づくり⑦外国語・異文化理解⑧児童生徒指導⑨カリキュラム・学校づくり⑩地域社会教育活動⑪ＮＩＥ⑫幼児教育・保育⑬美術教育

第 68 回　読売教育賞選考委員

①国語教育	明治大学教授	斎藤　　孝
②算数・数学教育	東京理科大学教授	秋山　　仁
③理科教育	NPO法人ガリレオ工房理事長	滝川　洋二
④社会科教育	筑波大学名誉教授	谷川　彰英
⑤生活科・総合学習	上智大学教授	奈須　正裕
⑥健康・体力づくり	筑波大学名誉教授	田中喜代次
⑦外国語・異文化理解	津田塾大学教授	田近　裕子
⑧児童生徒指導	東京学芸大学名誉教授	河野　義章
⑨カリキュラム・学校づくり	学習院大学特任教授	佐藤　　学
⑩地域社会教育活動	東京大学名誉教授	佐藤　一子
⑪NIE	福山大学教授	小原　友行
⑫幼児教育・保育	東京大学教授	秋田喜代美
⑬美術教育	日本体育大学教授	奥村　高明

読売新聞東京本社編集局教育部長　富所　浩介
（部門順、敬称略）

＊うち、算数・数学教育、社会科教育、生活科・総合学習の３部門を除く、10部門で最優秀賞授賞。

目　次

【国語教育】
主体的・対話的で深い学びを実現する新時代の国語科単元学習
……有松浩司

【理科教育】
宇宙への夢を育み生徒を科学研究の世界へ誘ったクラブ活動の実践
……谷川智康

【健康・体力づくり】
生徒が主体で取り組む食育活動
……岡山県勝央町立勝央中学校（団体）

【外国語・異文化理解】
学びへの意欲を高め、グローバルなコミュニケーション能力を育む
英語教育の取り組み……角﨑洋人

【児童生徒指導】
健やかな生徒の心の成長を支援するために
……久原　弘

【カリキュラム・学校づくり】
地域の子どもを見守る家庭学習への支援
……小鹿野輝芳

【地域社会教育活動】
未来に羽ばたけ「地球にやさしいエンジニア」
……飯尾美行

【ＮＩＥ】
主体的に学び合う児童の育成―子供たちが創るＮＩＥ―
……宇都宮市立豊郷中央小学校（団体）

【幼児教育・保育】
地域のなかで育つ子どもたち　「出雲崎のお獅子を作りたい」
……出雲崎保育園（団体）

【美術教育】
幼児教育に美術的な視点を持ち込むことでなにが起きたのか
……浅羽聡美

主体的・対話的で深い学びを実現する新時代の国語科単元学習

――単元「ドキュメンタリーを作ろう」より――

広島県竹原市立吉名学園　教諭

有松（ありまつ）　浩司（こうじ）

1979年生まれ。2001年広島大学学校教育学部卒業。2001年広島県尾道市立山波小学校勤務。2005年広島県尾道市立御調中央小学校勤務。2009年広島県竹原市立中通小学校勤務。2016年広島大学大学院教育学研究科卒業（現職教員大学院派遣制度）。2016年広島県竹原市立吉名小学校勤務。2018年広島県竹原市立吉名学園（義務教育学校）赴任。現在に至る。連絡は、広島県竹原市吉名町2671番地まで。

第 68 回　読売教育賞から

【国語教育】

実社会意識した単元

「プロフェッショナル　ドキュメンタリー番組を作ろう」

教室の黒板に、児童の意欲をかき立てる文字が躍る。10月末、担任の有松教諭が小学6年の児童15人に対し、これから挑戦する取材やシナリオ作り、映像制作に向け、要点を丁寧に説明していく。

授業では、海の生物を専門とする獣医師と板金職人の2人が歩んできた半生を紹介する教材を使い、それぞれの人物を紹介する文章に共通する表現方法について、児童たちが発表した。プロフィル、仕事を始めたきっかけ、乗り越えた苦難……。起承転結の組み立てで抑揚をつけ、面白さを引き出す。「ドキュメンタリーは映像作品であり、物語に近いんだ」。有松教諭の言葉に、児童らは大きくうなずいた。

昨年度の取り組みでは、児童らが町に飛び出し、地元で「プロ」として暮らすお好み焼き店の店主ら4人に取材を敢行した。ドキュメンタリーを完成させた児童らは「地元の良さを改めて発見できた」などと振り返った。

「実社会とのつながりを意識した単元を作れた。新しい授業作りへの糸口になるはず」。確かな手応えを感じている。（石田仁史）

斎藤孝・明治大学教授「新学習指導要領の目指す『社会に開かれた教育課程』『主体的・対話的で深い学び』を明確にモデル化している。読む・書くという基本を忘れず、国語科の実践として成果を上げている」

ドキュメンタリー作品の作り方を説明する有松教諭（広島県竹原市で）

国語教育部門最優秀賞
広島県竹原市立吉名学園　有松浩司教諭　40

【最優秀賞選評】

斎藤　孝　明治大学教授

「新学習指導要領の目指す『社会に開かれた教育課程』『主体的・対話的で深い学び』を明確にモデル化している。読む・書くという基本を忘れず、国語科の実践として成果を上げている」

1 はじめに

今、学校教育は大きな転換点を迎えている。新学習指導要領では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な知識や力を育む『社会に開かれた教育課程』の実現」を目指すという旨が示された。そしてその上で、これからの時代に必要な資質・能力を育成すべく、「主体的・対話的で深い学び」の実現が強く求められている。

実際に小学校の国語科を例にとってみると、教師の指示や発問に沿って文章を読んだり書いたりする活動がほとんどであり、その学習をなぜ行うのか、その学習が社会でどのように役立つのかということは、多くの児童が理解できていない中で学習が進められてしまっている。小学校国語科教育においても、主体的・対話的でかつ深い学びの視点から学習過程を改善し、より実社会の場で生きるような新しい教育活動を展開していく必要がある。そしてそのための教材や指導法を開発することは、今後の国語科教育において、急務の課題であると考える。

本研究では、ドキュメンタリーづくりを中心としつつ、実社会とのつながりを重視した国語科の単元を開発することを主な目的とする。ドキュメンタリーとは、事実をもとに取材・編集を通して作られた作品のことであり、本単元においては、地域の様々な職業の方を取材の対象とする。ドキュメンタリーを作るためには、まずはドキュメンタリーがどのようなものであるのか、どのように番組が構成されているのかを読み解く力が必要となる。また取材を行う際は、相手の仕事の内容やこれまでの苦労等について会話を通して引き出す力、つまりは話す力・聞く力が求められる。さらには、取材した内容を番組として構成していく上で、書く力や感情を込めて語る力も必要となる。このように、ドキュメンタリーづくりという共通の目標に向かう中で、主体的・対話的で深い学びが生まれ、その結果、個々の言葉の力を育成できるのではないかと考えた。

以上のようなことを目的として、本研究を進めていく。実社会という場を意識した主体的・対話的で深い学びを実現する中で、国語科で求められる言葉の力をしっかりと育んでいきたい。

2 研究の具体

研究に先立ち、まずは本研究の大きな柱となる「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業について論じ、それを踏まえて本単元の中核となる「ドキュメンタリーづくりとその意義」について考察する。

1．主体的・対話的で深い学びを生み出す授業とは？

研究に先立ち、主体的・対話的で深い学びについて整理しておく必要がある。本研究で目指す主体的・対話的で深い学びについては、中央教育審議会答申(平成２８年)に詳しく述べられている。同答申では、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためのＩＣＴの効果的な活用についても述べられている。これらを踏まえて、主体的・対話的で深い学びを生み出す授業づくりのポイントを次のように整理した。(以下は筆者によるまとめ)

主体的・対話的で深い学びを生み出す授業づくりのポイント

① 児童が目的や必要性を意識して取り組めるような学習課題を設定すること。またその学習課題は、実社会や実生活との関わりを重視した内容とし、児童が学ぶ意欲をもつことができるようにすること。

② 児童同士や児童と教職員、地域の人などとの関わりを重視し、考えを伝え合ったり議論したり協働したりするような活動を計画すること。

③ 表現活動を重視すること。またそのために必要な情報収集や情報分析、情報発信の過程を大切にし、思考を活性化させること。

④ 電子黒板やタブレット端末等のＩＣＴ機器を効果的に活用すること。

2. ドキュメンタリーづくりとその意義

児童は少なからず、地域への愛着をもっており、かつどこかで社会の役に立ってみたいという思いをもっている。ドキュメンタリーづくりは、自分たちの力で地域をＰＲする活動である。これはまさに実社会への参加型学習であり、児童が目的や必要性を意識し、かつ意欲的に取り組める絶好の活動であると考える。また、ドキュメンタリーを作るためには、地域の方を取材したり友だちと協働したりという他者との関わりが必然となる。さらに、取材・編集の過程を通して、情報収集・情報分析・情報発信が行われる。そこでは、思考も活性化されるし、ＩＣＴ機器の活用も促される。つまり、ドキュメンタリーづくりは、前項に挙げた「主体的・対話的で深い学びを生み出すポイント」をすべて兼ね備えている。

ただし、国語科として目指すべきものは、映像を制作すること自体ではないことに留意したい。あくまでも目指すべきものは、話すこと・聞くこと・書くこと・読むことといった、言葉による見方・考え方を働かせることであり、それに伴って獲得される言葉の力の育成である。そこで、ドキュメンタリーづくりが、どのような言葉の力を獲得させることができるのか、事前に整理しておく必要がある。

まず、ドキュメンタリーづくりで必要となるのは、ドキュメンタリーがどのような構成でできているのかを理解することである。そのためには、実際のドキュメンタリーのシナリオを読解し、どのような構成で作られているのかを読み解く必要がある。本校で使用している国語科の教科書には「プロフェッショナルたち」（東京書籍６年）という、まさにドキュメンタリーづくりのモデルとなる教材がある。自らもドキュメンタリーを作るという目的のもと、この教材の特長を読み取らせることで、小学校高学年で求められる文章構成や表現技法に着目した読みの力を育成することができる。

次に必要となるのは、取材を通して必要な情報を聞き出すことである。先述したように、今回のドキュメンタリーづくりでは、様々な職業にかかわる地域の方を取材の対象とする。必要な情報を聞き出すためには、当然話す力・聞く力が必要となる。特にここでは、小学校高学年で育成すべく「自分が聞こうとする意図に応じて話の内容を捉える」力を育成することができる。同時に、他者との受け答えを通して、時と場に応じた丁寧な話し方も身に付けさせることができる。

最後に、取材した内容をもとに、ドキュメンタリーを作る際は、当然書く力が必要となる。ドキュメンタリーが映像作品だとしても、映像に仕上げるに当たっては、前段として文章を書かなければならない。その際は、集めた情報を分類したり関係付けたりして伝えたいことを明確にすること

や、筋道の通った文章になるように文章全体の展開や構成を考える力を育成することができる。さらに実際に映像化する場面では、完成した文章を、抑揚をつけたり感情を込めたりしながら工夫して読み語る力も育成することができる。

このように、ドキュメンタリーづくりは、児童にとって楽しく取り組める魅力的な学習であると同時に、話す力・聞く力・書く力・読む力を総合的に育成できるという、二つの大きな良さがある。単元の構想とそれぞれの場面で付けたい力を図1に整理する。

■ 図1　ドキュメンタリーづくりと育てたい言葉の力及び資質・能力との関連

なお、本単元は、カリキュラム・マネジメントの観点から、総合的な学習の時間との関連を図る。話すこと・聞くこと・書くこと・読むことにかかわる指導内容については国語科、映像の編集などそのほかの指導事項は総合的な学習の時間とし、相互に関連づけながら単元を進めるものとする。

3 授業実践

1.学年・教科

第6学年・国語科
（一部総合的な学習の時間）

2.単元名

ドキュメンタリーを作ろう
ー私の町のプロフェッショナル！ー

3.単元の主なねらい

【国語科としての主なねらい】

○人物の生き方に関する複数の文章を読み、文章構成（起承転結）や表現技法の効果を読み取ることができる。（読むこと）

○地域の方への取材を通して、自分の聞こうとする意図に応じて話の内容を捉えることができる。（聞くこと）

○集めた情報を分類したり関係付けたりしながら、自分の伝えたいことを明確にするとともに、筋の通った文章になるように、文章全体の構成や展開を考えて書くことができる。（書くこと）

【そのほかの育てたい資質・能力】

○地域に対する愛着を高めるとともに、地域の一員として、社会に貢献しようとする思いをもつことができる。

○取材や編集に必要な情報機器の基本的な操作の技能を身に付けることができる。

4.単元計画　（）は時間

①地域のケーブルテレビから依頼があったことを知り、自分たちの力でドキュメンタリーを作って、知識の様々な職業の方を紹介したいという意欲をもつ。（1）

②「プロフェッショナルたち」（東京書籍6年）を読み、ドキュメンタリーの作り方（文章構成、表現技法等）を学ぶ。（2）

③地域の方を取材し、必要な情報を集める。（2）

④集めた情報を整理し、ドキュメンタリーを書く。（2）

⑤動画編集を行い、番組を作る。（4）

※国語科1時間、総合的な学習の時間3時間

⑥地域の方を招待して「プロフェッショナル完成披露会」を行い、感謝の気持ちを伝える。（2）

※総合的な学習の時間

5.授業の実際

【第1時　ドキュメンタリーを作ろう】

① 本時の目標

ドキュメンタリーがどのようなものであるのかを知るとともに、番組を制作して地域に貢献しようという意欲をもつことができる。

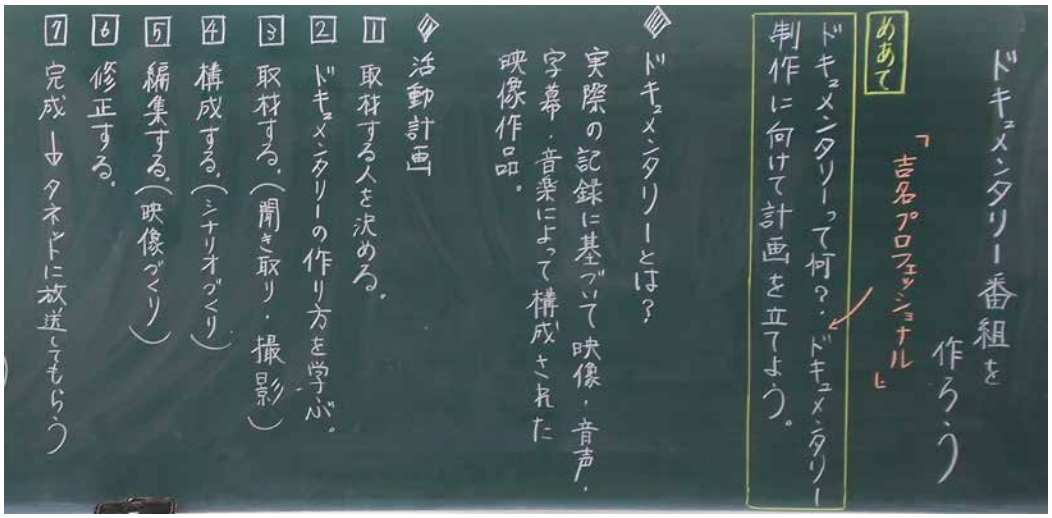
② 授業について

導入となる第1時では、まず地域のケーブルテレビから、「地域の様々な職業の方を紹介するドキュメンタリーを作ってほしい」という依頼があったことを告げた。もちろんこれは、児童の学習への意欲付けを図るためであり、実際には、事前に教師が地域のケーブルテレビと連携し、番組ができたら放送してもらうようにお願いをしておいた。

ケーブルテレビから依頼があったことを知った児童からは、「面白そうだけど、ドキュメンタリーって何ですか？」という質問があった。そこで、ド

キュメンタリーがどのようなものであるのかを理解させるために、実際のドキュメンタリー番組「プロフェッショナル 仕事の流儀」（NHK）を視聴させた。そのあと「自分達の町にもプロフェッショナルはいるかな？」と投げかけたところ、地域のいろいろな商店の方やお菓子づくり職人さんなど、たくさんの人が挙げられた。そこで、「地域の方を取材し、吉名版『プロフェッショナル』を作ろう」という学習課題を設定し、地域の方について取材し、映像制作を行う計画を立てた。

なお、その後の話し合いで、地域のお好み焼き屋さん、お菓子作り職人さん、ジャムづくり職人さん、呉服屋さんの４名を取材対象とすることになった。



第1時の板書

【第2時　ドキュメンタリーづくりの極意を学ぼう①】

① 本時の目標

「海獣医師、勝俣悦子の仕事」と「板金職人、国村次郎の仕事」を比較して読み、基本的なシナリオの書き方（文章構成、表技法等）を捉えることができる。

② 授業について

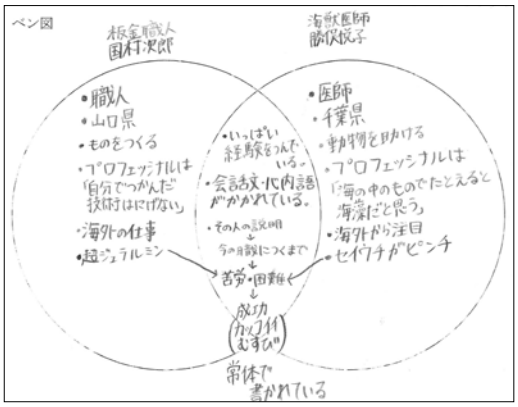
本単元で使用する教材「プロフェッショナルたち」（東京書籍６年）では、３人の人物が取り上げられている。それぞれ文章の量に違いはあるものの、どれも起（人物の紹介）・承（その職業を志したきっかけ・歩み）・転（失敗や困難を乗り越えた転機）・結（終末）という四段形式で書かれている。またナレーターの語り口調を再現した表現で書かれていることから、①体言止めが多い②情景を表す表現が多い③人物の言葉が多く引用されている④余韻が残るように終末を工夫しているといった特長がみられる。これらの文章の構成や特長は、ドキュメンタリー番組のシナリオを作成する際のモデルとして活用することができると考えた。そこで第２時は、まず「海獣医師、勝俣悦子の仕事」と「板金職人、国村次郎の仕事」の二つの文章のみを取り上げて、文章の比較を通して、これらの特長に気付かせることにした。

実際の授業では、まずベン図（資料参照）を使って二つの文章を比較させた。その上で、どのような共通点があるか、全体の場で話し合わせた。（以下、児童から出た主な意見）

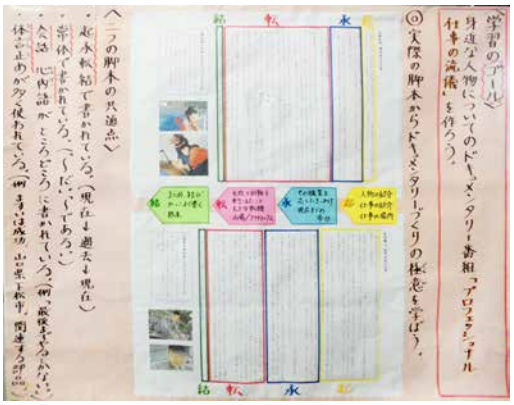
- どちらも人物の仕事ぶりについて書かれた文章である。
- 前半に、その人の仕事の紹介（仕事内容、仕事の場所）が書かれている。
- なぜその仕事に就こうとしたのか、きっかけとなる出来事が書かれている。
- その仕事において、大変だったこと（苦労・挫折）と、どうやってそれを乗り越えたかが書かれている。物語の山場（クライマックス）に似ている。
- 常体で書かれている。
- 体言止めが多く使われている。
- 文章全体の最後の終わり方がかっこいい。

これらの気付きは、掲示物としてまとめ、児童がドキュメンタリーづくりの参考にできるようにした。

第2時の板書。二つの教材文を比べて読み、書き方の共通点を見つけることができた。



児童ノート。ベン図を使って二つの文章を読み比べている。



第2時の後に作成した掲示物。
児童が見つけた共通点を教師がまとめた。

【第3時　ドキュメンタリーづくりの極意を学ぼう②】

① 本時の目標

教材文や友だちの考えた文章から、終末の表現の工夫について考えることができる。

② 授業について

第3時は、三つ目の教材「パティシエ、杉野英実の仕事」を扱った。ここでは、教材文の一部（終末の部分）を隠して提示し、その部分に入る

文章を考えるという授業を行った。終末（起承転結の「結」の部分）の文章はそれほど多くないが、視聴者に余韻をもたせる大切な役割をもっている。そのため、選び抜かれた言葉と巧みな技法で、豊かに表現されている。ドキュメンタリーを作る際、終末の文章には特にこだわってほしいと思い、そのための練習として、本時を位置付けた。

児童には、以下（右）のような文章を提示し、□に入る言葉を自分なりに考えさせた。

児童に提示した文章

目指す菓子は、ただおいしいだけではない、□菓子。そのためには、いっさいの妥協も許さない。
朝から晩まで、ひたすら菓子作りに没頭する毎日。□

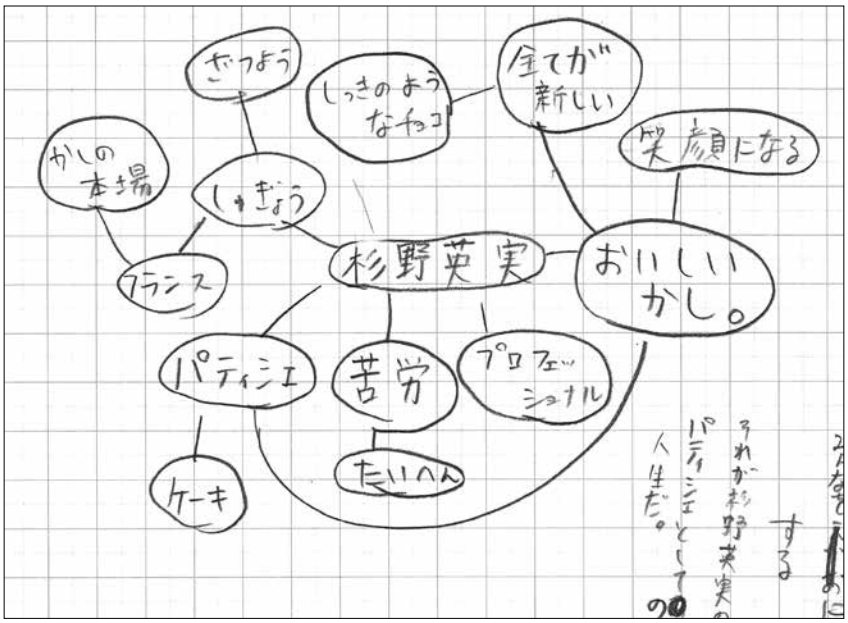
□

□

実際の文章

目指す菓子は、ただおいしいだけではない、人を幸せにする菓子。そのためには、いっさいの妥協も許さない。
朝から晩まで、ひたすら菓子作りに没頭する毎日。店の二階にある厨房には、今日もまた杉野の大声がひびく。

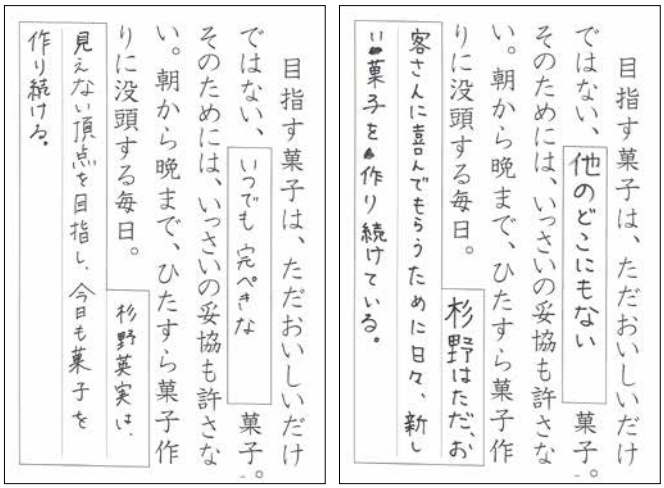
イメージマップ（資料参照）を活用してパティシエ杉野英実に関する言葉を集めさせてから、□に入る文章を考えさせるようにした。



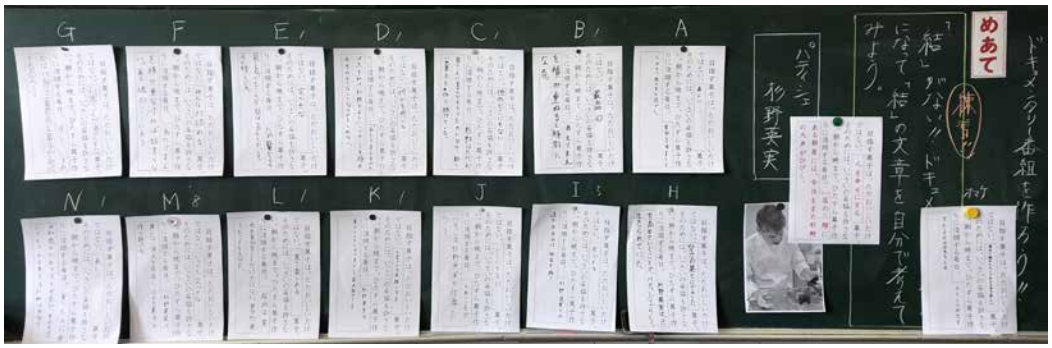
児童が思考を整理するために使ったイメージマップ。

誰が書いたかは公表せずに黒板に並べて、自分が良いと思う文章を選ばせたところ、支持が多かったのが右の二つである。その理由として、「体言止めをうまく使っている」「使っている言葉がかっこいい」などの意見が挙がった。

続いて、筆者（脚本家）が書いた文章を提示し、児童に文章を評価させたところ、「『人を幸せにする菓子』という表現が良い」「体言止めや情景文があっていい」などの意見が出された。



児童が考えた文章の一例。



第3時の板書。起承転結の「結」の部分を児童自身に考えさせ、どれが最も心に響くかを話し合わせた。
最後に実際の文章を提示し、その良さを考えさせた。

【第4～5時　地域の方を取材しよう！】

① 本時の目標

地域の方への取材を通して、自分の聞こうとする意図に応じて話の内容を捉えることができる。

② 授業について

基本的なドキュメンタリーの作り方が分かったところで、いよいよグループに分かれて地域の方の取材を行った。グループごとにタブレット端末を持ち、事前に考えておいた質問事項をもとに、職業の内容や職業のこだわり等について、詳しく取材を行った。なお、取材に行く前には、自分たちに必要な情報が何であるかを確認させるとともに、グループ内で、聞き取りの練習をさせてから本番に臨ませた。

第２時でドキュメンタリーの起承転結を学習していたので、児童はそれらにかかわる情報を引き出そうと必死になっていた。中には、なかなか必要な情報を引き出せず、苦労しているグループも見られた。取材を行う児童の姿は真剣そのものであった。

地域のお好み焼き屋さん

地域のお菓子職人さん

地域のジャムづくり名人さん

地域の呉服屋さん

グループごとの取材の様子。「読むこと」の学習を活かし、児童は以下のような情報を取材で引き出そうとしていた。

- 仕事の内容。
- 仕事に就いたきっかけ。
- これまでに味わった大きな挫折や困難。
- その挫折や困難をどのように乗り越えたか。
- 自分にとってプロフェッショナルとは。

※取材をしながら、タブレットで動画を撮影させていただいた。

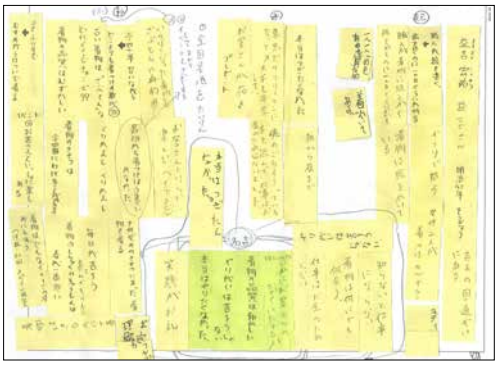
【第6～7時　ドキュメンタリー番組のシナリオを作ろう】

① 本時の目標

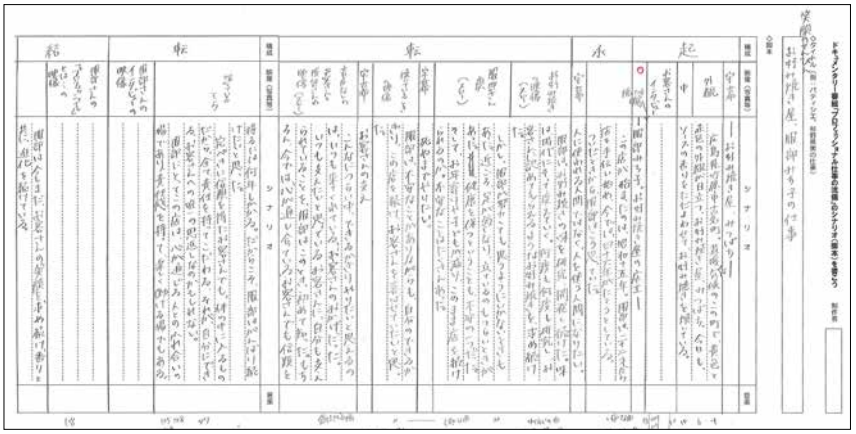
集めた情報を分類したり関係付けたりしながら、自分の伝えたいことを明確にするとともに、筋の通った文章になるように、文章全体の構成や展開を考えて書くことができる。

② 授業について

第6～7時は、グループごとにシナリオづくりを行わせた。まずは集めた情報を付箋に整理し、構造図を作ってから原稿を書かせた。その際は、これまでの学習を活かして、基本的には、起（人物の紹介）・承（その職業を志したきっかけ・歩み）・転（失敗や困難を乗り越えた転機）・結（終末）という構成で書くこと、そして様々な表現技法を効果的に活用することの2点を特に意識させた。



児童が作成した構想図。集めた情報を、付箋を使って分類・関係付けていた。



児童が作成した実際のシナリオ。学習したことを活かして、起承転結で構成を考えていた。

【第8時　ナレーション（音声）を録音しよう】

① 本時の目標

語りを意識して、速さや間、抑揚などに気を付けながら、自分たちが作成した文章を読み語ることができる。

② 授業について

児童はこれまでに教科書の教材「プロフェッショナルたち」を、速さや間、抑揚などに気を付けて読み語る練習を継続して行ってきた。本時はその練習の成果を活かし、自分が作成したシナリオを読み語り、録音する時間とした。

本校で使用しているタブレット型端末には、録音の機能が備わっている。また、一度録音したものもすぐさま再生することができる。児童はタブレット型端末に向かって直接声を吹き込み、何度も再生しては、納得のいくまで録り直しをしていた。なお、この録音の作業については、多い子で10回も録り直しを行っていた。授業時間内に終わらず、休み時間にも熱心に取り組む児童の姿が見られた。

ナレーションを録音する児童の様子

【第9～11時　映像を編集しよう】

※総合的な学習の時間

① 本時の目標

集めた写真（映像）や録音したナレーション、字幕、音楽（BGM）を組み合わせて、ドキュメンタリー番組を作成することができる。

② 授業について

動画編集に関しては、総合的な学習の時間として実施した。これまでも別の単元で経験していたので、予想以上にスムーズに作業を進めることができた。

タブレット型端末を使って映像を編集する児童の様子。集めた写真や動画、事前に録音した音声、動画編集ソフトに備わっている様々な音楽を組み合わせて、映像を制作することができた。

【第12～13時　完成披露会をしよう】

※総合的な学習の時間

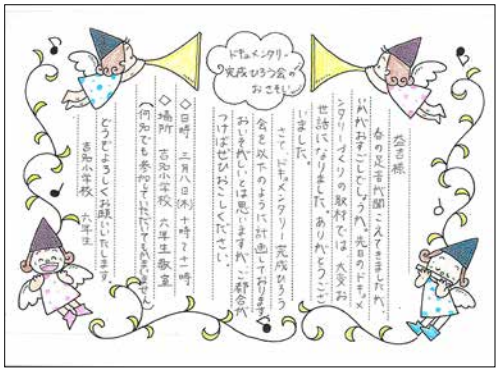
① 本時の目標

地域の方を招待して完成披露会を行い、自分たちの学びと感謝の気持ちを伝えることができる。

② 授業について

児童からの強い希望もあり、取材を快く引き受けて下さった地域の方を招待し、「吉名プロフェッショナル完成披露会」を行うことにした。第12時は、分担してそのための準備を行った。まず映像化したドキュメンタリー番組を、紙媒体として原稿用紙に清書した。これは、取材した方の中には高齢の方もおられたので、映像だけでなく

紙媒体もプレゼントした方が良いのではという児童の発案によるものである。また、同時に招待状を書いたり、感謝の気持ちを込めた色紙を作ったりもした。なお、映像のパッケージの作成については、教師が担当した。



児童が地域の方に送った招待状

地域の方に贈った色紙・映像DVD・原稿

第13時は、いよいよ完成披露会の本番である。簡単に内容の紹介をした後に自分たちが作成した映像を流し、全員でグループごとの作品を視聴した。さらに、自分がドキュメンタリー番組を作る中で学んだことや感謝の気持ちを一人一人発表し、最後は事前に作成しておいた感謝の色紙を手渡した。最後に地域の方から一人一人お礼のメッセージをいただいたときは、どの児童も嬉しそうな表情を浮かべていた。

ドキュメンタリー完成披露会の様子。手作りの会で、お世話になった地域の方に感謝の思いを伝えることができた。

なお、単元の終了後には、制作した映像を地域のケーブルテレビに送り、数週間にわたって何度も放映していただいた。自分たちの学習の成果が実社会の場で放映されることに、児童はとても満足していた様子だった。

4 授業の考察

本研究では、実社会とのつながりを重視する中で、主体的・対話的で深い学びを実現することを目的として授業を行った。授業を通して完成した作品の一例を以下に示す。

紙面の都合上、全員の作品を示すことはできないが、どの子も起（人物の紹介）・承（その職業を志したきっかけ・歩み）・転（失敗や困難を乗り越えた転機）・結（終末）という、読むことの学習で学んだ構成を活かし、四段形式でドキュメンタリーを書くことができていた。また、個人差はあるものの、体言止めや情景描写等の表現技法を効果的に使った豊かな表現も多く見られた。

なお、単元の終了後に、ある児童が書いた振り返りを以下に示す。

> わたしは、服部さん（地域のお好み焼き屋さん）のドキュメンタリー番組を作りました。服部さんのお店には何度か行ったことがあったけど、仕事について話をしたことはなかったので、たくさんおどろいたことがありました。特に心に残ったのは、服部さんの「死ぬまでこの仕事をやりたい」という言葉です。自分の仕事を一生続けたいと思う強い気持ちがすごいと思いました。服部さんはとてもやさしい方で、いろいろな質問に答えてくださいました。今回の学習を通して、吉名町の良さをあらためて発見できました。ケーブルテレビで放送されるのが楽しみです。これからも町の良さをどんどん見つけて、しっかりPRしたいと思いました。　（下線は筆者による）

この児童の作文からも、ドキュメンタリーを作る過程を通して、児童が地域の方と積極的にかかわり、地域の良さを改めて発見できたことへの喜び、さらには地域社会の一員として、地域に貢献できたことへの満足感がうかがえる。

このように、主体的・対話的で深い学びを通して、国語科としての言葉の力、さらにはこれからの時代の必要な資質能力を一層高めることができた単元といえる。

5 成果と課題

研究の成果と課題を以下のように整理した。

【成果】

- 話すこと・聞くこと・書くこと・読むことを相互に関連させながら、児童の言葉の力を高めることができた。同時に、社会貢献への意欲等、これからの時代に必要な資質・能力を育成することができた。
- ドキュメンタリーづくりを中心とした「主体的・対話的で深い学び」を実現する国語科単元学習を開発することができた。特に、実社会とのつながりを意識した単元を作ることができたことは、今後の授業づくりに向けて大きな糸口になると考えられる。

【課題】

- 対話的な学びの観点からも協働学習は大切だが、個々の言葉の力の育成が曖昧になることがある。一層つけたい力を明確にし、個人差に応じた指導が求められる。
- 今回の研究は、あくまでも第６学年国語科の一つの単元の実践を示したにすぎない。地域とのつながりを重視した学習はすべての学年で行うことが重要である。今回の実践に限らず、今後も新しい国語科単元学習を積極的に開発していく必要がある。

主要参考・引用文献

- 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(平成28年、中央教育審議会答申)
- 小学校学習指導要領解説総則編（平成29年、文部科学省）
- 小学校学習指導要領解説国語編（平成29年、文部科学省）

宇宙への夢を育み 生徒を科学研究の世界へ誘った クラブ活動の実践

兵庫県立洲本高等学校　主幹教諭

谷川智康（たにがわともやす）

1962年生まれ。1986年北海道大学理学部数学科卒業。同年より兵庫県立高等学校に教諭として勤務。1993年定時制高校勤務の傍ら神戸大学大学院理学研究科に入学し惑星科学を学ぶ。1995年同大学院修了（理学修士）。2018年兵庫県立洲本高等学校に赴任。現在に至る。連絡は、兵庫県洲本市上物部2-8-5洲本高校まで。

第 68 回　読売教育賞から

【理科教育】

宇宙の面白さ説く

理科教育　最優秀賞

兵庫県立洲本高　谷川智康・主幹教諭 57

自作のロケットを打ち上げて、2万㍍上空から地上の景色を撮影する――。そんな壮大な夢の実現に向け、風洞装置でロケットの空気抵抗を小さくする実験を続ける科学技術部の部員たち。「主体的にやっているな」。真剣なまなざしで考察するその姿を谷川主幹教諭は優しく見つめた。

昨春、母校の洲本高に転任した頃、科学技術部の活動は停滞していた。宇宙に興味を抱く生徒は多いが、研究テーマを適切に設定できるケースは少ない。難解な数式や理論に苦しんで一歩踏み出せない生徒もいる中で、熱意を持って面白さを説き、やる気を引き出してきた。

自身も、未知なる天文の世界にひかれてきた。小学1年生の時、宇宙船「アポロ11号」の月面着陸を見て関心を抱き、30歳の時に神戸大学大学院へ入り、惑星科学の研究に打ち込んだ。経験を生かし、前任の県立三田祥雲館高では天文部を創設。指導を受けた生徒は、世界でも例を見ない宇宙天気予報のデータベース化などに挑戦し、成果を出した。

谷川主幹教諭は「課題を克服して成長する生徒と喜びを分かち合えるのが幸せ」と目を細めた。

（清水裕）

手作りの風洞装置で実験に取り組む生徒を指導する谷川主幹教諭（右）（兵庫県洲本市の洲本高校で）

滝川洋二・NPO法人ガリレオ工房理事長「高校生に世界初となる研究を指導し、論文は国内だけでなく英語にして海外でも発表するなど、優れた指導のノウハウを紹介している。多くの先生に役立つ実践だ」

【最優秀賞選評】

滝川洋二　NPO法人ガリレオ工房理事長

「高校生に世界初となる研究を指導し、論文は国内だけでなく英語にして海外でも発表するなど、優れた指導のノウハウを紹介している。多くの先生に役立つ実践だ」

はじめに

宇宙へ興味を抱く高校生は多い。しかし、興味に任せていては適切なテーマ設定ができない場合がある。また難解な数式や理論に阻まれ、今一歩前へ踏み出せないでいる生徒も多い。私は部活動を通じ、そのような生徒に対し、難解な事柄を優しく解説しながら無理なく最先端の科学研究の世界へ導く手法で成果を挙げてきた。特別なことをしたわけでなく、指導者自身が研究を楽しむ気持ちを忘れず、生徒に熱意を持って働きかければ、誰にでも可能なことである。

私は小学1年生の時に見た、アポロ11号の月面着陸をきっかけに宇宙に興味を抱くようになった。大学では数学を専攻し高校の数学教員となるが、宇宙への夢絶ち難く、1993年4月、30歳の時に、夜間定時制高校の勤務の傍ら神戸大学大学院に入学し、昼間は惑星間塵の研究に打ち込んだ。大学院修了後も自分の研究を続け学会発表や論文の執筆に勤しんだ。研究を続ける中で、世界で誰よりも早く科学的な事実を知ることが、研究の醍醐味であると強く実感するようになった。そこで、ぜひ生徒にも、この研究の魅力・楽しさを伝えたい、と考えるようになり、2000年頃より天文普及活動に精力的に取り組みはじめた。時系列で列記すると2001年より有馬高校科学部で8年間、2009年より三田祥雲館高校天文部で9年間、そして洲本高校科学技術部の顧問を2018年より2年間務めてきた。有馬高校と洲本高校では、活動が停滞していたクラブを宇宙への興味を引き出すことで、部活動を大いに活性化させ部員を増やし再興した。有馬高校で私が指導し、流星塵を研究した一人の女子生徒は、現在、宇宙研究開発機構（JAXA）研究員となり小惑星探査機「はやぶさ」、「はやぶさ2」計画に携わっている。また三田祥雲館高校で私が創設した天文部では小惑星の自転周期の研究や太陽活動の観測とそのデータベースを活用した研究により、世界的にも注目される著しい研究成果を上げることができた。現在、勤務する洲本高校では、科学技術部でモデルロケットをテーマに設定し風洞実験を行いながら空気抵抗の少ない機体開発に取り組んでいる。今回は主として三田祥雲館高校天文部、現在も継続している洲本高校科学技術部での実践に絞り報告をまとめた。

1 三田祥雲館高校での活動

1．三田祥雲館高校の紹介

2009年4月に兵庫県立三田祥雲館高校に着任した。これまで、理科部や科学部の顧問を務めたことはあったものの、天文に特化した“天文部”に関わったことがなかったので、2010年に天文部を創設するに至った。

三田祥雲館高校は平成14年に創立された単位制・普通科の県立高校である。兵庫県三田市郊外の住宅地と関西学院大学三田キャンパスに隣接している。イタリア初期ルネッサンス風の校舎が特徴的であり、「学びの館」と呼ぶにふさわしく、ここに集う高い理想を胸にした若人が、この学びの舎の空に浮かぶ「祥雲（めでたい雲）」のように明日の世界に広がりわたり、社会の各分野で活躍・貢献する人材となることを願い、三田祥雲館高等学校と命名された。教科「探究」を中心として自ら学び考える姿勢を大切にしている。進学先として国公立大学に毎年100名前後、また関西学院大学に100名以上など私立大学にも多くの進学者を送り出している。私が勤務していた9年間は主として1学年7クラス規模であり約

840名の生徒が在籍し学んでいた(2018年度より各学年6クラスになっている)。私が着任した2009年度よりスーパーサイエンスハイスクール(SSH)に6年間指定されていた。SSHによる理科教育の先進的な取り組みの効果があって平成23年度スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会において「文部科学大臣賞」を受賞するなど目覚ましい成果を上げた。2017年度より再びSSHの指定を受けており現在、第II期SSHのプログラムが展開されている。

2. 三田祥雲館高校天文部の活動内容

①天文部の設立

三田祥雲館高校に着任すると同時に、周りの教員の理解や協力を得ながら天文部を創設すべく準備を開始した。2009年は7月22日に奄美大島や北硫黄島など日本の南部で皆既日食が起こる年であった。ニュースなどでも非常に注目された天文イベントであったこともあって、奄美大島での観測を一般生徒に募集をしたところ4名の生徒が応募してきた。残念ながら曇天のため皆既日食の観測を行うことはできなかったが、天文部設立の足掛かりはできた。その後も、校内で天体望遠鏡を使って観望会を開き続け、天文に興味を持つ生徒を開拓した。三田祥雲館高校の第I期SSHの目的の一つとして“理数系クラブ活動の支援”とあったため、天文部を立ち上げるには良いタイミングであった。2010年1月まず天文同好会として女子10名でスタートした。最初の活動は反射望遠鏡の作成であった。SSHの予算で望遠鏡を購入することもできたが、望遠鏡のしくみをしっかりと理解してほしいという気持ちで30cm反射望遠鏡を作成することにした。主鏡となる30cm反射鏡は以前から交流があった川西市の三好清勝氏がご自身で磨かれたものを寄贈してくださった。望遠鏡の鏡筒には直径35cmの巨大な紙筒であるボイド管を用い、主鏡を支えるセルなどは加工のしやすさから木材を用いることにした。女子10名でノコギリやドリルを手にしてさながら工作部のような活動で天文同好会がスタートした。この自作望遠鏡で未発見の小惑星を見つけようとしていたため最初に発見された小惑星ケレス(現在は準惑星)にちなみ“ケレス望遠鏡”と名付けた。

②ACM2012への参加

天文部の活動が注目を浴びるきっかけとなったのが国際学会Asteroids, Comets, Meteors(ACM)2012への参加であった。ACMはほぼ3年に1回、世界各地で開催され、世界中から太陽系小天体の研究者が集う学会である。2012年5月、アジアで初めて新潟で開催され約400名の研究者が参加した。

私たちは福岡県立小倉高校、愛知県立一宮高校と共に、2011年秋、国立天文台三鷹キャンパスで開催されたライトカーブ研究会でギャラッド彗星の測光観測について発表した。その場に出席されていたACM2012の組織委員会委員長を務める佐々木晶教授から「来年のACM2012へ高校生も参加してみませんか?」とお誘い頂いたのが参加の契機であった。高校生がACMで発表することは1983年にACMが始まって以来、初めてであった。まず、日本語で発表をまとめた上で、ポスターとシナリオの英訳を行っていった。2012年5月は後述する金環日食観測にも取り組み、準備は多忙を極めたが、生徒たちの若さと勢いでなんとか乗り切った。

発表は5月19日(土)新潟市トキメッセで行われた。高校生たちのポスター発表にはし座流星群の大出現予報で有名なアッシャー博士や小惑星研究の第一人者であるマサチューセッツ

工科大学ビンゼル教授など錚々たる面々が訪れてくださった。生徒たちは発表練習してきた成果を発揮し、身振り手振りの英語を駆使しながら立派に発表を行った。生徒の感想のひとつである。

> 始まる前はポスターを置いて逃げ出したいような気持ちになりましたが、いざポスターセッションが始まると無我夢中で説明していました。終わってみるとすごい舞台に立てた自分が信じられなくて今も夢のような気持ちです。

ACMへの出場記念として三つの高校には各学校名を小惑星に命名していただき、サプライズプレゼントとなり、非常にありがたかった。この小惑星Sandashounkanは後に大切な研究対象の一つとなる。しかし、ACMに参加した最大の成果は、この大舞台を乗り越えたという大きな自信が生徒たちの胸に残ったことである[1] [2]。

写真1　ACM2012での生徒の発表の様子

③太陽半径の測定

教科書や理科年表では太陽半径は696,000kmとされているが、これはおおよその半径であって、詳しい値の測定を試みた機会は少ない。2012年5月21日、日本の太平洋側を中心に金環日食が観測された。この金環日食の際に起こるベイリービーズを利用して太陽半径の測定

写真2　生徒たちが観測した金環日食。太陽の光が途切れているところが月の地形を反映したベイリービーズである

写真3　2012年5月21日、金環日食観測中の生徒たち

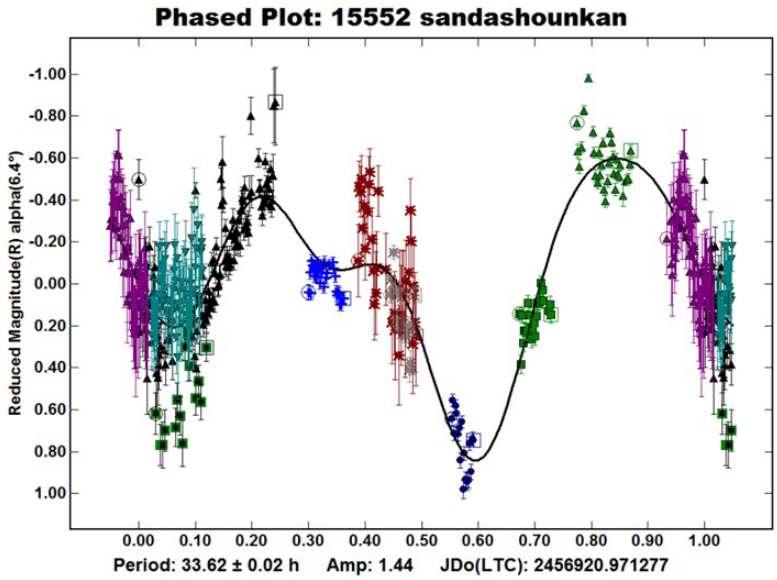
に挑戦した。ベイリービーズの発生原因は、月の山や谷による地形である（写真2）。月や太陽の天球上での位置は極めて正確に予報される。すなわち月の中心から谷底や山頂までの距離は正確に測定できるのである。天球上で月を定規として用いることにより太陽の直径を計測しようとしたのだ。月探査機「かぐや」によって月面上の詳しい地形が数メートルの精度で測定された直後であり、その成果を活用する絶好の機会だったのである。本校の所在地である三田市の10km程南を金環帯と部分食帯の境界線が通ることが予想されていた。この境界線上はベイリービーズが長時間観測されるので観測地に適している。私たちは境界線上の3箇所に分かれ遠征による観測を行い成功した。誰もまだ取り組んだことがない研究だったため、解析方法は試行錯誤を繰

り返し苦労したが太陽半径を696,016kmと求めた[3]。この研究により第36回兵庫県高等学校総合文化祭自然科学部門発表会　地学分野で最優秀賞を受賞し、さらに初の全国大会出場となった第37回全国総合文化祭自然科学部門研究発表　地学部門で優秀賞を受賞した。

④小惑星Sandashounkanの自転周期の測定

2019年8月現在、発見されている小惑星は約80万個あるが、自転周期が判明しているのはその数％である。ACMへの参加を記念し誕生した小惑星Sandashounkanもそれらの自転周期が未知である小惑星の一つであった。小惑星Sandashounkanは比較的大きな軌道傾斜角を持っており、命名当初の2012年～2013年は北半球からの長時間観測が難しい位置にあった。2014年秋より北半球でも観測できる位置に移動して来たため観測を開始した。小惑星の自転周期を決定するには長時間にわたる連続観測が不可欠である。そのため、ターゲットの小惑星の“衝”のシーズンに観測をする必要がある。衝とは太陽―地球―小惑星の3天体がこの順にほぼ一直線上に位置し、一晩中、地球から小惑星が観測できる位置にある状態である。私たちは2014年9月から11月、及び2016年1月から2月の衝に観測を行った。まず、2014年9月に行った最初の観測で小惑星Sandashounkanは約30時間の長い自転周期を持つことが予想された。小惑星の通常の自転周期は数時間～20時間程度であるのに比べかなり長時間の自転周期である。そこで、観測方法を考えた結果、リモート望遠鏡の利用に思い至った。リモート望遠鏡はインターネットを通し遠隔操作可能な望遠鏡であり、商用のものなら誰でも利用することができる。日本からの観測だけでなく地球の夜を追いかけるように、欧米のリモート望遠鏡を用い長時間連続観測を計画した。多大なデータを処理するのに苦労し解析の末、自転周期を33.6時

■ 図1　小惑星 Sandashounkan の自転周期を示すグラフ



生徒たちの手で英語論文にまとめ学術誌 Minor Planet Bulletin に報告し掲載された。

間と決定した。この研究成果を発表するには専門誌に英文で結果を報告する必要があった。かなり高いハードルであったが、英語による論文執筆に挑戦した。世界中の小惑星の観測報告はMinor Planet Bulletin(MPB)に集まる。いきなり何もないところから論文の執筆には困難が伴う。そこで、MPBに発表されている他の研究者の論文を読み、英“借”文の手法で論文作成に取り組んだ。既刊の論文の中に自分たちが記述したい表現を探し、固有名詞や数値を置き換えていく手法である。そのようにして英語論文作成という高いハードルを乗り越え、投稿し査読の末、掲載された［4］。この手法をマスターし生徒たちは自力で英語論文が作成できるようになっていった。

また、2016年1月からの観測でも地球の夜を追いかけるように長時間連続して観測する方法を継続した。2014年の観測ではリモート望遠鏡を用いたが、リモート望遠鏡は長時間独占使用ができない上、予約を入れても機材の不調で満足の行く画像がえられないことがある。何より費用がかさむなどの欠点があった。そこで、小惑星の観測者のメーリングリストに依頼し共同観測者を募った。その結果5ヶ国5名の方々より協力の申し出があった。これら協力の依頼などは生徒たちが英文メールを作成し、小惑星観測者のメーリングリストに投稿した。このようにしてリモート望遠鏡に代わり、共同観測者による長時間観測を実施し、小惑星Sandashounkanの自転周期を31.12時間とさらに詳しく求めた[5]。この成果は2015年第59回　日本学生科学賞兵庫県コンクールで兵庫県知事賞、また2016年第40回全国高等学校総合文化祭自然科学部門研究発表　地学部門で奨励賞を受賞した。

小惑星の自転周期についてはこのSandashounkanの他にも四つの小惑星について求めて結果をMPBに報告した。そのうちの一つ小惑星Nshiharimaの自転周期は未知であって私たちの手で初めて求められた［6］［7］。ちなみにNishiharimaは三田祥雲館高校天文部が観測でよく訪れている兵庫県立大学西はりま天文台にちなんで名付けられた小惑星である。

⑤2nd Thai Astronomical Conference（student session）への参加

日本では2000年より毎年日本天文学会ジュニアセッションが開催され、中高生による天文研究の発表の機会が設けられている。近年、タイ天文学会のスタッフがタイの高校生を引率しジュニアセッションに参加していた。日本のジュニアセッションに刺激を受けタイでも高校生に研究発表の場を設けたいということで、タイ天文学会の主催で2014年からThai Astronomical Conference student session（TACs）が開催されることになっていた。2015年12月タイ、チェンマイで行われたTACsにタイ国外から唯一の団体として参加した。その頃の天文部は小惑星の自転周期の結果をMPBに報告し科学英語の教育に力を注いでいたときでもあったし、英語圏での発表ではなかったが、英語で発表する絶好の機会であったからだ。

「The lifetime and the area of the sunspot」及び「The determination of the rotation period of the asteroids」のタイトルで部員全員がポスターまたは口頭発表を行った[8]。英語による発表を準備するために、校内の外国人英語教員と積極的に会話する機会を増やし、本番前の2ヶ月は部活動の時間は部員同士も雑談含めすべて英語で会話する“All English部活”にするなどして特訓をした。このような努力の甲斐があって、TACsでの発表は大成功し、部員たちの大きな自信と成長へ繋がった。

写真4　タイの生徒たちと記念写真

写真5　TACs の口頭発表

⑥宇宙天気予報への挑戦

大規模な太陽フレアは停電や通信障害など人間生活に重大な悪影響を与え、その発生予測は重要な課題である。特に地球に影響が及ぶフレアの発生予測を宇宙天気予報といい、その手法はまだ確立されていない。

２０１３年度より私たちは太陽黒点のスケッチ観測及び一眼レフカメラによる撮影を開始した。観測対象を夜間のものに限定すれば、高校生の部活動ではどうしても生徒が望遠鏡を触る機会が減ってしまう。そこで昼間でも観測できる太陽を研究対象の一つにし、輪番制で昼休みに観測することにすれば生徒たちの観測スキルをアップさせることができる。以上の理由から太陽観測を一つのテーマに選んだのである。自分たちの観測結果から、太陽黒点の面積とその寿命の関係を調べることによって大きなエネルギーを持つ面積の大きな黒点は、必ず長い寿命を持つことがわかった。しかし、このように限定的な成果は出たものの、部の歴史が浅い自分たちの観測データだけでは研究できるテーマが非常に限定されてしまう。太陽活動は長期間の変化を観測しないと正確に捉えることができないのである。そこで世界各地の観測所が公開している１００年以上の観測データベースを活用することにした。私自身、太陽物理に関しては乏しい知識しかないので2015年度より京都大学花山天文台　北井礼三郎先生の指導を受けながら大規模フレアの発生と磁場タイプ別の黒点の発生について調査を行ってきた。

２０１６年度からは大規模なフレアの発生状況を詳細に調べるため、太陽黒点の面積だけでなく、フレア指数、磁気タイプ、発生した緯度の情報を収集し、一つのデータベースにまとめることにした。これらの情報が一つにまとめられたデータベースが存在しなかったからだ。なお太陽黒点の磁気タイプにはα、β、γ、δの四つのタイプがあり、黒点の磁極の分布でβγ、γδなどと分類される。私たちの研究の中で、β，γ，δの各タイプが組み合わさった黒点を“βγδ複合タイプ”と呼ぶことにした。情報収集源としてアメリカ海洋大気局（ＮＯＡＡ）およびウイルソン山天文台のデータベースを用いた。サイクル２１～２４の一万個以上の黒点の調査をし、太陽活動サイクル毎に磁気タイプ別の太陽黒点の出現数とフ

写真6　みやぎ総文表彰式後の記念写真

レア発生率をまとめた。その結果、

① βタイプまで発達した黒点がもっとも多い。
② 発生数は少ないが、フレアを発生させているのはほとんどβγδ複合タイプである。
③ 各サイクルにおいて、太陽活動のピークのやや後にβγδ複合タイプの黒点が多く発生している。

以上三つのことがわかった。

このことから大きなフレアの発生を警戒するには太陽活動のピークが衰えた頃であるということが言えるという結論を導いた。この事実は、単一の太陽活動サイクルでは示唆する先行研究があったものの四つの太陽サイクルに渡って確認されたのは初めてであった。これらが2017年度前半までの研究である。この研究成果は第41回全国高等学校総合文化祭自然科学部門研究発表　地学部門で発表し最優秀賞を受賞した。さらに生徒たちの手で英語論文にまとめ学術論文として発表された［9］。

また、2017年度後半の研究では、地球の磁場撹乱に影響があるのは、それらの複雑な磁場タイプのβγδ複合タイプの黒点が太陽表面の中央経度付近で発生した場合に起こり易いことをつきとめた。最終目標の宇宙天気予報に到達したのは、私が転勤後のことになる。生徒たちは（1）太陽黒点の磁場タイプ、（2）太陽黒点の発生位置、この2点に着目すれば天気予報のように地球への影響を降雨確率と同様にパーセントで表示できることに気づいた。そして自分たちの手によって2018年度からは“宇宙天気予報”を三田祥雲館高校天文部のホームページ上で発表している。2017年度後半～2018年度にかけての研究は第42回全国高等学校総合文化祭自然科学部門研究発表　地学部門で発表し優秀賞を受賞した［10］。

⑦天文普及活動

以上、研究活動の主なものについて報告して来たが天文部の活動のもう一つの柱である「天文普及活動」についても触れておく。

9年間で合計17回の「祥雲星空教室」を開いた。月食、金環日食、彗星などその時々の天文現象の解説を行うことや季節の星空案内などを生徒たちが市民の方、特に子どもたちに向け行ってきた。「なぜ月食が起こるのか」や「彗星とはどのようなものか？」等専門的な事柄を子どもたちにもわかるように解説を工夫することは生徒たちに大変勉強になった。望遠鏡の操作はもちろん解説用のパンフレットや原稿作りなど、まさに「教えることは学ぶこと」を生徒たちが体現した、と言える。その他、文化祭でのプラネタリウム解説などでもコミュニケーション能力を高めるのに非常に良いトレーニングとなっていた。そして何より市民の方から「ありがとう、大変面白くためになりました」という声かけを頂けたことが生徒たちの励みになった。このように天文普及活動は生徒たちにとって研究活動とならび大切な活動の要素である。これらの星空教室については広報や運営の補助などの面で三田市教育委員会や三田市立図書館と連携し外部の方々にも大変お世話になり支えて頂いた。

さらに、「天文普及」については共同観測HYPAR（HYogo Prefectural Asteroid Research）も2010年から4年間主宰してきた。本校の部活動にとどまらず、兵庫県内の他の高校、また天文部がない高校生（個人）を対象にした共同観測学習会である。兵庫県佐用町の兵庫県立大学西はりま天文台で年に数回、小惑

星を中心とした観測を行い、測光や位置測定など、解析技術を共同で学習した。普段交流することが少ない天文部の活動で、複数の高校が交流し、切磋琢磨しあう貴重な機会となっていた。

写真7 祥雲星空教室の様子

2 洲本高校での活動

1. 洲本高校の紹介

洲本高校は1897年(明治30年)に旧制洲本中学として設置され、創立122年目を迎えた兵庫県下屈指の伝統校である。全日制普通科では現在、1年生240名、2年生の237名、3年生235名、合計712名が学んでいる。「至誠、勤勉、自治、親和」が校訓である。制服が自由化されていたり、校則を必要最小限のものにとどめ制定していたりと自由な校風と昭和28年センバツ高校野球で優勝した野球部を中心に部活動が大変盛んで文武両道が特徴である。進学においても毎年60名前後の生徒が国公立大学に合格しており、卒業生の大多数が大学に進学する。

写真8 自作風洞装置。上側の写真の下部にある円筒の機械が工事用の送風機で、空気を下へ吸い出し、写真下側の上部網の上に置いた上皿秤で機体が気流に引っ張られ増える重力を測定している

2. 洲本高科学技術部での活動内容

私は洲本高校に2018年4月に赴任し、科学技術部の顧問となった。着任当時は部員が10名いたものの、定まった研究テーマもなく、活動は停滞していた。

着任したからには、生徒に科学研究の楽しさを味わってほしいと思った。“天文”をテーマに持ち込みたい気持ちもあったが、押しつけにならぬよう在籍する部員の気持ちを大切にしようと話し合いをもつことにした。生徒が提案するものと、私が指導できる範囲を考慮し、ロケット作りの他に、天体望遠鏡作り、電波望遠鏡の作成などが候補に上がった。天体そのものが研究対象ではなくても、宇宙は根強く生徒たちの興味を引く舞台であることを実感した。最終的には“宇宙風船”で有名な岩谷圭介さんの取り組みなどを参考に自作ロケットを高く飛ばし、20000m上空から地上の景色を写真に撮ろう、ということになった。いきなり大きなロケットを作ることはできないので、簡単なモデルロケットやペットボトルロケットに取り組むことにした。最初はインターネットの情報や参考書を元に、ただ単に見様見真似でロケットの組み立てを行っていた。しかし、空気抵抗を考慮した機体を作成するためには風洞実験が必要であることが分かり、昨年度末より風洞実験に取り組んだ。風洞実験の他の取り組みについてもテーマ別に個々説明する。

①風洞実験を用いた機体の開発

効率よく飛行するロケットを風洞実験の検証に基づき作成するのが目的である。飛行するロケットに作用するのはエンジンによる推進力、機体の重力および空気による抵抗力の三つである。黒色火薬を用いたエンジンは法令で既製品しか使えないので、これら三つのうち自分たちで制御できるのは空気抵抗力である。空気抵抗を求めるには理論計算のみでは無理で風洞実験を行う必要がある。そこで自作の風洞実験装置を作成することにした(写真8)。他校の高校生が作った前例を参考に、私たちが入手可能な送風機や木材を用いロケット専用の縦型の風洞装置を設計し、制作した[11]。ロケットの先端部分(ノーズコーン)と羽根については様々な形状がある。先行研究でノーズコーンについてはオージブ型のものが、また羽根については角張らない楕円型の形状のものは空気抵抗が少ないと言うのが通説になっている。まず、私たちは先行研究の結果が正しいかどうかを確認するところから始めた。その結果、ノーズコーンと羽根については先行研究の結果が正しいことは確認できた。しかし、空気抵抗が最も小さいノーズコーンと羽根を組み合わせて機体を作成しても、一番空気抵抗が小さな機体とはならないことが実験により、確認された。さらに形に関わらず羽根の枚数を3枚より、4枚にした方が、空気抵抗が小さくなることがわかった。本来、抵抗体となる羽根の枚数が多い方が空気抵抗の値が小さくなるのは大変興味深い事実であった。当初、ノーズコーンについては市販品を用いて実験を行っていたが3Dプリンターを導入することにより自分たちで口径と長さの比を自由に設定したノーズコーンを作成できるようにした。現在、様々に条件を変えたノーズコーンと羽根の組み合わせを用いて風洞実験と打ち上げ実験に取り組み、空気抵抗が最小となる機体の研究を行っている［12］。

②缶サット

缶サットとは飲料缶サイズの模擬衛星を作成し、自作ロケットで数十～数百mの高さに打ち上げ、気象データや地形データ等を取得するのが目的である。2000年頃より中高生～社会人がチ

ームを作って取り組む競技会が開かれるようになった。高校生のみを対象としては2008年より毎年、缶サット甲子園が開かれている。洲本高校も昨年より缶サット甲子園に参加している。缶サットの観測機器の電力を全て太陽電池で賄う「エコサット」を作り2年連続参加した。残念ながら全国大会への出場は逃したが、その独創性は審査員の方々から高い評価を得た。

写真9　ロケット教室の様子。下側がグラウンドでの打ち上げの様子で、写真中央に白い航跡を引き発射されたロケットが写っている

③ロケット教室

三田祥雲館高校で行っていた星空教室同様に洲本高校においても、年に数回、地域の小中学生を対象としたロケット教室を開いている（写真9）。ケント紙を用いロケットの機体を作成してグラウンドで発射体験をしてもらう流れである。火薬を用いた自作ロケットを打ち上げる数少ない機会であり、大変好評を得ている。作る機体の型紙は風洞実験に基づき部員たちが考案作成して、今年度は上述のように3Dプリンターで作ったノーズコーンを提供している。当日の運営はもとより、広報、募集、参加者への連絡など事前の業務も全て生徒たちの手で行っている。

3　まとめ

1.「世界初」を目指し駆け抜けた9年

三田祥雲館で過ごした9年間は、本稿にまとめてきたように「太陽半径の測定」、「小惑星の自転周期の決定」などまさに高校生と一緒になって未知を追い続けた毎日であった。天文学は他の分野に比べアマチュアでも最先端の成果を上げやすい学問である。特に彗星、小惑星及び流星など太陽系内の天体に関しては、世界的にも昔から日本のアマチュアが活躍し、リードしてきた歴史がある。大きな天文台の望遠鏡だけでは様々な天文現象をカバーしきれないことが背景にある。粘り強く、地味な観測を続けることによって、天文学の発展に寄与することは高校生でも十分可能であるのである。このことを生徒自身にしっかりと示し活動を続けてきた。観測や研究は非常に忍耐を要する。そのため高校生には「世界初」は研究を地道に継続するための非常に大きなモチベーションとなる。宇宙に興味を持っている生徒であっても自分の力で適切な研究テーマを見つけ出すのは大変困難である。しかし、指導者が研究動機を引き出すような提案をすることで生徒たちは動き出すことができる。このことが私の実践から証明されたと思っている。

2. 部活動を通しての成長

三田祥雲館高校
天文部員（16回生）の感想

私ははっきり言って、入学したときは天文

部に入る予定どころか、存在さえ知りませんでした。だけど、はるか（友人の名前）が部活見学に行きたいからついてきて欲しいと頼まれ、ついていきました。部活見学をしたものの、私はＥＳＳに入ると決めていたためその意志を変えるつもりはありませんでした。しかし、なんだかんだで、はるかに説得され、はるかもＥＳＳに入るという条件つきで私も天文部に入ることになりました。

天文部の活動は、観望会などの楽しいことから、総文前１週間のパソコン作業という地味な仕事もあったけど、すべて私にとってプラスになることばかりでした。

空を見上げた時、空と星と月、という情報しか持ってなかった私が、文化祭や星空教室でみんなに星について説明する日が来るとは思ってもいなかったし、大勢の前で自分たちの研究内容を発表する日が来るとも思っていませんでした。

ましてや、自分がこんなに天文が好きになるなんて想像もついていませんでした。

天文部に入ったのは自分の意志ではなかったけど、今では天文部が自分の居場所なのだと感じることができ、誘ってくれたはるかにはとても感謝しているし、私にたくさんの知識、出会いを与えてくれた“天文部”にも感謝しています。

洲本高校科学技術部 部長（現3年生）の感想

２０１８年度からロケットをテーマに持ち込むことによって部活は部員全員が共通の目標を持つことにより協力することができ、協調性等が生まれました。自分自身がこの2年間、部長を務めることによりクラブ活動を通して、リーダーシップを執れるようになりました。また、部員全員に気を配ることで、周りを見る力がつきました。何回かの研究発表会やロケット教室のプレゼンテーションを経験して、人に分かりやすい資料をつくる力が身に付きました。これらのコミュニケーション能力が身に付き、人の前で話す事が苦手ではなくなりました。部活動でこれらの力がついたことが大きな収穫だと思います。

これらの感想文を書いた二人の進路先は文系であり理系ではない。部活動を通じ研究者を育成できれば、それは価値あることである。しかし、「科学する心」を持った一般市民を作り出すことができたことも私の実践の大きな成果だと考えている。研究のエキスパートを育成するのと同じく、広く科学を理解できる人材を育成することも大事な目標と捉え今後も精進したいと考えている。

両校の活動を通じ、難解な研究にもモチベーションを保ち続けハードルを一つ一つ乗り越え生徒たちは成長を続けてきた。部活動は教育活動の一環であるので生徒たちの人間的な成長が何よりの目標であると思う。私がプロデュースしてきた部活動で研究する喜びを通じ生徒は大きな達成感を得て、自信を持ち成長していってくれた事が最大の成果である。

参考文献・サイト

［1］谷川智康（2012）兵庫教育8月号 pp36-37

［2］谷川智康、井上哲秀、高村洋三郎（2012）日本惑星科学会誌Vol 21-3 pp313-314

［3］谷河 澪他（2013）第37回全国総合文化祭自然科学部門 論文集

［4］Tanigawa et al.,（2015）Minor Planet Bulletin Vol 42 pp162-163

［5］河合塾みらいぶ（2016）http://www.mili

ve.jp/live/2016sobun/chigaku210/
［6］ Tanigawa et al.,(2015)Minor Planet Bulletin Vol 42 pp248
［7］ Ohmae et al.,(2016)Minor Planet Bulletin Vol 43 pp272-273
［8］ 谷川智康(2016)天文教育 2016年5月号 Vol 27-6 pp31-36
［9］ Mizoguchi et al., (2018)ELCAS Journal vol 3
［10］溝口智貴他(2018)第42回全国総合文化祭　自然科学部門　論文集
［11］藤本正直、楢崎桃子、藤田一貴 (2013) 平成25年度兵庫県立神戸高等学校SSH課題研究発表会論文集 pp15-18
［12］毛笠友瑛他(2020)第11回坊っちゃん科学賞研究論文コンテスト　作品集

生徒が主体で取り組む食育活動

～ピア・サポートで笑顔広がる給食に～

岡山県勝央町立勝央中学校　代表
勝央中学校　校長

光井一恵（みつい かずえ）

1959年生まれ。1983年大学卒業後、岡山県公立中学校勤務。2016年勝央町立勝央中学校に現職として着任。

第 68 回　読売教育賞から

【健康・体力づくり】

「楽しい給食」の工夫

健康・体力づくり部門 最優秀賞　岡山県勝央町立勝央中学校

給食時間、2年1組の生徒32人が6グループに分かれて座る。当番の生徒が献立や食材を説明し、日めくりカレンダーに記された給食の標語を全員で唱和して食べ始めた。光井一恵校長(60)が「今日の給食はどうかな」と尋ねると、生徒たちから「おいしいよ」と元気な声が返ってきた。

岡山県北部の農村地帯にあり、全校生徒約300人。2010年頃は、不登校や遅刻・早退を繰り返す生徒が多く、いじめや暴力行為なども起きていた。こうした生徒は給食を食べないケースが多いため、給食を楽しく食べられる学校を目指そうと、13年度から生徒同士や教職員が支え合う「ピア・サポート活動」に取り組んだ。

生徒同士の支え合いは「毎日大きな声であいさつする」「困っている人に声をかける」などから始まった。やがて、生徒と教職員で保健委員会を設置、給食の残量調査をしたり、給食にまつわる標語や俳句を募集して優秀作を目めくりにしたりする活動に発展した。

学校によると、活動の定着により10年に5%台だった不登校生徒の割合は、15年には1%台に減ったという。光井校長は「この取り組みを続けてもらえるよう努力したい」と話す。（佐藤清貴）

給食を食べる生徒たちに声をかける光井校長（岡山県勝央町で）

田中喜代次・筑波大学名誉教授「学校の落ち着きを取り戻すべく、学校全体で食育活動に取り組んだ素晴らしい実践報告である。受験応援献立や給食標語など、生徒たちの活動は魅力的だ」

【最優秀賞選評】

田中喜代次　筑波大学名誉教授

「学校の落ち着きを取り戻すべく、学校全体で食育活動に取り組んだ素晴らしい実践報告である。受験応援献立や給食標語など、生徒たちの活動は魅力的だ」

1 はじめに

本校のある、岡山県勝田郡勝央町は人口1万1125人、兵庫県と鳥取県との県境に近い岡山県北の農山村である。町内には2小学校と1中学校、1公立高校がある。中学校の生徒数は約300人。ほとんど減少はなく通常学級9クラス、特別支援学級3クラスである。

以前の本校は、不登校生徒が多数在籍。遅刻・早退者・別室登校、長期欠席者も多く、登校しても給食を食べずに下校する生徒が多かった。「孤食」「個食」になっている生徒だ。

給食調理場は各学校に設置されている自校給食方式である。しかし、栄養教諭は町内に一人で、生徒数が一番多い1小学校にのみの配置である。献立は栄養教諭が基本案を作成し、各校の実態に合わせて、給食担当者と調理員で調整する。ランチルームは設置されていないので、調理場から各クラスへ当番が食缶を運び、配膳、教室での食事になる。

地域での社会体育活動は熱心で、中学校の部活動では、夏には地区大会・全国大会へと様々な競技で出場する。そのため中学校卒業後は実家を離れ、下宿や寮に入る進路を選択する生徒の割合も高い。学校教育で食育の推進を図り、食に関わる資質・能力を育成することは「生きる力」として本校生徒に必要である。

不登校や遅刻、早退者は給食を食べる回数も少ない。全校生徒が安心して学校に登校する、笑顔で楽しい学校にする、具体的目標として「楽しく給食を食べられる学校」にしたいと考えた。本校では給食を、「食育」と位置づけている。6年間にわたって教師と生徒がピア・サポートで取り組んだ食育実践を報告する。

2 研究の概要

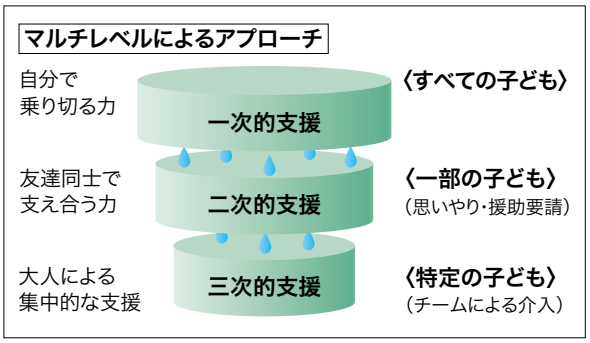
1．学校の状況

以前、本校は授業エスケープや器物破損、暴力行為など生徒指導の課題をたくさん抱えていた。特に不登校の出現率は全国平均、岡山県平均を上回っていた。そこで不登校と学校の荒れを解決しようと様々な取り組みを始めた。

平成25年度から県内不登校対応先進校の取り組みに学び、不登校対策として本校独自に「ぴあっこ育成プロジェクト」の取り組みをスタートした。「ぴあっこ」とはアセスで生徒の実態を把握し、SEL（ソーシャルエモーショナルラーニング）・ピア・サポート・協同学習で生徒たちの自己有用感を高め、主体的に生き生き活動する生徒を育てようとする学校全体の取り組みである。特に「ぴあっこ」という名前の由来となったピア・サポートは、生徒同士が支え合う活動のことである。

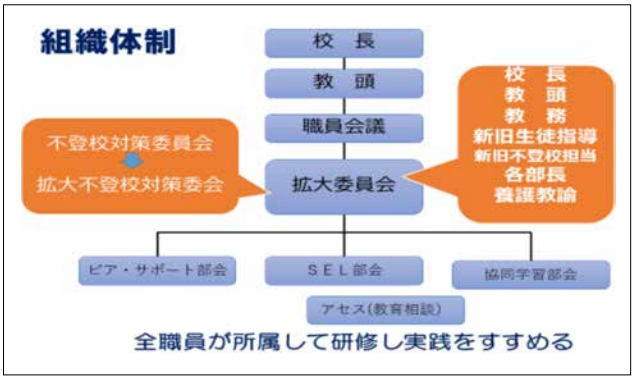
またマルチレベルによるアプローチで考えると本校のこれまでの生徒指導は三次的支援レベルだったのではないかと分析した。一次的支援レベルに力を入れ、生徒が主体的に活動し友達を支えあえる人間関係を築く学校改革をめざし取り組んだ。

（1）ぴあっこ育成プロジェクト



【一次的支援レベル】

- 教育相談週間の実施
  （年2回）
- **ぴあっこ育成プロジェクト**の取り組み
  - 全校で取り組む
    （協働学習、SEL、ピア・サポート）
- アセス実施
  （学級集団理解と生徒理解）



（2）本校不登校支援の方針を確認

平成25年度　不登校対策委員会で、校内の方針を検討。以下のように決定し全教職員で共有した。「学校教育において、一人ひとりの生徒が出合う学習面、心理・社会面、進路面、健康面における問題解決を援助し、成長することを促進するため、一次的支援（すべての生徒）、二次的支援（一部の生徒）、三次的支援（特定の生徒）をトータルに充実させるという視点（マルチレベルでのアプローチ）により教育相談体制を確立する」

2. 研究テーマ

- 学校給食を通して食育を推進する。
- 生徒が主体となり笑顔が広がる給食にする。

上記の研究テーマを設置する。

（1）食育を推進するために

「食に関する指導の手引き　平成31年3月文部科学省」の食育の指導目標・食育の視点を参照し、取り組みを進める。

【食に関する指導の目標】

（知識・技能）

食事の重要性や栄養バランス、食文化についての理解を図り、健康で安全な食生活に関する知識や技能を身につけるようにする。

（思考力・判断力・表現力）

食生活や食の選択について、正しい知識・情報に基づき、自ら管理したり・判断したりできる能力を養う。

（学びに向かう力・人間性）

主体的に、自他の健康な食生活を実現しようと、食や食文化、食料の生産などに関する人々に対して感謝する心を育み、食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を養う。

【取り組みのための食育の視点】

19年文部科学省発行「食に関する手引き」では「食に関する指導の目標」として示されていたものである。平成31年3月の第2次改訂により以下の6つは新たに「食育の視点」として示されたので、それに準じる。

❶ 食事の重要性	❷ 心身の健康
❸ 食品を選択する能力	❹ 感謝の心
❺ 社会性	❻ 食文化

（2）生徒の主体的活動とするために

教職員は全校あげて「ぴあっこ育成プロジェクト」に取り組む。生徒会ピア・サポート活動を開始する。

（3）取り組みを進めるために

● 食育推進 ● ぴあっこ育成プロジェクト	H25～27 **1期** 立ち上げ期	H28～30 **2期** 継続期

３年を区切りに取り組みを進める。

３．１期　立ち上げ期の実践

（1）「ぴあっこ育成プロジェクト」開始

「主体的生徒の育成」を目指し
全教職員で取り組みを共有

学校をあげての本取り組みは３年で区切りをつける。成果を検証し継続の有無を検討することにした。目指す方向を全教職員が共有し全教職員がそれぞれの担当で取り組むことになった。

（2）ピア・サポートって何するの

理解・周知する取り組み開始

【仲間と支え合う活動】とは何か。教師にとっても初めての言葉である。ピア・サポート活動に生徒会と取り組むために、教職員は次の２点を共有した。

❶ 活動の目的

○生徒がピア・サポートの取り組みでリーダーを育成する。

○上級生と下級生の温かいつながりを作る。

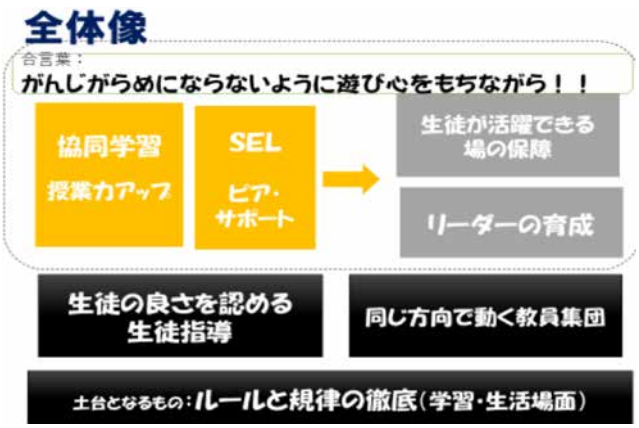
○友人同士で声を掛け合い、自分たちで考えて動くことができるようにする。

❷ 教師の指導上の留意点

○今までやってきた校内の取り組みに、少しピア・サポートの視点を入れてやってみる。

それぞれの委員会で「相手を思う優しい気持ちを育てる」ことで安心した学校ができると考えた。

● 生徒が活躍出来る場の保障　● リーダーの育成
● 生徒の良さを認める生徒指導　● 同じ方向で動く教員集団



（3）保健委員会として取り組むピア・サポート

本校の専門委員会に給食委員会はなく、保健委員会が給食に関する活動を行っていた。主な食育に関する活動を整理すると次のようになる。①配膳当番生徒へのエプロン・マスク点検活動②給食前の手洗い励行呼びかけ③給食残量調査④給食週間の取り組みなどである。

保健委員会でも、新しいピ

ア・サポート活動で自分たちに何ができるか取り組みを考えた。

① 理解周知のために

ピア・サポートについて啓発活動

保健委員会より全校生徒へアンケートを実施し生徒の考える具体的な「支え合う」とはどんなイメージなのかを調べた（保健委員会アンケート文）。

「学校では、毎日楽しいことやおもしろいことしんどいことや、つらいこと、いろいろなことが起こります。そんなとき友だちが一緒に喜んでくれたり、大変なときに手伝ってくれたり、応援してくれたりすると、うれしいし元気が出ます。そんなふうに仲間が仲間を支えることをピア・サポートといいます」「このアンケートはこの学校がもっと、安心で、楽しくて、この学校でよかったと思える学校にするためにはどうしたらいいのかを考えるアンケートです」

＊集計結果を受けた学級の取り組み　例

困っている人に声をかける
あいさつ　毎日大きな声でする
男女問わず　笑顔であいさつをしよう
校内をきれいに使う　仲良くする
など（1年生の学級より）

これを見ると、生徒が「支える」という言葉を具体的にイメージするのは難しいことがわかる。

集計結果をもとに各クラスの班で計画を立て、各クラス保健委員のよびかけで取り組みを始めた。1週間後に保健委員会で反省をまとめた。

- 「ピア・サポ週間」に取り組むことによって、クラス全体の雰囲気が温かくなった気がする。
- 協力してくれた班もあって、うれしかった。
- 班単位のものとは別に、個人単位で考えて行動できるような呼びかけを行う。
- 一人一人がやる気を持って取り組める内容にした方がいい。

生徒からは肯定的な意見がたくさん出た。委員会で考えた提案が採用され、学校全体を動かす変化が生まれたことを、保健委員の生徒は実感した。

「支える活動」の内容として、うれしかったことを具体的に言語化し・意識化させることから、取り組みを始める必要を感じた。

② 生徒集会で啓発活動

具体化・言語化・意識化に向けて

2学期のピア・サポート週間では保健委員会で作成したプレゼンビデオを流した。各委員会でのピア・サポートの取り組みを整理し、生徒の目線で具体的に紹介したピア・サポート活動啓発ビデオになった。

（啓発ビデオ内　宣言文の一部）

「みんなが学校を楽しいと思えるように、仲間の気持ちをきちんと考えることができ、支えあえる学校にしていきたい。そんな学校になるために、一人一人が考えることができるようになってほしい」と、ピア・サポートに取り組んできている。

今の学校はどうだろうか？
＊人のことを思って、声をかけられる学校

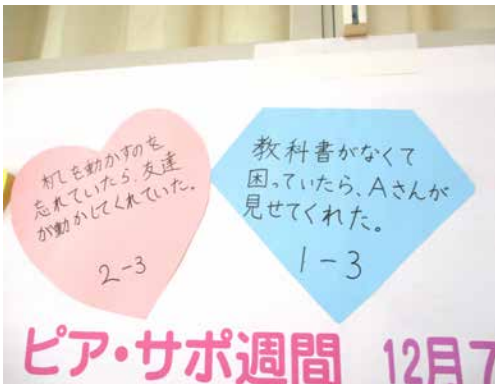
＊生徒同士がお互いのよいところをみつけて、ほめあえる学校

＊男子も女子も仲良く助け合える学校

ピア・サポート週間をそのきっかけにしていこう。

ピア・サポートの活動に取り組むことで、どんな学校を目指すのか、生徒の中から具体的な言葉が出てきた。全校生徒・教職員に定着をはかるために何度もいろいろな場面で、具体的に、言語化・意識化することを繰り返した。

特に平成26年度の「うれしかった言葉」の取り組みは、保健室前に掲示されお互いのいいところを認め合う実践となった。



「ピア・サポート週間」ぴかいち言葉　集まれ

（4）食育活動としての保健委員会

① 残量調査とリクエスト給食（平成26年）

保健委員会の生徒たちがピア・サポート活動として次に考えたのは、それまで行っていた給食残菜調べの結果を、残菜量の少ないクラスの希望を聞いた、リクエスト給食として献立に反映させることだ。栄養教諭と生徒の連携がより必要になってきた。そこで保健委員会便りで全校へ通知した。

保健委員会では給食の残菜の量を調べてその量が少なかったクラスの希望にこたえたリクエスト献立メニューを企画しました。この活動は、ピア・サポート活動を意識して計画しています。栄養を考えて作られた給食を残さないように声をかけあって、楽しくいただく期間にしましょう。

この保健委員会便りには、栄養教諭から全校生徒へのアドバイスも載せた。

- 米自体も重いし水分を含んだりしてさらに重くなるので、あまり残さない方がいいと思います。
- 食べる時間を確保するために、運搬の人や給食当番の人たちは早く準備にかかりましょう。
- きちんと時間内に食べて下さい。
- 牛乳も重いので、寒いけどがんばって飲んで下さい。

ピア・サポートは支え合う活動。支え合うのは生徒だけではない。周囲の大人、様々な人が生徒を応援していることを伝える。自分が支えられていることを感じることもピア・サポート活動の目標だ。

残菜調べ　これまでの取り組みを少し工夫

（取り組み方法）

- 期間１週間（１１月４週）
- 保健委員が給食終了後、残菜の入った食缶を職員室前に持ってきて計測する（残った牛乳も全部入れる）。
- 結果を掲示板に記録する。
- 合計で残菜の少ないクラスから順位を決める。

リクエスト献立

- 残菜調べ1位から3位のクラスにアンケートを実施して献立を作る。
- 1位・主菜決定権（ご飯に合うもの）
- 2位・デザート決定権（5つの中から選ぶ）
- 3位・副菜決定権（5つの中から選ぶ）

＊2月の給食で実施

リクエスト献立は、保健委員会から依頼し、栄養教諭が全体を調整して献立とし実現できた。大いに盛りあがった取り組みになった。保健委員の生徒は、次々と提案した取り組みが実現することに自信を持ってきた。また、全校生徒にも変化が出てきた。給食への関心が高まり、残菜を出さないようにしようという意識が生まれてきた。

リクエスト給食では、選ばれた学級の生徒に主菜・副菜・デザートとして献立の希望をとった。保健委員会でその希望を調整して献立を作ることになったが、献立全体の栄養のバランスを考えることは大変難しく、結局生徒だけでは決めることができなかった。給食献立が、いかに栄養のバランスを考えて作られているか、そして食事には知識が必要だということを、生徒たちは改めて知る機会となった。

② 給食週間　給食標語の取り組み

３学期には給食週間がある。今まで、ここで給食標語を生徒に募集していた。ここでも保健委員会がピア・サポートの視点で新しい取り組みを提案してきた。保健委員会作成「給食標語募集文」を紹介する。

「１月２４日から３０日まで全国学校給食週間です。保健委員会では、給食週間の取り組みとして、食べることの大切さや、給食を作って下さっている調理員さんに感謝の気持ちを込めた標語を（俳句・川柳などもｏｋ！）書いてもらうことになりました。優秀作品は、日めくりカレンダーにして、各クラスや町内の給食調理場で使ってもらう予定にしています」

この年から給食標語の優秀表彰と、優秀標語による給食カレンダーの作成が始まった。学級から選ばれた標語を保健委員会で選考していく。保健委員会で作成した給食標語カレンダーは各クラスにも配布され、給食のはじまりの挨拶とその日の給食標語の紹介が当番の仕事になった。

本校給食調理場へカレンダーを届ける

（５）受験応援献立　作成へ（平成２６年）

好評だったリクエスト給食は、学級委員会と保健委員会で協力して受験を控えた３年生への応援献立を作るピア・サポートの形に変化した。ま

た、食育の面から、栄養教諭と連携して保健委員の生徒たちに食品の栄養素を調べる活動を、新たに取り入れた。

2年生学級委員・保健委員コラボ企画書

『3年生へ応援メッセージを送ろう』

（目的）

- 高校受験に挑む3年生を、応援するメッセージを送ることで、これまでの感謝の気持ちを伝え、入試への不安を少しでも軽減できるようにサポートする。
- 3年生が築いてきた伝統を受け継ぎ、1、2年生も後に続いてよい伝統を作っていく意識を育てる。

（内容）

❶「3年生応援献立」→保健委員会企画

- 3年生に食べたい給食メニューをアンケートで聞き、それぞれのテーマにあった食材を使った（いつもより多く使用した）メニューを考え給食献立に入れてもらう。

❷「応援メッセージ」→学級委員会企画

- 1、2年生が3年生へ応援メッセージを個人で書く。
  模造紙にまとめて3年生へ贈る。

【保健委員会の取り組み】

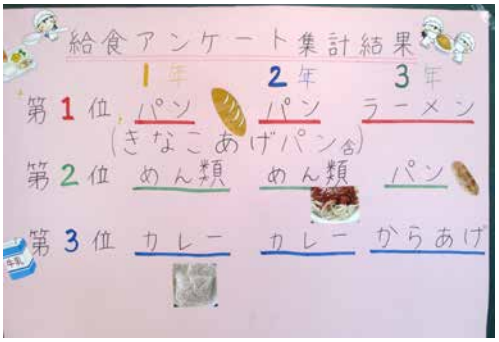
① 3年生アンケート

3年生のみなさんへ

1、2年生の保健委員で3年生に、受験をがんばってほしいという思いから、『3年生応援献立』を考えて給食メニューに入れてもらうことになりました。そこで、3年生の好きなメニューも取り入れたいと思うので、記入してください。ただし、今まで給食で食べたことのあるメニューの中から書いてください。

1、2年生　保健委員会

アンケート結果を集計し玄関に掲示。献立は当日のお楽しみとした。



アンケート結果集計

② 思いを持って　栄養素を学ぶ

保健委員会献立作りの食育としての活動目的は次のものである。

❶ 食品の栄養素の、成分と働きを知る。
❷ 願いを持って献立を作る。

食事は好きなものを食べるだけではない。食事は体と心を元気にする。元気にする働きがそれぞれの栄養素にある。相手のことを思って献立を考える。生徒の主体的食育の活動が始まった。

食育活動　取り組みの流れ

- 『テーマ』を決めて食材について調べてくる
  （1、2年生保健委員　各自で）

受験を応援する ＝ 3年生が好きなメニュー

脳の働きがよくなるメニュー

（豆、魚などがメイン）

疲れをとるメニュー

（ビタミンCが多く含まれる）

縁起をかつぐメニュー

（とんかつ・たいやきなど）

- 調べてきたことと、3年生へのアンケートを参考にメニューを考える。

（2年生保健委員・栄養教諭指導）

■ 保健委員会　配付資料

【脳の働きをよくする・目の疲れをとる食べ物調べ】

脳の働きをよくする栄養素・食べもの

炭水化物	分解されたらブドウ糖になる。脳がエネルギーとして使えるのは、「ブドウ糖」のみ。
米・パン・小麦製品・麺類・イモ類・砂糖・果物・はちみつ	
タンパク質	記憶力と集中力を高める。
肉・魚・たまご・大豆製品・乳製品（チーズ）	
脂質	脳の神経組織において重要な働き。**緑黄色野菜やかんきつ類と一緒に食べる**とOK
DHA・EPA　魚の脂、ナッツ類 → **鮭・あじ・さば**	

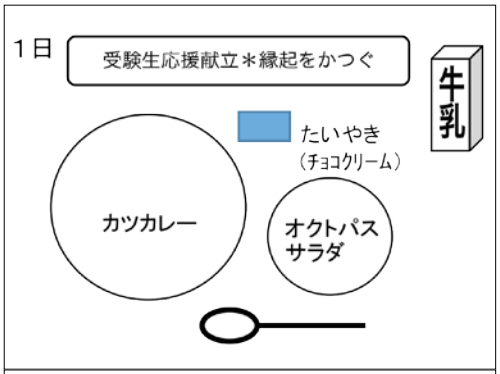
ビタミンB9	記憶力、集中力を高める
ほうれん草・ブロッコリー	

③ 応援献立の決定

栄養教諭に全体の栄養バランスなどの助言をもらい3つの献立が決定した。実施日は行事と調理場のことを相談して、3年生の入試に近い日を候補に3回実施することになった。給食献立表は町内の小中学生の家庭に一斉配布される。一口メモは盛り付け表とともに小中学校の全学級に配布され読まれる。町内共通献立なので小学校でも「一口メモ」で中学校生徒たちの取り組みが紹介された。中学校の生徒の取り組みを、広く知ってもらうことになった。生徒たちは自分たちの作った献立が様々な形で紹介され、認められ自信につながったようだ。

■ 2月1日　私立入試直前　献立

（給食盛り付け表・一口メモより）



今日は中学生が考えた「縁起かつぎ」メニュー、メニュー名は「勝つべし！」です。
カツカレーは、「受験に勝つ！」
オクトパスサラダは、タコは英語で“octopus”=オクトパス”→置くとPASS（合格）！
たい焼きは、メデタイ！
皆さんにいいことがありますように…給食室も思いを込めて給食を作ります。

当日給食時に流れた「保健委員会放送原稿」

（保健委員会より放送します）保健委員会では、2学期の終わりから、受験にむけてがんばっておられる先輩方を応援しようと、アンケートをしたり、食材や栄養について調べたり、栄養士の先生に相談したりして、『3年生応援献立』を考えてきました。今日は、第1弾で　「縁起かつぎメ

ニュー　勝つべし！」です。カツカレー　牛乳　オクトパスサラダ　で、デザートは　たいやきです。カツカレーを食べて、苦しい受験勉強に勝ち、オクトパスサラダで、試験にパスして、3月には「めでたい！」と喜べるように……という思いを込めています。

『3年生応援献立』は第2弾、第3弾と続きますので、3年生のみなさん、おいしい給食で心と体にパワーをためて、ラストスパートがんばってください。

山陽新聞　2月2日付記事より

受験に勝つ 試験にパス

カツカレー　タコサラダ

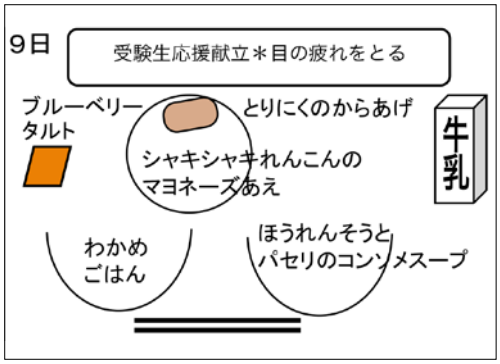
勝央中1、2年生企画

受験を応援する給食を味わう3年生たち

3年生応援給食を提供

（山陽新聞使用許諾）

■ 2月9日　公立推薦入試直前　献立



（目の疲れをとる）「目がシャキメニュー」

今日は中学生が考えた「目の疲れをとり、目によい食材を使った給食」、メニュー名は「目がシャキメニュー」です。生徒が目にいい食べ物を調べ、それらを使った料理を考えました。

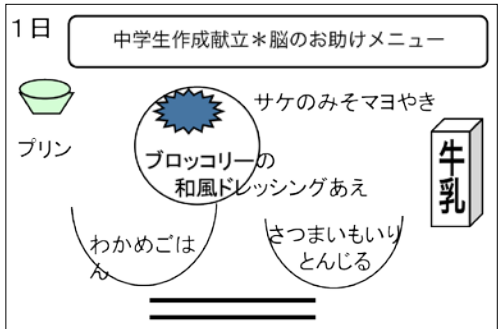
・れんこん→ビタミンB1が豊富…視神経の働きを高める

・ほうれん草→ビタミンA…目の疲れをとる

・パセリ→ビタミンC…目の充血を防ぐ

・ブルーベリー→アントシアニン…目の疲れを防ぐ

■ 3月1日　県立入試直前　献立



「脳のお助けメニュー」

今日は中学生が考えた「脳の働きをよくする食材を使った給食」、メニュー名は「脳のお助けメニュー」です。生徒が、脳のエネルギー源になる食材や、記憶力と集中力を高める食材、脳の神経組織に重要なDHA・EPAをたくさん含む食材を調べ、それらを使った料理を考えました。（わかめ、サケ、ブロッコリー、さつまいもなどを取り入れたメニューです）

ピア・サポートという言葉が学校内に定着してきているのを感じる。「支え合うことができる、支

えられている」と感じる様々な関わりがあることを具体的に生徒は学んできた。感謝の言葉、応援する言葉、優しい言葉となって具体的に、言語化、意識化できてきた。

リクエスト献立から発展した受験応援献立の作成は、心身の成長のために食事が大切であること、その食事には知識が必要なことを生徒自身に感じさせる実践となった。放送文や一口メモにも栄養素の詳しい内容が入り、教室の生徒たちも楽しみながら真剣に学び、聞くことができた。

4.成果と課題

全校で取り組んだ「ぴあっこ育成プロジェクト」、様々な生徒の委員会活動は自己肯定感を高める取り組みとなった。保健委員会でも、食育の目標実現を目指し、具体的な6つの視点に取り組むという成果が現れた。そして、3年間の取り組みで、不登校生徒は減少し学校は落ち着いてきた。

立ち上げ期を指導した大勢の教職員の異動が予想される中、次に継続できるのか。3年間の取り組みを終え、成果が出ていることに鑑み、次の3年間、学校としてさらにプロジェクトを継続することにした。

5.2期 継続期の実践

新たな3年は、もう一度取り組みの意味と課題を共有し、同じ方向で教職員が動くことから始まった。4月、大勢の転任者は、学校の目指す方向と「ぴあっこ育成プロジェクト」を共通理解する研修から本校の業務がスタートした。

生徒会の活発な活動やピア・サポートの定着は、学校の落ち着き、不登校生徒の減少とともに給食時間のトラブルを減少させた。

食育の面でも成果のあった取り組みを検証し、生徒の実態に合わせて、新しい教職員集団と継続する3年間となった。

(1)全校で行う　ピア・サポートの取り組み

新たに、生徒会目標を設定(僕たちの愛言葉)。

手を取り愛　絆を深め愛　助け愛(あ)う

生徒会がピア・サポート活動の企画・運営を担う。全校生徒で、支え合う活動を行うことを確認する。

ピア・サポ週間　保健委員会企画　クラス自慢

(2) 主体的食育活動として

保健委員会　受験応援献立の取り組み

今期から、栄養教諭を小学校から中学校に派遣していただき保健委員会活動に参加して指導をお願いした。食育の目標である食事の知識・技能について、これまで以上に重視し、事前に自分たちで調べた食品、栄養素、その働きなどについて栄養教諭から生徒たちが直接学ぶ時間を作った。

■ 平成29年

3年生　給食アンケート結果

第1位　ラーメン
第2位　きなこ揚げパン
第3位　唐揚げ

保健委員会で調べた栄養素

- 風邪予防に役立つ栄養素
- ストレス解消・疲れに効く栄養素
- 脳の働き・記憶力アップの栄養素

受験応援献立 決定（当日 保健委員会 放送原稿）

◎ストレス解消や疲れを軽くするメニュー「元気もりもりHAPPYメニュー」です。

献立は、「牛乳、きなこあげパン、幸運スープ、イライラブロックサラダ」デザートは「未来のみかん」です。3年生に受験勉強のストレスや疲れを少しでも軽くしてもらうために考えました。

ストレスが加わると体内でタンパク質がたくさん消費されます。そのタンパク質が豊富なきなこを使っているきなこあげパンは、全学年とても好きな給食メニューランキングの上位です。

幸運スープは、体内の疲労物質を作らせないようにする栄養素を含んでいる食品をたくさん使っています。そしてポイントは、コーンを入れています。幸運とコーンを掛け合わせて『幸運（コーン）スープ』です！イライラブロックサラダは、ストレスへの抵抗力を増す栄養素を含んでいるブロッコリーをメインに使っています。イライラを「ブロック」することと「ブロッコリー」をかけあわせて『イライラブロックサラダ』としました。

そして、デザートに『未来のみかん』です。みかんは、皮をむくとたくさんの実があることから、3年の先輩たちに多様な未来が来ますようにという願いを込めています。

たくさんの人たちの思いをこめてあるこのメニューをおいしく残さず食べて、受験のストレスに負けないでください。苦しい受験勉強の勝者になってください。

◎「3年生応援献立」第2弾 脳活サプリ献立
「脳にジャストミート」
「脳シャッキーン・サラダ」
デザートは、「はちみつレモンゼリー」

◎「3年生応援献立」第3弾「全勝ランチ」
メニューは、若芽ごはん、金星レンコン、点数があがるカラアゲ、勝たま汁、リン合格ヨーグルト

保健委員会では、受験にむけてがんばられている先輩方を応援するために、この企画を考えましたが、どうだったでしょうか？先輩方の励みにしていただけたでしょうか？先輩方が、「ほっ」としたり、「やるぞ！」と思ってもらえたら、私たちはとてもうれしいです。3年生のみなさん県立高校の一般入試まであと少しです。おいしい給食で心と体にパワーをため、最後までがんばってください。

私たちも一生懸命応援しています。

■ 平成30年

決定　受験応援献立

◎緑で合格つかみ取り給食

- **OKちくわのわかめうどん**
  （さくら）にんじん　わかめ　コーン　しめじ
  （OK）ちくわ
- **成績上げるかきあげ**
  （枝豆　カボチャ　たまねぎ　緑茶パウダー
  もずく　豆乳）
- **カゼをブロック！ ブロッコリーと**
  ソーセージの炒め物
  （ブロッコリー　ソーセージ）
- **合格率アップル**
  （りんご）

◎ビタッとミンなが元気になるカレー

- **とんかつカレー**
- **海藻サラダ**
- **はちみつレモンゼリー**

◎きなこも点数もあげあげ給食

- **きなこあげパン**
- **ミネストローネ**
  （トマト　ウインナー　マカロニ　パセリ
  にんじん　たまねぎ　コーン）
- **レンコンサラダ**
  （レンコン　ごぼう　にんじん）
- **デザート**
  （ブルーベリーゼリー）

きなこも点数もあげあげ給食

継続して取り組んできた受験応援献立は3年生にとって待ち遠しい取り組みになってきた。1、2年生で自分たちも考えてきた献立が、今年はどんなものになるのか生徒の関心も高くなった。放送の文章を読み上げるのは、2年生保健委員の緊張の時である。何度も練習して長い文を心を込めて読む。リーダーとして、気持ちを伝える練習である。

（3）給食標語の取り組み

平成28年度から給食標語は全校生徒に募集し、全標語が校内に掲示されるようになった。教職員にも募集がかけられるようになった。その中から優秀なものを保健委員が選びカレンダーにしていく。継続する中で、標語の言葉から生徒の学校生活が見えてきた。中学校生活がスタートした1年生の「待ちどおしい。おいしい」から心身の成長を感じさせる2年生の「作る人にもいただく食材にも感謝」「残さず食べよう」に。そして、3年生の12月になると、さらに言葉が変化する。

給食を　普通に食べれる　ありがたみ
給食は　9年間の　思い出の味
あと少し　みんなで　食べる　給食は

3年間で成長していく生徒を、給食標語に感じる。そして、仲間と楽しく笑顔で給食を食べた時間が学校にあったことを感じさせる。

■ 給食カレンダー

(4) 感謝を表現できる生徒に

みんな多くの人に支えられている

給食室へ保健委員の生徒からカレンダーを渡す際に、自分たちでメッセージを考え、感謝の言葉を述べるようになった。

平成30年度の卒業式では、答辞の中で卒業生から給食への感謝が語られた。中央のスクリーンに3年間の場面が流れるのだが、卒業生の希望でその中に給食のシーンが入れられた。そして、「僕たちは大勢の方に支えられていました。3年間ありがとうございました」と力強い言葉があった。

卒業式

(5) 学校から地域へ「食育の取り組み」発信

受験応援献立の取り組みを継続することでテレビ局、新聞社など、マスコミ数社からの取材を受けるようになった。平成26年から毎年の取材である。「この企画が楽しみなんです」「今、自校給食は少ないんですよ」「毎年来させていただきますけど、生徒さんが落ち着いてますね」などの言葉をいただくようになった。もちろん生徒にとっても、この上なく晴れ晴れしい、うれしいときである。

平成30年には、町内「家庭支援チーム」の取材を受けた。町内児童生徒のいる家庭へ町の支援チーム員が手渡しで届ける町内情報冊子に中学校の取り組みとして「受験応援献立」が紹介された。学校の食育の取り組みを知ってもらう機会となった。

6年にわたる本取り組みの継続で、取り組みを知っていただき、中学校から「食育」の活動を地域へ発信できるようになったと感じる。

(6) 成果と課題

継続期3年間の取り組みで、「ぴあっこ育成プロジェクト」の多くの活動が定着した。

ピア・サポート活動は生徒会活動とともに浸透し、1期よりさらに自分たちで話し合い、提案・発表力がついてきた。また、互いに認め合う温かい言葉が校内に増えてきた。

保健委員会を中心に、生徒が楽しみながら様々な「食育」活動を展開した。取り組みを進め楽しい給食が学校全体に広がったと感じる。

3 研究の成果

■ **全国学力テスト生徒質問紙より**（平成31年4月実施）

◎ **学校に行くのは楽しいですか。はい**

本校　86.1%（肯定的回答）
全国　81.9%

◎ **いじめはどんなことがあってもいけないと思いますか。はい**

本校　96.5%
全国　95.1%

◎ **生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりできていると思いますか。はい**

本校　79.1%
全国　72.8%

不登校対策からスタートした本校の6年間の学校改革の取り組みは生徒の変容、学校の変容をもたらしたと感じる。

食育に関して整理をする。本校に栄養教諭は配属されていないが、その専門性は食育指導に関して欠かせないものである。工夫し連携することで様々な実践ができた。

生徒の給食献立作りの経験は、栄養教諭が作成している献立・一口メモに多くの知識と生徒への愛情が詰め込まれている事を、生徒に伝える機会となった。食育の6つの視点のすべてがわかりやすく丁寧に盛り込まれている。食育の大切な指導書であることを教職員と共有していきたい。

生徒が主体的に学ぶ場を作り、認められることで、生徒の自己肯定感は非常に高まる。今回の食育の実践がそれであった。発表もまた訓練であり生徒の自信と意欲につながった。

給食標語は、感謝の言葉を短く、ユーモラスに伝えることができる中学生の発達段階にふさわしい実践である。中学校の3年間が心身ともに大きく成長するときであることが言葉より伝わってくる。そこに関わる食育は大切で意味がある。

4 おわりに

本校は、平成２４年に文部科学省からコミュニティスクールの指定を受けて、学校運営協議会が設置された。平成２６年から、生徒の実態を知りたいと１年に１回、授業参観を実施後、全委員の方々が各教室に分かれて生徒と給食を試食。その後、感想を持って協議に入る形をとっている。「給食を見ると学校のことがよくわかる」といわれる。

令和元年７月、学校運営協議会を開き生徒との給食試食を実施したところ「楽しかった」「いろんな話を生徒とできた」「落ちついとるなあ」「地域として食育に協力できることがあればいってほしい」という言葉もいただき、感謝である。食育には家庭地域の協力が必要である。

給食のリラックスした時間は、生徒の本音もでる。いじめられた経験のある生徒、他者理解の苦手な生徒、集団参加の苦手な生徒も入学してくる。集団の中で「孤独」を感じたら給食は味がしないものになる。給食の前に帰りたくなったり、「個人」で食べたいと訴える生徒がいたら、教職員はその最初のサインを真摯に受け止めなければならない。

給食は、多くの生徒にとって楽しい学校のスタートである。わかりやすく、感謝も伝えやすい。そして、生きていく力として一人一人が身につけてほしい多くの学びがある。これからも、みんなが笑顔で楽しく給食を食べる学校であってほしいと願っている。

最後に本校の６年間の実践に関わった養護教諭・栄養教諭・本校に在職した全ての教職員・職員に深く感謝を申し上げる。

（学校長　光井　一恵）

参考文献

- 「食に関する指導の手引」第二次改訂版
  文部科学省　　平成31年3月

学びへの意欲を高め、グローバルなコミュニケーション能力を育む英語教育の取り組み

大阪府枚方市立樟葉南小学校　教諭

角崎洋人（すみざきひろと）

1977年生まれ。2002年大阪教育大学大学院教育学研究科修了。2003年から大阪府公立小学校勤務（2015年4月から現任校勤務）。

第 68 回　読売教育賞から

【外国語・異文化理解】

旅行中 英語で取材

「Let's study English！（英語の勉強をしましょう）」。日直の号令で5年生の児童が一斉に立ち上がった。角崎教諭は英語の授業で、できるだけ日本語を使わないようにしている。写真を示し、「I went to Hiroshima.（広島に行きました）」と、同行した6年生の修学旅行の話を始めた。

「子供たちは柔軟だから、意味を想像しながらついてきてくれる」。この日は国語、算数など教科名の英単語を学び、発音を練習した後、児童は「What subject do you like?（好きな教科は）」と互いに尋ねて、答えを書き留めた。

6年生には、修学旅行先などで外国人に英語でインタビューさせ、結果をまとめさせる。不安がっていた児童も、いちど言葉が通じると自信をつけて積極的に声を掛けられるようになり、大きく成長する。

「『ゲームを楽しむ』ことになりがちな小学校の英語を、『コミュニケーションを取るのが楽しい』と思えるものに変えたかった」。この2年は英語の専任だったが、「担任として、英語と他の教科を横断する授業にも挑戦したい」と意欲的だ。（佐々木伶）

好きな教科の尋ね方について授業で教える角崎教諭（大阪府枚方市で）

外国語・異文化理解部門 最優秀賞
大阪府枚方市立樟葉南小学校　角崎洋人教諭

田近裕子・津田塾大学教授「小学校英語教育にとって必要なすべてが授業の中に工夫されて含まれている、優れた取り組みである。授業がしっかりと準備されており、実に質の高い作品となっている」

【最優秀賞選評】

田近裕子　津田塾大学教授

「小学校英語教育にとって必要なすべてが授業の中に工夫されて含まれている、優れた取り組みである。授業がしっかりと準備されており、実に質の高い作品となっている」

1 はじめに

外国語の授業では、「話す」、「聞く」、「書く」、「読む」力の育成によって児童の英語運用能力の向上を目指すとともに、グローバルな文脈で自己を表現する力や多様な文化的背景を持つ人々と協働・共生していこうとする態度といったグローバルなコミュニケーション能力の育成が求められる。また小学校段階では、児童に外国語を学ぶ意義を感じさせ、主体的に外国語を学んでいこうとする意欲を持たせていくことも重要である。しかしながら現在の小学校での英語の授業は、多少の工夫は見られるものの、反復練習や学習ゲームを主体に構成され、授業の最後に形式的にコミュニケーション活動を行うといった展開に終わることが多い。そのため児童の学びへの意欲を高めたりグローバルなコミュニケーション能力を培ったりする内容に乏しく、そのことが「学年が上がるにつれて子供の学習意欲に課題が生じるといった状況」[※1]を生み出す一因にもなっていると考えられる。

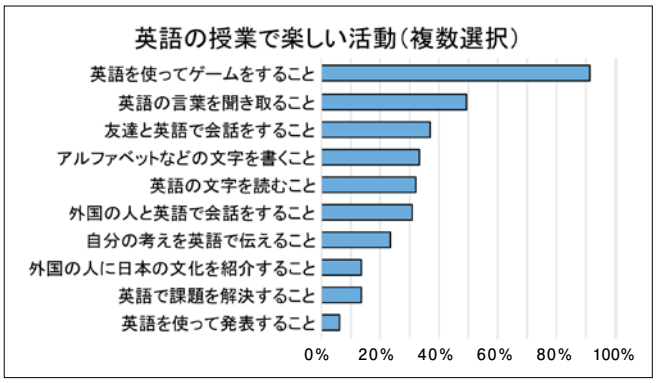
このような状況から脱するためには、児童が授業を通して英語の学びに意味を見出すとともに、将来に向けて目標を持ち、主体的に英語を学んでいこうと感じられるようにカリキュラムを工夫していく必要がある。また、異文化への理解を促す学びを通して外国人と対話したりグローバル社会に参画したりしようとする意思を持たせ、英語の学習を始めとして自分にできることを一つひとつ実行していこうとする意欲を育んでいくことも重要である。そこで本実践では、クラスでのコミュニケーション活動を児童にとって意味のある活動にするとともに、多様な相手と英語で関わる機会を設けるために5・6年生での異学年交流授業を実施した。また、外国人へのインタビュー活動や国際交流の場を設定するなど、問題解決や体験的な学びを通して子どもたちが異文化への学びを深められるよう計画した。

2 実践計画

1．児童の実態

4月当初に実施したプレアンケート[※2]では「英語の学習は楽しい」と答えた児童は90％近くに達したが、「英語を使ってゲームをすること」が楽しいと答えた児童が90％を超えたのに対し、その他の活動が楽しいと答えた児童が概ね30％程度にとどまるなど、英語の学習動機がゲームに偏っている現状が確認できた。

また、70％を超える児童が「外国の人と話をするのは不安だ」と感じていることに加え、「色々な国の人々と交流し、分かり合いたい」と考えてい



※1「日本の外国語教育はこう変わる」『初等教育資料』No.976　p3　2019.1
※2 本稿で数値として示したアンケート結果は全て6年生82名を対象にし、棒グラフでは肯定的に回答した児童の割合を表示している。

る児童や「色々な国の人々と協力して、よりよい世界を作っていきたい」と答えた児童が70％程度にとどまるなど、多様な文化的背景を持つ人々との触れ合いや異文化への理解、グローバル社会で協働・共生していこうとする意志の醸成などに課題があることが明らかになった。

加えて、グローバルな文脈で自己を表現するために重要である「日本人としての自分の考えをしっかりと持ちたい」といった意識や「日本の伝統や文化を外国の人々に伝えていきたい」という気持ちを持つ児童が70％程度にとどまっていることから、日本人としてのアイデンティティの形成にも課題があることが明らかになった。

これらの状況を鑑みて、次の5つの指針をたてるとともに、実践目標を設定した。

2. 実践の指針

①児童に英語を学ぶ意義を感じさせ、学習の動機を内在化させること。そのため、児童の活動に英語を使用する必要性や必然性を持たせるとともに、異文化との関わりを通して英語の有用性を実感させること。

②自己理解や他者理解につながるといった児童にとって意味のある活動を通して、「話す」、「聞く」、「書く」、「読む」力をバランスよく育成すること。

③子どもたちが将来様々な場面で多様な人々と英語で関わり合うことを考え、相手やシチュエーションを変えた多様なコミュニケーションの経験を積ませること。また、会話の成功体験を積み重ねて児童の自己肯定感や学習意欲を高めること。

④文化の多様性を認識させたり日本の文化に興味を持たせたりする機会を継続して設けることで、児童のアイデンティティの形成に寄与すること。また、相手の状況を考えながら対話をしたり協働して課題を解決したりする経験を積ませること。

⑤児童の学びを学校の外に広げていけるように、中学校や国際交流機関などとの関わりを深めたり、外国語通信の発行などを通して保護者との連携を密にしたりすること。

3. 実践目標

日々の授業でのコミュニケーション活動、異学年間での交流活動、外国人との活動を3本の柱として相互に関連付けながら英語の授業を展開することで、児童の学びへの意欲を高めるとともにグローバルなコミュニケーション能力の育成を目指す。

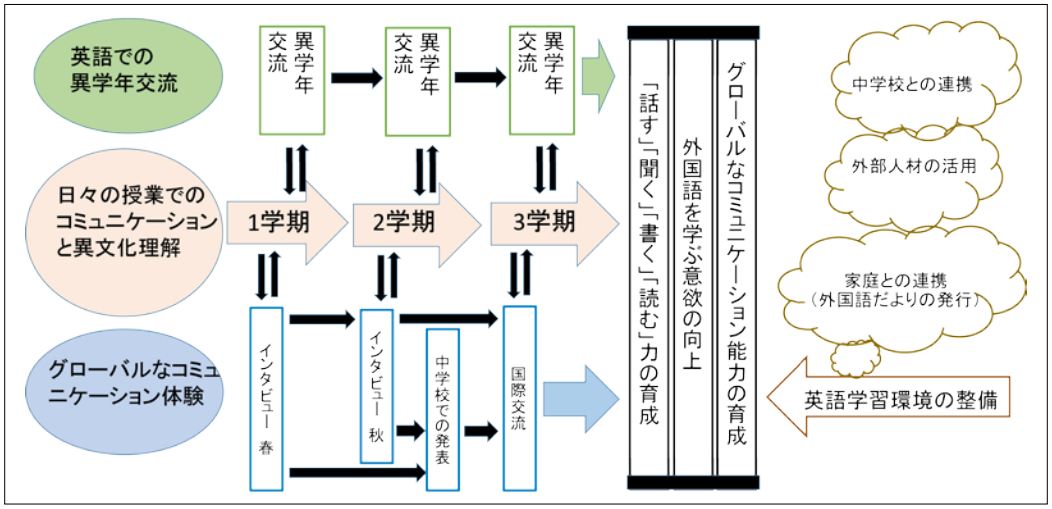
4. 実践の概要

日々の授業では、異文化に関わる活動を単元の内容に合わせて継続的に取り入れることで児童の異文化理解を深める。同時に、クラスでのコミュニケーション活動を自己・他者理解につながる内容にするなど児童にとって意味のある活動とし、その中で児童の英語運用能力を高める。

また、多様な相手と英語で交流する場として5・6年生の混合クラスを編成する。その際、異学年間での会話を通して英語実践能力を高めるとともに、外国をテーマとした課題に協力して取り組ませることで、問題解決力を高めたり異文化への視野を広げたりする。

加えて、奈良や広島で外国人へのインタビュー活動を行うなどグローバルなコミュニケーション体験を蓄積するとともに、外国人との対話を小学校外国語学習の目的として位置づけ、6年生の学年末に国際交流を実施する。

5. 実践のイメージ図



3 実践記録

1. 日々の授業での取り組み

1. 英語を学ぶ意義や異文化を意識させる活動

年間のカリキュラムを開始するにあたり、「なぜ英語を学ぶのか」を考えさせた。子ども達はインドの言語やEUで認められている公用語のリスト、世界に存在する国と言語の数などの情報をもとに話し合い、文化や言語の多様性に気付いた。その上で、「世界中の人々がつながり合っていくには、どのように言語を学んでいけばよいだろう」と問いかけたところ、「世界では英語を話すことが多いから英語を学ぶと良い」、「インターネットやゲームでも英語を使えば世界中の人と話ができる」といった理由から英語を学ぶことが大切という意見が多く出た。その後、ある児童の「世界の人々全員が英語だけを学べばよい」という発言から議論に発展すると、「それぞれの場所や民族で自分達の言葉を話すことで個性が出る」、「自分達の言葉も大切にした上で英語も話せるとよい」といった意見が増えていき、自分達や相手の話す言葉を大切にした上で、多くの人とつながれる可能性の高い英語を学んでいこうという結論で決着した。授業後の振り返りからは、「言語の多さに世界の歴史を感じました」、「日本にも昔の言語があるのなら、外国語も昔の言語があるのかなと、不思議に思うことが出てきた。これから英語を習って調べてみたい」、「外国語を学ぶと世界が広がると感じた。しっかり英語を勉強して外国にも行ってみたいと思った」といった、言語や文化への気付きと英語学習への興味の高まりが確認できた。

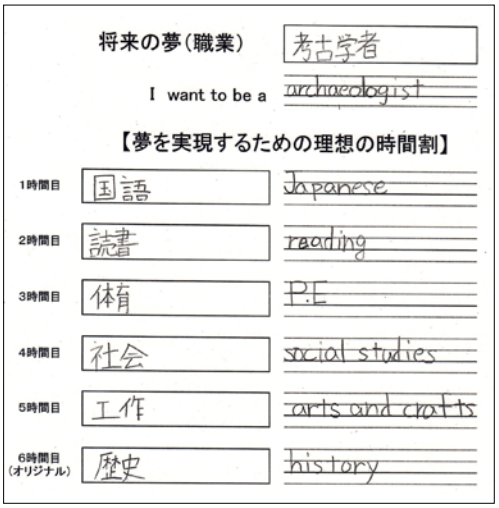
また、異文化に関わる題材を継続的に授業に取り入れ、子ども達が自分の暮らしと異文化を対比して考えられるようにした。例えば、“I can ….”、“I can't ….” のフレーズを学ぶ学習では、外国の道路標識や看板を見てしてよいことや禁止されていることを予測する活動を行ったり、日本でグローバル化に対応するためにされている工夫について考えたりした。その他にも、世界の

子ども達の生活を英語の映像で見て自分達との共通点や違いを考えさせたり、持続可能な社会に向けて自分達にできることを考えさせたりした。

2．クラス内交流

クラスでのコミュニケーション活動では、相手に思いを伝える活動を通して児童が自分自身を見つめ直す機会にするとともに、児童が自信を持って英語で自己を表現できるようにすることをねらいとした。そのため、子ども達が自分の考えを伝え合いたいと思えるように課題設定を工夫するとともに、その思いを満たす表現や語彙を一人ひとりに身につけさせることに重点を置いた。例えば「What do you have on Monday?」の単元では、時間割と将来の夢を組み合わせ、夢を実現するための時間割を考えさせた。ここでは子ども達がなりたいと考えた職業を教師が英語のリストにして示すことで、空手選手、通訳者、ゲームクリエーター、宇宙学者など個に応じたリアルな職業を表現させた。また、夢の実現に向けて必要な授業構成をオリジナル教科を含めて考えさせた。未習の単語は教師が個別に教えたが、教室に常設している和英辞典を使って調べ、教師に発音を聞きにくる児童も沢山いた。子ども達は本当に自分のなりたい職業だからこそ、夢の実現のためにどのような時間割を組めばいいかを真剣に考え、友達に伝えようとした。また聞き手側も、クラス全員の希望職業をランダムに示したリストを見て、誰がどの職業に就きたいのかを事前に予想しておくことで、“What do you want to be?”と興味を持って尋ね合い、知らない単語でも与えられた情報から予想しようとする姿勢が育った。なお、オリジナルの教科は個々人によって違う内容なので、未習の単語を使用する場合は相手が理解できないことを前提に、ジェスチャーや写真・絵を併用するなど伝え方を工夫させた。

■ 児童が書いた将来の夢と時間割



このように、将来の夢に合わせてキャリア教育の視点を持たせるなど、各単元でのコミュニケーション活動を英語の目標に合わせてオーセンティックに構成し、その上で「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」力をバランスよく育成できるように組み入れた。特に「書く」ことに際しては、単語をただ写して書くような作業ではなく、児童が英語を書く意義を感じられるように、コミュニケーション活動と連動させた。

その他にも、コミュニケーション活動を通して友だちの新たな側面を知ったり、友達の考えを聞いて共感したり、自分の考えと比べて認め合ったりするなど、英語の学習が他者理解や新たな人間関係の構築につながる活動を多く設定した。例えば「友達自慢をしよう」の活動では、“She/He can ….”、“She/He is good at ….”、“She/He is ….”などのフレーズを用い、友達の紹介文を書かせた。班で交流したあと、教師が児童の書いた「友達の良いところ」をクイズ形式で読み上げた。子ども達はいったい誰のことだろうと真剣に英語を聞き取り、友達の様

子を思い浮かべながら予想をするなど、楽しみながら他者への理解を深めていった。また、“Do you like …?”のフレーズを使った活動では、ある児童の“Do you like cockroach?”との問いかけに、1人の女子だけが“Yes, I do.”と答える場面があった。教室は「ええー」という反応で満たされたが、「ゴキブリは3億年も姿を変えずに生きているからかっこいい」という理由を聞いて、「なるほど!」と共感する空気に変化した。このように、英語の授業は気持ちを共有し認め合う場としての役割も果たすことができた。

2. 異学年交流

多様な相手と英語でコミュニケーションを取る機会として、年間3回の異学年交流授業を実施した。5・6年生が半々になるようにクラスを編成し、学期ごとに交流の相手が変わるようにした。授業は2つのパートに分け、前半は各学期のまとめを兼ねて5・6年生が既習のフレーズを使って互いに自己紹介をした。6年生は5年生よりも英語の知識が豊富なため、5年生に理解してもらえるよう相手に合わせて表現方法を工夫することを課題にした。一方5年生は、未知の英語が出てきても内容を推測したり聞きなおしたりして少しでも理解しようとすることを課題とした。各学期に学習したフレーズを加えながら、3学期に向けて少しずつ話す内容を増やしていった。

活動を通して5年生は上級生の使う英語に憧れを抱き、「6年生は英語がぺらぺらしゃべれていたのですごいと思った。ぼくも、6年生のようにしゃべれるようになりたい」、「交流した6年生が文字を見るだけで意味を分かっていた。ぼくも6年生になる前に英語を読めるようになりたい」といったように、これからの英語学習への期待感や見通しを持つことができた。また、未知の英語を理解し表現しようとする態度も身につけることができた。一方、6年生は英語学習者のモデルとしての役割を担うことで責任感と自信を持ち、「自己紹介で5年生がよく分かっていなかったので、教えられた。ゆっくり話したりジェスチャーを加えたりするなど、色々と工夫した」、「5年生にも英語をしゃべってもらうように気をつけた。5年生が分かるまで何度もくり返して言ってあげた」というように、相手の英語力に合わせて表現方法を工夫することができた。

後半は5・6年生混合グループでの問題解決に取り組ませた。1学期は外国人の友達が初めて日本に来るのでウェルカムパーティーを開くという設定で、子どもたちはプロフィールを参考にして外国人の友達に喜んでもらえそうなパーティーの内容を考えた。その際、各チームが3〜4人程度になるように編成し、5・6年生が協働して課題を解決できるようにした。プロフィールには名前・出身国・好きなもの・苦手なもの・特

【1学期自己紹介】
（共通）○ Hello!　○ My name is … .　○ Nice to meet you!　○ I (don't) like … .
（6年）○ I can … .　○ My birthday is … .

【2学期追加】（5年）I can … .　（6年）I want to go to … .

【3学期追加】（共通）I want to be a … .（6年）I want to study … .

技等を文章で示したが、児童が読めない時は教師が個別に発音することにした。また、発音を聞いても分からない言葉がある時は、英語での言い換えや例の提示、写真の提示などを行った。

■ プロフィールの例（1学期）

① My name is Alecsi.
② I'm from Russia.
③ I like Japanese toy.
④ I can't eat eggs.

① My name is Emily.
② I'm from America.
③ I like Japanese food.
④ I can't drink milk.

児童の活動の様子

子ども達は外国人のプロフィールを確認した上で、どのようなパーティーにするのかをグループで話し合い、“What's this?”、“I'd like ….”、“ I'm just looking.”などの英語を用いながら、パーティーに必要なものを5か所のブースから集めていった。

2学期は1学期のパーティーが終わった後の設定で、外国人の友達に一緒に観光プランを考えて欲しいと相談される内容とした。ブースを観光案内所に見立て、案内員役の児童から紹介される中から世界遺産、食べもの、おみやげなどをリクエストを参考にして選び、外国人の友達に日本を好きになってもらえるような観光プランを考えさせた。

■ 外国人の友達のリクエスト例（2学期）

I want to see the Japanese beautiful nature.
I like spring season.
I can't eat raw fish.

I want to see Japanese castles.
I like Japanese animation.
I want to eat noodles.

■ 児童の活動例（2学期）

案内ブースチーム（写真を提示）	**外国人チーム**（提示された写真から選びながら）
Hello!	Hello!
Where do you want to go?	I want to go to Kyoto.
What do you want to see?	I want to see Kinkakuji and cherry blossoms.
What do you want to eat?	I want to eat Sukiyaki.
What do you want to buy?	I want to buy Yukata and Japanese hand fan.
Good choice. Have a nice day.	Thank you. Good Bye.

３学期はグローバルな視点から世界の子どもたちの生活について考えさせた。子ども達は自分達で実際に集めたユニセフ募金（約３８０００円）で世界の子ども達にどのような支援ができるかを考え、英語で発表した。その際、ユニセフの資料や国際理解関係の本、タブレットなどを活用して世界の人々がどのようなことに困っているかを調べ、ユニセフの支援物資一覧から金額内で支援できる内容を考えた。最後は６年生を中心に提案内容を英語でまとめ、発表した。

児童の発表の様子

■ 児童の発表の例（3学期）

This is our plan. ※写真を見せながら
We will send　No.3（手押しポンプ），
No.7（浄水剤），and No.12（経口補水塩）.
Because they need clear water.
We can save their life.　That's all.
Thank you.

活動の結果、「違う学年の人と話すことで、英語を話すことに自信が持てた」、「５年生と交流して自分がきちんと英語を話せるか確認することができた。私よりもいっぱい英語をしゃべれる中学生とも交流したいと思います」といったように、日々の学びの成果を確認できたことによる自己肯定感の高まりや、学習意欲の向上が見られた。また、「実際に困っている人のために何ができるかを６年生と話し合うことによって、５年生だけでは思い浮かばなかっただろうことも出たりして、とっても楽しかった」、「自分の考えでだけではなく、色々な人の考えを知ることで、自分の考えを広げることができました。中学でも英語で交流したいです」などの感想から読み取れるように、多様な意見や考えを持つ人々と話し合いながら課題を解決していくことの大切さや楽しさを児童に実感させることができた。

３．異文化間交流

子ども達に英語の有用性や文化の多様性を感じ取らせるためには、実際に外国人と接する中で異文化への気付きを得させることが重要である。しかし、無計画に両者を接触させることは相手の外国人にも失礼であるし、ミスコミュニケーションにより児童の外国人への不安感を増大させることにもつながる。そこで、事前に交流内容について充分に話し合い準備をしておくなど、児童と外国人の双方が価値のある時間を過ごせるように工夫した。

１．奈良でのインタビュー活動（５月）

まずはインタビューの目的をクラスで話し合い、現時点での子ども達の英語力も考慮して、外国人が日本の文化についてどのくらい知っているかを調査・発表することにした。その際、正確な調査をするには調査人数が多い方がいいことや、英語を正確に聞き取って記録を付けることの大切さを確認することで、子ども達が積極的に外国人と話をしたり相手の話を真剣に聞きとったりすることへの意欲を高めた。

次に、気持ちの良いインタビューにするにはどのような会話や工夫が必要かについて話し合っ

た。その結果、挨拶、お礼、礼儀正しさ、一生懸命さ、丁寧さ、笑顔、相手の時間やプライバシーへの配慮、相手が聞き取りやすいように話すことなどが大切ということで一致し、会話の流れを組み立てた。児童が自信を持って活動できるように、外国語の時間だけでなく朝学習の時間なども活用して練習し、インタビューに備えた。

■ インタビューの流れ

Excuse me. Do you have a minute?
My name is …. What's your name?
Nice to meet you.
Where are you from?
(写真を見せて指さしながら)
Do you know this?

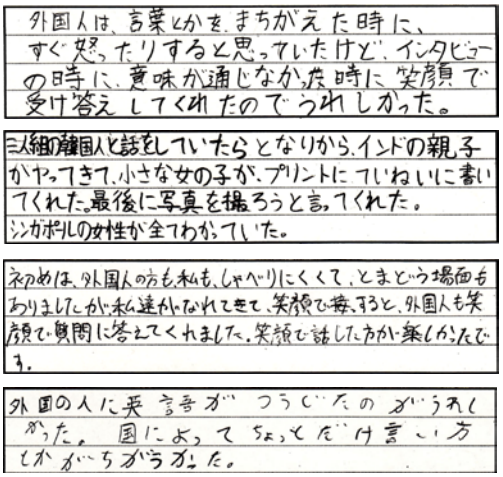
調査したトピック

- 日本の食べ物
- キャラクター/人物
- 日本のアニメ
- 行事/くらし
- 伝統芸能/道具
- 日本の遊び
- 日本の世界遺産

(手作りのお礼の品)
This is for you. Thank you very much.
Have a nice day ! See you.

青空の広がる東大寺にて外国人へのインタビューを実施した。実際に話をしてみて英語が通じることに自信を持ったことや外国の方の対応が親切だったこともあり、子ども達は意欲的に活動して150人を超える外国人にインタビューすることができた。近くで子ども達を見守っていた筆者も何人もの外国の方に話しかけてもらい、「とてもキュートだったね」、「すばらしい活動だね」、「子ども達が礼儀正しくてよかった」と褒めていただいた。インタビューを通して多様な国の人々と英語で話ができたことで、子ども達は世界の人々と英語でコミュニケーションを取れることを実感したり、同じ英語話者でも人によって話し方が異なることに気付いたりすることができた。

インタビューの様子



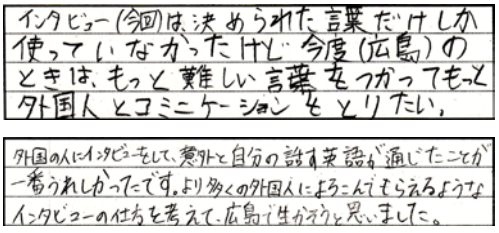
外国人は、言葉とかを、まちがえた時に、すぐ怒ったりすると思っていたけど、インタビューの時に、意味が通じなかった時に笑顔で受け答えしてくれたのでうれしかった。

三人組の外国人と話をしていたらとなりから、インドの親子がやってきて、小さな女の子が、プリントにていねいに書いてくれた。最後に写真を撮ろうと言ってくれた。シンガポールの女性が全てわかっていた。

初めは、外国人の方も私も、しゃべりにくくて、とまどう場面もありましたが、私達からなれてきて、笑顔で挨拶すると、外国人も笑顔で質問に答えてくれました。笑顔で話した方が楽しかったです。

外国の人に英語がつうじたのがうれしかった。国によってちょっとだけ言い方がちがうがあった。

その他にも、「英語だけだったら通じない人がいたから、もっと他の言葉も学びたい」と英語以外の言語の重要性を実感したり、秋のインタビュー活動に向けて新たな目標を持ったりした児童も多かった。



インタビュー(今回)は、決められた言葉だけしか使っていなかったけど、今度(広島)のときは、もっと難しい言葉をつかってもっと外国人とコミニケーションをとりたい。

外国の人にインタビューをして、意外と自分の話す英語が通じたことが一番うれしかったです。より多くの外国人にようこそでもらえるようなインタビューの仕方を考えて、広島で生かそうと思いました。

2．広島でのインタビュー活動（10月）

修学旅行に合わせ、広島の平和公園で2回目の外国人インタビューを実施した。奈良でのインタビュー後の児童の振り返りを基に、“May I ask you some questions？”、“We are elementary school students.”などのフレーズを追加した。また、「もっと難しい英語を話してみたい」、「日本のことについて聞いてみたい」といった児童の希望をもとに会話形式の質問を追加し、奈良でのインタビューをベースにして内容を再構成した。

■ 児童が教師と相談して班ごとに考えた質問の例

- “What's your impression of Japan?”
- “What's the purpose of your visit to Japan?”
- “What Japanese word do you know?”
- “How did you feel about Atomic Bomb Dome?”

当日、子ども達は奈良でのインタビューから得た経験や反省をもとに、臨機応変に外国の方と接することができた。インタビューは音声でのやりとりを主体に行ったが、聞き取りが難しいと感じた場合は“Write it down here,please?”と尋ねて紙に記入してもらうようにした。インタビューの後、子ども達が外国の人に書いてもらったコメントを自分達で読みとりたいと言ってきたので、一緒に辞書で単語を調べながら和訳していった。このように、子ども達にとってリアルな状況で英語の文章を提示することで、「英語を読みたい」、「内容を知りたい」という気持ちを持たせ、自分達で調べて理解しようとする姿勢を引き出すことができた。

外国の方に記入してもらったコメント

■ 外国の方の回答の一例

- “Beautiful history, friendly people, modern cities, great food, and awesome school kids.”
- “Japan is a very interesting and beautiful country. Its people are polite and friendly.”
- “Japan is beautiful with lots of history. I will visit again!”

多くの外国人が日本は歴史があり素晴らしい国だと答えてくれたことで、子ども達は「外国の人が素晴らしいと言ってくれる日本に住んでいることが嬉しい」、「これからも外国の人にいい所だと言ってもらえるように、日本をもっといい国にしたい」、「他の（日本の）いいところも知って欲しい」と日本を誇らしく思い、日本文化を世界に発信したいという気持ちを高めた。また、「奈良の時と比べ、外国の人と話す時あんまり緊張しなくなった」、「外国の人がしゃべっていることが、少しずつ分かってきているところが、成長していると感じます」、「英語がうまくなったと思う。あと、英語を使って話していると楽しくなってきたのでまた話したい」といったように、奈良でのインタビューと比較しながら活動を振り返り、自身の成長を実感するとともに、英語を学ぶ楽しさを感じることができた。

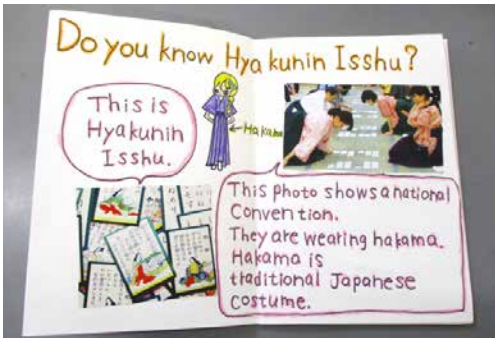
3．中学校での発表（11月）

奈良と広島で実施した外国人アンケートの結果を英語で発表した。当日は隣接する小学校の６年生と中学校の全校生徒を前に、６年生一人ひとりがリズムや発音に気をつけながら覚えた英語を披露した。調査結果をまとめて英語で発表することを目的に外国人へのインタビューを行ってきたため、中学生が興味を持って発表を聞いてくれている様子を見て子どもたちは達成感を得ることができた。

中学校での発表の様子

4．国際交流（2月）

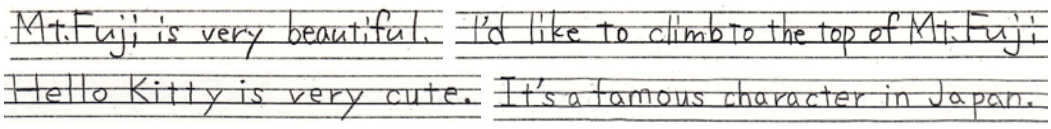
外国人へのインタビューは基本的に会話の型が決まった交流であり、子ども達が自由に話せる時間は少なかった。そこで、児童が１年間の学びの成果を発揮し、外国の方と対話する場として国際交流を企画した。国際交流での対話は小学校外国語学習の目標として示しており、「話す」、「聞く」、「読む」、「書く」力や異文化理解、コミュニケーション技能など１年間の学びや経験を統合して活用するように促した。交流のテーマは外国の人と日本の良いところについて話し合うこととし、子ども達は外国の人に紹介したい日本の名所や伝統・文化を、本やインターネットで調べて資料を作成した。既習のフレーズや単語を使った文についてはワードリストを参考に児童が自力で作文した。また、未習の文については子どもたちが調べた内容を基に教師がアドバイスして作文し、読み方を指導した。中には日本語と英語の対訳のついた日本文化紹介の本を参考にして納得がいくまで英語を調べ、教師と相談を重ねて資料を作成した児童もいた。



児童が作成した資料

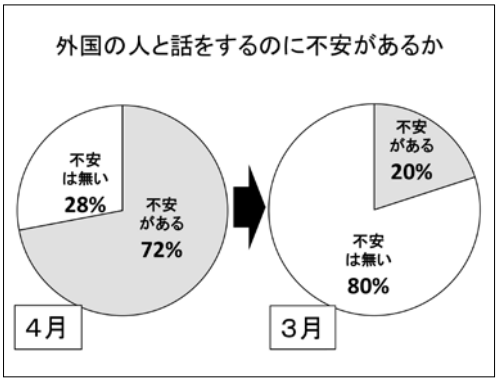
当日は、インドネシア（女性）、エジプト（男性）、フィリピン（女性）、ブラジル（男性）、オーストラリア（男性）出身の５名の外国人に来ていただき、自分達が感じている日本の良さや疑問などを子ども達に問いかけながら話を進めてもらった。前半はそれぞれの国の文化について話をしてもらい、後半はグループに分かれてじっくりと対話する時間をとった。子ども達は日本の世界遺産や文化などについて、外国の方に英語を交えてしっかりと伝えることができた。また外国の方の話に耳を傾け、日本と他国の文化を比較しながら会話を進めていった。

■ 児童が国際交流に向けて書いた文



外国人との対話の様子

1年間にわたる異文化交流活動の結果、外国人との交流における成功体験や英語でコミュニケーションがとれたことによる自己肯定感の高まりなどにより、「外国の人と話をするのは不安」と感じる児童の数が大きく減少した。また、実際に外国の人と会話し英語が通じたことで日々の学習の成果を実感できたことに加え、「もっと自分の考えを伝えたい」、「外国の方の考えを正確に聞き取りたい」といったもどかしさや英語習得の必要性を感じたことで、英語学習への意欲が高まった。

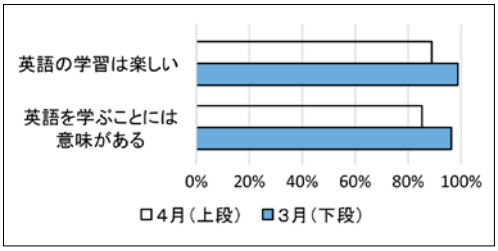


外国人でも、言葉がある程度分かれば会話もできるし、コミュニケーションも取れることが分かった。以前より外国の方がこわくなくなったし、親近感がわいた。英語も、もう少し学んで、外国の方が伝えようとしていたことを分かるようになりたいと思った。楽しい活動だった

ぼくは日本人として、もっと世界の人々の事が知りたくなりました。外国の方はとても優しくてフレンドリーでした。外国の方から話しかけてくれる事もあった。でもちょっとだけこうじない所もありました。だからぼくはもっと英語を勉強していきたいと思いました。

4 実践の評価と今後の課題

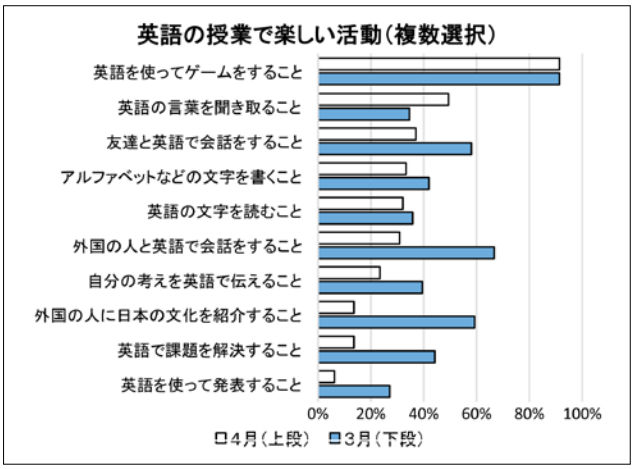
英語の学習が楽しいと答えた児童が全体の99%に達し、英語の学びに意味があると答えた児童も95%を超えるなど、1年間の学びを通して子ども達の英語学習への意欲が大きく向上した。加えて、自己表現やコミュニケーション活動、問題解決に関わる学習が楽しいと答えた児童の数が大きく上昇するなど、学びの質も向上している。唯一「英語の言葉を聞きとること」が楽しいと答えた児童の数のみ低下しているが、これは一方向的な聞く活動より他者とのコミュニケーションの楽しさが勝ったためと考えられる。

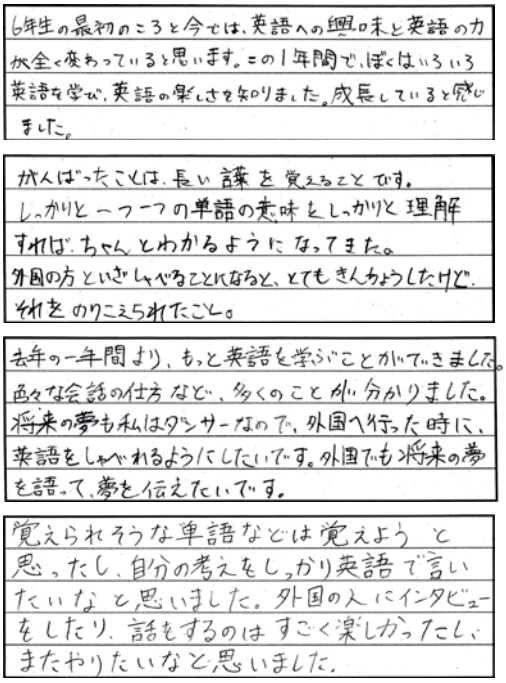


英語を学ぶことには意味があると感じている児童についても、その意識に変化が見られた。実践前は「外国の人と会話ができる」、「外国に行ったら使える」、「将来のため」といった漠然とした理由ばかりであったのに対し、実践後には自分の夢の実現に向けた具体的な理由や、「他の国の人々と少しでも話せたら仲良くなれるし、日本の文化を教えたり外国の文化を知ったりして、相手の良

さを分かち合える」、「日本に来た外国の方々に、英語で色々教えてあげたい」、「これからの未来のために英語を使って外国の人と関わっていきたい」など、英語を使う目的を明確にした記述が多くなった。

更に学年末の児童の振り返りからは、１年間の学びを通して児童が自己の成長を実感し、中学校や将来への学びに向けて意欲を高められたことが確認できた。




6年生の最初のころと今では、英語への興味と英語の力が全く変わっていると思います。この1年間で、ぼくはいろいろ英語を学び、英語の楽しさを知りました。成長していると感じました。

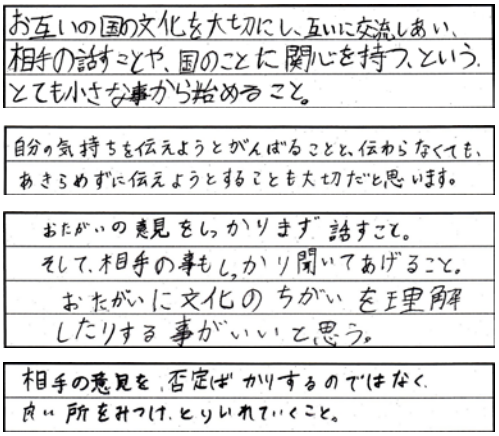
かんばったことは、長い課を覚えることです。しっかりと一つ一つの単語の意味をしっかりと理解すれば、ちゃんとわかるようになってました。外国の方といざしゃべることになると、とてもきんちょうしたけど、それをのりこえられたこと。

去年の一年間より、もっと英語を学ぶことができました。色々な会話の仕方など、多くのこと が分かりました。将来の夢も私はダンサーなので、外国へ行った時に、英語をしゃべれるようにしたいです。外国でも将来の夢を語って、夢を伝えたいです。

覚えられそうな単語などは覚えよう と思ったし、自分の考えもしっかり英語で言いたいなと思いました。外国の人にインタビューをしたり、話をするのはすごく楽しかったし、またやりたいなと思いました。

グローバルなコミュニケーション能力の育成についても成果が見られた。「外国の人とお互いの考えを伝え合い、理解し合うためには、どのようなことが大切か」という問いかけに対して、4月当初は「英語を上手にしゃべる」、「丁寧に説明する」、「ジェスチャーを使う」など、言語やコミュニケーション方策に関わる考えがほとんどを占めていた。その後、クラスの友達や異学年との交流、国際理解に関わる課題解決、外国人へのインタビューや対話を経て、相手の文化や考えを尊重し、互いに理解を深めながら協力して課題を解決していこうという意識を持つようになってきた。

■ 外国の人と考えを伝え合い、理解し合うために大切だと思うこと

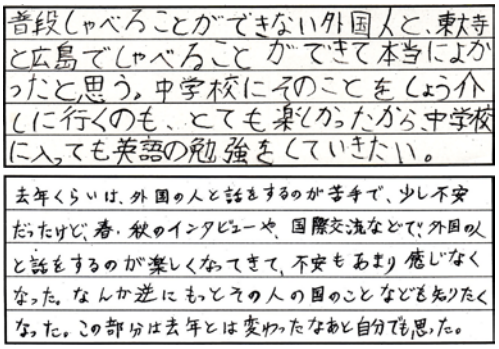

お互いの国の文化を大切にし、互いに交流しあい、相手の話すことや、国のことに関心を持つ、という。とても小さな事から始めること。

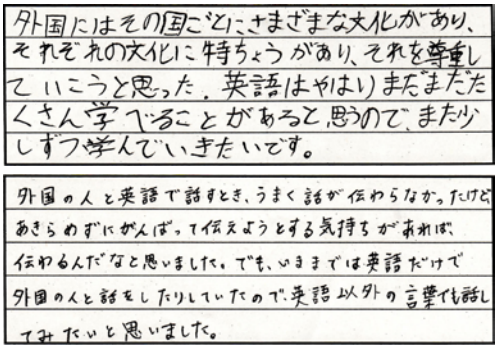
自分の気持ちを伝えようとがんばることと、伝わらなくても、あきらめずに伝えようとすることも大切だと思います。

おたがいの意見をしっかりまず話すこと。そして、相手の事もしっかり聞いてあげること。おたがいに文化のちがいを理解したりする事がいいと思う。

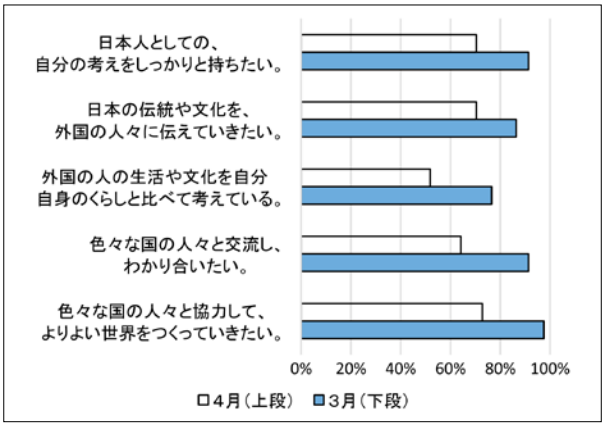
相手の意見を、否定ばかりするのではなく、良い所をみつけ、ほめられていくこと。

また学年末の児童の振り返りからは、外国人へのインタビューや対話の体験が児童の印象に大きく残り、異文化への理解や外国語習得意欲の向上に貢献できたことが確認できた。





更に右のグラフが示すように、日本人としての自分の考えをしっかりと持ちたいという意識や、外国の人々と文化を伝え合いたいという意欲を持たせるなど、児童のアイデンティティの形成に資することができた。加えて、色々な国の人々と交流し分かり合いたい、そして様々な国の人々と協力してより良い世界を作っていきたいといった、これからグローバル社会で生きていく子ども達にとって大切な思いを抱かせることができた。



以上のように、本実践においては日々の授業でのコミュニケーション活動、異学年間での交流活動、外国人との活動を3本の柱として相互に関連付けながら外国語の授業を進めることで、児童の学びへの意欲を高めることができた。また、外国の人と話すことへの不安を大きく減少させ、日本の伝統・文化を伝えたい、そして色々な国の人々と交流して分かり合いたいという気持ちを高めるなど、児童のグローバルなコミュニケーション能力の育成に資することができた。

なお、子ども達の学びは学校の外へと広がってこそ意味があると考え、家庭でも世界や異文化に目を向けてもらえるように、外国語便りの発行を通して外国語の学びの目的や児童の活動の様子、児童の考えなどについて伝えてきた。しかし、一方的な情報提供に終わってしまい、児童の学びの広がりを実感できなかった。また中学校との交流は実施できたものの、授業内容や指導方法についての連携を十分に行えなかった。今後は中学・高校へと続く児童の学びの道筋を視野に入れ、家庭や各学校と双方向的につながっていくことで、子ども達が外国語の学びを通して世界を広げていけるような実践を目指していきたい。

参考文献

- 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説　外国語活動・外国語編』
- 文部科学省教育課程課・幼児教育課（編）(2018)『初等教育資料』No.964
- 文部科学省教育課程課・幼児教育課（編）(2019)『初等教育資料』No.976

健やかな生徒の心の成長を支援するために

～キャリア・カウンセリングの事例を通して～

山口県立山口高等学校通信制　教諭

久原（くはら）　弘（ひろし）

1959年生まれ。2007年山口大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻修士課程修了。中学校、私立高校講師を経て、1989年山口県立徳佐高等学校、1994年山口県立西京高等学校、1999年山口県立防府商工高等学校、2012年山口県立山口高等学校通信制へ赴任。現在に至る。社団法人日本児童文学者協会会員。連絡は、山口県山口市糸米1-9-1の同校まで。

第 68 回　読売教育賞から

【児童生徒指導】

やりたいこと発見

「今日の調子はどうですか」。山口県立山口高の応接室で10月下旬、久原教諭は大学受験を控えた生徒に優しく声をかけた。圧迫感を与えないように生徒の斜め前に座る。「小論文の方はどう？」と問いかけると、生徒は「あまり自信がないです」とこぼしたが、会話が進むと「対策をするしかありません」とはっきり答えた。

この生徒は不登校を機に転校してきて、月に1、2回のペースで面談を続けている。生徒は「先生と話すことで自分の気持ちに整理がつき、スクールカウンセラーになりたいと思うようになった」と笑顔を見せた。

女子生徒と面談する久原教諭（山口市の山口高校で）

児童生徒指導部門 最優秀賞　山口高通信制 久原弘教諭 60

同校通信制は約900人が在籍し、その多くが不登校経験者。久原教諭が赴任した2012年度に受けた生徒相談は56件だったが、18年度は370件まで増えた。ほとんどは将来への不安や悩みだ。相談では、生徒が話しやすいように久原教諭も自分のことを話す。会話の中で生徒の関心のある分野を絞り込み、能力や才能に気づかせて進路を明確にさせていく。

久原教諭は「生徒は、将来やりたいことが分からないから不安定になる。やりたいことが見つかれば、自立し、健全に成長していく」と語る。（愛野翔太郎）

河野義章・東京学芸大学名誉教授「『何のために学ぶのか』『卒業したら何をしたいのか』という問いに、生徒が自分で答えを探し出す。そんなキャリア・カウンセリングの取り組みがなされている」

【最優秀賞選評】

河野義章　東京学芸大学名誉教授

「『何のために学ぶのか』『卒業したら何をしたいのか』という問いに、生徒が自分で答えを探し出す。そんなキャリア・カウンセリングの取り組みがなされている」

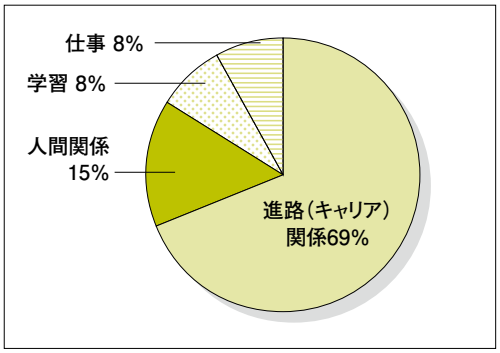
1 はじめに

通信制高校に赴任して今年で8年目を迎えるが、実は本校のおよそ3分の2が全日制や定時制の元不登校だった生徒達である。その不登校になった理由としては、いじめをはじめ、ネット被害、DVや性的被害、貧困などがあるが、これは被害者的立場である。一方、加害者的立場としては、社会に反する問題行動等を起こし、学校に登校しなくなったケースである。

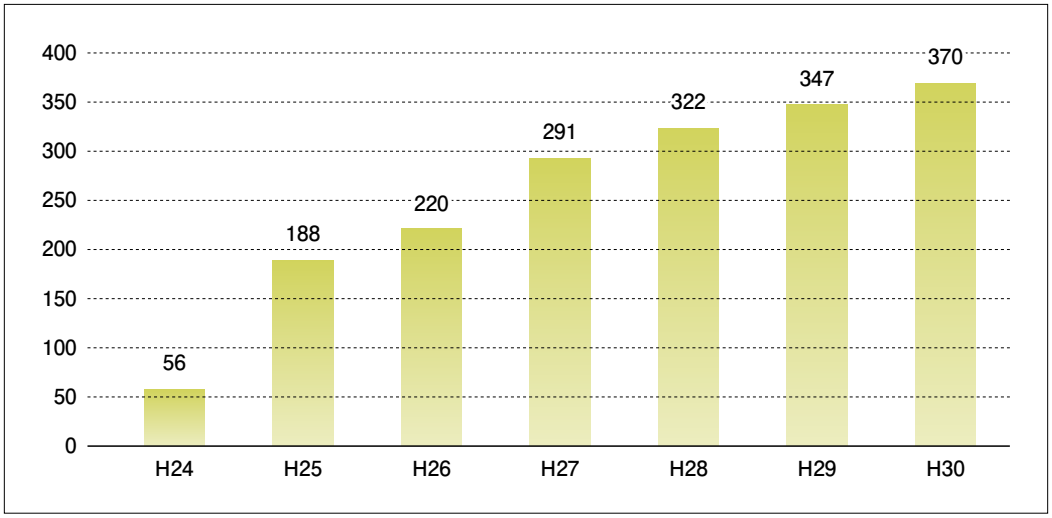
しかし、そんな生徒達もなんとか立ち直り、勉学に専念するものの、再び不適応を起こし、自暴自棄に陥ったりすることも多い。そうなると、本校でも犯罪に巻き込まれたり、万引きや暴力行為などの犯罪に手を染めるケースも少なからずある。そこで、健やかな心の成長を促すためにも、本校ではその支援の一つとしてキャリア・カウンセリングを実施している。キャリア・カウンセリングを行うことで自己実現に向かい、自立することによって、生徒の心の成長を少しでも支援できると考えたからだ。

筆者は現在、教育相談を担当し、キャリア・カウンセリングを中心とした相談活動を行っているが、本校に赴任した平成24年度から30年度まで相談件数はかなり増加しているといえる(図1参照)。またその約3人に2人が進路問題であるキャリア（生き方）の相談である（図2参照)。それだけ生徒はキャリアのことで悩んでいるといえるだろう。具体例としては、「将来のことを考えると不安で仕方がない」、「受験に失敗して何もかも嫌になった」など様々であるが、中でも最も多いのが「将来への展望が定まらず、何になりたいのかわからない」といった事例である。

■ 図2　相談内容／平均(H24～30)



■ 図1　年度別相談件数



では、どのようにキャリア・カウンセリングを実施しているかというと、まず信頼関係形成のための来談者中心カウンセリングを生かした面接に、相談者が自己開示をしやすいように支援者も積極的に自己開示を行う面接を組み合わせて行ってきた。

本実践では、こうした支援を実施した中でも、特に自己実現に近づき、自立したことによって健やかな心の成長を少しでも支援できたと思われたキャリアに関わる二つの事例を取り上げた。生徒の変容過程を3期（信頼関係形成期、自立準備期、終結期）に分け、キャリア・カウンセリングの実践論文として紹介したい。

2 実践の内容

1. キャリア・カウンセリングの定義

「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（文部科学省2004）には、「キャリア・カウンセリングとは、子ども達一人ひとりの生き方や進路、教科・科目等の選択に関する悩みや迷いなどを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供したりしながら、子ども達が自らの意思と責任で進路を選択することが出来るようにするための、個別またはグループ別に行う指導援助である」（注1）と定義されている。

2. 本実践研究における キャリア・カウンセリングの流れ

この定義を踏まえ、本実践でのキャリア・カウンセリングの流れであるが、まず信頼関係形成期には、傾聴を中心とする来談者中心カウンセリングを生かした面接を実施する。次に自立準備期には、自立に向けて自己開示や自己発見が一層促進されるよう、来談者中心カウンセリングを礎としながら、具体的には、支援者が相談者を受容するだけでなく、積極的に自己開示を行う。終結期には、自らの意思による進路の選択決定に向け、進路を明確にするための面接を実施する。

※来談者中心カウンセリングを行う理由

来談者中心カウンセリングを生かした面接を行う理由としては、傾聴することによって信頼関係が形成されると考えるからである。信頼関係が形成されて初めて相談者は援助者に対して自己開示を行い、さらに自らの課題を解決する方向へ向かうと考えられる。したがって、キャリア・カウンセリングにおいても、信頼関係の形成が援助の第一歩であると考え、来談者中心カウンセリングをキャリア・カウンセリングに活用することにした。

3. キャリア・カウンセリングの実際

まずは徹底的に生徒（相談者）の話を聞くこと（生徒がどんな話をして、またどんな話に関心を持っているか等）に専念する。そのとき必ずその話の中において支援者が後で話しやすいように支援者とリンクする話題（語句）等をチェックしておく。またリンクしなくとも相談する上で今後効果的と思われる話題（語句）と判断すればそれもチェックしておく。具体例として、「家族のこと」、「友人のこと」、「好きな食べ物」、「よく見るテレビ番組」、「好きなアニメ」、「好きなタレント」、「気になる出来事」etc.があがってくると予想される。

次にそのチェックしたメモの中からキーワードを選択し、それを媒体として会話を実施する。その会話のやり取りにおいてお互いに自己開示す

る中で、疑問に思ったことを質問したり、感想を言い合ったりする。またフィードバックも行う。これらの会話を繰り返していく中で、興味関心のあるものを絞り込み、それまで未知の領域にあった能力や才能等に気付かせる。そして進路を明確にさせる面接をすることによって、自らの意思と責任で自分の進路を選択させるわけである。

3 実践事例

1. 事例Ⅰ

何になりたいかわからず、自暴自棄になり、不良グループのリーダーと付き合っていたAさん（3年生女子）が、その後看護師を目指すようになり、大学の看護学部に進学した事例。

来談までの経緯

Aさんは、比較的恵まれた家庭の子女で、整った顔立ちをしていたため、男子生徒からのマドンナ的存在でもあった。ところが、高3（当時17歳）の春、突然、行方不明となった。街をぶらぶらしているところを不良グループのリーダー（20歳）にナンパされ、次第に外泊が重なるようになっていたのだ。保護者が警察に捜索願を出したところ、1週間後に警察に通報が入り、無事保護された。本人の話によると、高3になってもやりたいことが見つからず、焦って「もうどうでもいいや」と自暴自棄になってしまい、街をぶらぶらしている時に不良グループのリーダーから声をかけられたとのこと。

その後、無事に家には戻ったものの、Aさんは無表情になり、部屋に引き籠ったまま、籠城状態になってしまった。ほとほと困った保護者から筆者に相談の依頼があったのである。

（ア）第Ⅰ期：信頼関係形成期

（X年5月～6月：初回面接～第5回面接）

来談者中心カウンセリングを生かした面接を実施した。初回から第3回面接までは黙ったままで、全く話さなかった。しかし、第4回面接から少しばかり表情が柔和になってきた。その後第5回面接において、ついにアニメの話を皮切りに徐々に家族や進路の話題へと幅が広がってきた。その面接の中から主だった会話を下記に紹介する。

Aさん：学校はもちろんだけれど、何もかもが楽しくなくて。

筆　者：何もかもが楽しくないんですね。

Aさん：とにかく毎日つまらないし、退屈なんです。

筆　者：毎日退屈ですか。面白いことでもあるといいですね。

Aさん：そんなもんないですよ。

筆　者：なんかあればいいですよね。

Aさん：…あ、そういえばアニメの「冒険ファンタジーW」は面白いかも。

筆　者：へぇー、そうなんですか。

Aさん：海賊の話なんですけれど、主人公がものすごく友達や家族を大切にするんです。

筆　者：海賊の話なんですか。友達や家族を大切にすることはいいことですね。

Aさん：とにかく面倒見が良くて。

筆　者：へぇー、面倒見がいいんですか。

Aさん：そういえば、私の母親もいつも心配してくれますね。3年になるのに進路もまだ決まってないし、迷惑ばっかりかけてきましたからね。婆ちゃんが寝たきりなので婆ちゃんの面倒も見なくちゃいけないんですけど。

筆　者：お母さんがいつも心配してくれるんですね。それに婆ちゃんが寝たきりなんですか。

（イ）　第Ⅱ期：自立準備期

（X年6月～7月:第6回面接～第10回面接）

第Ⅰ期でメモした中から媒体としてのキーワードを選択し、面接を実施した結果、会話がさらに成り立つようになった。面接の中で婆ちゃんの世話をすることの嬉しさに気づき、さらにそこから「人の世話をして喜んでもらえる仕事がいいかもしれませんね」と話すようになった。なおこれらの面接の中から主だった会話を下記に紹介する。

■ 会話の媒体として選択したキーワード

冒険ファンタジーW	**寝たきりの婆ちゃん**

筆　者：アニメは結構見るけれど、冒険ファンタジーWは今まであんまり見たことがなかったのでこの間、レンタルでまとめて見ましたよ。

Aさん：どうでしたか？

筆　者：めちゃくちゃ面白かったです。

Aさん：どんなところが面白かったですか？

筆　者：海賊が主人公というのも珍しくていいですね。それにAさんが言ったように友達想いだし、家族も大切にしているしね。

Aさん：でしょう。

筆　者：そういえば家族といえば、私のところも婆ちゃんの血圧が異常に高くて心配なんだけれど、Aさんのところも婆ちゃんが心配ですねぇ。お母さんが寝たきりの婆ちゃんの面倒を見ているそうだけれど、お母さん一人で世話しているのかなぁ。

Aさん：婆ちゃんは腰を痛めて、寝たきりになったんですよ。その婆ちゃんの世話も母さん一人では大変なので、私もお手伝いしているんですよ。

筆　者：すごいなぁ。毎日大変でしょう。

Aさん：はい、確かに大変だけれど、婆ちゃんの世話をしてあげると、婆ちゃんがものすごく笑顔になって喜ぶんですよ。そうすると、私もなんだかとても嬉しくなってくるんです。

筆　者：世話をすることで喜べるAさんはすごいなぁ。なかなかできないですよ。

Aさん：そんなことないですよ。そういえば今まであまり考えていなかったけれど、人の世話をして喜んでもらえるのって、いいかもしれませんね。あの笑顔が忘れられませんから。

（ウ）　第Ⅲ期：終結期

（X年7月～8月:第11回面接～第12回面接）

進路を明確にするための面接を行った。具体的には「どんなもの（仕事）？」といった質問から「人の世話をすることによって喜んでもらえる」という点より看護師を選択した。また面接における主だった会話を下記に紹介する。

筆　者：例えば人の世話をすることで喜んでもらえるとはどんなもの（仕事）ですかね。

Aさん：そうですね。人の世話をして相手に喜んでもらえる。そんな生き方をしてみたいですね。なんかやりがいを感じますよね。でもどんな仕事があるんだろう。

筆　者：世話をするといっても色々ありますからね。

Aさん：そういえば、この間、婆ちゃんの具合が急に悪くなって病院に連れて行った時、看護師さんが婆ちゃんの身の周りの世話をしてくれたのです。その時、ばあちゃんはとても嬉しそうで満面の笑みでした。とすると、看護師なのかなと思います。

2. 事例II

進路が決まらず、問題行動の多かったBさん（3年生男子）が、クルマに興味を抱いている自分を発見し、それより自動車整備士に関心を示すようになった。その後すっかり明るさを取り戻し、専門学校の自動車整備科に進んだ事例。

来談までの経緯

Bさんは母子家庭で育ち、子どもの頃、決して恵まれた家庭とはいえなかった。そのためか、中学時より非行を繰り返し、いつも殺気立っていた。高校時も社会的規範から逸脱した行動が多く、高3の時は、通学中にいざこざを起こし、周囲にも多大な迷惑をかけている。母親によると、経済的にかなり苦しい上、何の目標もなく、捨て鉢になっているからではと話す。その後、学校に足が向かなくなり、自宅で空気が抜けたようにしばらく静かにはしていたが、またいつ爆発するかわからないと心配になった母親から筆者に息子との相談の依頼があった。

（ア）第I期：信頼関係形成期

（X年5月～6月：初回面接～第5回面接）

事例Iと同様に来談者中心カウンセリングを活用した。初回面接から第2回面接まで全く話す様子はなかった。ところが、第3回から第4回面接にかけて少しずつ顔がほころんできた。そして第5回面接の終わりごろになって憑き物が落ちたかのごとく笑顔で世間話をし始め、ひと通り話し終えた後、ややすっきりした表情で面接を終了した。その面接の中から主だった会話を下記に紹介する。

Bさん：全くやる気がなくて…気がつくと何となくというか、ぼんやりしているんですよ。

筆　者：やる気が出なくて、何となくぼんやりしてしまうんですね。

Bさん：それで暇なので時々テレビでも見るんですが、最近タレントCが気になりますね。なかなか面白いですよ。

筆　者：暇なので時々テレビなどを見るわけなんですね。そのテレビで面白いタレントCが気になるようになったのですね。

Bさん：ところで、先生、タレントCって知っていますか？　ほらよくバラエティー番組などに出ている人ですよ。

お笑い関係だと思うのですが、芸人かな。もしかしたら先生、知らないんじゃないですか。

筆　者：さすがに私でも知っていますよ。

Bさん：私生活では少し変わっていて、鮮やかな色をしたイグアナなどちょっと珍しい色々な動物を飼っているようですが、なんといっても、特にクルマに関しては、かなり面白くてマニアックですね。

（イ）第Ⅱ期：自立準備期

（X年7月：第6回面接～第9回面接）

第Ⅰ期の面接よりAさんと同じく媒体として選択したキーワードを基に面接を実施したが、第Ⅰ期よりもさらにスムーズに話が弾んだといえる。面接の中で、Bさんは子どもの頃、クルマの排気音が好きで、「クルマのことが結構好きなのかもしれません」と話すようになった。なおこれらの面接の中から主だった会話を下記に紹介する。

■ 会話の媒体として選択したキーワード

タレントC	クルマ

筆　者：タレントCといえばお笑い芸人として有名ですが、昔テレビでクルマのCMにもよく出ていましたね。クルマ雑誌のエッセイもよく書いていましたよ。Bさんはタレントのクルマの話は好きなんですか。

Bさん：サスペンションがどうとか、トルクがどうとか、多少専門用語が出ても、私には面白いし、何となくわかりますね。タレントCのクルマの話には興味あると思います。ただ家族にとっては、ちんぷんかんぷんみたいですが。

筆　者：私は高校生くらいの時、暇さえあれば、クルマ雑誌を読み漁っていましたが、Bさんはいつごろからクルマに関心を持ち始めたのですか。

Bさん：最近はちょっと忘れかけていましたが、そういえば小学生の頃からクルマの排気音が異常なくらい好きでしたね。特に排気量の大きいクルマなんか最高ですね。

筆　者：へぇ、排気音ですか。そういえばクルマによって排気音がそれぞれ違いますよね。

Bさん：もちろんどこのメーカーかによっても違いますが、その時のクルマのコンディションによっても、音が微妙に違うんですよ。エンジンの調子が悪かったら一発でわかりますよ。

筆　者：エンジンの調子までわかっちゃうんですか。すごいですね。結構メカにも詳しいのかもしれませんね。

Bさん：そういえば、小学生の高学年からよくメカいじりに熱中していた記憶があります。もしかしたら今まであまり意識していなかったのですが、僕はクルマのことが結構好きなのかもしれません。

（ウ）第Ⅲ期：終結期

（X年7月～8月：第10回面接～第11回面接）

事例Ⅰと同様に進路を明確にするための面接を実施した。「具体的にはどんなもの（仕事）？」といった質問から「クルマが好き」として、常にクルマに囲まれている環境で働くことのできる自動車整備士を選択した。

筆　者：クルマが好きということですが、クルマに囲まれた環境で働くことができたらいいですね。

Bさん：確かにそんなクルマに囲まれた環境でいつも排気音を聞くことができたら最高ですし、そんなところで働けたら言うことなしですね。

筆　者：ある程度限られてくるとは思いますが、どんな仕事がありますかねぇ。

Bさん：そうすると、やはりクルマのディーラーが最もふさわしい感じがしますね。ただ営業マンや事務、メカニックのスタッフなど職種も色々です。

筆　者：何がいいですか？

Bさん：メカいじりが好きですし、ずっとクルマの傍らにいたいですから、やはりメカニックですかね。つまり自動車整備士がいいですね。

3．2事例の各段階における援助方法と生徒の変容

（ア）第Ⅰ期：信頼関係形成期

筆者はAさん、Bさんに傾聴を中心とした来談者中心カウンセリングを生かした面接を実施した。Aさんは当初沈黙していたが、やがて表情が柔和になるとともに、アニメの話から家族（寝たきりの祖母）の話をしてくれるようになった。Bさんも、はじめは全く話す様子もなかったが、次第に打ち解けてきて笑顔でタレントCの話をし始めた。

（イ）第Ⅱ期：自立準備期

筆者はAさん、Bさんに来談者中心カウンセリングを礎としながら、Aさんは筆者の「世話をすることで喜べるAさんはすごい」（フィードバック）より祖母の世話をすることへの嬉しさを再認識し、「家族だけでなく人にも世話をして喜んでもらいたい自分」を発見した。Bさんはクルマの排気音に興味を持っていた自分を起点とし筆者の「けっこうメカにも詳しい」（フィードバック）よりそれまであまり意識していなかった「クルマ好きな自分」を発見したと思われる。また面接が進むにつれ、2人の表情はさらに明るくなり、生き生きとしてきたことが感じられた。

（ウ）第Ⅲ期：終結期

Aさんは、「人の世話をして相手に喜んでもらえる、そんな生き方をしたい」と考えていた。筆者はAさんの考えを受け止め、どのような仕事があるかを考えさせた。このように自分の考えを徐々に明確にしていき、その結果、将来の仕事として「看護師」を選択し、決定した。BさんはAさんと同様明確化する中で「クルマ好きな自分」からクルマに囲まれた環境で働ける「自動車整備士」を選択し、決定した。

その後Aさんはすっかり元気を取り戻し、引きこもりからも脱却し、家族や友人とも積極的に話すようになった。

一方、Bさんも人を寄せ付けない殺気立ったオーラがすっかり失せ、学校行事にも自ら積極的に参加するようになった。

4　考察

高等学校において、教師はとかく進路相談に来た生徒に対し、過去の生徒の例にあてはめたり、一方的に教師の意見を話すことが多いといえるかもしれない。筆者も過去において、何度もそ

ういった経験を持つ。筆者としては良かれと思ってやったことだが、生徒にとっては、自分の意見を主張しにくかったかもしれない。生徒がどんな気持ちで、何を考え、何を望んでいるのか、理解し、さらに生徒が安心して自分の可能性にチャレンジするための支援を教師がしなければならないであろう。そのためには教師は、生徒の伝えたいことや話の内容を聞き取り、生徒の気持ちをしっかり支えることが重要である。

そのための支援の一つとして本実践で筆者がキャリア・カウンセリングに取り入れた来談者中心カウンセリングがある。このカウンセリングは傾聴を主とすることによって信頼関係を形成する。そしてそれをベースとして、生徒が自己実現しやすいように支援者自ら積極的に自己開示を行う面接を実施したわけである。

本実践において来談者中心カウンセリングによって形成された信頼関係は大きな礎となって効果を発揮したと考えられる。それは第Ⅱ期（自立準備期）において信頼関係ができていたため、それまで傾聴に徹していた筆者が自己開示を始めても好意的に和やかな雰囲気で面接が進んだことからもわかる。カウンセリングにおいて温かい心の交流を作り出す信頼関係が十分深まっていたと考えられる。Aさん、Bさんともに生徒自身の自己開示と筆者の自己開示やフィードバックによってさらに生徒の自己理解が進み支援者の生徒理解も同時に進む。そして支援者も生徒も知らなかった未知の領域に踏み込むこととなる。この瞬間に新たな興味・関心、意欲の源泉ともなるべき発見に出逢えたわけである。つまりそれまで意識していなかった能力や才能等を発見したのである。それはその後Aさんにとっては、「人の世話をすることによって喜んでもらえる」という点より看護師へ到達し、またBさんにとっては、「クルマ好きな自分」から自動車整備士へと繋がったのである。このことは、それまでの支援により、支援者が生徒の生き方や価値観に触れつつ、生徒自らが自主的に進路を選択し、決定する力を育てていると考えられるだろう。

本実践では、支援者がほとんど自己開示を行わない来談者中心カウンセリングを生かした面接を礎として、支援者が積極的に自己開示を行う面接を組み合わせ、その上にそれらを下地として進路を明確にするための面接を実施した。その結果、支援者と生徒（相談者）との信頼関係の形成と生徒の自己発見が一層促進され、意欲が高まり、進路の選択・決定を行うことができたと考えられる。

またそのことで、Aさんは元気を回復し、引きこもりの殻を自ら破り、家族や多くの友人とも積極的に話すようになっている。一方自ら壁を作っていたBさんも角が取れ、学校行事に自ら積極的に参加するようになっている。つまりコミュニケーション力とともに集団における適応力が高まったと思われる。これらよりAさん、Bさんとも自分の自立性を高め、社会に適応する社会性の育成につながると同時に、社会の中で安全で健やかな居場所を確保したとも考えられる。

5 まとめ

青年期の課題に関わる教員の研修会に出席するたび、しばしば「アイデンティティーの確立」というフレーズを耳にする。今やアイデンティティーという言葉は日常でも広く使われているが、その意味の一つとして、分かりやすくいうと、「将来、自分のやりたいことがはっきりしている」である。つまり、アイデンティティーが確立すれば、揺るぎない自分を確立するとともに、将来の精神的健全さの礎となるともいえる。一方この対立概念と

して、「アイデンティティーの拡散」があるが、この逆になるのだから、やりたいことが見つからず、偽りの自分を演じているともいえるだろう。

そうすると自暴自棄になっていたAさん、問題行動を起こしていたBさんは将来やりたいことが見つかり、偽りの自分を演じなくてもよくなったといえる。それによって自分自身がしっかりし安定するので、危険な誘惑等から免れやすくなり、問題行動も起こしにくくなると思われる。

実際2人ともその後、高校在学中はもちろん、卒業した後も健全な人生を歩んでいるといえる。まずAさんであるが、看護師になると決めて以来、すっかり元気を取り戻し、笑顔が多くなった。看護師体験セミナーにも積極的に参加し、志望校の看護学部にも、猛勉強の末、見事合格することができた。いつも目が生き生きとしており、もう二度と自暴自棄になって街をぶらぶらするようなことはなくなった。看護大学に進んだ後も懸命に勉学に励み、無事に卒業したAさんは現在、病院で働いている。2人の子持ちで、幸せそうに暮らしている。無表情で冷たい目をしていた彼女はもうここにはいない。

一方、すっかり丸くなったといえるBさんも、自動車整備士になると決めてから、文化祭でダンスを披露するなど周囲を驚かせていたが、人が変わったように勉強をし始め、カ―ディーラー系の自動車整備士養成校にもなんとか合格した。高校卒業後も、自動車整備の専門学校を無事修了し、現在はカーディーラー関係の専属整備士として働いている。こちらも2人の子持ちで、いつも笑顔が絶えない。あの尖ったナイフのような殺気立った彼ももうここにはいない。

これらより健やかな生徒の心の成長を促す支援の一つとして、本実践におけるキャリア・カウンセリングが、少なくとも有効であったと考えられる。将来やりたいこと（生き方）が見つかることで、人は自己実現に向かい、自立することで、心身が健全に成長していくと思われる。

なお、本実践においては、多くのキャリアに関する事例の中から2事例のみであったが、今後はキャリア・カウンセリングを実施していく上で、少しでも有効性を高めるためにも、さらに検証を重ね、一層、実践研究を進めたいと思う。

※生徒のプライバシーに配慮し、一部個人特定につながる恐れのある表現などを修正しました。

引用文献

- （注1）文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」文部科学省 2004　p29

参考文献

- 柳井　修「キャリア発達論　青年期のキャリア形成と進路指導の展開」ナカニシヤ出版 2001
- 宮城まり子「進路指導のためのキャリアカウンセリング」（教師のためのカウンセリング技術　雑誌教職研修5月増刊）教育開発研究所　2001
- 末武康弘「個別面接による来談者中心カウンセリングの技術」（教師のためのカウンセリング技術　雑誌教職研修5月増刊）教育開発研究所　2001
- 青木紀久代・神宮英夫「徹底図解　心理学」新星出版社　2008
- 日本進路指導学会「キャリア・カウンセリングその基礎と技法、実際」実務教育出版　1996

地域の子どもを見守る家庭学習への支援

～アフタースクールの実践を通して～

坂戸アフタースクール代表

小鹿野輝芳（おがのてるよし）

1948年生まれ。1971年國學院大學国文科卒業、1971年～2007年埼玉県内小・中学校教諭、教頭、校長、指導主事等を歴任、2007年坂戸市内小学校校長定年退職、1998年～2001年パリ日本人学校校長、2010年～2012年米国・シャーロット補習授業校校長（シニア派遣）、2003年埼玉県教職員施策提案（学校経営）優秀賞受賞、2006年学校マネジメント（明治図書主催）、「学校教育の質を保証する経営システムへの改善点」にて優秀賞受賞。bambi48@crest.ocn.ne.jp

第 68 回　読売教育賞から

【カリキュラム・学校づくり】

児童が本音出せる場

「あいさつすすんで　アイウエオ」。埼玉県坂戸市の教会に、小学生8人の声が響く。週3回、各2時間の〝授業〟は「坂戸アフタースクールの詩（うた）」の音読体操で始まる。8人は小鹿野さんに導かれ、「枕草子」を暗唱し、歴史人物カルタを取り合った。

先生は全員が元教諭で、小鹿野さんと60～70歳代の女性4人。児童たちは「体育で疲れた」などと学校であった出来事などについておしゃべりしてリラックスした後、宿題のドリルに取り組む。

体を動かしながら、早口言葉を指導する小鹿野さん（埼玉県坂戸市の坂戸キリスト教会で）

小鹿野さんは、5桁の割り算で苦戦中の5年生の男児に「余りは割る数よりも少なくなるよ」とコツを教える。別の席で中国旅行の経験を伝える先生もいる。児童たちは休憩時間に手作りのおやつをほおばった後、絵本の読み聞かせを楽しんでいた。

別の5年生の男児は「分かりやすく教えてくれて、宿題を終えることができて助かる」と話した。

開校から6年。参加児童は増え続け、坂戸市や鶴ヶ島市の10校から延べ81人が学んできた。小鹿野さんは「現役教員だった頃の反省を踏まえて、個を大事に教え、私たちも発見がある。子どもが本音を出せる場所を提供し続けたい」と話す。（佐伯和宏）

カリキュラム・学校づくり部門最優秀賞
坂戸アフタースクール　小鹿野輝芳代表　71

佐藤学・学習院大学特任教授「退職教師たちが地域貢献として子どもたちの学びと連帯を支援する独創的で優れた実践である。地域に放課後のもう一つの学びやをつくる取り組みとして高く評価した」

【最優秀賞選評】

佐藤　学　学習院大学特任教授

「退職教師たちが地域貢献として子どもたちの学びと連帯を支援する独創的で優れた実践である。地域に放課後のもう一つの学びやをつくる取り組みとして高く評価した」

はじめに

平成２６年（２０１４年）８月に厚生労働省と文部科学省とが連携して「放課後子ども総合プラン」が発表された。その趣旨に「共働き家庭等の『小１の壁』を打破するとともに、次代を担う人材を育成するため、全ての就学児童が放課後等を安全・安心に過ごし、多様な体験、活動を行うことができるよう一体型を中心とした放課後児童クラブ及び放課後子ども教室の計画的な整備等を進める」とある。その後、この施策に基づき各地域で「放課後児童クラブ」や「放課後子ども教室」の見直しが行われたり、児童クラブが新設されたりするようになった。私が現在住んでいる埼玉県坂戸市内にも１４の「放課後児童クラブ」と３つの小学校区での「放課後児童教室」が開かれて多様な活動が展開されている。

1 アフタースクールを開校した理由

私たちが現在取り組んでいる「坂戸アフタースクール」（放課後家庭学習支援）は「放課後子どもプラン」が発令される１年前の平成２５年（２０１３年）にスタートした放課後の子ども支援活動である。この設立の目的は「次世代の子どもたちの育成」と「放課後家庭学習支援」にある。アフタースクールを開校するに至った理由は、平成２２年から平成２５年の３年間私が米国シャーロット日本語補習学校の校長として文科省から派遣された体験に基づいている。米国での３年間の補習学校の体験を通して米国内にある様々な形態の子どもの為の支援活動を知ることができた。例えば放課後子ども支援の「アフタースクール」を始め、学校始業前には「ビフォ・スクール」があり、さらに家庭内で学校と同じカリキュラムで学べる「ホーム・スクール」や教会内で行われる「チャーチ・スクール」、不登校児童を受け入れている「フリー・スクール」等があり、子どもたちの学びを支援する選択肢が多様に用意されていることであった。

この３年間の補習授業校体験を通して私が得た教育の課題は以下の３つの事であった。

第一 日本の子どもたちが国際的に活躍していく為には日本語をしっかり身に付けること

第二 子どもたちに必要な学力とは「読み・書き・計算」の基礎力であること

第三 子どもたち同士の人間関係を築く為に「共に食べ」「共に話す」体験が必要である

平成２５年に帰国した私は、この３つの教育課題を放課後の子ども活動に関わりながら何とか具体化できないものだろうか、と考えていた。折しも平成２６年に「放課後子ども総合プラン」が国の施策として発表されたのを一つの契機として「坂戸アフタースクール」（放課後家庭学習支援学校）を開校して地域の子ども活動に取り組んでみようと決意した。

2 開校に当たって準備したこと

小学生を対象とした放課後学習支援学校を運営するに当たり、課題となったことは「どこで・場所」、「だれが・人材」、「いくらかけて・運営資金」、「だれを対象に・児童募集」立ち上げていくか、ということであった。

１．どこで（場所）で行うのがよいか

「場所」については地域にある公立小学校内の空教室を借りて行うのが理想的であるが、地元の小学校区では月４回の「放課後指導教室」が既に開かれていた。そこで、ミッション系幼児園を運営している地元のＳ教会の教育館（コイノニアチャペル）を借用することになった。この教会付属の教育館は多目的室（コイノニアホール）を有していて３１０㎡（約９４坪）の広さを備えていた。この場所に地元の小学生１０人前後を集めて放課後の活動を展開することはどうだろうか、と考えた。教育館の多目的室は学習だけでなくスポーツやゲームをするにも十分な広さがあった。さらに、この教会教育館の前は芝生広場６６９㎡（約２００坪）が広がっており、学習後に子どもたちがサッカーやバスケットボール等の運動をするのに最適な場所でもあった。

多目的ホール

芝生広場

芝生広場

２．指導者の人選をどうするか

スタートするに当たり、子どもたちを指導する講師の「人材確保」が課題であった。担当する講師は小学校の授業が終了した放課後（１６：００～１８：００）に来ることが出来、小学生を教えた経験のある人が相応しいと考えた。そこで、私が現役時代に一緒に勤めたことのある元小学校教員に趣旨を説明して声を掛けてみた。最初に声を掛けた近隣に住むK先生は即座に快諾してくださった。また、私達夫婦も元小学校教諭体験があるので一緒に加わることになり２０１３年６月に３名の教師でスタートすることとなった。その後、近隣地区から２名の元教員も加わって指導者５名が確保された。この放課後学習支援に関わっていく教師の条件として最初に私が考えていたことは（元小学校の教員経験がある人）（現在退職して家にいる人）（ボランティア精神を持っている人）の３つの条件であった。幸いにも私が声を掛けた３名の元教員はいずれの条件も満たし「小学校教員としての経験を退職後も何とか地域の子どもに生かしていきたい」と願っておられた方々であった。この活動を通して私が気付かされたことは、地域内には自分の経験を社会に還元したいと願っているシニア世代（６０代～７０代）が多くいるということであった。今後退職したシニア世代の活用が地域の教育力を活性化

していくカギとなるのではないかと思わされた。

3．運営資金はどうするか

「運営資金」をどうするかに関しては、事業を始めるに当たり大事な要素であるが幸いにもS教会から子どもたちが集まる活動が目的なら「場所代」「冷暖房費」「光熱費」「駐車場」等は全て無料で提供します、という返事をいただいた。これはS教会が創立60年を迎えて「地域の希望の光をめざす教会」という10年ビジョンを策定し、地域に密着した多様な子ども活動「保育園」「幼児園」を展開していた事と、私自身もS教会の会員であることによっての協力であった。S教会の主任牧師を始め、責任役員会、教会員の皆さんが放課後の子ども活動に大きな期待と関心を寄せてくださったのだ。そこで、運営資金としては講師の謝礼をどうするか、ということに絞られた。これに関しては5名の講師は原則ボランティアで無給でも良いという話であったが、往復の交通費だけは支給し補助する事になった。この資金を生み出すために、通ってくる児童の家庭から運営費として一人で月4回参加の場合は2,500円（兄弟で参加の場合一人2,000円）を毎月徴収（4回のおやつ代金も含め）することを保護者に説明して了解を得た。

4．子どもたちをどう集めるか

放課後学習支援をする場所・指導者・運営資金に関しては見通しが立ち具体化されつつあったが、一番の課題は地域に住む小学生がこの場所にどのくらい集まってくるだろうか？という不安であった。地域に住んでいる小学生や家庭の保護者にアフタースクールの存在をどう知らせるか、が先決問題となった。子どもが学ぶ場は第一に「安全・安心」が求められるし、さらに指導者の資質が問われることとなる。これらの条件を折りこんだ「パンフレット」を200部手作りで作成した。そして近隣の家庭や小学校を訪問して設立の趣旨を説明して回った。

ア　手作りのパンフレットの作成

各家庭を「訪問」して子どもや親に知らせていくために「紹介パンフレット」を作成した。このパンフレットには次のような5つの特長を明記してアピールすることとなった。

① アフタースクールとは「学童クラブ」でなく「学習塾」でもない「家庭学習支援」です。

② 指導者には元小学校教員が対応し個に応じて丁寧に宿題を教えます。

③ 学習だけでなく「おやつの時間」もあり、皆で楽しく交わる時間があります。

④ 音読（暗唱）を通して沢山の日本の古典を覚え、日本文化に親しむ時を持ちます。

⑤ 読み聞かせを通して沢山の本を読み、読書習慣を身に付けます。…等

このような具体的な学習内容を折りこんだパンフレットを200部作成して地域の小学校や公民館や近隣の住宅一軒一軒を訪問し配布して回った。地元の小学校の校長先生は趣旨をよく理解してくださり、パンフレットを全家庭に配布する許可をしてくださった。これらの広報活動を通して6月の開校時には地域の小学生8名が体験学習に参加して来た。

イ　口コミによる宣伝効果

児童募集をしていく過程で学んだことは、母親

同士の地域での連携を重視することだった。その例として、私が住んでいる自宅の隣に若夫婦が住んでいて2人の子どもがいた。その長男が4月から小学1年生に入学する予定であった。そこで、この夫妻に4月から始めるアフタースクールのことを話してみた。その結果、長男のM君が参加を決めてくださった。このことが一つの契機となって、M君の家庭と親交のあるSさんの家からも同じ小学1年生の女児が参加することになった。親から親への「口コミ」によって平成25年のアフタースクール開校当時は在籍8名であったが、5年後の平成30年には20名を数えるほどに増加した。紙媒体で紹介するパンフレットも大事であるが、親同士の口コミによる「ママ友ルート」?を活用することが効果的であることを知った。

3 アフタースクールの活動内容

アフタースクールが開かれる日は、毎週3回(月曜日・水曜日・金曜日)で子どもたちが帰宅した放課後午後4時から6時までの2時間となっている。なぜ毎日開かないかというと希望してくる子どもたちの放課後の都合と講師の先生方(シニア世代)に過重な負担をかけないという配慮からであった。指導に当たる講師にとって、あくまでもボランティア奉仕であるため「頑張らない」「力まない」で長続きできる奉仕をお願いしたいと思った。

このアフタースクールの2時間の学習内容は**(音読体操)➡(宿題支援)➡(おやつの時間)➡(読書タイム)➡(自由遊び)**の5つのステップで成り立っている。

1. 音読体操で体をほぐす(約10分間)

子どもたちがアフタースクールに集まって来て最初に取り組むのが「音読体操」である。最初に音読体操を取り入れているのは、次の5つの理由によるからである。

① 音読体操でまず体をほぐし、学校と違った場所で学ぶことを自覚させる。

② 発声練習で全員が声を出し合うことによって連帯意識を育てる。

③ 腹式呼吸で呼吸を整えて、宿題に取りかかる心構えをつくる。

④ 音読を通して「古典」や「ことわざ」「四字熟語」を覚える習慣を身に付ける。

⑤ 「音読カード」を活用して「自己評価」していく力と自信を得ていく。

発声練習

音　読

カルタ取り

ア 発声練習（3・2・1の合図で腹式呼吸を習慣化する）

3（鼻から吸い込み）➡ 2（おなかに入れて）➡ 1（ゆっくり口から吐く）

※ 口から息を吐く時（アーと発声して伸ばして吐くことを繰り返す）

発声練習用の教材「坂戸アフタースクールの詩（うた）」K先生作成を活用。

イ 教科書に掲載されている古典や詩や俳句を多く取り上げ暗唱する

（例）「竹取物語」「平家物語」「枕草子」「寿限無」「故事成語」「雨ニモマケズ」「早口言葉」「論語」「俳句」「百人一首」…等

ウ みんなでカルタ取りを通して日本語の言葉の面白さを知る

（例）「ことわざカルタ」「いろはカルタ」「小倉百人一首」「故事成語カルタ」…等

2．宿題を支援する時間（60分）〜一人ひとりの子に寄り添う指導〜

この時間がアフタースクールの中心分部を占める時となる。子どもたちは学校で出された宿題をそれぞれ持ってやって来る。子どもたちが家で宿題に取りかかる時間は、その子によって多様である。例えば、ある子は帰宅後に直ぐに取りかかり、ある子は夕飯後に、またある子は翌日の朝にと時間は違っている。アフタースクールに来た子どもは一斉に宿題に取りかかり、分からない箇所は講師から教えてもらうことになる。この時間を通して講師が子どもにする支援内容は以下の通りである。（ア・イ・ウ・エ・オは支援する配慮点を示す）

①「連絡帳」を見て今日の宿題を確認する

ア 直ぐに宿題に取りかかれない子への対応

一日の学校生活の中で何らかのトラブル（友達関係、担任との関係、授業中の出来事…等）を抱えてアフタースクールに来る子がいる。そんな時は講師がその子の話に耳を傾け、よく聞いてあげることを心掛けている。そのため講師は家庭での父親や母親のような役割をも担っている。講師は学校の「担任」と違って子どもは評価対象ではない。講師の立場は第三者的（親や教師とも違う）で子どもたちの学習を見守る役割である。この姿勢が子どもたちに安心感を与え、親や教師とは違って気軽に話せる場所となっている。

イ 個別指導で宿題に取り組む

宿題に取り組む時はできる限り講師と子どもとが（1対1か1対2）の個別の関係となっている。これは少人数での対話を重視するからである。子どもたちは宿題をしながら学校や家庭での出来事を「つぶやく」場合が多い。講師は子どもの話（つぶやき）をそのまま受け止めて聞いてあげる、そうすることによって子どもたちは「学校」や「家庭」とは違った姿を現し学習に取り組む。元教師であった講師たちも現職時代には常にクラス単位の30人前後の子どもを対象に指導してきた経験から、一人ひとりの子どもと真剣に向き合うという体験は貴重で新鮮なものとなっている。

一人ひとりの宿題を支援する講師の先生方

②宿題に取りかかる時間…小学3年児童のある日の宿題事例

- 「国語」…漢字練習・新出漢字をノートに2行ずつ繰り返して書く。
- 「音読カード」に音読した様子を評価して親の印を捺す。
- 「算数」…計算ドリル2ページ（分数のかけ算）をする。
- 「自主学習」…テーマを決めて自由課題で1ページ埋める。

ア 宿題に取りかかる順序を決めさせる

この日の宿題は「国語」「算数」「自主学習」の3つが出されていた。まず本人と一緒に3つの宿題を確認する。子どもによってはその日の宿題を正確に書き写してこない場合があるので確認する。次に宿題の3つのどれを優先にして取り組んだらよいかを考えさせる。児童に「宿題の中で君が一番面倒と思えるものから先に片付けよう！」とアドバイスする。この児童は「漢字書き取り」が大の苦手なのである。児童の漢字の書き方を観察すると漢字の書き順も正確でなく、字体も躍ってしまっている。いつも、担任からきれいに丁寧に書くように再三言われ続けてきたために漢字に対しての苦手意識が植え付けられてしまっていた。この劣等感から解放してあげることがまず一歩である。そこで、児童には大きな字体で一字一字の漢字を書くように指示して少しでも丁寧に書けたら「すごい！」と励ましてあげる事にした。これを毎日家事や仕事に追われている母親が放課後家庭ですることは難しい。

イ 漢字を書くことを億劫がる子への改善

3年児童の漢字を書く様子を観察していると鉛筆の持ち方が正確でない。毎回不必要な力が入っている。鉛筆の正しい持ち方の指導は学校では1～2年生であるが、3年生になっても正確に身に付いていないのが実態だ。これを何とか矯正してあげるために「鉛筆矯正器」を購入することにした。この器具は100円ショップで売っている簡単な物だったが、この器具を付けて漢字を書くことによって少しずつ矯正されるようになった。児童は最初漢字が苦手な子どもだったが、この補助器によって漢字練習の宿題にも取り組むようになった。

ウ 得意な教科は自主学習で促す

また、この児童は漢字練習に比べて算数の小数の計算は得意分野であった。そのためにアフタースクールの時間内で終わせなければならないという必然性はない。むしろ家庭で親と一緒にした方が良い場合がある。というのは、児童にとって計算のような得意なものは、母親と一緒に家庭で取りかかり、親から褒めてもらうことが大事で

ある。それが、本人を励ます要因となるからである。宿題を通して親との信頼関係が構築できるように仕向けることも大事である。

エ「自主学習ノート」の為に課題を見付け易い本を準備

ここ数年、毎日1ページを埋める「自由学習ノート（課題解決学習）」の宿題が各学校で出されるようになった。その要因は新学習指導要領（2020年から実施）に向けて「アクティブ・ラーニング」や「プログラミング学習力」が話題となり注目されているからである。

この教育動向から各地域の小学校で「自主学習ノート」が宿題として出される傾向がある。

課題解決型の宿題は親にとって負担となる場合がある。例えば「郷土の偉人を調べる」というテーマを選んでリポートしていく場合には地域の「図書館」「公民館」に子どもを連れていって、調べさせる必要も生まれるかもしれない。その場合、共働きの親にはそんな余裕がないのが普通である。アフタースクールでは地域の図書館から毎週20冊の本を常時借りている。その中には「調べ学習」に適応できる本を約2～3割入れるように工夫もしている。

オ 子どもに寄り添う教育相談

宿題を共にしながら、その子の教育相談にも関わっている。6年女児のクラスは5年生の時から学級崩壊に近い状態が続いていた。4月から学級は荒れて、担任が何人も交代して主幹教諭や教頭（副校長）が担当して臨時のクラス担任となる時期があった。担任の指導や指示に従わない数名の男児がクラスで騒ぎ、授業を静かに受けられぬ状態が続いた。そのために、このクラスの児童は5年生で必要な学力が身に付いていない実態であった。この事は女児の算数の宿題を支援していたF講師が見抜いた。それは、5年生で身に付けるべき「分数のかけ算」の問題が女児によく分かっていないことだった。「どうしたの？算数の授業中何を聞いていたの？」と本人に問いかけると「だって、授業中は男子がおしゃべりしてうるさくて先生の声は聞こえないんだもん！」という返事だった。女児は毎週アフタースクールに通ってきていたが、常に何かイライラしている様子で感情の起伏が激しかった。女児を担当するF講師は女児のイライラの原因がどこにあるのかを日頃探っていたが、女児のクラスが学級崩壊状態にあったことだった。この状態はしばらく続いたが、女児はアフタースクールを辞めることはなかった。卒業後に女児の母親に聞くと「うちの子はアフタースクールだけは絶対辞めないと言って頑張っていた」との情報だった。この女児にとってクラスは荒廃して学ぶ場所でなくなっていたが、アフタースクールという場所だけが「ホッとできる」唯一のオアシスのような場所であったともいえよう。

3．共に食する楽しさを味わう「おやつの時間」（10分）

宿題が終わった子どもたちが全員集まってきて10分間の休憩時間を持つ。この休憩時間を子ども達は「おやつタイム」と呼んでいる。

ア 「おやつ」は全て手作りである

子どもたちに手作りおやつを通して家庭の味を伝えたい、という願いで講師のF先生が毎回手作りの「クッキー」「ショートケーキ」「ゼリー」等を準備してくださる。おやつのメニューは季節ごとに変わるが、帰宅してもすぐにおやつを食べられない子どももいる中で、この「おやつタイム」は参加した多くの子どもたちにとっての「オアシスタイム」ともなっている。

おやつタイム

手作りおやつ

おやつタイム

イ　おしゃべりタイム

このおやつの時間は「食べること」と共に「しゃべる時間」ともなっている。現在１０の異なった地域の小学校から子どもたちが集まって来ているために様々な学校の情報を交換できる時間ともなっている。○○小学校の運動会はいつ、どのように行われたのか…等の話題提供があると自分の学校で行われた運動会の様子も話される。話題がない日は『なぞなぞクイズ』の本を準備して、順番に問題を出し皆で考え答えを探すことを楽しんでいる。

ウ　誕生日会を重視する

「誕生日」はその子どもにとって最も楽しみな時でもある。アフタースクールでは毎月の誕生者を事前に調べておいて、おやつの時間を使って祝福するようにしている。具体的には「誕生カード」を作成して本人に渡すとともに「デコレーションケーキ」（これも手作り）を準備する。その日に集まった皆で「ハッピーバースデー」を歌って賛美し祝福する。

食事後、全員で記念撮影する。その写真を印刷して「誕生カード」の裏に添付して本人へプレゼントしている。この誕生会は家族とは違った雰囲気の中で行われる楽しさがある。

T君誕生日会

手作りケーキ

M君誕生会

エ　1月の授業は「お茶会」から始まる。

講師の中にお茶の免許を持っているK先生がいる。そこで、正月最初のアフタースクールではK先生の指導の下「お茶会」を行う事が毎年の恒例行事となっている。日本文化を少しでも体験することが目的である。具体的には以下の流れを子どもたちに体験させる。

① お茶が運ばれたら隣の人に「お先に」と声を掛けて茶碗を手に取る。

② 茶碗を左手にのせて右手を添える。

③ 茶碗の正面を左か右に2度にわたって少しずつずらして正面を避けて飲む。

④ 飲み終わったら飲み口を人差し指と親指で軽くなぞり懐紙を使って指で拭く。

⑤ おいしかったら「結構なお点前でした」と御礼を言う。

正月お茶会

お点前指導

お点前指導

4. 読書タイム（15分）

おやつタイムの後は静かに本を読む時間を設定している。毎月の第1週は「自由読書」であり第2週～第4週は講師の先生が「読み聞かせ」を行っている。

ア　様々なジャンルの本を準備する

小学生が興味関心を持ちそうな本を坂戸市の図書館から毎週20冊借りて来る。

この20冊程度の本の内訳は「物語」を中心として他に「スポーツ」「動物」「言葉あそび」「食物」…等の多様なジャンルの本を対象にしている。この時間の記録は「読書カード」に各人が記入して「一言感想」を記入して興味関心を持たせている。

イ　読み聞かせの時間

宿題が終わった後、おやつを食べ、読書タイムとなる。読書タイムでは市立図書館で借りてきた本を自由に読む週もあるが、講師が交代で読み聞かせをしている。読み聞かせに選ぶ本は、集まって来る子どもの学年に応じて変わる。原則、講師が事前に読んでみて感動したものを選ぶようにしている。

読み聞かせ

様々な本

自由読書

5．自由遊びの時間（残り時間の活用）

アフタースクールを行っている教育館の前の庭には669㎡の芝生がある。この芝生広場では様々な遊びやスポーツができる。主に男子はサッカー遊びが中心であり、女子はテニスやバドミントン、等を行っている。この芝生で異なった学年の子どもたちが遊びを通して繋がることには大きな意味がある。特に最近では公園等で遊ぶのが防犯上難しくなったことから、このような芝生があることは恵まれている環境である。この自由遊びの時間を安全に過ごすために「スポーツ安全保険」に全員が加入している。

6．夏期特別学習の実施

夏休みの宿題で子どもや親を一番悩ますのは「読書感想文」を完成することであるといわれる。アフタースクールではこの親の悩みに寄り添って読書感想文を仕上げる期間を特別に設定している。夏休みに入った7月下旬に5日間を前期として、8月末の2学期が始まる前の週の5日間を後期として10日間を設定している。子ども一人につき4日間参加できることとしている。読書感想文を仕上げる為には最低連続3日が必要となってくる。例年参加希望者が20名前後いるために一日に指導できる人数を限定している。現在指導者が5名であるために、多くても一回につき10名までの参加者に限定している。時間は夏休み期間なので午前9時30分から11時30分までの午前中2時間となっている。

読書感想文を子どもと共に仕上げる過程は以下の5ステップである。

ステップ1 自分で読みたい本を見付けて熟読して面白かった箇所に付箋を貼っておく。（これは必ず家庭で親と一緒に行なってくるように要請している）

ステップ2 本に貼った付箋の中から特に面白かった場面を3か所に絞る。

ステップ3 絞られた3つの箇所を中心に自分の感想を書き、文章の組み立て（構想表）を考える。原稿用紙3枚の構想（最初の1枚・中心、まとめで2枚）

ステップ4 組み立て表を基にして原稿用紙に記述していく。

ステップ5 書いた文章を読み直して校正する。

指導に当たる講師の先生方は読書感想文を指導するに当たって、子どもが選んでくる本を良く読んで、粗筋をつかみ、その子の読みを生かして、どのように記述させていくかの構想を考えなければならない。この時期になると講師の先生方と子どもたちとが一冊の本を巡って熱心に語り合っている場面が多くなる。

完成した読書感想文

4 数字で見る5年間（2013年〜2018年）の変遷

平成25年（2013年）から始まったアフタースクールも平成30年（2018年）6月で開校5周年を迎えた。この間の児童数・児童在籍校名・夏の特別授業参加数は表の通りだ。

夏期学習での音読体操

1．参加した児童数

年　度	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計数
2013	2	2	1	2	0	1	8
2014	0	3	2	2	2	1	10
2015	0	1	3	2	3	2	11
2016	2	2	2	3	2	3	14
2017	2	4	4	3	2	2	17
2018	2	4	3	5	4	2	20

2．参加児童の在籍小学校名（10校）

学校名	参加者数	アフタースクール卒業者数
坂戸市立勝呂小学校	10	2
坂戸市立南小学校	3	
坂戸市立入西小学校	6	3
坂戸市立桜小学校	2	
坂戸市立浅羽野小学校	2	

学校名	参加者数	アフタースクール卒業者数
坂戸市立坂戸小学校	2	1
坂戸市立大家小学校	1	
鶴ヶ島市立杉下小学校	4	1
鶴ヶ島市立栄小学校	2	1
鶴ヶ島市立藤小学校	3	2

3. 夏期特別学習（読書感想文完成講座）参加者数

年　度	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計数
2013	3	2	3	2	0	2	12
2014	0	3	2	4	2	1	12
2015	1	1	3	2	3	2	12
2016	5	3	2	2	2	2	16
2017	3	3	4	3	3	2	18
2018	3	3	3	4	3	2	18

4. 保護者との連携誌「坂戸アフタースクールだより」の発行

保護者との連絡を図るために毎月「坂戸アフタースクールだより」を発行している。この便りは２０１３年6月に第１号を発行してから２０１８年7月で第６３号を数えている。この便りは原則毎月の第４週に次の「月の予定」や「お知らせ」…等を保護者向けに載せている。この便りを通してアフタースクールでの子どもたちの学習の様子を知らせて家庭との交流を図っている。

5 評価と課題

放課後の子どもたちが「安全・安心」に過ごすためには地域住民の見守りが必要である。このことは既に各方面から指摘されてきたことである。放課後子どもプランは地域によって多様な活動形態が考えられている。一般的に「アフタースクール」というと、現在、主に各私立小学校等で放課後の校舎や教室・多目的室を活用して行われている「学習支援活動」「スポーツ活動」「料理活動」「音楽活動」「文化活動」「企業との連携」…等を含めての多目的な活動を示していることが多い。

これに対して私たちが進めてきたアフタースクールは以下の点を強調してきた。

- 放課後の子どもたちの家庭学習（宿題）支援を中心とした活動である。
- 見守り指導者として元小学校教師であったシニア世代を活用している。
- 学びを中心に家庭内で行う「おやつタイム」「読み聞かせ」「音読」を取り上げる。

「あなたの目を上げて見まわせ、彼らはみな集まってあなたに来る」という言葉がイザヤ書６０章の中に出てくる。私が住んでいる地域をよく見まわすと、放課後の見守りを必要とする子どもたちが沢山いる。その子たちをシニア教師が温かく迎えてお互いに生き生きと放課後を過ごす。このような形態の放課後学習支援の場が、今後各地に設立されていくことが地域教育の活性化に繋がると信じたい。

未来に羽ばたけ「地球にやさしいエンジニア」

――大切な郷土の自然と地域社会が持つ教育力に注目した世界市民の育成――

静岡県立浜松城北工業高等学校　臨時講師

飯尾美行（いいお よしゆき）

1953年生まれ。1980年静岡大学大学院工学研究科修了。1980年静岡県立浜松工業高等学校定時制勤務。1988年静岡県立浜松城北工業高等学校勤務。1995年同校環境部創設・顧問。現在に至る。静岡県地球温暖化防止活動推進センター（アースライフネットワーク）理事。静岡県環境カウンセラー協会理事（ESD担当）。環境省環境カウンセラー。静岡県環境学習コーディネーター。浜松市環境教育推進ネットワーク運営委員。連絡は静岡県浜松市中区住吉5-16-1の同校まで。

第 68 回　読売教育賞から

【地域社会教育活動】

環境保全 生徒に伝授

「草刈り機の刃は地面と平行に、腰を使ってスライドさせて」。浜松市中区の特別緑地保全地区「椎ノ木谷」に10月27日、飯尾さんの声が響いた。飯尾さんが顧問を務める環境部のメンバーをリーダー役に、1～3年生約30人がカリキュラムの「社会体験活動」で環境ボランティアに参加した。

この日の活動は「里山保全」。広場の草刈りをして堆肥にする。生徒たちは、草を刈り取って手押し車で運搬する作業を2時間半、繰り返した。生熊凱人さん(16)は「活動を続け、環境はつながっていることが分かった」と話した。

社会体験活動は、飯尾さんが教諭時代の1995年に創設した環境クラブ（現・環境部）のボランティアが始まりだ。活動は、地域の環境保護団体との連携、部員以外の生徒の参加などと次第に発展し、35時間以上続けると、単位として認定されるようになった。

現在は、浜名湖や遠州灘海岸の清掃、森の植栽など、年30回以上、実施され、単位を取得した後も参加し続ける生徒もいる。飯尾さんは「地域や自然に感謝し、環境を思いやるエンジニアになってもらいたい」と願っている。（植村直人）

生徒たちに草刈り機の扱い方を指導する飯尾さん（右）（浜松市で）

地域社会教育活動部門 最優秀賞

静岡県立浜松城北工業高校　飯尾美行・臨時講師 66

佐藤一子・東京大学名誉教授「学校と地域を結ぶ多彩な環境ボランティア活動を積み上げている。持続可能な社会へ、未来のエンジニアとして若者の視野と行動力を育み、共感の輪を広げる分厚い実践である」

【最優秀賞選評】

佐藤一子　東京大学名誉教授

「学校と地域を結ぶ多彩な環境ボランティア活動を積み上げている。持続可能な社会へ、未来のエンジニアとして若者の視野と行動力を育み、共感の輪を広げる分厚い実践である」

1 はじめに（ねらいと背景）

便利で豊かな社会を支える“ものづくり”にかかわる本校の工業高校に通う生徒たちが、地域の自然を守る環境ボランティア活動への参加や国際規格「環境マネジメントシステム（ISO14001）」内部監査員研修への挑戦等の環境教育活動を通して、大切な「人と自然の関係」や「環境に配慮した生き方」に気づき、身近な環境問題から地球的規模の環境問題について生涯にわたり関心を持って学び続ける中で、自らの行動・生き方を通して持続可能な地域社会、世界を目指して変えていこうとする「世界市民」を育成することを目指した環境教育への取り組みである。

環境教育への取り組みを始めた当初は、「工業立国の日本」を目指す工業高校において、生物の多様性、森林破壊をはじめ地球温暖化等の地球的規模の環境問題について関心を持たれる先生方も生徒もとても少ない状況にありました。そうした中、私が勤務する静岡県立浜松城北工業高校（機械科・電気科・電子科・電子機械科4学科：生徒数約1000名・職員約100名）では、地球規模の環境問題が世界的にクローズアップし、ブラジルのリオデジャネイロで開催された「地球サミット」（1992年開催）の前年の1991年より、環境教育活動への取り組みを始めました。生徒会の顧問であり自然に親しむ「山の会同好会」の顧問でもあった私は、「環境教育」について学んだことも取り組んだ経験もない門外漢でありました。全くの「ゼロ」からのスタートとなった環境教育活動への取り組みは、地域社会の理解と協力を得ながら共に進められることから、地域の自然を守るクリーン作戦等の活動への参加を呼びかける「環境ボランティア活動」と本校の大切な工業高校の存在意義でもあり多くの先生方の思いとも一致できるよう「自然や環境に配慮した“ものづくり”」の二つを中心のテーマに掲げ、その取り組みをスタートしました。そうした中で1995年には、環境教育活動を推進する生徒たちのリーダーを育成する「環境クラブ」（現在の環境部、部員137名）を創設しました。

私たち環境部の活動は、当初から引き継いできた「参加の機会はチャンス」として紹介・提供され、強制等の全くない自主的な「完全自由参加型の活動」としました。活動の目標は、①自然や環境に配慮した“ものづくり”と②地域の自然を守る“環境ボランティア活動”を中心とし、自然を守り地域社会に貢献する中で、地球的規模の環境問題についても対応できる「地球にやさしいエンジニア」として成長することとしました。そうした活動に取り組む中で、生徒たちは自らの行動を通してクラスの友人、家族、地域の人々にも「共感の輪」を広げながら、みんなで取り組む「環境教育」、自然や環境への負荷に配慮する「持続可能な社会」の大切さを伝えていくことができるようになってきました。また、人類の「生存権」にかかわる最重要課題である「地球温暖化問題」についても、高校生の立場から考え、その思いを地域社会に発信できるようになってきています。

環境教育活動のリーダー育成を目指した「環境クラブ」の取り組みをモデルに、保護者・市民を対象とした「PTA環境教育クラブ」の創設、地域の子供たちを対象とした「城北ジュニア・エコクラブ」の創設、生徒・PTA・教職員による「環境教育宣言」、潜在自然植生による「城北の森」づくり、北欧をモデルにした「城北リサイクルステーション」、本校独自の「技術と環境（学校設定科目：2000～2012）」、県下初の環境ボランティア活動による単位認定、市内19か所での森づくりなど多くの環境教育活動が継続されています。

私は、生徒たちの実践的で実感のある「環境教

育活動」を通して、①私たちにとって身近で大切な「郷土の自然」を守りながら、21世紀の最重要課題とも言われるマイクロプラスチックの海洋汚染、地球温暖化問題等の「地球的規模の環境問題」についても確かな情報を通して正しく知ること、そして、②自らの「ライフスタイル」や「生き方」について考えること、さらに、③内発的な気づきと行動を通して、それぞれの立場で「生活のあり方」や「社会のあり方」に関心を持ち、「一人の小さな一歩」を大切にしながら変革に挑戦できる「世界市民の育成」を目指していけたらと願っています。

自然と人間の関係についての確かな価値観や関係性を生涯にわたり学び続ける中で、一人の人間の「内なる変革」の連鎖が、私たちの社会の未来や世界をも変えて行けるという視点に立ちながら、リアリティーのある実践的な「環境教育活動」を目指して取り組んでいます。

2 取り組んだ内容

自然や環境に配慮した「ものづくり」と地域の自然を守る「環境ボランティア活動」を中心に、「地球にやさしいエンジニア」を目指した具体的な七つの活動を以下に紹介します。

1.「地域の自然を守る環境ボランティア活動」について…

年間を通して行われる地域の自然を守る環境ボランティア活動には、中田島砂丘・浜名湖・佐鳴湖等のクリーン作戦の他、「椎ノ木谷」（静岡県下で初めて特別緑地保全地区に指定された）を中心とした佐鳴湖周辺の生態系回復を目指した「里山づくり」があります。本校では、環境部員がリーダーとなり、クラスの友人生徒と共に休日を利用して、149名（今年度）が環境ボランティア活動に取り組んでいます。また、本校は、そうした生徒たちの取り組みを卒業単位として認定する県下で唯一の工業高校となっています。

（生徒513名が年間35時間以上の環境ボランティア活動で単位を取得）

■「地域の大切な自然を守る環境ボランティア活動」

静岡県下初の「特別緑地保全地区」に指定された郷土の森や里山を整備する生徒たち（通年:椎ノ木谷:浜松市中区富塚町）

2.「地域の森づくり」について…

校内の「城北の森」づくり（地域本来の木々による潜在自然植生110種・547本による）、及び、本校の「城北の森」をモデルにした地域での森づくりの推進活動に積極的に取り組んでいます。**（現在までに市内19か所で実施、協力:NPO・浜松市・浜松葵ライオンズクラブ・浜松ロータリークラブ・国際ソロプチミスト浜松他）**

■「地域の森づく りと保全活動」

本校の潜在自然植生による「城北の森」づくりをモデルにした地域の森づくりへの挑戦は、現在までに市内19か所で取り組まれている

3.「バスによるエコツアー」の実施について…

環境部主催による「バスによるエコツアー」（静岡・山梨・長野・愛知・岐阜・三重・神奈川県他、年間2回）での聞き取り調査と「城北工高・環境教育新聞づくり（NIE :Newspaper In Education）」（全8ページA3判オールカラー/2005年度:7000部印刷・地域への配布）・「城北だより」（PTA広報誌）を通して、水や森をテーマに環境意識の啓発を行っています。**（1999年より環境部エコツアープログラムをバスツアーとして全30回実施）**

■「森をテーマにバスによるエコツアー」

浜松市の水源である天竜川上流の森の散策を地元NPOと協力して実施し、「森づくりのあり方を学習するエコツアー」を楽しむ生徒たち

4.「環境先進国をモデルにしたリサイクル活動」について…

環境先進国デンマークをモデルにした「城北工高リサイクルステーション」では、生徒たちによって毎日分別収集される校内のゴミを100%社会の資源となるよう市内のリサイクル専門業者と協力して、地域における「ゴミゼロの学校モデル」、「循環型社会」を目指して取り組んでいます。**（本校の「分別意識アンケート」調査より:いつもゴミの分別している・だいたい分別していると答えた生徒は96.5%、2017.12.7実施）**

■「環境先進国デンマークに学ぶ生徒たちによる校内リサイクル活動！」

循環型社会を目指し校内から出るゴミを、市内のリサイクル専門業者と協力して「100%リサイクル」を推進している

5.「市民の命を守る防潮堤での森づくり」について…

静岡県と浜松市が津波対策として建設中の防潮堤（高さ13～15m、長さ17.5km）に、本校の「城北の森」をモデルにした潜在自然植生による森づくりを、市民の方々と協力して取り組んでいます。**（現在までの累計長さ3000m・9000本、2020年度の完成時には全長17.5kmのうち約17%に、私たちの森づくりが行われる予定、協力NPO縄文クラブ、KALAプロジェクト、浜松いわた信用金庫他）**

■「市民の命を守る防潮堤での森づくり」

静岡県と浜松市が津波対策として建設中の防潮堤に、本校の「城北の森」をモデルにした森づくり・植樹活動を、多くの一般市民の方々と協力して取り組む生徒たち（高さ13～15m、長さ17.5km:篠原工区）

6.「城北ジュニア・エコ・クラブ」（地域の子供たち対象）について…

「城北ジュニア・エコ・クラブ」では、環境部員が中心となり本校の環境教育活動で学んだ内容のエッセンスをまとめ、小学生・中学生にも親しみやすいテーマで、できるだけ分かりやすく学習できる「体験的プログラム」を提供しています。**（地域の子供たち延べ4000名が来校）**

■「城北ジュニア・エコ・スクール」

「城北ジュニア・エコ・スクール」には、地域の小・中学生（延べ約4000名）が来校し環境学習をする。北欧のリサイクル事情の紹介や本校の「地球にやさしいものづくり」を通して、リサイクル・リユース等について学習する子供たち（本校「城北の森」・「多目的教室」にて）

7. 全国に先駆け国際規格「環境マネジメントシステム（ISO14001）」・内部監査員に挑戦について…

全国の工業高校に先駆け環境部の部長・副部長の3名のチャレンジから始めた国際規格「環境マネジメントシステム（ISO14001）」・内部監査員養成コースへの挑戦は、環境部員が中心となり全校生徒への普及・啓発にも取り組んでいます。**（生徒1142名が内部監査員修了証書を取得）**

■ 国際規格「ISO14001・内部監査員」への挑戦！

地域の世界的企業である浜松ホトニクス（株）、ヤマハ発動機（株）等の先進的な企業で、環境保全・環境法規等の豊富な業務経験を持つ講師の方々から実践的な環境マネジメントシステムの研修を受講する生徒たち（生徒1142名修了）

3 環境教育活動の意義とその成果

＜環境教育活動の意義＞

工業立国である日本のものづくりにおいて、自然や環境に配慮できるエンジニアの育成、及び世界的潮流でもある「持続可能な社会」とそのための「人材開発（ESD、SDGs）」において、工業高校におけるひとつの「学校教育モデル（グッドプラクティス）」として本校の環境教育活動を、提案できる意義は大きいと考えます。

また、本校での取り組みは、環境に関する学科やコースも持たない一般的な公立高校における環境教育活動であり、現在の日本の法律・施策が認めている中で、28年間という長期にわたって継続して取り組むことが可能な環境教育活動であります。校種による違い、普通科と職業科などによる違いはあっても、どの学校でも誰でも同様に取り組むことのできる取り組みが多数あり、自然や環境に配慮できるやさしい心や態度を、「世界市民」としての「教養」として学びながら、「実感（リアリティー）」を伴う体験活動を通して身に付けることのできる「実践的な環境教育活動」である点も、その意義は大きいと考えます。

「世界的な潮流」と「共通価値の創造」としての「SDGs」…

「地球温暖化問題」など地球的規模の環境問題の解決には、世界共通の価値観が重要となります。また、環境教育における歴史を見ても未来を生きる子供たちへの教育、気候変動をはじめとする「SDGs」（「持続可能な開発目標」）を、世界共通の価値として行動できる「世界市民（地球市民）教育」が極めて重要と考えます。そのためには、あらゆる「教育の機会（フォーマル・ノンフォーマル・インフォーマル）」を活用した生涯にわたる教育を通して、一人一人がそれぞれの社会を変革する力を持った「世界（地球）市民」に成長できる「教育のための社会」づくりが求められていると考えます。

＜環境教育活動による成果＞

本校が「環境教育活動」を開始したのは、今から28年前の1991年となります。全くのゼロからのスタートで周りには取り組んでいる学校はありませんでした。本校での取り組み方として、工業高校としての存在理由とも合致する自然や環境に配慮した“ものづくり”と地域との協力による“環境ボランティア活動”の二つを大きな柱としたことが、結果として継続的な取り組みを続けられた大きな理由となりました。私たちの学校がある浜松市は、ものづくりの街としても有名で世界的なHONDA、YAMAHA、SUZUKIといった大企業を有する産業都市であり、美しい浜名湖、日本三大砂丘の中田島砂丘、水量豊富な天竜川と自然環境にも大変恵まれています。そうした中にあって、ものづくりと自然を大切にするという二つの取り組みのテーマは、本校の生徒、保護者、先生方、同窓会、そして地域企業や自治体等からの理解や共感を得られたことも極めて重要な要素であったと思います。

①1995年にリーダー育成のための「環境クラブ(現:環境部)」を創設し、本校の実践的環境教育プログラムの基本となるモデルをクラブ活動を通して作り続ける中で、より多くの生徒たちが「共感」できるプログラムづくりへと工夫、改善する中、現在では部員数137名を有する本校を代表する最大の部活となっています。

■「環境をテーマに幅広い活動を展開」

1998年(平成10年)3月20日 金曜日 12版 34

教育

「環境」テーマに幅広い活動展開

浜松城北工業高 環境クラブ

「ソーラー車いす」づくり・重油回収 砂丘の清掃・エコツアー…

楽しみながら問題意識深める

本校で環境教育活動がスタートして5年後の1995年に、生徒のリーダー育成をめざした「環境クラブ」(現在の環境部)が創設された:1998年3月20日(金)朝日新聞より

②本校における環境教育活動の推進役を「環境クラブ」の生徒たち自身としたことにより、先生方の転勤等に左右されることのない持続可能性を持った取り組みとなりました。また、先生や学校だけで生徒たちの活動のあり方が構成されたり、強制されたりすることのないよう配慮されており、「自由で無理のない活動」、「自発的で意味を感じる活動」といった生徒たちの目線でとらえた取り組みとなっています。

本校では、生涯学習という視点から環境部のボランティア活動は発足以来すべて『自由参加』という伝統を引き継いでいる。生徒たちによるボランティア活動の説明会が年間を通して丁寧に定期的に行われ、他の部活に所属する生徒たちも好きな時に好きなだけ参加できる「参加希望票」に記入して取り組む「開かれたシステム」となっています。

③地球にやさしいエンジニアの育成」のための明確な目標と具体的な５項目の行動指針からなる「環境教育宣言」（2000年11月18日、本校体育館：生徒手帳Ｐ28掲載）が行われ、本校の「環境教育の原点」となっています。

浜松城北工業高校の環境教育活動の「原点」となっている「環境教育宣言」（2000年11月18日:本校体育館）

④全校生徒、職員、地域の方々とつくった生徒潜在自然植生による「城北の森」（１１０種類・５４７本、完成：２００２年３月１６日）は、本校の「環境教育のシンボル」となっています。

⑤本校の潜在自然植生による「城北の森」をモデルにした「市民の森づくり」が市内１９か所で取り組まれました。

郷土の潜在自然植生による「城北の森」（110種、547本）は、本校の環境教育の「シンボル」となっている

地域の教育力を活かした環境ボランティア活動として希少種「双葉葵」の植栽活動に取り組む生徒たち（浜松城公園にて）

⑥本校では２０００年度より全国の工業高校に先駆けて、本校独自の「技術と環境」（週２時間：必修科目・１年生）、「地球環境化学」（週２時間：選択科目・３年生）を、環境教育科目として教育課程上に位置付けました。２０１３年度には、全国の工業教育の学習指導要領に新たな教科として「環境工学基礎」が新設され、環境に配慮した工業技術者として学ぶ基礎科目として位置づけられ、同年本校では、今まで取り組んだ「技術と環境」（週２時間：必修科目）、３年生では「地球環境化学」（週２時間：選択科目）を発展的に廃止し、１３年間の本校独自の「技術と環境」の授業をクロスカリキュラム化して、「工業基礎」、「課題研究」等の多くの工業科目の中で教養として「環境」について学ぶ方法が採用されています。

全国の工業高校に先駆けカリキュラム化された本校独自の「技術と環境」（週2時間:必修科目･1年生全員）

⑦環境先進国デンマークをモデルに、ＰＴＡ環境教育クラブと生徒たちにより建てられたログハウス風「浜松城北工高リサイクルステーション」（２００３年３月１４日完成）では、生徒たちによって毎日校内のゴミが分別収集され１００％社会の資源となるよう地域のリサイクル専門業者と協力し「ゴミゼロの学校」モデルを目指して取り組んでいます。

⑧ＮＰＯ法人「リサイクル市民の会」、浜松市清掃管理課と本校の環境部が協力し、浜松市の特別予算による３年間の社会実験を通して、市民が自分たちのゴミを自分たちで分別する２４時間型の「リサイクルステーション」が、本校の「城北リサイクルステーション」をモデルにして市内各所に設置されています。

本校の「城北リサイクルステーション」をモデルに市民のための「24時間型リサイクルステーション」が市内に多数設置されている

⑨静岡県下初の「特別緑地保全地区」に指定された郷土の里山である「椎ノ木谷」を中心に、地域の自然を守る環境ボランティア活動を「学校外の学修」として単位認定する県下で唯一の高校となっています。（2019年3月現在513名が単位を取得）

⑩環境部のボランティア活動は、発足以来『自由参加』という伝統を引き継ぎ、本校では環境部の生徒たちによるボランティア活動の説明会が定期的に行われるなど、他の部活に所属する一般の生徒たちにも気軽に参加できるシステムとなっている。毎年100名を超える生徒が地域の自然を守るクリーン作戦（中田島砂丘、浜名湖、佐鳴湖）に参加するなど年間を通して環境ボランティア活動への「共感の輪」は着実に広がっています。

みんなを幸せにする態度には、「ものづくり」と「環境ボランティア活動」との間には共通するものがある

「社会貢献活動としての環境ボランティア活動」に取り組む生徒たち（通年:椎ノ木谷:生徒513名が単位を取得）

⑪本校の環境教育活動の森づくり、リサイクル活動、再生可能エネルギー等を利用したものづくりなどのエッセンスをわかりやすく伝える「城北ジュニア・エコ・スクール」は、地域の子供たちの楽しい環境学習の場となっていま

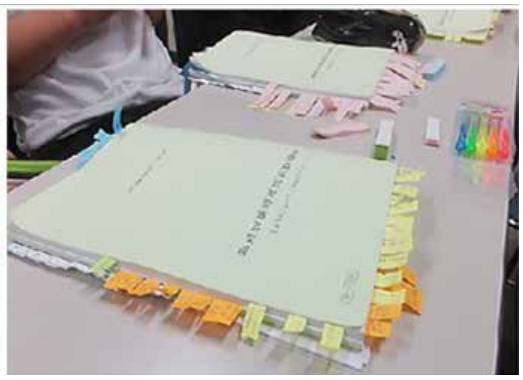
す。（延べ 4000名以上が来校）

「城北ジュニア・エコ・スクール」　地域の小・中学生が来校し環境学習をする。「地球にやさしいものづくり」について、できるだけ「やさしい言葉」で伝える生徒たち（本校「城北の森」にて）

⑫地域のNPO法人SDC検証審査協会の協力を得て2009年度より世界的企業の浜松ホトニクス（株）、ヤマハ発動機（株）等で環境保全や環境法規等の豊富な業務経験を持つ方々を講師に迎え、実践的な国際規格「環境マネジメントシステム」内部監査員養成研修を全国の工業高校に先駆け開講、環境部の部長・副部長の3名による挑戦からスタートし、本校では現在約380倍の生徒たちが修了証書を取得しています。（生徒1142名修了）

国際規格・環境マネジメントシステム(ISO14001)・内部監査員に、多くのクラスの生徒・友人たちも挑戦！

本校は、全国の工業高校に先駆け「地球的規模の環境問題と“ものづくりのあり方”を学ぶ」国際規格に挑戦し、1142名が修了。



⑬生徒たちは本校での学校生活の中で、「地球にやさしいエンジニアだね！」、「それって地球にやさしいエンジニアなの？」といった何気ない会話の中に、環境教育活動を通じて培った新たな「価値観」を創造しています。

⑭PTAのアンケート調査で「本校の環境教育活動を誇りに思う」と書かれる保護者の方々や入学試験で「環境部に入り活動したい」「環境ボランティア活動をしてみたい」いう受験生もいることなど、PTA環境教育クラブや城北ジュニア・エコ・スクールによる地道な活動の成果と考えます。

⑮環境ボランティア活動を通して、生徒たちの学校での先生方による評価とは違った側面を見ることができます。また、地域のNPOのスタッフの方々から「ありがとう！お疲れ様！」、「よく頑張ったね」と誉められたり、「疲れたらいつでも休んでね」と言われたりする中で、生徒たちは人とのやさしいかかわり方や自分のやれることを見つけたり、自信を付けたりしながら成長しています。（1年が経過するころにはスタッフの方々から「最初に来た時と随分違うね。いろいろな事がやれるようになったね！」と言われることが多くあります。）

⑯生徒たちが様々なボランティア活動にチャレンジする中で、地域に暮らすお年寄りやNPOの方々から人生で大切な多くのことを学ぶと同時に、スタッフの“後ろ姿”を通して生徒たちは教室では学ぶことができない“生きる意味”なども学んでいます。そして、お年寄りの多いNPOのメンバーの方々から“お礼の言葉”を聞くたびに、参加した生徒たちの顔は笑顔となり、そうした生徒たちの若い“力”や“存在”が、NPOの方々の大きな「希望」となっています。

生徒たちの若い“力”や“存在”は、お年寄りの多いNPOのスタッフの方々の大きな「希望」となっている（浜松市:椎ノ木谷）

⑰学校教育による環境教育活動を通して、地球温暖化防止を含め新しい価値を創造し、そうした価値を共有したいと願う「世界市民（地球市民）」としての生徒たちが、「ところてん」のように、毎年、毎年、生まれています。

環境部員をリーダーに自然や環境を守る体験を通して新しい価値を創造し、全校生徒にも“共感の輪”を広げている

⑱年間を通して行われる環境ボランティア活動に参加する生徒の中には、アスペルガー・学習障害・自閉的傾向といった発達障害を持つ生徒たちや人間関係が苦手で発達支援センター・メンタルクリニック等に通う生徒たちも仲良く参加しています。「自由参加型」のボランティア活動は、互いを認め合い自分たちのペースで取り組める活動ということもあり、こうした生徒たちには取り組みやすいものとなっています。

⑲本校は、「共生教育」を目指す工業高校として静岡県で唯一、特色ある立派な「特別支援学校城北分校」（定員18名/学年：合計54名、2011年4月開校）が併設されています。

「教育のための社会」づくりを目指し28年間取り組んだ「教育相談活動」と「環境教育活動」を統合した本校の「共生教育」と「地球にやさしいエンジニア」の育成

中日新聞　(第3種郵便物認可)

静岡特報　教育

環境教育 さらに充実

10年前から実践 今春から必修科目に

リサイクル服着て実習

浜松城北工高

木登りやスケッチ 体験授業で『自然』実感

ソーラーボートの製作などユニークな環境教育の実践で知られる県立浜松城北工業高校（浜松市住吉5丁目）が今春から、学校独自の授業科目「技術と環境」を設定、リサイクル実習服を導入するなど新たな環境教育の取り組みを始めた。2003（平成15）年の高校の新学習指導要領実施を踏まえた「特色ある学校づくり」の先行例として成果が注目される。

（報道部・林　知孝）

取り組みを始めて10年目に紹介された本校の「特色ある環境教育活動」:2000年5月17日（水）中日新聞より

リサイクル実習服を着て「地球にやさしいものづくり」に取り組む生徒たち（ソーラーラジオの製作:工業基礎）

中日新聞　2017年（平成29年）10月18日（水曜日）　☆　〔20〕

明るい社会へ 寄り添い続け

第34回中日ボランティア賞

静岡県内でボランティア活動を続ける団体を顕彰する「第34回中日ボランティア賞」（中日新聞東海本社、中日新聞社会事業団東海支部主催）の贈呈式が19日、浜松市中区元城町のホテルコンコルド浜松で開かれる。受賞した7団体の活動や思いを紹介する。

椎ノ木谷保全の会

浜松市中区

熱心に取り組む静岡県立浜松城北工業高等学校の環境部・社会体験活動の生徒たち

農作業を終えたあとの保全の会のメンバーら＝浜松市中区の椎ノ木谷地区で

自然を守り集える場に

シイやナラの木が林立し、「ミカワバイケイソウ」などの希少種も存在する中区富塚町の椎ノ木谷地区。自然あふれる七万平方㍍の環境を、子どもたちや地域住民ら約百十人で守る。会を引っ張るのは平均六十代のメンバー約二十人。代表の荒木信幸さん（七〇）が目標とするのは、人と自然がうまく共存していた「昭和三十年代の里山」だ。

荒れ地を開墾し、今では田で稲、畑ではイモ類、夏野菜を収穫できるようになった。地元の小学生や高校生らに、農作業体験や旬の味を楽しんでもらえるような場所にした。

環境保護も意識している。農作地とは別に、トンボやホタルを観察する区域、動植物を守るため立ち入りを制限した区域を設けた。

荒木さんは「地域の人との交流を楽しみながら、住宅地の中に残る素晴らしい自然を守っていきたい」と活動への意欲を見せた。（大城愛）

地域の大切な自然を守る椎ノ木谷での里山づくり・環境ボランティア活動の取り組みに対し「中日ボランティア賞」（中日新聞社）を受賞した：2017年10月18日（水）中日新聞より

“自然がつなぐ心と心”

―環境教育の大切さを実感―

私は会社勤めを経験してから教師となりました。最初に赴任した学校は、定時制の工業高校でした。そこで受け持ったクラスは、校内での暴力行為、校外では暴走行為、シンナー遊びなど、クラスで16人もの生徒が保護観察処分を受けているいわゆる〝荒れたクラス〟でした。

保護観察処分といっても、血気盛んな生徒たちです。自宅謹慎で反省するはずもなく、程なく全員が登校謹慎となりました。そのため私は、トイレ掃除や草取りなど、彼らに特別な課題や作業を与える仕事に明け暮れる毎日を送っていました。

そのような日々に、〝ああ、教師にならなきゃよかった。いっそ辞めてしまおうかな〟と、弱気な気持ちになったことも何度かありました。しかし、目の前にいる生徒たちを見ると、〝この生徒たちにも、何か使命があるに違いない。まずは彼らと友だちになろう！〟と、教師としての“使命”をふたたび思い起こす自分がいました。

そこで私は、授業が終わった週末に、生徒たちと近くの天竜川や中田島砂丘などに出かけては、一緒に夜釣りを楽しんだり、星空を見てはいろいろなことを語り合いました。すると、学校ではコミュニケーションがとれなかった生徒たちとも、自然の中では不思議とつながりを深めることができたのです。

こうした経験が、〝人は自然の中では心豊（か）になり、心と心がつながる〟という“実感”を私に与えてくれました。その後、私が取り組むこととなる「環境教育」への大きな原動力となっていきました。

夏休みを利用し企業での環境インターンシップに挑戦、企業から排出される水質を検査する生徒たち（ヤマハ発動機（株））

自然保護のメッセージを掲げ、ペットボトルを利用したソーラー&人力ボートを走らせる生徒たち（太陽文明号：浜名湖にて）

生徒たちが3年間、江戸時代から伝わる伝統技術を学びつくった大凧に自然保護のメッセージを掲げた環境展示（本校体育館）

PTA 環境教育クラブは月1回行われ、環境問題の学習会やエコツアーの企画などが行われる（本校生活館）

「城北ジュニア・エコ・スクール」では、地域の子供たちを対象にペットボトルによる“ものづくり”を通した環境学習が行われる（本校プール）

4 「静岡県立浜松城北工業高等学校創立６０周年記念誌」に寄せられた卒業生・在校生の言葉より

今後を担う私たちの決意

生徒会長
井尻　康太

浜松城北工業高校では、「地球にやさしいエンジニアの育成」をテーマに、環境教育、クリーン作戦、環境ボランティア活動などが盛んで、生徒一人一人が地球環境について考え、自ら挑戦しています。近年では、多くの生徒がISO14001シリーズ内部環境監査員育成コースを受講しており、環境を良くしたいという思いが強まり、世界に通用する実践的な人材が増えてきていると思います。私自身も受講させて頂き、環境問題に国境はないことを学び、エンジニアとして環境にやさしい製品を作ることが、現在のグローバル社会においてとても重要なことだと思いました。

「環境教育は、人生を通して考えること」

2003年度後期・生徒会長　二ツ橋 麗貴さん

環境の課題研究の授業で、自転車やペットボトルの廃材から環境保護のメッセージを掲げた「人力&ソーラーボート」を作り、浜名湖や大阪城のお堀でレースに参加しました。私にとっては楽しい思い出であり、忘れられません。

人も地球の生きものであり自然と離して考えることはできません。エンジニアを目指すかどうかに関わらず、先人達のように人は自然から多くのことを学ぶと思います。今、私は、健康を望む人たちの手助けをしたり、文字で伝えるライターの仕事をしています。自分が感じたことを大切に、人生に役立ててほしいと思います。環境教育は、生徒の時だけではなく、人生を通して考えることだと思います。

2006年度 電子機械科卒業　桂　麻美さん

私は、現在、幼稚園教諭として、子ども達と充実をした日々を過ごしています。城北工高とは分野は違いますが、その中でも環境の授業で学んだことを活かし、「もったいない」という言葉を知らせながら、物を大切に使うことを伝えています。

子ども達にとって、紙など少しでも使った物はもう使えないという意識が大きく、使える所があっても捨ててしまうことが多いです。今後の未来を担う子ども達だからこそ、物を大事に使うことを知らせながら、環境に対して優しい子を育てていきたいと思います。

「ＮＩＥによる環境教育で、持続可能な未来を!」

2013年度卒　島田 有里紗さん

NIEによる環境教育を受けて、地球環境がいかに危ない状態にあるのか知りました。地球温暖化による平均気温の上昇、それに伴う北極域の海氷・氷床の融解、海面上昇、洪水リスクの倍増など、教科書だけでは到底知り得ない情報を得ることができました。それらを知ることにより、自然や地球環境への理解が深まり、そして、このままではいけないという危機意識が高まりました。本校のこのような環境教育が、今の日本には必要ではないかと思います。大人だけでなく、未来を担う子供たちに地球の現状を、そして未来へ持続していくための方法を伝えていくことが、日本のため世界のために、今、最も大切で必要なことなのではないかと思います。

「地域の自然を守る-ふるさと貢献賞」

2014年度後期・生徒会長　青山 翔磨さん

私は、環境ボランティア活動による社会貢献活動を先輩たちから引き継ぎ、中田島砂丘、浜名湖、佐鳴湖でのクリーン作戦や椎ノ木谷での田植えや稲刈り、植林や森の整備作業などを里山づくりや自然保護活動を保全の会の方々と行ったりしました。25年間に渡る活動に対して「ふるさと貢献賞」(静岡新聞社・静岡放送他)を受賞することができ、とてもうれしく思います。

浜名湖では、小さなグループになってゴミ袋が一杯になるまで清掃をしました。作業中に他の参加者からお褒めの言葉をいただいた時は、参加してよかったと思いました。

今後も社会貢献活動を通して「地球にやさしいエンジニア」を目指して行ってもらいたいと思います。

静岡県地球温暖化防止アクション・キャンペーン」(757チーム、4万人参加)のエコスクール部門で、本校が「グランプリ」を受賞しました。(2008年2月23日:静岡市「あざれあ」にて)

２０１５
静岡県立浜松城北工業高等学校
創立60周年

2007年度 電子機械科卒業　安間 寛文さん

私は現在、ヤマハ発動機で水上オートバイのエンジン開発業務を行っています。

城北工高では、エンジニアに求められる工業知識と共に、将来、環境意識が大切になるということを学びました。エンジン開発業務では、環境に対する配慮が常に必要です。今後、一段と厳しくなる排出ガスの規制などにも対応できる環境技術が求められています。

大変な仕事ですが、自分が開発した製品を見ると苦労を忘れます。これからも環境に優しく、人の笑顔の架け橋となる製品を提供したいと思っています。

2011年度 電子科卒業　宮沢 和明さん

私は電子科の卒業生です。なかでも、３年生の課題研究でおこなった〈電子科・緑カーテンプロジェクト〉のことをよく思い出します。それは電子科の研究で植物を育てるという前例のないテーマでした。一見、電子とは関係がなさそうだと思っていたこの活動も、始めてみると自動散水機の作成、気温変化や温度差のグラフ作りと、電子科ならではの作業もしつつ、植物を育てるといったとても楽しみの多い研究でした。

育てた植物が電子科棟の窓一面を覆った時の感動は、今でも忘れられない大切な思い出です。

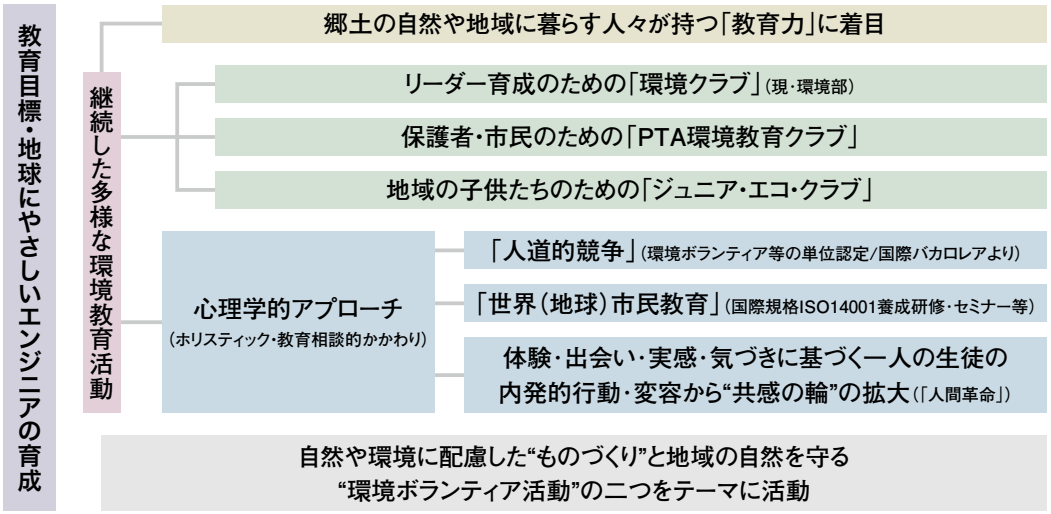
2015年度 電子機械科3年在校　有髙 綾汰さん

私が就職内定をいただいた地元企業では、生産に関する技術だけでなく、地球環境を守る取り組みにも力を入れています。

浜松城北工業高校に入り、中田島砂丘や浜名湖のクリーン作戦、「城北の森」や「城北農園」での整備活動、国際規格「環境マネジメントシステム（ISO14001)」の研修と内部監査員の資格取得などを通して、環境に対する見方や考え方が変わりました。

自然や環境に配慮できる城北工高の“地球にやさしいエンジニア”の一員として、社会人になっても貢献していきたいと思います。

■ 静岡県立浜松城北工業高校の環境教育活動：「組織図・コンセプト」と具体的な活動



＜本校の主な環境教育活動＞ ①「地域の自然を守る環境ボランティア活動」（生徒513名：単位認定）、②「地域の森づくり」（市内19か所）、③「バスによるエコツアー」、④「NIE（Newspaper in Education）による環境教育」、⑥「リサイクルステーション活動」（ゴミゼロの学校モデル）、⑦学校開放講座「城北ジュニア・エコ・スクール」（小中学生：4000名来校）、⑧「市民の命を守る防潮堤での森づくり」（植樹：累計長さ3000m・9000本）、⑨国際規格「環境マネジメントシステム（ISO14001）」内部監査員の養成（生徒1142名：修了証書取得）、⑩「自然や環境に配慮したものづくり活動」（ソーラー&人力ボート・ソーラーカー等の製作、課題研究「地球にやさしいものづくり」等）…「SDGs」・「ESD」（持続可能な社会づくり・人材の育成）

「一人の生徒の小さな一歩を大切に共感の輪の拡大へ!」、「生徒たちにとっての最大の教育環境は教師自身!」
「“共感の輪”を拡大するために必要な三つの活動方法：①人文科学的、②社会科学的、③自然科学的アプローチ」

5 まとめ：求められる「教育のための社会」づくり

①環境教育に求められる「教育のための社会」

森は一本の木だけでは存在することができません。まわりの木々や生態系とのつながりの中で支えられて成長していきます。豊かな土壌、自然に支えられて大きく木々が成長できるように、学校教育にあっても豊かな「地域の持つ教育力」に注目し、協力、連携していく“つながり”が重要と考えます。そのためにも「教育のための社会」が求められていると考えます。生涯にわたる学びである「世界（地球）市民の育成」を目指す「環境教育」にあって、学校教育の中だけで完結することはできないと考えます。

②新しいライフスタイルや価値を創造する教育

私たちの学校教育にあっても、経済成長とともにあった「過去の学び方」の延長線上にのみその答えを求めるのではなく、世界共通の問題とその目標設定（世界潮流のSDGs・ESG等）、ライフスタイルへの変革や新しい価値の創造といった問題を発見し解決していく「新しい学び方（ISO14001・PDCAサイクルなど）」にこそ未来を生きる子供たちの教育があり、持続可能性を約束するものであると考えます。

③未来に生きる子供たちに残せる確かな「教育」

本校では、「環境教育宣言」、「城北の森」、「城北リサイクルステーション」、リーダー育成のための「環境クラブ（現：環境部）」、「技術と環境」（学

校設定科目)、地域の自然を守る「環境ボランティア活動」(学校外の学修による単位認定)、課題研究「地球にやさしいものづくり」、地域の環境に配慮した国際的企業との協力による「環境インターンシップ」、「NIEによる環境教育」、「エコツアー」による環境学習、国際規格「環境マネジメントシステム」内部監査員養成研修、「PTA環境教育クラブ」、「城北ジュニア・エコ・スクール」、市民のための「よくわかる地球温暖化セミナー」(学校開放講座:年間10回)など教育現場において実行可能な環境教育プログラムを、現行の学校教育における法律や施策の中で取り組んで参りました。28年間という長期にわたる取り組みの中で、管理職の先生のお考えやNPO・行政の施策・助成金等により、短い取り組みで終了となった活動もありました。上記の活動の中では、二つの活動を除き現在まで継続してその取り組みを続けております。

継続できた大きな理由としては、1)学校という組織の中で管理職をはじめとする先生方の理解を得られる活動であること、2)決して無理な活動にならないこと、3)多くの方々の理解と協力が得られること、4)誰もが気楽に参加できるシンプルで最大公約数的な活動であること、5)本校の生徒をはじめ、卒業生、保護者、地域の方々の「共感の輪」が得られること、6)本校のユニークな「環境教育」の取り組みが、環境部員、本校の生徒・関係者の方々の「誇り」となり「良き伝統」となっているとがあげられます。

④やさしい「共生」の心と態度をあわせ持つ「地球にやさしいエンジニア」の育成

煙突の一本もない地球の裏側で生活する国々の人々が、地球の温暖化による海面上昇が原因で沈んでいくことに対しても、また持続可能な社会の中で未来を生きる子供たちが幸せに暮らして行けるように思いを致し行動できる“やさしい心と態度”をあわせ持つ「地球にやさしいエンジニア」の育成こそ、今、世界が求める「世界(地球)市民」の育成に通ずると考えます。

人生は短く、一人の教師ができることには限りがあります。小さな「コミュニティー」としての学校をモデルに、一人の人を大切にすること、そして、学校や地域社会にあって「より良き変革」、「小さな成功モデル」に挑戦することはとても大切と考えます。そうした成功モデルを参考に地球規模で「共感の輪」が拡がれば、地球環境は守られ「持続可能な社会」を未来の子供たちに残していけるものと確信します。

―大切な地域の自然とそこに住む人々が持つ強い教育力と「教育のための社会」づくり―

地域の自然保護団体やNPOのメンバーにとって、若い生徒たちの力や語り継ぐ若者の存在は大きく、生きがいともなっている。一方、生徒たちが、自然の仕組みや人とのかかわりを通して、「実感(リアリティー)」を持って地域の自然や文化を学んでおり、地域の自然や地域に暮らす方々の持つ教育力は大きい。こうした「WIN-WIN」の関係を通して、地域社会に安定したネットワークと信頼関係を築くことができる「環境ボランティア活動」による「学校外の学修による単位認定」(体験的学習プログラム)は、環境教育活動にとって効果的な学習方法と考えます。また、社会のあらゆるスペシャリストと教育に携わる者との協力による「教育のための社会」づくりは、社会貢献を目指す学校・社会的責任のある学校としてのあり方の上からも極めて重要と考えます。

主体的に学び合う児童の育成

――子供たちが創るNIE――

栃木県宇都宮市立豊郷中央小学校　代表
豊郷中央小学校　教諭

堀内多恵（ほりうち　たえ）

2003年3月、宇都宮大学大学院教育学研究科教科教育専攻国語教育専修修士課程（教育学）修了。2009年、栃木県教育研究所 言語力育成研究部会研究員として本格的にNIEの研究･実践スタート。2013年、宇都宮市教育委員会 授業の達人表彰制度選考委員会より「授業の達人」表彰。2015年、宇都宮市立豊郷中央小学校赴任。2016年から現在まで青少年読書感想文全国コンクール中央審査員を務める。2017年から栃木県NIEアドバイザーを務める。しもつけ新聞スクラップコンクールにて7年連続学校賞受賞。栃小教研宇都宮支部国語支部部会 研修副部長 栃小教研宇都宮支部学校図書館部会 研修副部長。2018年、栃木県教育委員会 とちぎ教育賞受賞。2019年、「いっしょに読もう新聞コンクール」学校優秀賞受賞。NIE全国大会準備委員及び2019年8月第24回NIE全国大会宇都宮大会にて実践発表。

第 68 回　読売教育賞から

【NIE】

児童主役で活動

NIE部門 最優秀賞　宇都宮市立豊郷中央小

「この記事を要約するならどこを見ればいいかな？」「いつ、どこで、が書いてあるところ！」「最初のところをよく見ます！」

豊郷中央小の新聞・NIEコーナーで、堀内多恵教諭(41)の問いかけに、児童たちが元気よく答え、スクラップをまとめていった。

毎日の気になるニュースを新聞から切り抜き、要約や感想を添えてA4判用紙1枚で掲示する「ニュース委員会」の活動。この日は日本代表の活躍が目立ったラグビー・ワールドカップの結果をまとめた。

「新聞は『速報性』が大事。話題が旬なうちに届けることを意識しています」と堀内教諭。委員の斎藤颯太君(12)は「目を引く写真を選ぶなど、みんなにたくさん見てもらえるよう心がけています」と笑顔で話す。

縦割り班活動の中でも、丸めた新聞を重ねて高さを競う「新聞タワー」や、記事から「の」文字を探す「のの字さがし」を取り入れるなど、教員主導ではなく児童主体のNIEを実現して定着させたことが評価された。「担当が代わっても、ずっと続いていく仕組みができたかな」と、堀内教諭はほほ笑んだ。（古郡天）

小原友行・福山大学教授「教師や学校主導になりやすく、担当教諭の転出で取り組みが下火になるという課題を、児童主体の活動として定着させることで克服しようと、多彩な試みに挑戦している」

児童のスクラップづくりを見守る堀内教諭（右）（宇都宮市立豊郷中央小で）

【最優秀賞選評】

小原友行　福山大学教授

「教師や学校主導になりやすく、担当教諭の転出で取り組みが下火になるという課題を、児童主体の活動として定着させることで克服しようと、多彩な試みに挑戦している」

はじめに

児童が主体となり、学校全体でNIE活動に取り組むことの有効性を日々感じている。新聞に親しみ継続的に読む習慣が身に付くと、児童の考える力が育まれ思考力が高まっていく。その結果、自ら考え判断し表現することが可能になる。

本校は教員がリードする活動を超え、子供たちの手で創り上げるNIE活動を構想した。児童会活動の一環として「ニュース委員会」を新設し、児童のアイディアを生かしながら活動を進めることで、主体的に学ぶ力の育成を図っている。また、学校課題や学習重点目標を見据え、NIE全体計画やNIE年間指導計画を作成し本校の教育活動とNIE活動を関連付けながら学校教育目標並びに学校ビジョンの実現を目指した。

昨年度は特に豊郷地域学校園での連携を強化し、小中学校を通して一貫して新聞に親しみ、学年や発達段階に合わせて系統的に指導すると共に、学校、家庭、地域を通じてNIE活動の裾野を広げていくことで、子どもたちが社会や地域とつながり、思考力・判断力・表現力を高めることができる環境づくりを進めてきた。今年度は、全校体制におけるNIE活動のさらなる活性化を図っている。具体的には、教育課程に朝の時間の「ニュースタイム」を位置付け、表現力の育成と合わせて対話を重視し、他者と協働しながら新たな価値を生み出す力を培うことに重点を置いた「学び合い」を推進している。以上のことを踏まえ、必要な資質・能力の育成を視野に入れた「主体的な学び」を創造していく子供を育むべく、本テーマを設定した。

1 研究実践テーマ設定の理由

本校では、平成29年度の全国学力学習状況調査の結果から、主として「知識」に関する問題（A問題）と比べ、主として「活用」に関する問題（B問題）での平均正答率が低い実態が明らかになった。特に、複数の知識を総合的に用いて記述する問いなど、思考力・判断力が求められる設問での正答率が低い傾向にある。このことから、基礎的・基本的な学習内容は定着しているが、学習した知識・技能を実生活や学習の様々な場面で活用する力や複数の資料を関連付けて読み取る読解力、「問い」に対して自分の考えを構築し論理的に表現することに課題があることが分かった。そこで、これらの課題を解決する手立ての一つとして新聞を活用した授業や学習活動の有効性に着目し、平成29年度から2年間NIE実践校として取り組んできた。

2 新聞活用で育てたい資質や能力

（1）日常的に新聞にふれることにより、学ぶ意欲を向上させ、社会への関心を高める。

【新聞に親しむ・遊ぶ】

（2）新聞を学習活動に効果的に取り入れることにより、思考力・判断力・表現力を育てる。

【新聞を創る・学ぶ・考える】

（3）学びの成果を蓄積し、発信する場を設定することで、表現する力を高める。

【新聞で発信する・社会とつながる】

■ 発達段階に応じた段階的取り組み 各学年・クラスの実態に応じて新聞を活用した授業を展開

ステップ1：新聞に親しむ【新聞で遊ぶ】 → **ステップ2：新聞を創る【新聞で学ぶ・考える】** → **ステップ3：新聞で発信する【新聞で社会とつながる】**

3 実践内容

本校NIEの基本方針

新聞を活用する意義は、生きた教材を教育に導入することである。自分たちが生きる社会を教材に、課題を見つけ、自らへと向かう問いを持つ能力や多面的・多角的分析力を培う。

① 情報を基にして子ども自身が考え、判断し、表現する力を育成する。
② 問題解決能力や意思決定・価値判断する力を高める。
③ 社会の出来事に関心を持ち、基礎的な力を土台として、社会参画の能力や市民性の育成へと発展させる。
④ 学校教育目標の達成と学習を進めていく上で、情報資料提供の場としての役割を担う。
⑤ 日常的に活字に触れるとともに、情報活用の方法を知り、情報を選択・活用する技能や態度を育てる。
⑥ 多様な新聞の充実と発信の場を提供することにより、児童に満足感を味わわせ、学習意欲を喚起する。

児童会活動「ニュース委員会」

一昨年よりNIE活動を児童会組織の中に位置付け、児童による主体的な活動を目指した。新設されたニュース委員会には5、6年生の各クラスから3人ずつ計24名の児童が所属している。全校児童が新聞に親しめるように環境整備や情報発信を主な活動としている。

（1）活動目的

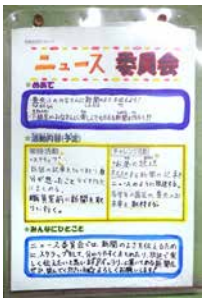
新聞を通して、社会を身近に感じながら学校での学びを実生活に役立てられる「生きる力」の獲得や「情報活用能力」の育成を目指す。

（2）活動内容

- 全校児童にリアルタイムで情報を発信していく。
- 豊郷中央小の「今」を届ける。

（3）常時活動

本校の児童会活動には「常時活動」と学校をよりよくするために主体的に児童が各委員会ごとに必要なことを考え、企画、運営していく「チャレンジ活動」がある。昇降口前の委員会掲示板を活用して全児童に行事参加を呼び掛けたり活動の様子を新聞で発信したりしている。以下に、取り組みを具体的に紹介する。



【新聞コーナー】北校舎と南校舎を結ぶギャラリーに設置（新聞を自由に読める空間）

【NIEコーナー】（左写真）委員が新聞の種類・日付ごとに整備する。（右写真）テーマごとにスクラップファイリングする。（例:スポーツ・健康・環境・福祉・動物・植物・経済・料理・世界・地域等）

新聞に親しみ、子供たちが社会・地域とつながる活動の推進

新聞を児童の身近な場所であるギャラリーの「新聞コーナー」に整備して、自由に手に取って読める空間を確保している。また、高学年児童が気になるニュースを新聞から切り抜き、記事の要約・感想を添えて「きになるニュース」に毎日当番制で掲示している。

児童が主体的に新聞に関わる取り組み

1.全校児童集会

秋の全国新聞月間に合わせた行事の一つとして、ニュース委員の児童が企画・運営を行う児童集会を行った。児童集会では、全児童参加型のスタイルが委員により提案され、新聞からの「見出し連想クイズ大会」を行った。スポーツや動物に関することや東京外郭環状道路のトンネル工事で活躍するシールドマシンに関する記事から、委員自ら問題を考え、「新聞」の魅力について伝えた。また、新聞スクラップ作品の発表会も合わせて行った。「西日本豪雨災害」や「戦争と平和」「サッカーワールドカップロシア大会」など、児童は関心を持った記事を半年かけて継続的に集め、1枚の作品に仕上げて紹介することができた。

<情報発信>

① 「今週のきになるニュース」と本校の「豊央ニュース」を金曜日のお昼の校内放送で発信

② 当番制で「きになるニュース」原稿作成⇒ホワイトボードへ掲示する。

③ 運動会や修学旅行などの行事、陸上競技大会や合唱コンクール、各種スポーツ少年団の活躍の様子を紹介

④ わたしたちの学校生活を支えてくださる方々の紹介や各委員会の活動掲示

毎週金曜日「お昼の校内放送」で発信

委員による「ニュース新聞」「ニュース原稿」作り

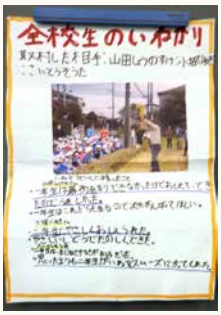
取材→構成→原稿作成・編集→リハーサル→発信

2.常時活動及びチャレンジ活動

① 活躍している豊央っ子や委員会、部活動、地域協議会の方々を取材して紹介

学校行事特集号

「豊央新聞」
スーパースターみつけた！



稲刈り新聞

② 豊央ハッピーニュース（ギャラリーや昇降口にボックスを設置・回収）

- 各クラスで用紙に記入してもらい、お昼の校内放送で紹介
- 友達や周りの人から親切にされてうれしかったことの紹介
- 心温まる出来事。「ほっ」とする一言・笑顔・しあわせになる言葉、等
- 先生方の選ぶ「ハッピーニュース記事」掲示

③ 特集号の作成

新聞の中で紹介されている「時の人」にクローズアップしたり、「改元」など社会の出来事として注目してほしいことについて、複数の新聞記事を集めたり、友達にインタビューしたりして取材を通してまとめて発信している。

<大坂なおみ選手特集>

大坂選手の強さの秘密や世界ランク1位になるまでの歩み、祖父からの言葉などを取材して発信

<もうすぐ新元号>
～新元号を予想しよう～
6年生124名が予想した新元号を集計し、発表

④ イベント企画

● サッカーワールドカップロシア大会

日本との対戦相手国コロンビアやセネガルの情報や地図などを新聞記事と一緒に紹介した。好きな選手の活躍の様子を見に来る児童が増え、新聞を通して、世界をつなぐワールドカップに関心を持つ児童が増えた。

● 年末特別企画「ニュース委員が選ぶ！2018年10大ニュース」

これまで毎日発信してきた新聞スクラップを整理し、ランキングをつけて発表した。各自が10大ニュースを考える機会を持つことにより、新聞や社会に目を向けるきっかけになった。

<サッカーワールドカップロシア大会速報>
対戦国のセネガルやコロンビアの情報、地図、選手の活躍を発信

<年末特別企画>
「ニュース委員が選ぶ！ 2018年 10大ニュース」

⑤ 各種コンクールの実施・出品

● 「いっしょに読もう新聞コンクール」豊郷中学校との連携　奨励賞受賞

● 第７回しもつけ新聞スクラップコンクール４年連続学校賞受賞

（その他、優秀賞・佳作・入賞等、多くの児童が受賞した）

本と新聞をつなぐ取り組み
～学校図書館司書や図書委員会とコラボ企画～

1.本と関連する新聞記事を紹介

学校図書館コーナーの一つに、本と新聞の記事を合わせて紹介する取り組みを行っている。

① ホタルの観察に関する記事の隣に４種類の「ホタル」の本を置き、記事と合わせて読める工夫をしている。

② ６年生の総合的な学習の時間「１２歳の未来予想図」の単元に合わせ、職業調べに活用できる本と合わせて関連記事を紹介した。キャリア教育の視点から様々な分野の新聞記事を紹介することで、児童が幅広い分野の本に興味・関心を持つことができるようにしている。

2.新聞パズル

「新聞パズル」コーナーでは、季節や行事に関する新聞記事を特集して、関連記事を児童から募集している。児童自ら進んで新聞を読んでパズルをつなぎ合わせたいという思いを大切にする。記事の内容や、友達が選んだ記事を読むことを楽しみに学校図書館に足を運ぶ児童も増えてきた。

大きなニュースは、異なる日や、違う種類の関連記事が多く出ることに気付く。「見出し」を手掛かりに、同じ出来事でも、新聞によって表現が異なることなど、自然に比較読みにつながっていった。

新聞に親しむ取り組み

1.縦割り班活動NIE

① 縦割り班活動「豊央ウォークラリー遠足」(「ののの字さがし」)

うつのみや文化の森で、縦割り班の班長を中心に、たくさんのクイズやゲームを楽しみながら異学年との交流を深める児童会企画「豊央ウォークラリー」が行われた。「ののの字さがし」のコーナーでは、新聞の中から「の」の字を真剣に探す姿が見られ、たくさんの文字や言葉が新聞には含まれていることに気付くなど、遊びながら自然と親しむ姿が見られた。(前ページに写真)

② 縦割り班活動「新聞タワーをつくろう」(「縦割り班対抗新聞タワー対決」)

異学年の児童同士の仲を深めるための手立てとして児童会活動「縦割り班活動」の中にNIEを取り入れた。今年度初めての縦割り班共遊であり、子供たちが互いの関係性を高める場の一つとして「新聞タワーをつくろう」の企画を行った。「1日分の新聞のみを使ってより高いタワーをつくる」という目的に向かい、「作戦タイム」で互いのアイディアを確認した後、ニュース委員の「スタート!」の放送を合図に各班ごとに夢中になって活動に取り組む様子が見られた。最初は遠慮がちな子供たちが活動に取り組むうちに打ち溶け合い、チームワークや対話が自然に生まれた。新聞に親しみながら学年を超えて楽しみ、コミュニケーション力を高めることができた。

進め方

① どのようなタワーを作るか、役割分担などの作戦タイム(5分間)
② タワーの作成(10分間)
③ タワーから手を放し10秒数える。
④ 計測と記録
⑤ 班ごとの**振り返り**(5分)

※ 振り返りでは各自がどういう役割を担っていたか、タワーのビジョンを互いに共有できたか。チームや仲間の良かった行動や言葉の称賛等を行った。

2.放課後子ども教室「バンブーキッズ」

放課後子ども教室「バンブーキッズ」では、下野新聞社主催出前講座「しもつけ新聞塾」をはじめ、低学年対象とした、新聞とふれあい、新聞と親しめる企画を行っている。遊びを通して新聞紙の質感や、機能性を肌で感じ慣れ親しむ姿が多く見られた。

放課後子ども教室 NIE 活動

下野新聞(R1.7.30)掲載

「しもつけ新聞塾」を体験した児童の声(5年女子)「新聞塾がやって来た!」

- 「ニュース委員会に所属していて、新聞の魅力を広めている。新聞作りに関わる人は、常に読者に世の中のニュースを伝えようと努力していることが分かった。インターネットより新聞の方が詳しい記事が書いてあるので、みんなに新聞を読んでもらえるように活動していきたい。」

思考力・判断力・表現力を高める取り組み

自分の選んだ新聞記事を、ペア学年に紹介し感想や意見をもらい、新聞を通して思考力・判断力・表現力を高める場の設定

○豊郷地域学校園 ＜小中一貫教育＞

本校6年生児童と豊郷中学校2年生が新聞を通して交流する取り組みを行った。第9回「いっしょに読もう！新聞コンクール」出品に向けて、まず、中学2年生が新聞から興味のある記事を切り抜き、記事を選んだ理由と記事を読んで思ったこと、考えたことをワークシートに記入する。次にその記事を6年生が読み、200字以内で感想を書く。最後に中学2年生が6年生からの感想を踏まえて再び自分の意見や提案、提言を書いた。地域学校園の取り組みの一つとして、とても有意義な活動になっている。そのため、今年度は豊郷学校園の全学校（中学校1校と小学校3校）と行うこととなった。

○豊郷中央小学校校内 ＜縦割り班ペア学年による取り組み＞

本校1年生と6年生、2年生と5年生、3年生と4年生のペア学年で新聞を通して交流する取組を行った。第10回「いっしょに読もう！新聞コンクール」出品に向けて、まず、ペア学年を意識した記事を2年生以上が切り抜き、記事を選んだ理由と記事を読んで思ったこと、考えたことをワークシートに記入する。次にその記事をペア学年に伝え感想を書く（児童の発達段階に応じて行った）。最後にペア学年で伝えられた感想をもとに、自分の感想や意見・提案、提言を書いた。

（低学年の感想）

- 3つの記事からおすすめの記事を選んだことで、記事に関心を持ち読み進め、新聞に興味を持てた。
- サニブラウン選手の記事を選択したことで、努力することの大切さを知り、目標を持つことができた。
- ペア学年で行ったことで、高学年の分かりやすい文章の書き方を知り、お手本にしたいという気持ちが芽生えた。また、新聞にはいろんなことがのっていることが分かり、楽しみながら新しいことを知る活動ができた。

（中学年の感想）

- いろいろな記事を紹介してもらったことにより、新聞の良さが分かった。
- 記事を読んだことで、自分の身の回りの環境についても調べたり、追究したりしたいという気持ちが芽生えた。同じ記事を選んで感想を伝え合ったことで、いろいろな表現方法があることを実感することができた。

（高学年の感想）

- 下級生にも上手に記事を紹介するために、カラーペンでアンダーラインを引き、長い記事も要約することができた。1つの記事を通して、お互いの考えを聞き合うことで、相手がどのように考えているのかを知り、自分の考えと共に考察することができた。
- 記事を読んで、自分の生活と比較しながら、実生活で生かす方法を考えることができた。
- 自分の考えを深めたり、他学年と新聞を通じて意見交換をしたりすることにより、読解力や情報活用能力、書く力など様々な能力を育むことができた。

現職教育「NIE研修会」

校内研修及び豊郷地域学校園での研修会の実施

昨年度は、豊郷地域学校園でNIEを実践していくために、学校図書館司書の先生向けの研修会を行った（豊郷中学校・豊郷北小学校・海道小学校・豊郷中央小学校4校合同研修会）。さらに夏の研修会の際に宇都宮大学の松本敏教授にNIEの理論についてご講話をいただき、実践編と合わせてNIEに対する理解を深める機会を持ち、協力体制を作ることができた。

また、教職員をはじめ保護者や児童に対して、本校の「NIE」の取り組みを紹介し、関心を持ってもらえるように「NIEタイムズ」を発行し、さらなる啓発を進めた。

NIE タイムズの発行

理論編：宇都宮大学教授
松本敏先生の講話

実践編

日常的取り組み

1.朝の学習の時間（15分間）

月曜日の朝の時間を「ニュースタイム」に位置づけ、記事やコラムを視写、要約、感想を書く活動を通して、楽しく新聞や活字に親しみ、継続的に「書く」力を伸ばしていった。

新聞を活用して読解力や書く力を鍛えるため、昨年度の全国学力テストで課題が見られた分野の問題を中心にした内容を取り上げている（グラフや写真など非連続型テキストの読解に慣れ、要約・事実・感想を混合せず、分けて書けるように鍛える）。

2.家庭学習及び基礎学習の充実

週末の宿題として「新聞スクラップ」を実施。読解力や書く力を育成するとともに、児童一人一人の興味・関心を把握し、日頃の授業や声掛けに生かせるようにする。家庭で取り組むことによりファミリーフォーカスへの効果もある。

朝の会「スクラップスピーチ」で紹介・交流し合ったり、読み合う時間を取ったりすることで書くことに有用感を持たせ、意欲的に活動に取り組むことができた。年間を通してポートフォリオにまとめる等、ファイリングしていくことで、自分の成長を振り返ることができるようにしている。

友達の「スクラップスピーチ」や相互交流をきっかけにして、興味の幅が広がり、自分のスクラップに生かせる児童が増えた。

教科での実践例

国語科5年「新聞を読み比べよう」

第1回日光ウルトラマラソンの記事を教材として、地元紙「下野新聞」と全国紙「読売新聞」の記事の読み比べを行った。2紙の本文を読み、見出しを考える活動である。地元紙の下野新聞は、世界遺産の名所や景観を背景に走る日光で初めて行われるマラソン大会であることを強調しており、全国紙の読売新聞は、多くのボランティアに支えられて開催されていることや、夜明け前の早

朝にスタートしたことなどが取り上げられていた。

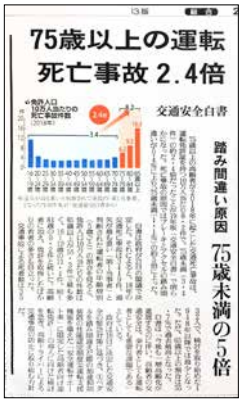
同じ出来事を取り上げる上でも、新聞社や記者によって内容が異なることを学んだ。

社会科５年「わたしたちの生活と食料生産」
―わたしたちが食べている食料品の産地を調べよう―

新聞広告を活用して、自分達が普段食べている食料品の流通の分布に目を向けると共に、外国から多くの食料品を輸入している現状を押さえ、食料自給率への関心を高めることができた。

社会科５年「わたしたちの生活と工業生産」
―自動車をつくる工業―

問題意識を喚起させるための教材として、電気自動車の普及や自動車工場での不正・リコールについて書かれた記事を単元の導入で活用した。「日本の自動車会社が世界販売台数において首位を陥落した」という自動車産業の今日的な課題を取り上げて提示することで、児童は驚きや危機感を持つと同時に、新たな問いを持つことができた。さらに自動車産業について児童が自分事として考えていくために、架空の自動車会社を設定した。「よく売れること」と「信頼されること」の２点を話し合いの観点として児童が部門のアイディアを出し合い、学級を自動車会社とすることで、一人一人が社員として自分たちの会社の発展のために思いや願いを持ち、新たな問いに向き合うことができた。また、自分の考えを広げ、深めるための手立てとして、「学習形態の工夫」と「思考ツールの活用（ピラミッドチャート）」を取り入れた。異質グループの話し合いを持つことで、考えを比較しながら練り合い、その後の全体での話し合いに生かすことができた。また、対話を活性化させるツールとして「思考ツール（ピラミッドチャート）」を活用して自動車会社の発展のためにより大切だと思うものを序列化することで、必然的に他者との考えの違いや共通点などをよく吟味し、考えを交流することができた。



社会科５年「情報産業とわたしたちのくらし」新聞機能学習
―しもつけ新聞塾「オープンスクール」の実施―

当日は下野新聞社教育文化事業部の大平記者と整理部の穴原記者を招き、新聞の役割や機能について学ぶことができた。オープンスクールの授業公開で実施することで、保護者や地域の方々にも新聞を活用した授業について関心をもってもらい、協力体制を構築することができた。

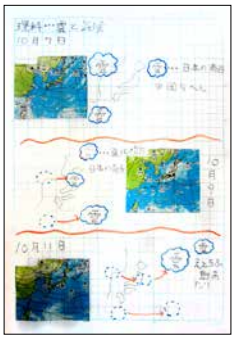
理科５年　「天気の変化を調べよう」

継続的に天気図をスクラップさせることで、児童に天気の変化の規則性を捉えさせる。

⇒天気の変化の規則性に気づいた後、根拠を立てて、翌日の天気を予想させる。

※台風３号の関連記事の紹介。台風は規則性に当てはまらないことを学ぶ。

学習を通して、新聞紙面の多様性や汎用性に気付き、自主学習につなげて日常化する児童が多くいた。



道徳５年「トマトとメロン」

相田みつを氏の「トマトとメロン」の詩を取り上げた学習

＜主題名＞ これからの自分が大切にしたいこと

＜ねらい＞ これから生きていくために大切にしたいことを明らかにする中で自分のよさに気付く。

※プロゴルファー青木功氏、陸上のボルト選手による新聞のコラムを活用した。

社会科6年「江戸幕府と政治の安定」（7月教材）

本小単元では、江戸幕府が約２６０年間どのようにして世の中を治めたのかについて、大名統制や農民支配、鎖国政策や身分制度の確立などについて調べたことをもとに、幕府の意図や願いを考えさせた。授業の導入時に、前時で学習した「鎖国」と関連させて、潜伏キリシタン世界遺産登録の新聞記事を活用した。「キリシタン」は幕府にとってどのような存在であったかを考えさせることから本時の話し合いをスタートさせた。深い学びを実現させるために「学び合い」を核として、言語などで適切に表現する力の育成を目指し、思考ツールを活用して考えを比較したり関連付けたりして交流できる場の構成を工夫した。特に、「大名」「庶民」「外国」３つの立場について構造的に板書することで社会的事象の関係を視覚化させながら、江戸幕府が長く続いた理由を多角的に捉えさせることができた。

授業の導入「潜伏キリシタン世界遺産登録」
新聞記事をきっかけに話し合いをスタート

構造的板書をすることで、それぞれの立場の共通点や相違点を見つけ出すことができた

同質同士で話し合うことで、他のグループの考え方と比較関連させながら、「問い」に対する答えを組み立てていく

自分の主張を支える根拠となる資料を黒板上部に提示しながら、話し合いに参加する

総合的な学習の時間　６年「豊央新聞タイム」

ＳＤＧｓを意識しながら、グループごとにテーマを決めて課題追究する学習を行っている。学習過程において新聞や図書資料、インターネットなど様々な媒体を活用して調べ学習を進めた。最終的には模造紙の大きさの表現物にまとめた。ゴールとしてゲストティーチャー（学校図書館司書や他のクラスの教員・保護者等）をお招きして調べて分かったことを基に、パネルディスカッション形式で討議し、考えを深めることができた。

今年度 児童のテーマ

○「自分らしく生きていく
　―誰もが平等に暮らせる世の中へ―」
○「地球温暖化襲来」
○「プラスチックゴミ減少へ！」
○「笑顔を守る！　―大災害から学ぶ―」
○「一つの命　―動物虐待―」
○「命の大切さ　―児童虐待―」
○「食を考える　―ＳＴＯＰ食品ロス！」等

社会問題や環境問題など、児童が日頃関心を抱いていることに対して調べ学習を進めた。新聞記事を活用して「現状」を把握した上で「解決策」を提案・提言する形でまとめるチームが多く見られた。

新聞に囲まれて生活する子供たち

児童の提案として、歴史学習を始めた当初から時代ごとにチームを作り、歴史新聞を作成していった。形式としては、その時代の記者の立場に立って書くという条件以外は、児童がそれぞれに工夫を凝らし、模造紙一枚の分量に時代をまとめ教室上部に掲示する。その結果、自分の担当した時代へ愛着を持ち、調べ学習に対しても相手意識や目的意識を持ちながら、意欲的に課

題解決に向けて取り組む姿が見られた。責任を持って担当した時代を表現することで、その時代のプロフェッショナルになることができたのではないだろうか。児童の意欲を尊重し、新聞にまとめるこの活動のおかげで、歴史好きの児童がとても増えた。

縄文から平成まで、時代の特徴を出来事や人物に焦点を当てながらチームごとにまとめて掲示

年間を通して、毎日の新聞の中から歴史に関する記事をみんなで探し、時代ごとに整理。新しい発見が多い。

4 成果と課題

1.成果

■全国学力学習状況調査結果資料より（平成29及び30年度）

【国語A　主として知識】

国語：観点別「書く能力」	全国平均正答率	本校平均正答率
平成30年度	73.8%	81.8%
平成29年度	60.6%	64.7%

【国語B　主として活用】

国語：観点別「書く能力」	全国平均正答率	本校平均正答率
平成30年度	45.6%	49.3%
平成29年度	53.4%	58.8%

○本校児童は2年連続「書く能力」の正答率が国の平均を大きく上回った。新聞を活用して日常的に書く活動に意欲的に取り組んだことにより、「書く能力」の向上につながった。
○児童質問紙（H30）で、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。」の質問に対して、87.5%の児童が肯定的回答、県の平均を9%も上回り、主体的に話し合い活動に取り組めていることが分かる。

■宇都宮市学習内容定着度調査結果（H30年12月）**6学年　学習と生活についてのアンケート**

【世の中のことへの興味・関心について】 ① 社会のできごとに関心があり、新聞やテレビから情報を得ている。

	宇都宮市肯定割合	本校肯定割合
平成30年度	84.6%	90.1%
平成29年度	85.4%	84.2%

○本校児童は、【世の中のことへの興味・関心について】の肯定割合が昨年度の結果では、市の肯定割合よりも低いことが課題であったが、実践2年目は社会の出来事への関心が90%を超え、日頃の積み重ねの大きさを感じる結果となった。特に、⑤人の生き方への関心や⑥本を読むことへの関心に関する質問での大きな伸びは、新聞を活用して様々な人に着目して考える道徳の授業やキャリア教育との関連、本校の図書館司書との連携による取り組みの成果によるところが大きいと考える。また、新聞をはじめ「活字」に対して必要性を感じ、「主体的な」姿勢がうかがえる結果が得られた。

２.課題

今後も対話を取り入れた学び合いを意識した教育活動を展開し、自分の考えを深められるようにすると共に、地域や社会の出来事を自分のこととして捉えられるように、継続的系統的に新聞を活用した教育活動の充実を図っていくことが求められる。

おわりに

今年度はこれまでに培ってきた学びの素地を生かし、子供たちの主体性を尊重するための環境整備や研修等を行い、計画的に活動を進めてきた。特に全教職員の協力のもと、校務分掌にＮＩＥ担当が複数位置付けられ、本校独自のＮＩＥ全体計画やＮＩＥ年間指導計画を作成し、学校課題との関連を意識して取り組めたことや、小中一貫教育の連携を生かし、地域学校園と共にＮＩＥ活動を推進して活動の充実を図り、楽しみながら児童の力を伸ばせたことは大きな成果である。

児童会活動の一環として設立した「ニュース委員会」の活動も軌道に乗り、児童のアイディアを生かしながら活動を進めることで「主体的に学ぶ力」を育むことができた。児童自身が世の中の動きと学校での学び、そして日常生活とのつながりに興味・関心が持てる活動になった。自分の考えを友達に伝え、話し合い、練り上げて全校に発信し、学校をより良くしていく。自分の考えが学校や社会を変える。今後も、これらの学びを積み重ねることが、より主体性を育み、社会の担い手としての主権者意識を高め、社会参画していく力を培うものであると確信している。

地域のなかで育つ子どもたち「出雲崎のお獅子を作りたい」

社会福祉法人浄勝会　出雲崎保育園　代表
出雲崎保育園　主任保育士

松延（まつのべ）　毅（つよし）

1986年生まれ。2012年上越教育大学大学院学校教育研究科修了。新潟県内の認定こども園勤務を経て、2014年より社会福祉法人浄勝会出雲崎保育園に勤務。現在に至る。子どもたちの人権を守り、自ら興味・関心をもって主体的に遊びに取り組める保育環境を整えながら、子どもたちの育ちに寄り添っている。子どもたちの傍らにいる保育者としての専門性についても日々考え、園全体で学びを深めていきたいと考えている。連絡は、新潟県出雲崎町住吉町551の同園まで。

第 68 回　読売教育賞から

【幼児教育・保育】

獅子作り 主体的に

「耳がグラグラしているよ」「テープを輪っかにして付けよう」。11月6日朝、年中クラスの園児5人が主任保育士の松延毅さん(33)に見守られながら、段ボール箱や折り紙で、町の伝統行事に登場する獅子を作っていた。

この日は、段ボール箱の底に穴を開けて獅子頭を作った後、次にどんな作業をするか意見を出し合った。小林茜ちゃん(5)は「お獅子をかぶるとワクワクする」と笑顔を見せた。

松延さんと一緒に獅子に「歯」を付ける園児たち（新潟県出雲崎町で）

幼児教育・保育部門 最優秀賞　出雲崎保育園（新潟県出雲崎町）

保育園では2018年度も、園児の提案で獅子作りに取り組んだ。松延さんは、園児を資料館に連れて行ったり、地域住民が獅子を作る様子を撮影して見せたりするサポートはしたが、制作の際は子供たちが試行錯誤。松延さんはこの経験で、園児の探究心がより強くなったと感じている。「考えて試したり仲間と相談したりすることは、生きていくうえで必要な力を育てる」と意義を語る。

今年度は園児のアイデアで虫の標本作りも行う。松延さんは「子供たちが遊びを通して何に気づくか、保育者が見て手を差し伸べ、成功体験にすることで、次も何かしようという主体性が育まれる」と話した。（沼田良宗）

秋田喜代美・東京大学教授「獅子を作るために子どもたちが隅々まで観察し、工夫を凝らしていく探究過程を丁寧に描き出している。地域に根ざした活動で1年にわたって子どもたちが追究した姿は圧巻である」

【最優秀賞選評】

秋田喜代美　東京大学教授

「獅子を作るために子どもたちが隅々まで観察し、工夫を凝らしていく探究過程を丁寧に描き出している。地域に根ざした活動で１年にわたって子どもたちが追究した姿は圧巻である」

1 取り組みの背景

1．出雲崎保育園　概要

本園は、新潟県のほぼ中央の日本海に面した港町、出雲崎で昭和23年に開園した保育所である。町の中では日本海を望む海岸の街並みに立地し、開園以来、地域の乳幼児期の子どもたちの教育と保育を担ってきた。それぞれの時代の中で変化する社会のなかで、最善の教育ならびに保育を実施しようと努め、直近では2012年に保育内容の大幅な変革を行い、より一層子どもたちの主体性と自発性に基づいた園生活を通して、乳幼児期に求められる資質・能力を育もうと保育実践に取り組んでいる。

本園の保育目標は「元気いっぱいに遊ぶ子ども」「感じたことを表現する子ども」「友達を大切にする子ども」を掲げ、適切な保育環境と専門性をもった保育者の関わりのなかで、自らの興味関心を基盤にして探究したり仲間と関わったりしながら共通の目的を達成していこうとする姿を支えている。そのような生活を保障する保育環境は園内の園舎や園庭ばかりでなく、園が立地している地域も教育的資源と捉えていくことでより子どもたちの学びが促されたり深まったりしていくと考えており、適宜地域に足を運びながら生活をしている。

本稿で紹介する5歳児クラス（年長「らいおん組」）は上記の保育目標を達成するために、平成30年度は「仲間と共に遊んだり活動したりする中で多様な感情体験を共有したり、考えに触れたりし、一緒に活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わう。」ことを学年の保育目標として定め、日々の色々な遊びの中に、何人かで共有しながら探究できる興味の種や芽がちりばめられていくことを願いながら保育に取り組んだ。

2．出雲崎町の歴史と獅子舞

出雲崎町の歴史は、町の観光協会では「出雲崎は遠く神話時代に大国主命によって開拓されたと伝えられており、江戸時代は天領地として佐渡の金銀荷揚げや北前船の寄港地として栄え、人口約2万人、人口密度は越後一と云われたほど。長屋建築の街並が今も面影を残しています。また、民衆に広く仏教を説いた良寛が生まれ過ごした土地としても有名。」と紹介されており、歴史や伝統が息づいた地域であることが窺える。そのような歴史的背景から、町内には神社やお寺も数多くあり神仏へ信仰も厚かった。本稿にも挙げている獅子舞は、そのような長い歴史の中で現代まで受け継がれている大切な伝統である。獅子舞について先述の町の観光協会では、「江戸元禄年間から行われてきた出雲崎町の正月の伝統行事。毎年1月2日、3日に各町内の神社から若衆に担がれた威勢のいい獅子が、太鼓や笛、ほら貝の音色に合わせて勇ましく、妻入りの町並の家々を一軒一軒悪魔払いしながら回ります。また、正月11日には、金ピカの獅子頭に派手な色で染め分けたシッポを持った飴獅子と呼ばれる獅子がでます。」と紹介されており、当日は遠方から獅子舞を見物に来る客をまといながら複数の獅子舞が町内を練り歩く趣深い行事である。

出雲崎で育つ子どもたちにとって獅子舞は、

日々折り重なっていく生活の中に自然と溶け込んでいる文化的事象の一つであるように感じている。獅子舞の訪問の合図となる太鼓のリズムが遠くから聞こえると、「獅子舞だ」と保育室の窓や玄関から獅子舞の姿を見ようとしたり、空き箱などの素材などで自分なりに獅子頭を作って楽しもうとしたりする姿は、年齢問わずさまざまな子どもたちが楽しんでいる遊びである。一方で、獅子頭の造形や舞の迫力は子どもたちに驚きや恐怖感をもたらすこともあり、獅子舞が保育園の玄関に現れると、恐怖心から机の下や物影に隠れてしまい、間近で獅子舞を観察したり触れたりすることは難しい様子も見られていた。

2 実践事例

1．活動のきっかけ

2018年4月、登園後、果物が入っていた大きめの箱を見つけたJ君は、箱の上部が開く構造から、獅子の口を連想した様子で獅子頭作りを始めた。素材を用いて獅子頭を作ることはJ君を問わず、これまでも沢山（たくさん）の子どもが楽しんでいる遊びであるが、その多くは口が開くように蓋を固定し、「おんばこ」と呼ばれる獅子頭のたてがみになる部分を、紙を切ってテープなどで貼り付け、獅子幕に見立てた新聞紙や包装紙などを貼って作ることが多かった。その日J君も同じように、箱の蓋をガムテープで固定し、獅子幕となる新聞紙を貼り付けて楽しんでいた。

数日後、J君は再び獅子頭を製作机に持ち出し、短冊状に切った紙を「おんばこ」として貼り付け始めた。その様子に興味をもったKさんも加わり、2人で「おんばこ」を1枚ずつ貼り付けている様子を見守っていると、J君が保育者に向かって「先生、僕、出雲崎のお獅子を作りたい」と自分の思いを伝えた。

クラス担任であった私は、J君の「出雲崎の」という言葉が心に留まり、子どもたち自身の生活している地域への関心や地域の伝統に対する関心、乳幼児期の子どもたちが地域の伝統や文化に体験的や感覚的に触れていくことの意義について考えを巡らせた。そして、J君の遊びとJ君が伝えた「出雲崎のお獅子」という言葉についてクラスの集いの時間（通称「みんなの時間」）で紹介してみようと考えた。

その日の「みんなの時間」にJ君の遊びと思いを紹介し、さらに全員に「みんなは出雲崎の獅子舞のこと、どんな事知っている？」と投げかけた。子どもたちからは「顔が赤い」「（ご利益があるため）頭を噛むんだよ」「おんばこが付いている」などの声が上がり、これまでの体験などから獅子舞について自分たちなりに捉えている様子であった。

さらに数日後、子どもたちと園外に散歩に出た

帰り道、獅子舞について書かれている町の観光看板を見てみることにした。そこに描かれていた獅子舞は町内に複数ある獅子舞の一つで「飴獅子」と呼ばれるもので、獅子頭の色使いや獅子幕も鮮やかで自分たちのイメージとの違いに気づいたり新しい発見をしたりしたようであった。

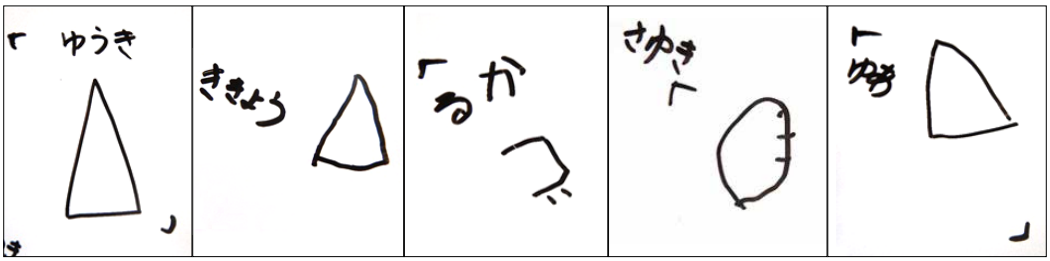
2. 本物の獅子舞を観察してみよう

散歩から戻った後、観光看板で見たことを思い出しながら、自分たちの獅子頭に絵の具で色を付けるなど、製作に意欲をもって楽しむ姿が見られた。また、この頃からJ君だけでなく、獅子舞作りに興味をもった複数の子どもが遊びに加わり始めていった。

そんな中で、「みんなの時間」に、再び「獅子舞について、どんなこと知っている?」と子どもたちに投げかけてみると、Kさんから「獅子舞の耳がちょっと尖(とが)っている」という声が上がった。その声に他児も関心を寄せたので、自分たちの知っている獅子の耳の形について意見を出し合った。すると、意見を出した子どもたちはそれぞれに、耳の形を捉えていることが分かると同時に、「本物はどんな形なんだろう」という疑問も生まれてきた。

保育者は本物の獅子舞を見ることで子どもたちの疑問に自分たちなりの答えを見つけていくだろうと考えたが、4、5月の時期は獅子舞が地域を練り歩くことはなく、実際に獅子舞を見せることは難しかった。そこで、町の郷土資料館に連絡を取り、資料館に展示されている、以前地域で使用されていた獅子頭を見せてもらおうと考えた。さらに、間近で観察することで子どもたちの疑問点への気づきや新たな発見、関心を引き起こすことができたらいいと考え、資料館にお願いして館内で気づいたことを表現できるように活動の許可をいただいた。

資料館に展示された獅子頭は三つあり、それぞれに微妙に表情や造形に違いが見られた。展



示ゆえ動き回らない獅子頭に安心感を持ちつつ、じっくりと観察した。事前に子どもたちと観察したものをどのように記録するか話し合うと、①絵に描く、②実際にその場で作る、③粘土で作る、④写真に撮るなどのアイデアが出てきた。②の実際にその場で作ることは材料の運搬や活動場所の関係で難しかったため、子どもたちに園に戻ってきてから作ることを説明し、「そのために『耳の形』やその他の気づきや発見を記録しておこう」と声を掛け、資料館内では絵を描く、粘土で作る、写真に撮ることのいずれかを選択して観察したことを表現したり記録したりした。

資料館での本物の獅子頭の観察を通して、耳の形については「丸と三角の合わさったような形」であることが分かり、子どもたちにとって柔らかな達成感が生まれた様子であった。一方で耳の形以外の気づきや疑問については数多く声が上がった。その中でも特に多くの子どもたちから上がった声が「『おんばこ』ってどうやってついているの？」という獅子頭についている「おんばこ」というたてがみの付け方に関する声であった。

3.「おんばこ」はどうやって付いているの？

獅子頭のたてがみである「おんばこ」は、これまでも子どもたちが獅子舞の遊びをする時には紙を切って付けており、獅子舞の象徴的なものであった。子どもたちが「おんばこ」に関心を寄せて疑問を抱いたことについて、私はこの活動の原点となった「出雲崎のお獅子」を作ることを楽しみつつ、より深めていくだろうと考えて、「おんばこ」の付け方に焦点を当てていった。

子どもたちの予想では、「おんばこは糊（のり）で貼って付いている」「ガムテープで止めてある」などであり、自分たちの遊びの経験知を基に予想したり考えたりしていることが窺えた。一方で、保育者自身も「おんばこ」の付け方を知らなかったため、送迎時に子どもたちの保護者に聞いてみたが、回答を得ることができなかった。そんな中、通園バスの運転手から、「らいおん組、おんばこの付け方知りたいんだって？」と声を掛けてもらい、これまでの経緯を相談すると、おんばこは決まった日時に地域の集会所で取りつけていることを教えてもらった。ちょうど6月の地域のお祭りに獅子舞を出すことがあり、近日おんばこを取りつける予定があることもわかり、その場に子どもたちと

共に見学できたら、「耳の形」同様、大きな気づきがあるだろうと考えた。しかし、取り付けは夜に行われることが分かり、子どもたちを連れていくことはできないことが分かった。そこで通園バスの運転手を通じて地域の方に相談し、「おんばこ」を取り付ける様子をビデオで撮影させてもらい、翌日、子どもたちに見せることにした。夜の集会所で子どもたちの獅子作りの取り組みを話すと、地域の方は「おもしろいことやっているな」と言いながら、「おんばこ」の取り付け方についても丁寧に説明しながら見せてくれた。

「おんばこ」は和紙を重ねたものを、畳用の縫い針と太い木綿糸で木製の獅子頭に縫い付けて、付けられていた。また、縫い方もほつれないように1回ずつ玉結びのように結び目を止めながら縫い付けていた。元となる和紙は5枚を重ねて、さらに半分に折って10枚分にし、それを暖簾のように切り込みをいれたものを一束として、地区の謂れに習って5束や7束、8束と縫い付けていく。また、「おんばこ」は紙の先を顔の前面に向けて縫い付け、仕上げの工程で和紙を逆立てて、たてがみにしていた。

それらの様子が納められた映像を見た子どもたちからは、「縫っている」「糊じゃない」「おんばこは繋がっている（1枚ずつ短冊状になっていない）」「向きが違う」などの声が上がり、「おんばこ」の付け方に様々な視点から発見と気づきがあった様子であった。さらに、縫い付けていることに注目したK子さんは、「私、縫い物したことあるからできるよ」と実際と同じ方法でおんばこを付けることに意欲をもち、獅子作りに取り組んでいった。製作の中で、和紙を10枚重ねると、その厚みから子どもの力で縫うことは難しいことがわかり、習字用の半紙に交換したり、畳用の縫い針も入手することが難しかったため、ミシン用の針を代用したりしながら、実際に「おんばこ」を縫って取り付けることにした。枚数を確かめながら半紙を重ね、「おんばこ」の形状になるようにハサミで切り込みを入れたのち、獅子頭に合わせて、錐で縫い穴をあけて針と糸で縫いつけていった。K子さんは半紙の厚みに多少苦戦しつつも、縫い物の遊びの経験を生かして、針と糸を細かく扱いながら最初の「おんばこ」を縫い付けた。「縫い物より難しい」と言いつつも、「でも、できた」と得意そうに獅子頭を眺めていた。本物の「おんばこ」は獅子頭からちぎり取って、身に付けたりお財布にいれたりしてご利益をねがう習慣があり、子どもたちは遊びの中でも縫い付けた「おんばこ」を園内の子どもたちに実際に取ってもらう遊びも楽しんでいった。

K子さんが実際に縫って取り付けたことで、女児を中心に自分たちも縫ってみたいと関心をもつ子どもが増え、その後も「おんばこ」の付け方

を教えあって縫い付けたり、他の子にちぎってもらったりすることを楽しむことが続いていった。

4. 獅子に歯をつけなくちゃ

「おんばこ」に興味を持ち関心を寄せている子がいる中、Nさんは資料館で獅子の「歯」について色や大きさに気づきを得ていた様子であった。「おんばこ」を取り付けている様子を見ながら、「私は歯を作る」と自分の関心に基づいた遊びに取り掛かり、どのように歯をつくるか試行を始めた。資料館で見た獅子頭の歯は金色や黒色だったことから、金色の折り紙を選んで、ペットボトルのキャップを包むようにして金色の歯を複数作った。

満足感を持ちながら、作った歯を獅子頭に取り付けようとしたのだが、段ボール箱が薄いため歯をうまく固定することができなかった。段ボールの薄さが影響していることはNさん自身も感じている様子であったが、どのように工夫するかについて思案している様子であった。保育者はその子の試行錯誤する様子を見つつ、段ボールの薄さをどのように改善していくかを見守っていった。その後もNさんやYさんなどが何度か試行錯誤するものの、なかなかうまくいかなかった。

獅子作りについては、子どもたちの気づきや疑問が生まれた時などに、クラス活動の「みんなの時間」のなかでテーマとして取り上げ、子どもたちが気付きや疑問点を仲間に発表して共有する時間をもっていった。

先の「おんばこ」を縫い付けたときや、Nさんが金色の歯を作り始めたときなどの「みんなの時間」のなかでも、他児から歯についての意見が上がっており、他の複数の子どもも獅子の歯については関心を寄せていることが窺えた。そんな中、NさんやYさんの「歯が付けられない」という悩みが挙がったことにより、T君やRさんなどがどうすれば歯を付けられるかを考えることに加わっていった。

NさんやYさんに加えてT君やRさんも一緒になって歯の付け方を試す中で、二つのアイデアが浮かんだようであった。一つは、歯にしていたペットボトルのキャップの内側に新聞紙をつめて、隙間をなくすことであった。そうすることでテープを輪にしたときにキャップに貼ることができ、強く粘着するようであった。もう一つは段ボールを厚くすることであった。薄さが原因でうまく固定できないことはこれまでの試行錯誤で感じていたため、どのように厚くするかを考え合っている様子であった。1人の子が厚くするかわりに、箱の側面に歯を付けるアイデアを出すこともあった

が、作りたいイメージと異なるため子どもたちは採用せず、「厚さ」を増すことを念頭において考えていった。その中で、子どもたちは積み木を箱にあてがって厚くする方法を閃(ひらめ)いた。積み木を使用していいかについて保育者に質問があったため、積み木のかわりに木工遊びで使う木っ端を使用してみることを提案した。素材棚から適当な大きさの木っ端を選びガムテープで止めると、木っ端の厚み分、歯を付ける土台に厚みが出て、隙間を埋めた歯をしっかりと固定することができた。じっくりと試行錯誤した結果、歯が付いたことはNさんを始め、子どもたちに喜びをもたらし、「みんなの時間」で歯が付いたことを報告し、工夫した点についても自信をもって発表する姿が見られた。

そのような獅子作りの歩み中で、徐々に子どもたちの中に新たな思いが芽生えていった。それは、「本当に町に出て歩きたい」というものであった。

5. 手作り獅子で町を歩きたい

獅子に歯が付いた頃から、徐々に本物らしく作られていく獅子頭を見ながら、「先生、この獅子で本当に町を歩きたい」(Yさん)という願いが聞こえてくるようになった。この遊びが始まった当初は、そのような子どもたちの思いが出てくることなどを予想していなかったため、子どもたちの新しい興味や関心は獅子作りを通した新しい学びや経験につながっていくだろうと考え、Yさんなどから出てきた思いを「みんなの時間」でクラス全体に伝えた。すると、他の子どもたちも「やってみたい」という思いになり、獅子作りの次の目標は「実際に町に出ること」となった。

しかし、その話し合いが行われた時期は9月で、まだ屋外は日射しが強く気温も高い時期だったため、屋外が涼しくなる時期に行おうと決めた。その時間を活用して保育者は実際に手作りの獅子を町に出すために必要な手続きや地域への周知を行おうと考えた。また子どもたちには、「本当に獅子を町に出すために、他にどんな工夫ができそうかな?」と問いかけた。子どもたちからは、「(獅子頭を)もっと本物らしく作る」「着物みたいな服を作る」「太鼓もあったよね」などの考えが挙がり、各々の関心に基づいて製作などの探究を続けていった。

6. 太鼓を作ろう

獅子を町に出すために、より獅子頭を作り込んでいくなかで、R子さんやAさんなどが「獅子舞が来た時に鳴らす太鼓を作りたい」と話しにきた。どんなふうに作るか絵に描いてみながら目指す形を共有したのち、大きい段ボールを用意して、太鼓作りを始めた。太鼓の大きさは本物と同じくらいにしたいという思いを実現するため、太鼓の大きさをイメージして両手を広げて大きさを決め、段ボールを切って太鼓の胴の部分を作った。続けて、太鼓の膜をどのように作るかを考えようとするが、うまく考えが浮かばない様子であった。保育者が「明日のみんなの時間で相談してみる?」と促すと納得し、翌日のクラス活動の時間

に太鼓の膜の作り方について話し合いを持つことになった。話し合いではＹ子さんが、「（胴の太さと）同じ大きさの段ボールを貼ればいいんじゃない」と一つ目の作り方の考えを出した。するとそれを聞いていたＡ君は「でも、そうじゃなくて、テープだけでもできる」と別な作り方の考えを出し、テープを張り巡らせて膜を作ることを提案した。どちらの方法がいいかという話に進んでいったが、最終的には太鼓の膜の部分は２面あるため、両方の作り方を試してみることに決まった。

太鼓の胴の太さと同じ段ボールを貼るという作り方では、Ｒさんの提案で、余った大きい段ボールに太鼓の胴を乗せて鉛筆でなぞることで、胴まわりと同じ大きさの段ボールを切り出すことができ、ガムテープで固定した。

その後、太鼓を反対向きにして、膜と同じ色のイメージで白のガムテープを太鼓の胴に張り渡しながらテープで膜を作る方法も試し、両面とも太鼓の膜を張ることができた。粘土遊び用の麺棒をバチにして叩いてみると、両面とも実際の太鼓に似た音が出た。熱心に太鼓作りを続けたＹさんは「本物みたい」と喜びつつ、両面の音を叩いたり聴き比べたりしながら、段ボールを膜として貼り付けた方がより本物らしいと感じ、主に段ボール面を叩くことを周囲にも伝えていった。

胴と膜ができた太鼓であったが、本物の和太鼓と比べると、太鼓の膜を止める黒い鋲（びょう）がないことや、実際に町に出されている太鼓は移動できるようにリヤカーなどに固定されていることなどに気づきが派生し、「より本物らしくしたい」という思いから太鼓の製作は続けられていった。

太鼓の鋲作りやリヤカーへの固定では、これまで獅子頭作りにあまり関心をもっていなかった

K美さんが興味を示し、黒の画用紙にペットボトルのキャップで丸をなぞり、切って貼ることを楽しむ様子が見られた。鋲を作ることは徐々に子どもたちのなかで自然に分業化され、丸をなぞる人、なぞった線に沿ってハサミで切る人、セロハンテープを輪にして太鼓に貼り付ける人と分担して製作が進められ、一人一人にとって「自分が作った太鼓」という思いが出ていった。

太鼓の固定には、園にあった荷物運搬用の小さなリヤカーを用いることにした。実際に手作り太鼓を乗せてみると、リヤカーの荷台と太鼓の胴の間に大きな隙間ができ、不安定であることが分かった。太鼓を固定することに意欲を持っていた子どもたちで、どうすればいいか簡単な話し合いがもたれ、ウレタンの大型積み木を置いて隙間を埋めることになった。その様子を見ていると、普段からウレタンの大型積み木などでままごとの空間を敷き詰めているK美が周囲に声を出して、積み木の大きさを指示したり、うまく敷き詰められるように工夫したりしている様子が見られた。その結果、ウレタンの大型積み木は隙間なく重ねられ太鼓はしっかりと固定された。

その姿に保育者として、「自分の好きなことや得意なことが生かされる部分で自信をもって遊びに加わっている」と感じ、これまでの遊びの経験で得た実践知は必要な場面で発揮されていることを感じた。

7. 手作り獅子で町に出よう

太鼓を作り、獅子頭には目や眉毛などを加え、「おんばこ」も複数の子どもが縫い付けに挑戦したことで十分な量が付いた。町に出るための衣装について、地域で実際に獅子舞を行っている保護者に子どもたちが質問すると、「本当は着物や脚絆（きゃはん）、襷（たすき）とかを着けるけど、法被とかでもいいんじゃないかな」と教えてもらい、園にある子ども用の法被を着用することになった。

また本物の獅子舞は、地域の家全てに入り、歯を鳴らしたり頭を噛む仕草（しぐさ）をしたりするのだが、園の活動で行うため、警察への手続きや地域への案内の関係上、すべての家に行くのではなく事前に訪問先を決めて練り歩くことになった。保育園を中心に、近隣の商店や園児の家庭を回ることにして、その順序や役割分担も事前に話し合いを重ね、決定した。

10月24日、全員で法被を着こみ、手作りの獅子頭や太鼓、「チンチン」となる鐘のかわりに園庭にあった金属性ボウルを整えて、いざ最初の目的地である商店へ出発した。子どもたちは自分たちの目標を実現できた喜びの中、大声で「お獅子だぞー、お獅子だぞー」と声を上げて町を歩いた。

しかし一つ、どうにもならない事態があった。それは当日の空模様であった。当日の天候は曇りのち雨、降水確率も高めであった。当日は空模様を見つつ、雨が降っていなかったため、実施することにしたのだが、1軒目の商店を訪問した頃に雨が降り出し、次の目的地に向かおうとするときには雨脚が強まってしまった。子どもたちにはもっと歩き進みたい気持ちが見られたが、安全面や健康面の判断から獅子舞行列を中止して、雨具を着て園に引き返すことにした。

その日、園に戻って昼食を食べたのち、獅子舞行列について子どもたちの気持ちを聞く時間を設けた。子どもたちは、町を歩くことができた嬉(うれ)しさについては大きく感じていたようであったが、途中で中止したことについては残念な気持ちや、やりきれない気持ちがある様子であった。それは「もう1回やりたい」という声になって次々に聞かれたため、可能であれば再度日程を調節して実施することとした。

8. 獅子舞の踊りを創ろう

手作り獅子を実際に町に出していこうとする共通の目的をもっていく中で、獅子の動きに関心を示す子どもたちが見られた。本物の獅子舞は、ぐるぐると回ったり、しゃがんだ後に大きく立ち上がって迫力ある姿を見せたり、獅子頭を高く持ち上げて「やーっ」という掛け声を出したりしながら、家々を訪問していく。

秋の時期は本物の獅子舞を地域で見る機会がないために、映像に残っているものを見ながら、獅子の動きについて調べたりしていた。その中で、映像を見ていたA美さんやH子さんが「ダンスみたい」とつぶやき、その言葉に保育者も賛同して、自分たちで動きなどを考えて獅子舞をモチーフにしたダンスを作ってみることを提案した。A美さんやH子さん、H美さん、Nさんなど、歌や踊りが好きな子どもたちを中心にして、映像を参考にしながら、しゃがんでジャンプすることや、腕を回すこと、回転することなどの動きを考えていった。子どもたちが考えた動きをまとめながら、音楽が得意な保育者に動きに合いそうな曲を選んでもらい、創作ダンスを作って楽しんだ。自分たちが考えたダンスを何度か楽しむ中で、ある時Yさんから「先生、今度のフェスティバルでも獅子舞の踊りを見せたい」と提案があっ

た。フェスティバルとは「生涯学習フェスティバル」という町が主催となった行事で１１月の文化の日に開催される地域行事であり、例年、園の年長組などが参加して歌などを披露しているものである。Ｙさんの提案を受け、翌日の「みんなの時間」にクラスの子どもたちに相談すると、多くの子どもたちが「やってみたい」という気持ちを見せた。一方で、この獅子作りのきっかけとなったＪ君は、人前に出ると緊張してしまうこともあり、不安そうな様子が見られていた。Ｊ君に声を掛けると、「ダンスは嫌だ、でも獅子を持つ人ならできる」という言葉が返ってきた。周囲の子どもたちもその声を受け止め、「それなら、みんなで作った獅子舞も見てもらえるから、いいじゃん」とＪ君の気持ちを認めつつ、さらに前向きな考えとなり、地域のフェスティバルで獅子舞の創作ダンスをすることになった。

ダンスの発表にあたっては、会場に来ている地域の方々にクラスの協同的な活動や遊びを通した学びについて知ってもらったうえで、創作ダンスの発表を見てもらいたいという思いから、発表当日はそれまでの獅子作りの活動の記録をまとめた映像と口頭の説明を用いて、子どもたちの姿を伝えたのちにＪ君らがかぶった獅子頭と創作ダンスを披露した。

９．もう一度、手作り獅子で町を歩く

獅子舞ダンスの創作や地域行事への参加などと並行しながら、保育者は再び町に出て獅子舞行列を催すために警察への道路使用の許可や地域への案内を進めていった。前回、雨天により中止した反省から天候のいい日に実施することを念頭におき、天気予報などを参照しながら１１月の３週目に３日間の期間を設けて手続きを行った。

２回目の実施となる１１月１５日は、気温は前

月よりも下がったものの雨は降らず、子どもたちと決めた行列の道程を、役割を交代しながら全員で楽しむことができた。

前回同様、「お獅子だぞー、お獅子だぞー」という掛け声と獅子舞の訪問を知らせる太鼓や鐘の音を響かせながら練り歩いた。獅子舞行列の途中では、訪問を予定していなかったお宅からも子どもたちの声を聞いて玄関から出てきて声を掛けていただいたり、散歩途中の地域の方々と触れ合わせてもらったりもした。訪問した先の方からは賽銭（さいせん）の代わりとなるミカンやお菓子などをいただいた。また、休憩をとった公園の隣にある食堂のおかみさんたちがお店にある獅子頭を持ってきてくださり、子どもたちに見せてくれる場面もあった。手作り獅子の行列を通して出会った地域の方に向けて子どもたちは、「みんなで作ったんだ」「おんばこを縫ったんだよ」「太鼓もあるよ」などと自分たちが作ってきたことを、自信をもって話す姿が見られた。地域の方からも「すごいね」「（太鼓が）本物みたいな音だね」などと声を掛けてもらい、子どもたちの気持ちを受け止めてもらうことができた。

行列後、子どもたちに感想を聞いてみると、「わくわくした」「嬉しかった」「楽しかった」「どきどきした」「よかった」など短い言葉が返ってきた。どうしてそのような心地なのか、さらに問いかけてみると、「自分たちで準備してきたことができたから」「自分の決めた役割ができたから」「地域の人に会ったから」などの感想がもたれ、その言葉に込められた想（おも）いと表情から、子どもたちは大きな達成感を感じていた様子であった。

10. 太鼓の片付けと太鼓の本作り

2回目の獅子舞行列からしばらくして、町は冬を迎えて雪の舞う季節となった。実際に町に出た獅子舞行列で大きな達成感を感じた後も、園内を獅子頭をかぶって巡る姿は見られていた。一方で、リヤカーに固定した太鼓は他の保育活動との関連で保管していくことが難しくなっていた。そこで保育者は、「みんなの時間」にこれまでに子どもたちが獅子作りに取り組んできた記録をまとめたドキュメンテーションのファイルを見せながら、簡単な学びの物語にして振り返った。自分たちの物語を楽しんだあと、その余韻を感じる子どもたちに太鼓の保管場所がなくなりそうであること、太鼓を使って遊ぶことが減少していることを伝え、太鼓をどうしていきたいか問いかけた。初めに手を挙げて意見を言ったA美さんは、「みんなで作った太鼓だから、とっておきたい」と話した。「とっておきたい」という気持ちに賛同する子どもは複数いて、自分たちが作った物に対しての愛着をもっている様子が窺えた。当時、太鼓の保管場所は園の屋根付き玄関であり、保管場所

を保育室などに変えて引き続き保管すればいいのではないかという意見も上がった。一方で、K子さんは「でも、お部屋にずっと置いておくと他の遊びができないよ」と話し、片付けを意識した意見を口にしていた。残しておくのか片付けるのかで意見が分かれた中で話し合いが進んだが、再びA美さんが手を挙げて「じゃあさ、太鼓の写真を撮ってさ、それを紙にして（印刷して）、絵本みたいにすれば？」という新しい考えが示された。子どもたちの遊びを記録するツールとして年度中、必要に応じて子どもたちは自由にデジタルカメラを使って遊びを記録することを経験していたため、A美さんの意見はこれまでの遊びで培った経験から考え出された提案であった。その提案は他の子どもたちにとっても、これまでに経験が反映された意見だったため、イメージしやすかった様子で、残しておきたいと考えていた子どもたちは写真を撮って残すという方法に納得し、太鼓は片付けることに決定した。

その話し合いの翌日、遊戯室にリヤカーに固定した太鼓を運んで写真を撮りたい子どもたちが、デジタルカメラを使って自分が製作に携わった部分やお気に入りの角度から写真を撮影した。その後全員で集合写真を撮り、太鼓をリヤカーから外したり、太鼓の膜を外したりして片付けを行った。

撮影した写真は、絵本作りに興味をもった子どもたちを中心にして、印刷をして写真をまとめ、鉛筆で写真の説明を書きこんで表紙を付けたり、装飾をしたりして完成させた。絵本の題名は、クラスで話し合い、「らいおんぐみのがんばってつくったたいこのえほん（らいおん組の頑張って作った太鼓の絵本）」と決めて表紙に書き添えて、手作りの獅子頭の隣に置くこととなった。子どもたちは時折、手作りの絵本を開いて太鼓を眺めたり、迎えにきた保護者に太鼓を片付けて絵本を作ったことを伝えたりする姿が見られた。

一方、みんなで作った獅子頭については、「まだ遊びたい」「まだとっておきたい」という気持ちが全員から示されたため、引き続き、園の遊び棚にスペースをとって置いておくこととした。

11．本物の獅子舞の来園と卒園前の遊びの姿

子どもたちが獅子作りに取り組んだり、地域に出て楽しんだりした姿は保育記録としてのドキュメンテーションやお便り、地域行事などで、その

都度発信を続けていた。そんな中、年末が近づいた時期に地域で獅子舞を行っている保護者の方から、「らいおん組が獅子を作っているなら、次の正月に出す地区の獅子を保育園に入れてもいいかな」と声を掛けていただいた。地域の方からいただいた嬉しい提案を受けさせていただき、年が明けた1月には二つの地区の獅子舞が保育園に来てくれて、子どもたちの間近で獅子舞の動きを見せてもらったり、「おんばこ」を取らせてもらったりした。自分たちも獅子を作ったことから、怖がらずに獅子舞を観察しようとする子や、自分たちが作った獅子を改めて披露する子どもたちの姿が見られた。本物の獅子舞の姿に呼応するように、その後の遊びでは獅子舞に興味を示し、仲間同士で声を掛け合って役割を分担したり、園舎内のどこを巡るかを相談して楽しむ姿が見られた。片付けた太鼓の代わりは、素材棚から見つけた大きめの空き箱を持ち出し、当時手作りした太鼓と同じような音を出して獅子舞の登場

を知らせていた。

その後、ゆったりと卒園に向かって過ごしていった子どもたちは、卒園式前の最後の遊びまで獅子を持ち出す様子もあり、手作りした獅子頭に親しみを込めて過ごしていた様子が感じられた。

その獅子頭は卒園前の時期の話し合いで、獅子作りのきっかけとなったJ君が自宅に持ち帰りたいという気持ちを伝え、周囲の子どもたちもそれを受け入れたため片付けることはせず、最後までとっておくことにした。そして、各々（おのおの）が獅子舞の遊びを存分に楽しんだ後に、J君が卒園式前日に自宅に持ち帰っていった。

3 手作り獅子の活動を通して子どもたちが育んだもの

1．地域への関心や関わり

概ね（おおむね）1年にわたった獅子作りの遊びを通して、

子どもたちは、自分たちの生活している地域に改めて触れる機会を重ねていったと考えられる。自分たちが抱いた目的や疑問を探究しようとするために地域に出向き、観察したり触れ合ったりしたことで目的が達成されたり疑問を解消したりする経験を重ねたようであった。それは子どもたちにとって、さらに「地域に出たい」という思いの芽生えとなり、主体的に地域に関わろうとする姿に繋がっていったようにも感じている。

その経験や気持ちは子どもたちが成長していく中で、今後地域やその文化や伝統に対して、実体験を伴って感じたり考えたり向き合ったりしていくことに繋がるのではないかと考えられる。それは子どもたちが大人となって社会生活を営んでいく中で、地域との新たな関わりのきっかけや意欲を生むことに繋がるのではないかと考えている。そのきっかけや意欲は、自分たちが育った地域に対しての愛着や原風景となって、地域の振興や発展のきっかけを生み出す可能性もあるだろう。

2. 遊びを通して育まれた力の関連付け

子どもたちの姿には、これまでの遊びの経験が生かされていると感じる姿があった。例えば、太鼓作りの中で太鼓の膜の大きさを決める時などに太さの基準となるものを当ててなぞる方法を選択することや、「おんばこ」を縫い付ける際にも、以前に楽しんでいた裁縫の遊びの経験によって縫うことに戸惑うことなく自分のイメージした方法で獅子作りを実現することができたようである。それは、子どもたちの中にこれまでの遊びが実践知として蓄積され、必要に応じて複数の選択肢から選んで活用する姿の表れだと考えられ、自分のもつ力を応用したり場面に応じた技術や知識を適切に発揮したりしたと考えられる。

3. 大きなテーマの中で派生した複数の探究的活動

手作りの獅子を作る中で、「獅子の耳」や「歯の付け方」「創作獅子舞ダンス」「太鼓作りと音」「太鼓の絵本作り」など複数の探究的活動が生まれた。それぞれ少人数の子どもたちが自分たちの目的を持って考えたり試行錯誤したりしながら、子どもたちなりに納得したり、新しい気づきを得ていく様子が見られた。それらが一連の活動の中で関連し合ったことで、学びの複合的連鎖が生まれ、獅子作りの取り組み以外の生活や遊び、テーマに基づいた活動にも生かされていったように感じている。

4. 子ども自身の主体性と協同的意識の育み

一連の獅子作りの中では、さまざまな遊びの側面があり、子どもたちはそれぞれの興味や関心に基づきながら参加していく姿が見られた。その中で得られた気づきや発見、感じた疑問や相談点などはクラス活動の時間である「みんなの時間」の中でテーマとして挙げて、仲間の気持ちや考えなども含めて共有することを繰り返してきた。そのプロセスの中で作り続けていった獅子頭は、「自分のお獅子でもあり、みんなのお獅子」となったように考えられ、子どもたちの主体性と協同的意識の両面において育みがあったと考えられる。

4 まとめ

今回、一人の子どもの興味・関心から始まった手作り獅子の遊びが様々な探究活動の芽を

伸ばし、それぞれに対して、子どもたちが自らの主体性をもって取り組む姿を傍らで見守り続けたことで、子どもたちが遊びを通して学ぶということを保育者の立場から身をもって感じることができたように考えている。さまざまな活動の側面において、子どもたちは自らの思考力を働かせたり、感じたことや考えたことを表現したり、仲間との対話を重ねながら共通の目的を達成する喜びを感じていったように思われる。それらは、今回の保育所保育指針等や小学校以降の学習指導要領の改定（訂）によって示された、育むべき三つの資質・能力の育ちに関連付けられていると考えられる。幼児期に遊びを通して学んだことが小学校以降の学習の基盤となるだけでなく、地域に開かれた教育課程の中で学びを深めていこうとする際に、子どもたち自身が学びへの関心を示し、主体的に対象に関わり、仲間との対話を通して新しい知見を得ていく中で、学びがより一層深まっていくことに繋がるだろう。それはすなわち一人一人の子どもたちの、自ら社会に関わって生きていこうとする豊かな人間性の育みに寄与していくものだろうと考えている。

最後に、今回の実践を通して感じた子どもたちの育ちを、園のさらなる保育の質の向上の糧として、今後も子どもたちの傍らに寄り添い、共に驚いたり感じたりすることを重ねながら、乳幼児期の子どもたちの育ちを丁寧に支え続けていきたいと強く考えている。

幼児教育に美術的な視点を持ち込むことでなにが起きたのか

atelier le matin（アトリエ ル・マタン）主宰

あさ ば さと み
浅羽聡美

1968年生まれ。20代で7年間、千葉県公立中学校の美術科教諭として勤務。その後、病院や福祉施設、幼稚園、保育園、小学校、大学や適応指導教室などさまざまな場で、健常な方だけでなく、病気や障害、不登校や引きこもり、自傷行為など、さまざまな問題を抱えた方たちとも美術を通して関わる。2012年からatelier le matinを主宰し、とくに乳幼児期の造形表現に集中的に関わり、そこから見えてきたことをSNSや書籍、ワークショップなどの形で発信する活動をし、現在に至る。新渡戸文化短期大学非常勤講師。著書『子どものチカラを引き出す美術と大人の関わり合い』『保育園の表現者たち〜アートが流れる日々から』『アートという文脈で保育を考えてみると』。連絡は、lematin1011@gmail.comまで。

第 68 回　読売教育賞から

【美術教育】

思い思いに戯れて

絵筆を洗った水を床にこぼした女児が、足先で水遊びをする。そばでは別の女児が筆で机をたたいてリズムを刻む。東京都練馬区東大泉のベネッセ大泉学園保育園。1歳児クラスのアートの時間は、園児10人が思い思いに絵の具や画用紙と戯れる。その様子を浅羽さんや保育士らが見守る。

浅羽さんは美術活動を通して学びの場を提供する「アトリエ　ル・マタン」（千葉県市川市）を主宰する。保育園で絵の具や絵筆の使い方など技術的な指導は行わない。「信じてあげることで、子供たちは安心して自分の絵を描ける」

大切にしているのは「振り返り」だ。授業後、保育士らが園児の行動をメモして模造紙に貼り付ける。なぜそう行動したのか、意見を述べ合う。「正解はなく、保育士が一人一人と向き合うことに意味がある」

浅羽さんと4年間、実践を続けてきた渡辺直子園長(58)は「『こうさせたい』という気持ちが保育士になくなり、園児に自主性が育ってきた」と認める。

現在は都内や横浜市の8園で活動する浅羽さん。「幼児の人格が尊重される美術教育をさらに広めたい」と語る。（栗村政伸）

園児の自主性を信じる活動を続ける浅羽さん（東京都練馬区のベネッセ大泉学園保育園で）

美術教育部門 最優秀賞　　造形作家 浅羽聡美さん 51

奥村高明・日本体育大学教授「造形が子どもだけでなく、周辺環境を丸ごと発達させている。美術教育の効力を示した実践だ。ささやかな取り組みが保育者や子どもたちを変えていく有りように感動した」

【最優秀賞選評】

奥村高明　日本体育大学教授

「造形が子どもだけでなく、周辺環境を丸ごと発達させている。美術教育の効力を示した実践だ。ささやかな取り組みが保育者や子どもたちを変えていく有りように感動した」

1 はじめに

これは、保育現場に美術的な視点を持ち込み、遊びといえる乳幼児の造形的な表現行為を見詰めることで、より深い子ども理解を促し、日々の保育の質が高まっていくことを目指して行われた、ベネッセ大泉学園保育園の2015年から現在までの4年間の実践報告である。

私は、20代の公立中学校の美術科教員を皮切りに、二十数年にわたって美術を通して人と関わってきた。0歳から98歳の方まで、健常な方だけでなく、病気や障害、不登校や引きこもり、自傷行為など、さまざまな問題を抱えた方たちと、幼稚園、保育園、小、中、大学や適応指導教室、福祉施設、病院などで、教育やリハビリ、治療の一環など、さまざまな目的で関わってきた。

その中で強く感じてきたことがある。それは、多くの人が美術に強い苦手意識を持っているということである。例えば、98歳の方が小学校の成績の話をされる。「図画工作だけが甲乙丙でいうと丙だった。だから自分にはできない。恥をかかせないでほしい」と言われる。90年間そう思って生きてこられたのだと思うと愕然とする。その方に限らず、学校教育の中で比較され、評価されることで、描いたり、つくったりすることが苦手になり、自分には無縁のものであるとひとたび思い込むと、それを覆す体験がなく人生を送られる方々は多い。その反面、美術はこうあるべきという囚われから解放されるきっかけがあれば、誰もが描き、つくることを楽しみ、たとえさまざまな問題を抱えていたとしても、美術を手掛かりに自分を肯定的に捉えられるようになっていく姿もまた見てきた。

学校教育における評価が大きく影響しているとしたら、就学前の子どもたちはどうなのだろうか、それを知りたいという思いから、8年前から複数の保育園や幼稚園において、乳幼児期の子どもたちに関わり現在に至っている。

そこで目の当たりにしたのは、子どもたちの自発的な遊びから生み出される造形的な行為を、取るに足りないものとして、保育者がつくり方を指導し、子どもが心動かされ、未知のものを探求したいと思う瞬間を遮ってしまい、上手に描けるかどうかを気にし、すでに描くことに苦手意識を持っている子が少なからずいるという現状であった。

長いこと美術に携わってきた私にとって、子どもたちの自発的な遊びにこそ、人が表現することの本質があると強く感じている。けれど、美術が専門の私が保育に関わることは、ともすると一過性のイベント的な活動になりがちである。そうではなく、表現活動を私が来た日の特別なものにせず、保育者が日々の遊びの中にあるべきものとして捉え、子どもたちの自発的で自由な表現＝遊びが生まれる保育環境を再考していく、私の関わりがその契機にならないかを、保育の変革を目指したベネッセ大泉学園保育園の園長先生とともに模索し続けた4年間であり、今も継続されている取り組みである。

2 具体的な取り組み

2015年度は2回、2016年度は4回、2017年度は7回、2018年度は8回、2019年度は9回（予定）、保育園に赴いた。午前中に子どもたちとの造形活動を行い、午後、その活動を担任保育者と振り返る回と、保育時間外の夕方からの2時間、保育者を対象とした研修を担当する回を交互に持った（表1）。子どもたちへの造形活動、保育者研修の内容は、園長先生から日々

の保育の様子についてメールをいただき、その都度、そこから見えてきた課題を反映させながら、担任の先生方とも相談して決めていった。

3 子どもたちとの造形活動

■ 表1　ベネッセ大泉学園保育園での具体的な取り組み

年　度	月　日	対　象	内　容
2015	10.27	5 才児	月光を描く
	11.20	職員研修	絵本をつくる / 乳児の動画視聴
2016	6.3	5 才児	月光を描く
	8.2	5 才児	ウミウシのモビール
	10.24	5 才児	ゴミからつくる
	1.30	職員研修	ゴミからつくる / 幼児の動画の視聴
2017	4.3	職員研修	墨汁で雷を描く /1、3 才児の動画視聴
	4.17	5 才児	音楽を描く
	6.7	職員研修	音楽を描く /5 才児の動画視聴
	8.4	5 才児	ウミウシのモビール
	9.7	職員研修	ウミウシのモビール /5 才児の動画視聴
	12.14	職員研修	石膏のレリーフ
	1.17	5 才児	墨汁とクレヨンで絵本をつくる
2018	5.21	5 才児	泳ぐ鯉を描く
	7.26	職員研修	カタチに残らない絵具の動き / 乳幼児の動画視聴
	8.1	2 才児	ハサミとセロテープ、水性ペン、廃材を置く
	11.4	5 才児	光をつくる
	11.22	職員研修	テープのインスタレーション / 乳幼児の動画視聴
	1.10	2 才児	テープと紙皿、紙コップ、水性ペンを置く
	1.31	5 才児	黒い紙に白い絵具と水性ペンで雪の絵本をつくる
	3.26	2 才児	墨汁とクレヨンで絵本をつくる
2019	5.15	職員研修	洗濯糊で溶いた絵具で自由に描く /1 才児の動画視聴
	5.29	5 才児	鯉の滝登りを描く
	6.14	保護者研修	クレヨンを使って描く / 対話
	7.31	2 才児	クレヨンとジェッソ、サンドペーパー、ヘラを置く
	9.25	1 才児	絵具と紙、さまざまな描画材を置く　　~ 以下予定 ~
	11.27	2 才児	ハサミとさまざまな素材とテープ
	12.12	職員研修	光をつくる / 乳幼児の動画視聴
	1.29	5 才児	光をつくる
	3.26	4 才児	ゴミからつくる

子どもたちとの造形表現活動を設定する上では、事前に担任の先生方と、表現において間違いはなく、また、正解もないこと、危険でない限り、制限しないことを確認した。

大人が極力、介入しない状況をつくることにより、造形に限らない、子どもの本来的な遊びが生まれる状況をつくる。そうして、大人が予想しない、子ども一人ひとりから自発的に出てくる表現を記録し、事後、その記録をもとに振り返ることによって、子どもがすでに持っている可能性に気付き、それは造形活動に限ったものではなく、日常のさまざまな行為、遊びの中で認められる可能性であることに気付いていけるようにする。そうした時間を担任の先生方と繰り返し持つことによって、子どもは有能であり、創造的な存在であるという、新たな子ども観が現れてくることに期待している。

自発的な表現といっても、放任ではない。前述のように幼児であっても、自由に描いたりつくったりすることに自信を失っている子は少なくない。真っ白い紙を前に途方に暮れる子や、保育者にかわいらしい絵を描いてとせがむ子、お絵かきはしないけど塗り絵は好きという子、キャラクターやかわいらしい絵が描けるかどうかで上手、下手という評価がすでに子ども間にある、そうした姿を少なからず見てきた。

そこで、これまで子どもたちが触れてきたであろう上手な絵とは違う表現を提案する。言い換えれば、そういう表現もあるんだ、そういう表現でもいいんだという表現の振れ幅が提示されることで、言われた通りに描くのではなく、上手に描くのでもなく、自分がやってみたいこと、面白いなあと思うこと、この感じがいいなあと思うことを追求しやすくなるようにと考えている。

子どもたちの前にさまざまな素材やテーマを置くとき、それは絶対ではなく、あくまで“私の面白い”であって、子どもたち1人ひとりの“私の面白い”は別のところにあるということが前提になる。

上手い下手といった既成の価値観に、未だ囚われていないだろう乳児に関しては素材や道具を置き、見守ることに極力徹している。

幼児の活動としては、光や音、水など、身近で実感を伴いながらカタチのないものを造形のテーマにしたり、さまざまな異素材を置き、「誰も見たことのない色をつくろう」「世界にひとつだけのカタチをつくろう」…といった言葉を用いて、素材の色や形、質感との出会いから直感的、衝動的に、既存の“何からしさ”に拠ることなく、“私の面白い”を追求していくことを提案している。

その上では、作品としてカタチを残すことが絶対ではない。“私の面白い”が、留まらない絵具の動きのように、次々と現れては消えていくものであってもいいのである。けれど、そうして完成を目指さずに、造形的行為を楽しんだ後に残る痕跡には、かわいいやきれい、子どもらしい、上手といった表現とは違った魅力が潜んでいる。そうした色や形のユニークさや深みを感じ取る鋭く、柔らかな感性を、子どもたちは大人以上に、実は持ち合わせていることを感じる。

実験的な感覚で造形しやすくするために、素材を多めに用意し、極力、使う量に制限を加えないようにする。1枚の紙の上でじっくり表現する子もいれば、即興的に30枚の紙を使った表現を試す子がいてもいい。また、提案とまったく違うテーマでつくりたくなったとしたら、それもまた大いに歓迎する。

4 ある日の造形活動の様子

2016年10月24日に実施した5才児の「ゴミからつくる」の様子を紹介する。

あえて、廃材と言わずにゴミという言葉を使って、家庭や園で素材を集めてもらった。衛生的に問題がない、小さめなものという但し書きをつけている。子どもたちが使う工作用の廃材というと、ペットボトル、空き箱、牛乳パック、トイレットペーパーの芯など、決まりきったものになりがちであるが、ゴミというと相当に雑多なものが集まる。

（写真1）2016. 10.24　5才児「ゴミからつくる」作品の展示風景

ゴミを素材にする面白さには、造形を目的に作られた用途や使い方が決まっている素材にはない、自由さがある。それらは、誰かの手を経た痕跡や息遣い、時間をはらんで、そのモノに味わいを与え、子どもたちは、それらの背景も含めた多彩さに触発されながら、理屈では説明できない混沌とした中で、“私の面白い”を拠りどころに造形していく。それは、一般的な価値観や常識（ゴミはいらないもの、不要なもの、汚いもの、価値のないもの）に拠らずに、自分の感覚を拠り所にモノと対峙することであり、その体験は、自分を取り巻くモノ（モノに限らず人も）に対しての見方、感じ方に少なからず変化をもたらすものになるのではないかと考えている。

異素材を使う場合、接着が難しくなるが、木工用ボンドに軽量紙粘土を混ぜたものを使うことで、ボンドの粘度を高くし、硬化を待たずに素材をキープすることが容易になり、それに埋め込んでしまうことで素材を選ばず、接着することができる。ねっとりとした粘土の感触も心地よく、接着という作業を超え、それ自体が魅力的な造形素材でもある。

過剰に誘ったり、無理強いせずに活動をはじめるが、家から素材を持ってきているため期待感もあり、5才児の全員が参加する。直感的に面白いと思うモノを選び、色が加えたくなったら絵具を使い、完成させる作品の数もそれぞれに、自分のタイミングで制作を終えていく。

つくりはじめる前に、完成形のイメージを持つ必要も、“何からしく”つくる必要もない。そうしたことを大人に求められないことで、今、この瞬間に、モノと自分が関わることで湧き上がる感覚に、素直に反応しながら造形していくことが可能になる。

そうしてつくるうちに、具体的なイメージやストーリーが生まれてくる子たちもいる。色そのものが面白くなり、容器の中で絵具を混ぜることや、絵具を手足に塗ることに没頭する子が出てきたりもする。それも止めない。そのどれもが表現として尊重される。大人がそうあれば、子ども同士は否定し合うことはない。

この日は、昼食の準備ができても1人だけ制作が終わらなかった。他の子たちが昼食を食べはじめても、気にすることなく制作を続けていたが、衛生上、昼食を取っておける時間が決まっているため、本人にその旨を話し、午後、続きをするこ

とで納得していったん制作を終える。午睡後、1人でさらに1時間ほど制作し、作品を完成させた。

下はそのときの約3時間かけて制作された作品である。

（写真2）2016. 10.24　約3時間かけて制作された作品

5 造形活動後の振り返り

活動したその日の午後、子どもたちが昼寝をしている時間を利用し、1時間程かけて、午前中の活動に立ち会った先生方（担任2名、主任、園長）と振り返りの時間を持つ。行動レベルの反省会にならないように、私は、ファシリテーターであることを意識して行っている。まずは、午前中に起きたこと（子どもや大人の言動、自分の心の中の動きなど）を、できるだけ解釈を加えずに、付箋に書いて出し合う。そこから掘り下げてみたい事柄をいくつか選び、それがなぜ起きたのかを想像し合う。思い付く可能性を出し合いながら振り返っていくと、自ずと、この日の造形活動に限らない、さまざまな場面に通じる大切な何かが浮かび上がってくるのである。

一例を挙げてみる。2016年6月3日、この年度において、初めて私が関わった5才児の造形活動の振り返りである。

（写真3）2016.6.3 造形活動後の振り返りの記録

上の写真は、話し合いを促進するために私がその場で書き留めている記録である。

私を含めて先生方と午前中に起きたことを書き出した付箋（以下「」で示す）から、まず、取り上げた出来事は、最初のうちの「戸惑う」「できないと言う」「大人の顔色を見て」「私の色、変だよと言う」といった子どもたちの様子についてであった。それは、なぜなのだろうか？思いつくことを出し合っていく。

- 変だと思われたら嫌。
- 初めてのことに抵抗感がある。すでに経験していることなら、すでに答えがあるから上手にできることが分かるが。
- やるからには上手にやりたいという思いが強い。

- これまで制作をするときには、大人の見本を見せていた。大人と同じようにつくれば安心。変とは思われないが、今回はそうではない。
- その場にはいない家族、親や兄弟の目も意識していて、何て言われるかを気にしている。
- 大人が発信している評価（上手な出来栄え）に子どもたちが影響されている。
- そうした評価が子ども同士にも影響している。自分に自信がない子が、他の子の揚げ足を取るから、先回りして自分の表現を「変だよ」と言う。

次に、時間が経つにつれて、子どもたちの様子が変化していったことを取り上げて考えていった。自分の表現に「天才」と言い、「すごいと拍手」し、大人が止めたくなるような「ヘラを両手に持って」描いたり、色水をふくんだ「スポンジを紙の上で絞って」いたり、「びしゃびしゃ」になった紙が「破けた」ことを「ワア」と言い、描画材として用意した「金たわしを引っ張り合い、のばして遊ぶ」、「描く時間より、ヘラをきれいに雑巾でぬぐう時間が長い」といった出来事について、それはなぜだろうか想像していった。

- 浅羽だけでなく、そこにいる大人が口を出さない、手を出さないという空気を感じた。
- 汚れても、穴があいても、筆を２本持っても大人から何も言われないことが分かって、何をしてもいい、自由にしていいんだと思えるようになっていった。
- 人に意識を向けていられないくらいに自分の表現、行為に没頭していた。
- 評価を気にせず、目の前で起きる現象に驚いていた。

そうした子どもたちを前にして、先生たちに、指示したい、行為を止めたいと思う気持ちがあったことが話された。それをせずに見守ったからこそ、見えてくる子どもたちの姿があったのではないか、子ども主体の保育をしたいと思っていたが、これまで、子どものことを思って余計なお世話をしてきたのではないかといったことに話は及んでいく。

そして、昼食の時間になっても活動が終わらない子がいて、いつまでやっているのだろうと思ったが「止めなくても終わった」、紙に穴があいても子ども同士「否定の言葉がない」、「ズボンが絵具で黒くなってしまった子に、他の子が、そのうち乾くよ」と声をかけていた、「戸惑う子も、時間差があっても自由にふるまえていた」ことについて、さらに考えていく。

- 大人が余計な声掛けをしなくても、子どもたちは自分で考え、行動でき、それで問題はない。
- 子どもが自分で考えて行動する経験を、これまで、大人が設けた行動の基準、約束で阻んできたのではないか。
- 大人の基準が評価になって、言わないまでも威圧して、それよって子どもが自信をなくし、それが他の子を否定することにつながるのではないか。
- 子どもを信じて、任せて、待つ。子どもは、夢中になって楽しむ中で、そして、子ども同士の中で育つ。
- やらないことも選択であって、やりたい気持ちが湧く、選択肢の広がる環境を考える。

起きたことには必ず、それを起こす背景がある。そこには良いも悪いもない。決めつけずに、そのままを見詰めて、その背景を想像してみる。本当のところは分からないという理解のもと、謙虚に考えうる可能性に思いを馳せていく。そうすると、行動レベルのもっとこうすればよかった、こうしなければよかったという後悔や自己否定、他者否定ではない、明日からの子どもたちに対していくときの指針のようなものが見えてくるのである。

6 職員研修

子どもたちとの造形活動とその後の振り返りは、保育中の時間であるため、該当クラスの先生以外は参加できないが、保育時間外に設定される職員研修では、保育者全員が参加する。

２時間の研修の内容は、制作体験が中心である。その第一の目的は、子どもと一緒にできる造形活動のネタを学ぶことではなく、保育者自身が“表現者としての自分”を感じることにある。表現する体験によって、子ども一人ひとりを、自分とは違う深淵な内面世界を持った表現者として尊重でき、その表現に共感することができるのではないかと考えている。

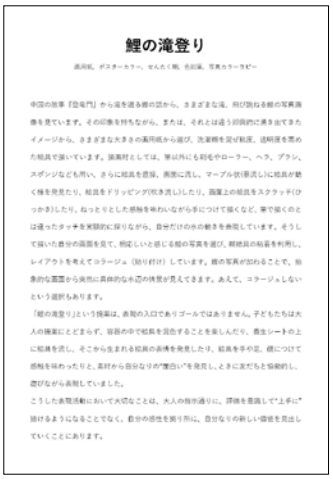
子どもたちとの造形活動と同じ素材を用意することもあれば、違う素材で制作することもある。制作後に、子どもたちが造形表現する動画を視聴する。自分の制作体験と照らして、表現する子どもたちの姿を見ることで、未熟な存在と思われていた乳幼児が、自分と遜色なく、いやそれ以上に鋭い感性を持ち、常識に囚われることなく、果敢に自分の可能性を切り拓いていく存在であることに気付かされるのである。

そして、制作体験と動画を視聴しての気付きをシェアし合い、この気付きを明日からの保育にどうつなげていくかを、クラス単位で対話しながら言葉にしていく。

（写真4）職員研修でのグループ対話の様子

（写真5）2018.5.21
5才児の作品と解説文と振り返り

（写真6）2017.1.30
職員研修の作品と対話の記録



（写真7）2019.5.29 解説文

7 保護者の理解

子どもたちの作品やその日の振り返りの記録（写真5）、職員研修の作品や記録（写真6）は、保護者に向けて園内に掲示されている。また、展示作品の解説文として、私が作成した、子どもたちの制作の様子とともに、こうした表現の意義を記した文章を掲示してもらっている（写真7）。

2018年5月、保護者の方から5才児の担任の先生に、以前あった季節や年中行事にまつわるような持ち帰りの作品がなくなったことを憂える声や、絵の描き方を教えてほしいという要望があった。その月の保護者会で園長先生から保護者の皆さんへ、園としての造形表現についての考え方が伝えられたが、子どもの就学を前にして、学校教育で評価されることへの不安があることが伺われたとのことであった。

そこで2019年6月、保護者の皆さんに、子どもたちと同じ感覚、完成を予想せず、今この時の自分の感覚に素直に反応しながら、直感と衝動を大切に、実験的に描く制作体験をしてもらい、その上で、私から、自発性を尊重した自由な造形表現活動（ここではアートと呼ばれている）が、子どもたちの育ちにおいてどのような意味があるのかを伝える場が設定された。以下、その研修会に参加された方々の感想（抜粋）である。

- 人生で初めて、思うままに表現したかもしれません。子どもたちの個性を潰さず、承認欲求を満たしてあげたいと思います。
- 形に囚われず、思いっきりクレヨンを使えて、こんな気持ちいいものかと楽しめました。怒ってばっかり（笑）の毎日から、子どもを信じられるように気持ちを切り替えていこうと思いました。
- つい「ダメ」と言ったり、規律に従わせようとしてしまいますが、認める大切さを感じました。
- 大人というだけで偉いわけでなく、子どもというだけで未熟なわけでもなく。自分の立場、居場所ってなんなのか分からなくなりがちですが、子どもも自分も認めていけたらいいなと思います。
- クレヨンの感触が久しぶりで夢中になってしまいました。子どもの気持ちのままに…というのは、大人の事情で難しいですが、その都度、今日のことを思い出して子育てしていきたいです。
- アートを通してほめ方ひとつとっても、大人の考えを押し付けてはいけないんだなと、親としてもとても勉強になりました。
- 実際にアートを行うということで緊張してきたのですが、「まずは1本の線から」という導入があり、こんなことを大切にという説明があったことで、リラックスすることができて、描きはじめると夢中になっていました。子どもたちもこんなふうに取り組んでいたんだなと思いました。
- 評価とは異なるコメントに「これでいいんだ」と自分で自分を認められるような感覚でした。子どもが大人になり、自分で選択して、社会の中で自分らしく生きていけることを目指して、今は“認める”ということを大切にしていきたいと思いました。
- 確かに子どものやること、考えることは、大人の事情を除くと、面白い、興味深いことが多く、そんなアイデア、活力を「面白いね」と伝えられるような余裕を持って

生活していけたらと思います。

- 夢中になって取り組んでいると、周囲から何を言われても耳に入らないことを実感し、子どもに無駄なことばかり、いつも自分が言っていることに改めて気付きました。
- ありのままの自分を認めてもらえるという原点の大切さはとても共感でき、まだまだお話のようなふるまいはできませんが、その思いをどこかで持ちながら子どもに接することはできるかなと思いました。

文面からは、保護者の皆さん自身が、これまで「形に囚われず」「夢中になって」「思うままに」造形表現した経験がなかったことがうかがわれる。それは、前述の私が関わってきた、美術に苦手意識を持つ多くの方たちと重なる。

そして、“自由な”制作体験を通して得た「自分で自分を認められる」実感の上に、子育てにおいて、子どものありのままを認めることの大切さに思い至らせている。

8 園長先生のメールから見る保育の変化

最後に、こうした子どもたちへの造形活動、その後の先生方との振り返り、職員研修、保護者への理解を促す園内掲示等を重ねていくことで、保育がどのように変わっていったのかを、保育が大きく変化した2016年後半から2017年度の園長先生のメール（表2）から見ていく。

メールの文面から改めて、日々、汗しながら、よりよい保育について真摯に考え続ける先生方の思いの中で、私自身もまた生かされていたことを思う。

造形活動での大人の介入、モノの使い方や量、時間の制限を極力、排したときに現れた子どもたちの姿から、子どもの育ちにおいて大切にすべきことはなにかを考えていったことが動因となり、2016年10月、園長先生は、それまでの大人が決めた日課や決まりごとの中で行う保育から、子どもがやりたいことを保障する保育への移行を決断する。そして、会議において、これまで園長として自分が言ってきたことと違う、「口や手を出さずに少し待って、子どもの姿を見る」ことを先生方に求めている。

2月には、それを実践する担任の先生が出てくる。そうして見えてきた子どもの姿から、これまでの自分たちの関わりを振り返っている。

年度末、職員間で新年度からの園内研修の内容を話し合うと、造形表現の研修を1回でなく複数回やりたいという声が上がる。先生方が、こうした試みを否定的に捉えていないことがうかがわれ、新年度の園としての方向性が3月末のキックオフミーティングで確認される。

2017年度に入ってからのメールでは、幼児の担任の先生の葛藤が読み取れる。これまでの「規制や否定の言葉」をなくそうとしたときに現れた、一見、無秩序とも思える子どもたちの行動に、口を出してしまうことを反省している。それに対し、園長先生は「その先」を見てみようと励ますが、園長先生自身も揺れ動いていることが分かる。けれど、数か月毎にある子どもの造形活動の振り返りや職員研修で大切なことを再確認しつつ、子どもを信じて関わり続ける。

その中で4月18日には、自発的な遊びと切れ目のない自由な造形表現の場が実現され、数日後には、造形表現に限らない「見たことのない新たな保育の様子」が見られはじめる。子どもたち一人ひとりが遊びたい場所、遊びたいことを選び、それに対応する先生たちの姿である。

（写真8）2017.4.18　鯉のぼり作りが色水遊びになる

（写真9）2017.4.18　最後まで掃除する5才児2人

その後、先生たちからは、“その先”の子どもたちの姿が肯定的に報告されるようになっていく。それを喜びながらも、園長先生は謙虚に保育を振り返り続けている。「大人が一方的に子どもを動かしたり」してしまう現実に目をそらすことなく。

そうして2月20日、3月12日には、第三者からも子どもの様子が変わったことが指摘されるようになる。

子どもたちの変化とともに、保護者の保育に対する満足度も上がっていく。子どもが朝、登園を嫌がらなくなったとの声が聞かれるようになり、行事毎の保護者アンケートでは、それまでの出来栄えを評価するコメントから、見た目の完成度よりも、子どもがどう取り組んだかに重きを置いたコメントが多くなっていった。

同時に保育者の離職率が大幅に下がっている。先生方の変化について園長先生はこう言う。「子どもたちの姿を肯定的に捉えていこうという思いで保育にあたることで、保育者自身もさまざまなことに縛られずに、ゆったりと保育に気持ちが向くようになった」と。

■ 表2　園長先生からのメール

年 度	月 日	園長先生からのメールの内容（抜粋）
2016	10.24	子どもが困らないため、自ら考えて行動できるようにという思いで日課を崩さず、遊びの先取りをしてきた…今まではそれが子どものため、と思ってやってきたが、なんとも大人の思いしか感じられないものと気づいてしまい、さぁこれからどうしていこう…
	10.25	職員会議で、私の迷い、これまで私が言ってきたことと、今、言っていることが違っていると感じるかもしれない、今まで子どもに関わっていたタイミングを、口や手を出さずに少し待って、子どもの姿を見てほしいと話しました。
	2.9	先日の職員研修で「やってみたい」と言っていた１歳児担任が、クラスで初めて絵具を使っていました。他の子どもの画用紙に描き始める子が出てきて、普段なら大人が声をかけてしまいそうな場面、でも描かれている子は気にもせず…また、子どもが「いい?」と常に大人に聞いてくるのは、いつも「それしない！」と大人が言っているからなんだろうなと話していました。
	3.25	新年度に向けてのキックオフミーティング。幼児担任は混乱の中にいました。大人の言うことを聞いて、キュッと型にはまった子どもを育てる保育には戻らないようにしようと確認し合いました。

2017	4.3	今日の帰り際、幼児担任が、いかに規制や否定の言葉を子どもにかけているか、余計なことを考えちゃうからなぁ（片付け大変、床が汚れちゃうなど）と言っておりました。もうこれは、大人が子どもを信じて言葉をのむことで、その先に見えてくる子どもの姿を見てみないと実感が持てないのかもしれません。
	4.17	私が保育を変えようとしていることで、現場が混乱しているのでは?! やはり規律と言う名のもと約束を決めて、保育を行なったほうがよいのだろうかと悩んでいましたが、今日の振り返りで、元には戻したくないと思いました。すぐに保育が変わるわけではありませんが、子どもたちに否定的に関わることがマイナスにしかならないことを担任たちと考えていきたい…
	4.18	昨日の振り返りで感じたことを幼児担任が実践しました。鯉のぼりを描く活動から、いつの間にかボディペインティングがはじまり、別な遊びとなっていきました。最後には年長の女子２人が自ら掃除しはじめ、「楽しい!」を連発しながら拭き、２時間たっぷり遊びました。今までなら「そこは行かないよ」「そこには塗らないよ」とたくさん声をかけてたなぁと担任。きっと今日も同じだったならば、子どもたちは２時間もあの場に留まらなかっただろうと思います。午睡は、いつも寝付けず大人から声をかけられる子なのですが、今日はすぐに眠りました。子どもの体と洋服洗いに私も久々の体力勝負でしたが、子どもも大人もいい顔だったので疲れも感じませんでした。少しずつではありますが、大人の関わりが変わってくれたらと思います。
	4.23	幼児は日課を見直し、外遊び、室内遊びという括りを外しはじめ、子どもたちが遊びたい所を決めて過ごす様にしました。そんな中、21日には私も見たことのない新たな保育の様子が見られました。子どもたちが園庭、テラス、室内と遊びたい場所で過ごすという光景は、今までにはなかったものです。
	6.7	今はまだ、１人ひとりの子どもを大切にと言いながらも、どこかで大人の思う通り動けたり、静かに出来る子どもをよしと思う職員もいる中で、少しずつですが、大人の大きなお世話が無くても大丈夫なんだと感じてくれる職員集団を目指したいと思います。保育の取り組みに大きな軌道修正を加えたからには、責任を持って進んでいく覚悟です。
	6.22	会議の中で、担任からいくつか嬉しい話がありました。今までは「これ作って」だったのが「一緒に作ろう」から「こんなの作りたいから〇〇が欲しい」に変わってきたとのことでした。先日、本部スタッフにも、４月の時より子どもも大人もいい顔していると言ってもらえました。私をはじめ職員たちも、本当にこれで大丈夫?と迷いながら進んできましたが、子どもの姿から少しずつですが、これで大丈夫という思いになってきました。
	9.7	子どもたちの姿に寄り添いながら、否定の言葉は減らしたいと保育を行なっているつもりですが、日々の中では、大人が一方的に子どもを動かしたり、子どもを叱る言葉が聞こえてきたり。まだまだ一人ひとりの子どもが「自分は大人に受けとめられているんだ」「これでいいんだ」とまでは思えていないであろう現実があります。
	10.8	全職員での中間反省。幼児に関わっている人たちからは、保育を変えたことで子どもたちが好きなことに夢中になれる、自分でつくりたいものを作り、技量も上がっているなどなど…。私のお願いしていることに戸惑いながらも実践し、そこから変わった子どもの姿を認めてくれていることに改めて感謝でした。
	2.20	巡回指導の臨床心理士の先生が子どもの様子を見て、落ち着いたことに驚いたのと同時に、子どもたちが部屋でも園庭でもとても楽しそうに遊んでいると言ってもらいました。
	3.12	言語療法士の先生が巡回指導にみえ、幼児の様子を見て「にぎやかだけど静か」「にぎやかだけどあったかい」、大人がうるさくないのがよいですね、珍しいですとおっしゃって下さいました。そこで、保育を変えたことを話したところ、静かで落ち着いた集団をつくろうとすると、子どもに歪みが出るとおっしゃっていました。まだまだ「これでよいのか?」という思いがありますが、こう言ってもらえたことに安堵の気持ちになりました。

子どもがやりたいことを保障する保育は、保育者にとって手間もかかり、大変なことも多い。小学校にいったら困るのではないかという不安もつきまとうのではないかと思う。子どもをコントロールできることが保育者の力量であり、なにかが上手にできるようになることが成長の指標とみる保育現場が少なくない中で、先生方がこれでいいのだろうかと悩み、葛藤してきたことは手に取るように分かる。私自身もまた、常に、そして今も同様に葛藤し続けている。そうした葛藤が、保育者としてのモチベーションを下げるものではなく、すでに子どもの内にある力を見出すことに、保育者としての喜びがあることを思う。

2018年度からは、乳児クラスでも、私が入っての造形活動を行い、乳児の担任の先生方と振り返りの時間を持ち、今年度は前述のように、保護者向けの研修の時間が持たれるなど、美術的な視点を持ち込むことによって、保育の質の向上を目指す取り組みは、今も継続されている。

9 おわりに

保育所保育指針の総則には「乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」、幼稚園教育要領の総則には「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として」とあり、幼児教育全体の前提として、「遊びを通して」子どもの育ちを支えることが明記されている。

その中で造形表現活動とは、モノに関わり、その形や色、質に心動かされ、そこに自分なりの面白みを見出していくことであり、描き、つくることと「遊び」に線引きはない。

けれど、保育園や幼稚園における造形活動は、保育者が指示、または、想定する以外の画材の使い方、例えば、提示された制作テーマから逸脱し、パレット上で色が混ざっていくことが面白くなり、紙に描くのではなく、絵具を混ぜること自体を楽しみはじめると「それは違うよね」「ただの遊びだよね」といった声掛けがなされることが多い。

造形に限らず、保育者の指示に従って、保育者に了解された遊び方で遊ぶことを子どもたちに求める園は決して少なくない。その中では、子どもたちは大人を窺い、どこまでやっていいのかを探りながら遊ぶ。果たして、大人に決められた中で遊ぶことが、子どもの育ちを十分に促す遊びになりえるのだろうか。そして、美術教育の観点で言えば、遊びの感覚なくして創造的な表現は生まれない。

これからの子どもたちに求められる力として、多様化する社会の中で唯一の正解ではなく、最適解を導く力、批判的思考を持ち、自分なりの考えを表明できる力、自分と違う考えを持つ他に共感し協調する力といったことが謳われる。そうした力は、自発的な遊び、創造的な表現活動を通して育まれるものであろう。

答えのない中で、私が感じ、考え、表現する、表現されたものを通して自分とまったく違う他に触れつつ、また感じ、考え…そうした表現のプロセスにおける主体としての経験、表現者としての経験が、今、教育において求められているのではないか。

ベネッセ大泉学園保育園の取り組みは、そうした教育を実現するための現実的な手立てとして、幼児教育の現場に美術的視点を持ち込むことの意義を明らかにするものではないかと考える。

講　評

【国語教育】　斎藤　孝（明治大学教授）

13件の応募があった。例年にも増して質量ともに充実していた。主体的・対話的な学びへの意識が浸透してきており、新学習指導要領の影響が感じられる。テキストに主体的に取り組む読解力の向上と、その読解を表現へとつなげていく連動性が複数の実践に見られた。国語教育の変革期に、モデルとなる実践を世に問う意欲を感じた。

【算数・数学教育】　秋山　仁（東京理科大学教授）

11件の応募があった。教科書の枠を超えて興味や関心を持たせるための取り組み、プログラミング教育やデジタル機材を使ったＩＣＴ（情報通信技術）教育の実践に向けた取り組みや考察など、内容は多岐にわたっていた。どれも先生方の創意と努力がみられたが、発展途中の取り組みが多かったように感じた。今後の進展に期待したい。

【理科教育】　滝川洋二（ＮＰＯ法人ガリレオ工房理事長）

応募は11件。これまで応募経験のある方や団体が多く、レベルが高かった。生徒や児童の探究的な活動をどのように支援するかという応募が特に多く、教育界の動きを反映していた。生徒や児童の自発性を大切にしながら指導する優れた実践は、今後、探究指導を目指す先生には大いに役立つだろう。

【社会科教育】　谷川彰英（筑波大学名誉教授）

今年の応募は10件と、最近３年間に比べて大きく減った。内容的には、大学における実践を除けば、地理、歴史、公民がそれぞれ３件とバランスがよく、力作がそろった。学校種別でも小学校、中学校、高校がそれぞれ３件となった。ただ、例年みられるような、最優秀賞に相当する実践はなかった。来年に期待したい。

【生活科・総合学習】　奈須正裕（上智大学教授）

幅広い層から創意に満ちた15件の実践が寄せられた。学習の対象や主題は多岐にわたった。子どもたちが学ぶ意義を深く実感し、学びを自己の生き方や将来の職業などにつなげられるよう、心を砕く報告が多かった。探究を通した科学と生活の実践的統合という生活科・総合学習の特質に迫る方向性である。さらなる発展を期待したい。

【健康・体力づくり】　田中喜代次（筑波大学名誉教授）

最近10年間で最多の８件の応募があった。「運動を通した体力づくり系」にも魅力的な報告は多かったが、食行動など生活習慣の重要性を子どもたちに理解・習得させる実践的活動が充実していた。特に、教師や生徒同士が支え合う「ピアサポート」による食育活動は、最優秀賞に値する優れた内容だった。

【外国語・異文化理解】　田近裕子（津田塾大学教授）

来年度から英語が５、６年生の正式教科になるためか、応募７件のうち、小学校が５件と多かった。ほとんどが言語としての英語と、異文化理解を関係づける試みだった。最優秀作品は、児童に考えさせ、英語を意味のある自然な文脈の中で使うことで学ばせる指導という点で優れていた。全国の先生方にぜひ取り組んでほしい内容だった。

【児童生徒指導】　河野義章（東京学芸大学名誉教授）

応募は８件。いじめや不登校のほか、世相を反映して、学校に苦情を持ち込む保護者への対応策を示す報告もあった。学級経営に教科や道徳の指導を絡めた報告は、今後の実践の方向を示唆していた。地道なカウンセリングで成果を上げている通信制高校の先生の報告は特に目を引く内容だった。

【カリキュラム・学校づくり】　佐藤　学（学習院大学特任教授）

応募は12件と例年よりやや少なめだが、学校改革の課題が出そろっていた。どの応募も質の高い実践報告だったが、革新性と独創性という点で見ると、秀逸な実践は４件ほどであった。子どもの学びの姿がもっと具体的に描かれる必要がある。受賞した二つの報告は、いずれも時流に流されない教師の識見を表現しており、優秀だった。

講　評

【地域社会教育活動】　佐藤一子（東京大学名誉教授）

応募は11件。息の長い重厚な実践報告が多く、感銘を受けた。深い信念と高い専門性も有していた。地域づくりをめざす学習実践が、創造的な広がりを見せている。立場や領域を超えて思いを結集し、協力関係を生み出す。そのための知恵と苦労、充実感が示されている。世代間交流の中で次世代が育つことも改めて意義づけられていた。

【ＮＩＥ】　小原友行（福山大学教授）

５件の応募にとどまったが、ＮＩＥの持つ新たな価値の創造に期待を抱かせる意欲的な作品もみられた。新学習指導要領を反映し、すべての作品で主体的で対話的な学びが重視されていた。また、防災・減災教育や命の教育（児童虐待、動物虐待）、食育、世界遺産教育など今日的な教育課題や時事問題を取り上げた報告が多かった。

【幼児教育・保育】　秋田喜代美（東京大学教授）

５件の応募があった。年間を通した当該地域ならではの文化的探究や、何年間も複数の園で検証されたプログラムの提案など、厚みのある報告が寄せられたことは評価できる。その中でも、子どもたちの具体的な姿の描写や、根拠となる保育者や保護者の声と支援を丁寧に記録した応募が特に優れており、受賞につながった。

【美術教育】　奥村高明（日本体育大学教授）

15件の応募があった。美術教育には、美術を様々な活動の根幹に位置づけ、新しい個人と社会を生み出す実践が求められる。すべての論文がこの水準に達していた。選考結果は、文字数や表現のあいまいさなど微妙な差異でしかない。最優秀賞の作品には、たった一人の取り組みで社会を変えることができるという可能性が感じられた。

■ 第68回読売教育賞部門別応募件数の内訳（カッコ内は前年度）

①国語教育……13　(6)
②算数・数学教育……11　(9)
③理科教育……11　(14)
④社会科教育……10　(18)
⑤生活科・総合学習……15　(20)
⑥健康・体力づくり……8　(3)
⑦外国語・異文化理解……7　(5)
⑧児童生徒指導……8　(7)
⑨カリキュラム・学校づくり……12　(15)
⑩地域社会教育活動……11　(22)
⑪ＮＩＥ……5　(13)
⑫幼児教育・保育……5（前年度は特別支援教育＝16）
⑬美術教育……15（前年度は音楽教育＝2）
応募総計……131（150）

第68回読売教育賞　優秀賞受賞者

【国語教育】

立命館守山中学校・高校（滋賀県）教諭

犬飼　龍馬

桐光学園中学校・高校（川崎市）講師

佐々木　洋子

【算数・数学教育】

愛知県立旭陵高校教諭

加藤　圭太

早稲田摂陵中学校・高校（大阪府）講師

塚平　恒雄

【理科教育】

成城学園初等学校（東京都）

理科研究部

【社会科教育】

愛知教育大学付属岡崎中学校（愛知県）教諭

伊倉　剛

東京都立荻窪高校教諭

相川　浩昭

【生活科・総合学習】

大阪市立新高小学校教諭

松井　香奈

宮城県立支援学校　小牛田高等学園教諭

佐光　克己

【健康・体力づくり】

愛知教育大学付属岡崎中学校　養護教諭兼保健主事

城所　美和

【外国語・異文化理解】

光塩女子学院初等科（東京都）教諭

茂木　俊浩

【児童生徒指導】

聖心女子学院初等科（東京都）教諭

森　勇介

【カリキュラム・学校づくり】

新潟県南魚沼市立上関小学校校長

青木　善治

【地域社会教育活動】

川越 igoまち倶楽部（埼玉県）常務理事・事務局長

斎藤　喜以子

網地島（あじしま）ふるさと楽好（がっこう）（宮城県）

【NIE】

大阪府東大阪市立孔舎衙（くさか）小学校教諭

楠井　征子

【幼児教育・保育】

一般社団法人
味の教室協会（京都市）

【美術教育】

筑波大学付属桐が丘特別支援学校（東京都）教諭

森田　亮

群馬美術教育研究所（群馬県）

読売教育賞 最優秀賞一覧
受賞者名簿

―第1回 昭和27年(1952) ～第67回 平成30年(2018)―

■　第１回　　1952 年（昭和 27 年）
〈小学校〉
千葉県館山市立北条小学校・校長　和泉　久雄
香川県仲多度郡筆岡小学校・校長　杉岡　茂
山口県下関市立本村小学校・校長　村田　幸一
〈中学校〉
秋田市立久保田中学校・教諭　小西　三治
福岡県築上郡椎田中学校・教諭　加来　孝義
〈高等学校〉
北海道立倶知安高等学校・教諭　桑原　義晴
島根県立松江産業高等学校・校長　鎌田　武
〈盲ろう学校〉
宮城県立盲学校長兼ろう学校・校長　赤木　将為

■　第２回　　1953 年（昭和 28 年）
〈道徳教育〉
山梨県甲府市立穴切小学校・校長　米山　圭蔵
〈社会科〉
大分県大分市立春日町小学校・校長　倉成　英敏
香川県香川大学附属坂出小学校・教諭　佐柳　正
神奈川県足柄上郡福沢小学校・校長　井上喜一郎
〈基礎能力〉
新潟県北魚沼郡広瀬村立中条小学校・校長　品田　文松
山口県美祢郡大嶺町立麦川小学校・校長　豊島　誠
秋田市立中通小学校・教諭　浅野　ヒナ
〈特殊教育〉
新潟市立舟栄中学校・教諭　中村　与吉
京都市立生祥小学校・教諭　熊谷　君子
愛知県立名古屋ろう学校・校長　今井　柳三
〈学校新聞〉
新潟県南蒲原郡鹿峠村立中浦小学校・教諭　磯野　修二

■　第３回　　1954 年（昭和 29 年）
〈作文教育〉
長野県上水内郡栄村栄小学校・教諭　大日方千秋
〈職業教育〉
愛知県碧南市立新川中学校・校長　神谷　義雄
〈へき地教育〉
新潟県仙田村立十日町高校定時制課程仙田分校・主任　保坂安太郎
〈理科教育〉
秋田県天王町立天王中学校・教諭　片岡太刀三
〈勤労青少年教育〉
島根県大原郡日登村立日登中学校・校長　加藤歓一郎
〈新聞教育〉
大阪府堺市立英彰小学校・教諭　岡本　園子
〈幼稚園教育〉
兵庫県明石市立播陽幼稚園・園長　内匠　ちゑ
〈特殊教育〉
東京都世田谷区立青島中学校・教諭　小杉　長平
山口県立ろう学校・校長　泉　吉美
長崎県北松浦郡佐々町立口石小学校・教諭　近藤　益雄

■　第４回　　1955 年（昭和 30 年）
〈現場教師の研修活動〉
山口県美祢郡秋芳町立嘉万小学校・代表　原川　馨
〈算数・数学教育〉
静岡県浜名郡庄内村立村櫛小学校・校長　山下百十二
滋賀県近江八幡市立八幡小学校・校長　坂口　完二
〈幼児教育〉
麗和幼稚園（埼玉県浦和市）・園長　中島　修
〈普通学級の遅進児指導〉
山梨県北都留郡上野原町立島田小学校・校長　塩野　隆洋
〈定時制教育〉
北海道立前田高等学校・教諭　行本　一雄
〈ＰＴＡ活動〉
三重県飯南郡大河内第二小学校ＰＴＡ・代表　三崎　邦次
〈健康教育〉
香川県小豆郡内海町立安田小学校・校長　久留島武保
〈教具の自作・改作・利用（授業研究）〉
新潟県三条市三条高等学校・教諭　有本　進作
兵庫県伊丹市教育委員会・指導主事　田辺　綱雄

■　第５回　　1956 年（昭和 31 年）
〈家庭科教育〉
新潟県南蒲原郡大面村立大面中学校・教諭　田中　トマ
〈学校と地域社会の共同活動〉
山口県徳山市立今宿小学校育英会・会長　清水　勇
〈遠足・修学旅行〉
埼玉県浦和市立大原中学校・教諭　荒幡　義輔
〈理科教育〉
新潟県南魚沼郡大和村立大崎中学校・校長　桑原　理助
埼玉県川越市立大東東小学校・教諭　相原　健一
〈視覚教育〉
秋田県大曲市立大曲小学校・校長　東海林和美
〈クラブ活動〉
新潟県柏崎市立第二中学校・校長　村山　貫一
〈定時制と技能者の養成〉
兵庫県立北兵庫高校定時制・主事　林　博夫

■　第６回　　1957 年（昭和 32 年）
〈学校図書館経営〉
千葉県香取郡栗源町立栗源小学校・校長　松本　玄
〈算数・数学教育〉
新潟県新潟市立万代小学校・校長　竹山洋一郎
〈美術教育〉
大阪府堺市立榎小学校・教諭　藤岡　静子
〈国語教育〉
徳島大学学芸学部附属中学校・教諭　福岡　八郎
〈外国語教育〉
秋田県雄勝郡羽後町立西馬音内中学校・教諭　岩佐　利克
〈学級経営〉
福島県信夫郡吾妻村立野田小学校・代表　内池　幸吉
〈進路指導〉
山梨県立甲府工業高校・校長　古屋　一雄
〈勤労青少年教育〉
広島県立神辺高校大津野分校・主任　木村　国夫

■　第７回　　1958 年（昭和 33 年）
〈小学校の算数・理科教育〉
宮城県栗原郡尾松小学校・代表　大宰　陸郎
〈ローマ字教育〉
秋田大学学芸学部附属小学校・教諭　斎藤千弥男
〈音楽教育〉
石川県七尾市立西湊小学校・代表　山崎　常雄
〈映画教育〉
福岡県久留米市立西国分小学校・教諭　市村　一夫
〈高校のクラブ活動〉
新潟県立中央高校・校長　島津　政雄
〈特殊教育〉
奈良県奈良市立鼓阪小学校・教諭　西村　幸治
福島市立福島第四中学校・教諭　中丸　良彦
〈定時制通信教育・技能者養成教育〉
兵庫県立佐用高校平福分校・主任　春名　一明
〈成人教育活動〉
埼玉県北埼玉郡騎西町立種足中学校・教諭　岡田　正明
大分県南海郡上野婦人学級・運営委員長　工藤　妙

■　第８回　　1959 年（昭和 34 年）

〈学校経営〉
千葉県香取郡笹川中学校・校長　柳沢　徹夫
〈道徳教育・生活指導〉
大阪市東成区玉津中学校・校長　直原　兵平
〈科学教育〉
愛媛県八幡浜市立大島中学校・教諭　乗松　尚
北海道立函館中部高校・教諭　渡辺　英郎
〈作文教育〉
新潟県佐渡郡金井小学校・教諭　吉原　清
〈作文教育〉
山口県大島郡久賀高校・教諭　岡田　貞義
〈工作教育〉
青森県中津軽郡相馬小学校藍内分校・教諭　小島　良蔵
〈体育教育〉
埼玉県秩父郡間明平中学校・校長　近藤八十夫
〈テレビ教育〉
新潟県東頸城郡松之山小学校・校長　関谷藤四郎
〈勤労青少年教育〉
香川県立琴平高校定時制・主事　三好　和夫
〈ＰＴＡ活動〉
福島県信夫郡湯野小学校・校長　今井　豊蔵

■　第 9 回　　1960 年（昭和 35 年）
〈学校経営〉
青森県佐井小学校川目分校・教諭　沢田半右衛門
〈道徳教育・生活指導〉
大分県大分市立滝尾小学校・教諭　二宮　重幸
〈科学技術教育〉
岡山県井原市立井原中学校・教諭　塩田　啓二
山口県長門市水産高校・教諭　黒子　三良
〈歴史教育〉
山梨県山梨市立加納岩中学校・教諭　石原　国光
〈読書指導〉
大阪府大阪市立滝川小学校・教頭　浜中　重信
〈複式教育〉
徳島県鳴門市立島田小学校室分校・教諭　西条　益夫
〈養護教育〉
兵庫県豊岡市立豊岡北中学校・教諭　藤本　晴雄
〈勤労青少年教育〉
新潟県両津市立東中学校・教諭　小野　良泰

■　第 10 回　　1961 年（昭和 36 年）
〈学校行事〉
静岡県庵原郡由比町立西小学校・代表（校長）　榛葉　弘
〈基礎学力〉
佐賀県佐賀郡春日小学校・代表（校長）　鶴田　辰次
新潟県東頸城郡下保倉小学校・校長　坂井　勝司
〈外国語教育〉
京都府京都市立九条中学校・教諭　山田　芳夫
〈校外生活指導〉
千葉県銚子市立明神小学校・代表（校長）　堀　竜之助
〈中・高校の理科教育〉
岐阜大学附属中学校・教諭　近藤　芳彦
福岡県立糸島高等学校・教諭　若宮　義次
〈クラブ活動〉
宮城県柴田郡村田町立沼辺中学校・教諭　庄司　正明
〈盲・ろう教育〉
福岡県立福岡ろう学校・教諭　今任　統夫
〈スポーツ指導〉
佐賀県立佐賀高等学校・教諭　野口　七郎
〈就職後の補導〉
宮城県栗原郡一迫中学校・教諭　菊地　義彦
〈高校の産学協同〉
北海道立岩見沢農業高校・教諭　清水　小十

■　第 11 回　　1962 年（昭和 37 年）
〈職員会議〉
新潟県新潟市立沼垂小学校・校長　松浦　雅公
〈小学校の社会科（とくに地理教育）〉
徳島県鳴門市立撫養小学校・教諭　河野　睦也
〈国語教育（とくに文法・表記の指導）〉
静岡県浜名郡北浜中学校・教諭　鈴木　波男
〈技術科教育〉
埼玉県熊谷市立大原中学校・教諭　佐藤　一司
福岡県八幡市立中央中学校・代表（校長）　豊田　喜祐
〈中学生の生活指導（とくに進学・非行児指導）〉
徳島県名東郡佐那河内中学校・校長　速水　清一
埼玉県浦和市立岸中学校・教諭　野村　英一
〈盲教育〉
東京教育大学附属盲学校・教諭　河合　久治
福井県立盲学校・教頭　今川　勇
〈農業高校の再編成〉
富山県立富山産業高校・校長　久世　幸治

■　第 12 回　　1963 年（昭和 38 年）
〈学校経営〉
長野県大町市立大町小学校・代表（校長）　松田　吉辰
〈社会科（とくに政治・経済・社会）〉
宮城県仙台市立東華中学校・教諭　白石　和巳
〈話しことばの指導〉
徳島県徳島市立富田小学校・教諭　宮崎記代江
〈科学教育〉
神奈川県足柄下郡理科教育研究会・代表　神保　憲朗
福岡県北九州市立荻ヶ丘小学校・教諭　生野　ヒサ
〈道徳教育〉
埼玉県熊谷市立荒川中学校・教頭　中村　邦夫
宮城県仙台市立北六番丁小学校・教諭　渡辺　健二
〈ホームルーム〉
徳島県立徳島商業高校・代表（校長）　森　孝三郎
〈進学指導〉
新潟県刈羽村立刈羽中学校・代表（校長）　小林　睦治
〈特殊教育〉
千葉県千葉市立蘇我中学校・教諭　大石　三郎
大分県大分市立新生養護学校・校長　髙橋　矩夫
〈定時制・通信教育〉
千葉県立千葉東高等学校・代表（校長）　石毛　貞雄
〈教育委員会〉
長野県教育委員会教学指導課・代表（課長）　太田　美明
島根県出雲市教育委員会・代表（教育長）　長岡　豊盛
〈成人教育活動〉
高知県室戸市立羽根中学校・教諭　吉本　珖

■　第 13 回　　1964 年（昭和 39 年）
〈小中学校の国語教育〉
千葉県山田町立八都小学校・代表（校長）　小林　邦治
〈高校の数学・理科教育〉
千葉県習志野市立習志野高校・代表（校長）　山口　久太
〈小中学校の道徳〉
新潟県出雲崎町立西越中学校・代表（校長）　安達　孝司
〈特別教育活動〉
山口県立柳井商工高校・代表（職業指導主事）　守政　輝雄
〈幼稚園教育〉
福岡県北九州市立小倉幼稚園・代表（園長）　黒木　道子
〈辺地教育〉
山形県東根市立東郷小学校入分校・教諭　柏倉　博
奈良県奈良市立田原小学校柚ノ川分校・教諭　大東　幸雄
〈教育委員会の活動〉
奈良県教育委員会指導課・代表（課長）　今西　宗一

〈教育研究所の活動〉
信濃教育会教育研究所・代表（所長） 上田　薫
新潟県立教育研究所・代表（所長） 小林　正直

■　第 14 回　　1965 年（昭和 40 年）
〈小中学校の作文教育〉
埼玉県川越市立大東西小学校・教諭 大橋　清一
〈小中学校の社会科教育〉
兵庫県小中学校郷土学習研究グループ・代表
（兵庫県三原郡緑町立広田中学校・校長） 野上　安郎
〈小中学校の理科教育〉
佐賀県佐賀市立鍋島小学校・代表（校長） 古賀　清次
奈良県五条市立阿太小学校・教頭 山口　裕文
〈小中学校の音楽教育〉
熊本県熊本市立白川小学校・教諭 松村きみ子
〈進路指導〉
徳島県立池田高等学校・代表（校長） 岩橋　昌
〈辺地教育〉
岐阜県馬瀬村立中切小学校川上分校・教諭 岩倉　昭雄
〈辺地教育〉
岐阜県馬瀬村立中切小学校川上分校・教諭 岩倉　縫子
秋田県矢島町立矢島小学校金ヶ沢分校・教諭 遠藤　昌夫
〈特殊教育〉
千葉市立院内小学校 言語治療教室・主任 大熊喜代松
〈定時制高校における学習指導〉
福岡県立門司高等学校・教諭 相川　秀和

■　第 15 回　　1966 年（昭和 41 年）
〈学級経営における能力別指導〉
富山県滑川市立北加積小学校・代表（校長） 井原　正則
〈小中学校の国語教育〉
静岡県新居町立新居小学校・代表（校長） 山下百十二
〈理科教育〉
岐阜県大垣市立宇留生小学校・代表（校長） 河合　正一
鳥取県米子市立弓ヶ浜中学校・教諭 岸岡　務
〈中高校の外国語教育〉
山梨県立甲府南高校・代表（校長） 日向　誉夫
〈工作〉
奈良県北葛城郡新庄町立新庄小学校・教諭 前田　馨
〈体育〉
愛知県丹羽郡大口町立大口北小学校・代表（校長） 奥村　久男
〈辺地教育〉
山形県朝日町立立木小学校木川分校・教諭 鈴木　基介
〈成人教育〉
愛媛県立松山工業高校定時制・主事 田井能喜三郎
〈教育研究所の活動〉
群馬県教育研究所・代表（所長） 佐野　金作
〈教育委員会の活動〉
大分市教育委員会・代表（教育長） 池見　喬

■　第 16 回　　1967 年（昭和 42 年）
〈学校経営〉
千葉県佐原市立佐原中学校・校長 本宮　源一
〈幼児教育〉
奈良県大和郡山市立郡山幼稚園・園長 花木　イソ
〈小中学校の算数・数学教育〉
鹿児島県立養護学校・教諭 高浜正海郎
〈中学校の歴史教育〉
静岡県田方郡韮山町立韮山中学校・教諭 斎藤　宏
〈小中学校の道徳教育〉
奈良県奈良市立鼓阪小学校・校長 奥西　徳義
〈学校給食の指導〉
神奈川県鎌倉市立御成小学校・校長 林　邦雄
〈安全教育〉
三重県伊勢市立修道小学校・校長 野呂　敏
〈辺地教育〉
鹿児島県大島郡十島村立中之島小日之出分校・教諭 芝　貞夫
鹿児島県大島郡十島村立中之島小日之出分校・教諭 芝　礼子
〈特殊教育（精薄児の指導）〉
北海道旭川市特殊学級担当者会・代表 橋本　勝朗
〈教育研究所の活動〉
新潟県新潟県市立教育研究所・所長 阿部　守衛
〈公民館の活動〉
北九州市教育委員会戸畑支所社会教育課（福岡県） 林　栄代

■　第 17 回　　1968 年（昭和 43 年）
〈学校経営〉
山梨県甲府市立南西中学校・校長 井上　英信
新潟県新発田市立第一中学校・校長 菅井　豊吉
〈中学高校の国語教育〉
香川県立観音寺第一高等学校・教諭 佐藤　寛志
〈小学校中学年の社会科教育〉
岐阜県洞戸村立洞戸小学校・教諭 角竹　弘
〈小中学校の理科教育〉
熊本県八代市立第一中学校・教諭 蓑田啓一郎
高知県高知市立初月小学校・教諭 中山　湧水
〈中学高校の外国語教育〉
福井県福井市立明道中学校・校長 林　繁樹
〈小中学校の道徳教育〉
茨城県日立市立大久保中学校・教諭 沢畑　登
〈安全教育〉
広島県賀茂郡西条町立西条中学校・校長 下崎　実
〈辺地教育〉
長崎県小値賀町立小値賀小学校六島分校・教諭 田中　竜美
〈身体障害児の教育〉
山梨県立盲学校・校長 飯島　五郎
〈進路指導〉
千葉県立千葉商業高等学校・校長 吉井　正男
〈ＰＴＡ活動〉
名古屋市立有松小学校ＰＴＡ・会長 水谷　善彦
〈教育委員会の活動〉
岐阜県加茂郡東白川村教育委員会・教育長 安江又右ヱ門

■　第 18 回　　1969 年（昭和 44 年）
〈小学校の算数教育〉
香川県観音寺市立南小学校・校長 長尾　茂
〈小中学校の理科教育〉
青森県八戸市立吹上小学校・校長 佐藤政五郎
〈中学高校の国語教育（特に読解指導）〉
兵庫県立福崎高等学校・教諭 福島　浩之
〈小中高校の芸術教育〉
秋田県大曲市立大川西根小学校・校長 鎌田　五郎
新潟県岩船郡山北町立下海府中学校・教諭 青木　繁
〈小中高校の保健体育〉
千葉県野田市立宮崎小学校・校長 平野　喜一
〈小中高校の道徳教育〉
大分県日田市立三芳小学校・校長 佐藤誠一郎
〈小中高校の特別教育活動〉
群馬県沼田市立蓮根中学校・校長 大川　善夫
〈辺地教育〉
香川県塩江町立塩江小学校樫川分校・主任 岡田　弘治
〈成人教育〉
黄十字学園（東京都台東区）・責任者 松永　健哉
福岡県山門郡大和町栄皿垣 大津　勇
〈教育研究所の活動〉
富山県福光町教育センター・所長 渡辺　諭吉

■　第 19 回　　1970 年（昭和 45 年）

〈小中学校のカリキュラム編成〉
千葉市立本町小学校・代表（校長） 山本　喜治
〈教育機器の利用（教育工学）〉
北海道亀田郡大野町立萩野中学校・校長 岡村　達
〈小学校の国語教育（特に読解または作文）〉
青森県八戸市立八戸小学校・校長 川村　義一
島根県松江市立乃木小学校・教諭 渡辺　郁子
〈中学高校の数学教育〉
宮城県仙台市立東華中学校・教諭 南　明子
〈高校の理科教育〉
埼玉県立秩父農工高等学校・教諭 福島　義一
〈小中高校の芸術教育〉
千葉県柏市立柏第一小学校・代表（校長） 富沢　定一
広島県東部図工美術教育連盟・代表 来山　武雄
〈中学高校の進路指導〉
島根県松江市立第四中学校・代表（校長） 田中　邦男
〈小中高校の国際理解の教育〉
埼玉県立戸田高等学校・教諭 小川　隆通
〈教育委員会の活動〉
青森県三戸郡三戸町教育委員会・教育長 松尾　禎吉
〈幼児教育〉
福岡県北九州市立中島幼稚園・園長 原田　寛子

■　第 20 回　　1971 年（昭和 46 年）
〈小中学校の国語教育〉
茨城県石岡市立府中小学校根当分校・教諭 田崎しづえ
〈算数・数学教育〉
熊本県山鹿市立山鹿小学校・教諭 瀬口　忠一
〈理科教育〉
東京都文京区立第九中学校・教諭 刈込　実
福岡県北九州市立米町小学校・代表（校長） 山本　桂一
〈社会科教育〉
香川大学教育学部附属坂出中学校・教諭 作花　典男
〈小中高校の芸術教育〉
千葉県長生郡一宮町立一宮小学校・代表（校長） 森　芳男
宮城県仙台市立西多賀小中学校療養所分校・代表（教頭） 半沢　健
〈小中高校の体育〉
秋田県南秋田郡昭和町立豊川小学校・代表（校長） 若松　研一
〈道徳教育〉
徳島県美馬郡半田町立半田小学校・教諭 佐藤　周子
〈公民館の活動〉
岡山県真庭郡新庄村公民館・館長 畔高　義正
〈高校の定時制通信制教育〉
新潟県立小出高校定時制・主事 後藤　三夫

■　第 21 回　　1972 年（昭和 47 年）
〈小中学校の文学教育〉
広島県世羅町立大田小学校・代表（校長） 山口　博人
〈小学校の算数教育〉
山形県西川町立入間小学校・代表（校長） 槇　清哉
〈理科教育〉
長野県松本市立旭町中学校・教諭 倉田　稔
兵庫県姫路市立城北小学校・教諭 城谷　義子
〈小中高校の社会科教育〉
青森県立弘前中央高校定時制・教諭 川口　光勇
〈小中高校の芸術教育〉
秋田県平鹿郡雄物川町立里見小学校・校長 能登谷　清
〈教育機器の導入と利用〉
愛媛県立今治工業高校・教諭 大内　信俊
〈辺地教育〉
石川県石川郡河内村立河内小学校・教諭 福岡　克美
〈成人教育活動〉
岐阜県郡上郡明方村立明方中学校・校長 金子　貞二
千葉県銚子市立若宮小学校ＰＴＡ・代表（会長） 常盤　豊司
〈盲ろう教育〉
東京都渋谷区立大向小学校・代表（教諭） 北原　貞治
〈幼児教育〉
島根県八束郡穴道町立穴道幼稚園・代表（教諭） 新田　旭子

■　第 22 回　　1973 年（昭和 48 年）
〈小中学校の国語教育〉
島根県簸川郡多伎町立岐久小学校・教諭 岸田千代子
徳島県小松島市立千代小学校・教諭 杉本　恒子
〈理科教育〉
岐阜県加茂郡七宗町立神淵小学校・教諭 渡辺　住夫
徳島県立池田高等学校・教諭 梅本　利広
〈情操教育〉
千葉県館山市立第二中学校・代表（校長） 星谷　悌二
〈過疎地教育〉
宮崎県西郷村立山瀬小学校長崎分校・代表（校長） 佐藤九州男
香川県丸亀市立手島小学校・代表（教諭） 福浜　一雄
〈特殊教育〉
宮城県仙台市立立町小学校・代表（校長） 伊藤　竜夫
山形県立山形聾学校・教諭 鏡隆左エ門
〈幼児教育（幼稚園・保育所）〉
大分県臼杵市立市浜幼稚園・園長 篠田美佐子

■　第 23 回　　1974 年（昭和 49 年）
〈小学校の国語〉
高知県吾川郡伊野町立伊野小学校・教諭 山脇　映子
〈小中高校の算数・数学教育〉
兵庫県姫路市立城陽小学校・教諭 高田クミ子
〈小中高校の理科教育〉
徳島県徳島市立高校・教諭 佐々木靖典
〈小中高校の社会科教育〉
広島県瀬戸田町立瀬戸田小学校・代表（校長） 伊藤　準蔵
〈小中高校の音楽教育〉
山形県立山形西高校・代表（校長） 笠原　二郎
〈幼児教育（幼稚園・保育所）〉
しらかば保育園（神奈川県横須賀市）・園長 浜田　幸生
ルーテル愛児幼稚園（秋田市）・代表（園長） 片桐　格
〈肢体不自由児教育〉
千葉県立桜が丘養護学校・教諭 斎藤　皓子
佐賀県立金立養護学校・教諭 米光　光子
〈成人教育活動〉
奈良県榛原町教育委員会・代表（社会教育課長） 梶野　雄介
〈教育委員会の活動〉
徳島県那賀郡木頭村教育委員会・代表（教育長） 走川　輝一
奈良県教育委員会・代表（教育放送課係長） 大西　照雄

■　第 24 回　　1975 年（昭和 50 年）
〈小中学校の国語教育〉
福島県いわき市立錦小学校・教諭 佐々木義勝
〈小中高校の算数・数学教育〉
宮崎県東臼杵郡西郷村立山瀬小学校長崎分校・教諭 斎藤　敬亮
〈小中学校の理科教育〉
長野県伊那市立伊那中学校・教諭 征矢　哲雄
〈道徳教育〉
千葉県旭市立第一中学校・代表（校長） 江ヶ崎貞雄
〈美術教育〉
岩手県釜石市立八雲小学校・代表（校長） 畠山　理助
〈幼児教育（幼稚園・保育所）〉
山形県立山形盲学校・代表（校長） 鈴木　栄助
〈肢体不自由児教育〉
千葉県千葉市立松ヶ丘小学校・教諭 山本　朋江
〈成人教育活動〉
京のおんな大学・主宰 冨士谷あつ子

■　第 25 回　　1976 年（昭和 51 年）
〈小中学校の国語教育〉
千葉県銚子市立興野小学校･代表（校長）堀　竜之助
徳島県徳島市立加茂名小学校・教諭　以西　久代
〈小中高校の算数・数学教育〉
群馬県渋川市立西小学校・教諭　小林巳喜夫
〈小中学校の理科教育〉
栃木県宇都宮市立清原中学校・教諭　小筆恵美子
千葉県夷隅郡大多喜町立上瀑小学校･代表（校長）大岩冨士雄
〈小中高校の社会科教育〉
神奈川県平塚市立港小学校･代表（教諭）小室　修二
〈小中高校の保健室活動〉
福井県大野市立下庄小学校・養護教諭　金森　恭子
埼玉県大宮市立東大成小学校・養護教諭　桜井すゞ代
〈進学問題にどう対処したか〉
栃木県立鹿沼高等学校・教諭　小谷野力勇
青森県八戸市立第一中学校・校長　松村　剛
〈在学青少年の学校外教育活動〉
佐賀県佐賀郡東与賀町立東与賀中学校･代表（前校長）納富　兼次
〈幼児教育（幼稚園・保育所）〉
誠信幼稚園（広島県福山市）･代表（教諭）檀上　順子

■　第 26 回　　1977 年（昭和 52 年）
〈小中高校の国語教育〉
山口県光市立室積小学校･代表（校長）藤山　敏見
岩手県立杜陵高校・教諭　松浦　好
〈小中高校の算数・数学教育〉
滋賀県甲賀郡甲西町立岩根小学校・教諭　佐川　愛子
〈中高校の理科教育〉
大分県立中津北高校・教諭　安倍　慎
〈小中高校の保健室活動〉
長崎県立長崎東高校・養護教諭　高原　二三
〈小中高校の情操教育〉
熊本県熊本市立西原小学校・教諭　武藤　哲雄
〈障害児教育〉
茨城県日立市立大久保小学校
「ことばの教室」・代表（教諭）丸山　勝雄
〈過疎地教育〉
新潟県中魚沼郡津南町立中津峡小学校･代表（校長）庭野　忠男
〈幼児教育（幼稚園・保育所）〉
鳥取県倉吉市立上井第一保育園･代表（主任保母）石賀サチ子
〈教育研究所の活動〉
北海道教育研究所連盟･代表（委員長）斎藤　実

■　第 27 回　　1978 年（昭和 53 年）
〈小中高校の国語教育〉
滋賀大学教育学部附属小学校・教諭　吉永　幸司
〈小中高校の算数・数学教育〉
大分県別府市立鶴見小学校・教諭　松島桂太郎
〈小中高校の理科教育〉
栃木県立宇都宮高校・教諭　篠原　尚文
〈小中高校の社会科教育〉
北九州市教育委員会たしろ少年自然の家（福岡県）・指導主事　池田　正光
〈道徳教育〉
福島県いわき市小学校教育研究会
道徳教育研究部・代表（部長）根本　篤
宮城県亘理町立亘理中学校・教諭　斎藤　公隆
〈小中高校の生活指導〉
篠ノ井旭高等学校（長野県長野市）･代表（校長）若林　繁太
〈障害児教育〉
徳島県立聾学校幼稚部･代表（主事）安川　宏
神戸市小学校教育研究会
心身障害児教育研究部･代表（部長）溝下　宏
〈幼児教育〉
奈良県田原本町立南幼稚園･代表（園長）片岡　良一

■　第 28 回　　1979 年（昭和 54 年）
〈国語教育〉
徳島県立城北高校・教諭　佐野　泰臣
〈算数・数学教育〉
山口県光市立室積小学校・教諭　原田　慶子
〈理科教育〉
埼玉県秩父郡大滝村立上中尾小学校･代表（校長）新井　肇司
青森県立青森高等学校・教諭　石戸　励
〈社会科教育〉
千葉県東金市立城西小学校･代表（校長）加瀬　国雄
〈情操教育〉
栃木県真岡市立中村中学校･代表（校長）榎戸　隆夫
東京都足立区立寺地小学校・教諭　江藤　勝久
〈障害児教育〉
京都府立与謝の海養護学校・校長　青木　嗣夫
〈幼児教育〉
秋田県南秋田郡飯田川町立若竹幼児
教育センター・飯田川保育園長　石川　郁子
〈社会教育活動〉
群馬県邑楽郡明和村立明和西小学校･PTA 前会長　渡辺　茂
〈教育研究所の活動〉
新潟県地区理科教育センター研究協議会･会長　風巻　友重

■　第 29 回　　1980 年（昭和 55 年）
〈小中学校の国語教育〉
福井県坂井郡丸岡町立平章小学校・教諭　松本千代子
〈算数・数学教育〉
静岡県浜松市立北小学校・教諭　高橋　莞爾
〈理科教育〉
新潟県立新潟盲学校・教諭　金安　健一
〈情操教育〉
茨城県新治郡桜村立桜中学校・教諭　飯野五十吉
〈障害児教育〉
佐賀県立金立養護学校養訓部･代表（教諭）重松　康雄
〈幼児教育〉
岐阜県瑞浪市立瑞浪幼稚園･代表（園長）尾石　安正
学校法人高千穂学園高千穂幼稚園（東京都）･園長　久野登久子
〈学校の指導・運営〉
鳥取県鳥取市立美保小学校･代表（校長）木下　政雄
〈社会教育活動〉
千葉市婦人大学セミナー・代表　国吉　君子

■　第 30 回　　1981 年（昭和 56 年）
〈国語教育〉
東京都立足立西高等学校・教諭　清水　和夫
〈算数・数学教育〉
福島県立二本松工業高校数学科･代表（教諭）本間　正幸
〈理科教育〉
千葉市立北貝塚小学校･代表（校長）小山　天祐
〈社会科教育〉
千葉市立千城台南中学校・教諭　安藤　一郎
千葉市立千城台南中学校・教諭　本保　弘文
〈言語教育〉
東京都目黒区立東山小学校･代表（校長）榊原　烋一
〈障害児教育〉
大分県立別府養護学校・教諭　宇都宮鏡子
〈児童生徒指導・情操教育〉
広島県尾道市立長江中学校・教諭　八ッ塚　実
〈学校の指導・運営〉
東京都文京区立湯島小学校･代表（前校長）小沢恒三郎
〈社会教育活動〉

広島市立安西小学校ＰＴＡ会長　沖　繁
〈教育活動・教育政策の研究・実践〉
静岡県清水市教育委員会･代表（教育長）油井　猛治
栃木県宇都宮市立雀宮中学校・教諭　長岡　孝之
栃木県宇都宮市立姿川中学校・教諭　綱川　浄

■　第 31 回　　1982 年（昭和 57 年）
〈国語教育〉
清心女子高校（岡山県倉敷市）・教諭　光元　聡江
〈算数・数学教育〉
宮城県仙台市立南小泉中学校・教諭　久道　登
〈理科教育〉
関の自然を調べる会・代表
（岐阜県関市立下有知小学校校長）山口常二郎
〈社会科教育〉
長野県北佐久郡軽井沢町立軽井沢東部小学校・教諭　小林　秀夫
〈障害児教育〉
長崎県立長崎養護学校･代表（校長）内堀　勝見
〈児童生徒指導〉
千葉県夷隅郡岬町立岬中学校･代表（校長）菰田潤七郎
〈幼児教育〉
兵庫県姫路市立めぐみ保育所・所長　森川　紅
〈学校の指導・運営〉
愛知県西尾市立室場小学校･代表（校長）高須音次郎
〈教育活動・教育施策の研究・実践〉
千葉県立千葉商業高校･代表（校長）久保田一麿

■　第 32 回　　1983 年（昭和 58 年）
〈国語教育〉
千葉県富津市立吉野小学校･代表（教諭）渡辺　さわ
〈算数・数学教育〉
東京都世田谷区立松原小学校･代表（教諭）坪田　耕三
〈理科教育〉
長崎県北松浦郡小値賀町立小値賀中学校・教頭　真鍋　信義
〈社会科教育〉
千葉県夷隅郡岬町立長者小学校･代表（校長）田中　益男
〈障害児教育〉
社会福祉法人「しいのみ学園」（福岡市）・園長　舜地　三郎
〈児童生徒指導〉
山口県美祢市立伊佐中学校･代表（校長）原田　卓雄
〈幼児の教育〉
横浜市教育センター 幼児教育センター・所長　白石　伸子
神奈川県横浜市立小菅ヶ谷小学校・教諭　堀井　巳恵子
〈学校の指導・運営〉
新潟県新発田市立外ヶ輪小学校･代表（校長）大滝　末次
〈社会教育活動〉
福岡県子供会研修隊連絡協議会・会長　宗村　道生

■　第 33 回　　1984 年（昭和 59 年）
〈国語教育〉
福岡県八女郡黒木町立枝折小学校・代表（校長）栗山シヅカ
宮城県栗原郡若柳町立畑岡小学校・教諭　吉田よし子
〈理科教育〉
富山県富山市立八人町小学校･代表（校長）水野　平
〈社会科教育〉
千葉県船橋市立高郷小学校・教諭　斎藤　武也
〈障害児教育〉
千葉市立検見川小学校まきのこ学級･代表（教諭）金沢　義広
千葉市立検見川小学校まきのこ学級･代表（教諭）奥村　兼弘
〈児童生徒指導〉
新潟県南魚沼郡六日町立六日町
中学校58年度第三学年部･代表（教諭）田村　賢一
千葉市立更科小学校・教諭　福田　節子
〈社会教育活動〉
大阪市立こども文化センター
「こども詩の会」･代表（神戸女子大教授）足立　巻一
〈学校の指導・運営〉
東京都荒川区立日暮里中学校･代表（教諭）桐山　京子
〈教育活動・教育施策の研究・実施〉
広島県工業教育検討グループ・代表
（広島県立広島工業高校校長）松前　実

■　第 34 回　　1985 年（昭和 60 年）
〈小中学校の国語教育〉
福島県郡山市立大島小学校･代表（元校長）星　幸雄
千葉県茂原市立茂原中学校・元教諭　渡辺　昇子
〈算数・数学教育〉
長崎県平戸市立獅子小学校･代表（校長）真辺　静男
〈理科教育〉
東京都大田区立嶺町小学校・教諭　中馬　民子
〈社会科教育〉
島根県松江市立白潟小学校・教諭　森　泰
〈障害児教育〉
東京都立足立養護学校中学部･代表（教諭）脇坂　順雄
〈児童生徒指導〉
奈良県王寺町立王寺小学校・教諭　池島　徳大
〈情操教育〉
埼玉県大宮市立指扇小学校・教諭　高橋　昭子
〈社会教育活動〉
大月市社会教育委員（山梨県）・元委員長　山口　英夫
〈教育活動・教育施策の研究・実践〉
静岡県立静岡工業高校（定時制）・教諭　小堀　一郎

■　第 35 回　　1986 年（昭和 61 年）
〈国語教育〉
愛知県名古屋市立南光中学校・教諭　吉村　勇善
〈算数・数学教育〉
長崎県郷ノ浦町立初山小学校
算数科学習指導研究会･代表（校長）末永　正幸
〈理科教育〉
東京都大田区立入新井第一小学校・教諭　三石　光子
埼玉県都幾川村立都幾川中学校・教諭　酒井　克
〈社会科教育〉
福岡県北九州市立永犬丸西小学校・教諭　青柳　睦
〈学校体育〉
千葉県大多喜町立西畑小学校･代表（校長）渡辺　五郎
〈障害児教育〉
東京都立石神井ろう学校･代表（元教諭）小川美佐子
〈児童生徒指導〉
千葉工商高校（千葉市）・教諭　林　芳隆
〈学校の指導・運営〉
神奈川県川崎市立高津中学校･代表（教諭（応募時））馬場　英顕
〈社会教育活動〉
川崎市青生こども文化センター企画会議委員　十文字美恵

■　第 36 回　　1987 年（昭和 62 年）
〈国語教育〉
青森県八戸市立根城中学校・教諭　橋本　ヤス
〈算数・数学の教育〉
山口県立南陽工業高等学校・教諭　竹本　芳朗
〈社会科教育〉
新潟県長岡市立南中学校・教諭　小森ケン子
〈学校体育〉
岐阜県岐南町立東小学校･代表（校長）吉田　豊一
〈障害児教育〉
福岡県北九州市立八幡西養護学校・教諭　原　敏夫
〈学校の指導・運営〉
新潟県立新発田南高等学校・教諭　田中　洋一

昭和女子大学附属昭和小学校（東京都）・代表（教頭）　巳波　瑠美
〈教育委員会・教育研究所の調査研究活動〉
群馬県松井田町教育委員会・代表（教育長）　小板橋文夫

■　第 37 回　　1988 年（昭和 63 年）
〈国語教育〉
東京学芸大学附属世田谷中学校・教諭　高橋　俊三
〈理科教育〉
岡山県立玉野高等学校・教諭　宮崎　武史
福島県立福島女子高等学校・教諭　菅野　幸雄
〈児童・生徒指導〉
栃木県大田原市立大田原小学校・教諭　加藤　治朗
〈幼児の保育〉
東京都千代田区立錦華幼稚園・教諭　原田　愛子
〈障害児教育〉
秋田県立秋田養護学校・養護教諭　中村　幸子
〈学校の指導・運営〉
群馬県上野村立上野中学校・代表（教務主任）　大島　道男
山形学院高等学校「小さな親切の会」
（山形県）・代表（顧問）　堤　幹夫
〈社会教育活動〉
若人の集い実行委員会（北海道八雲町）・代表（委員長）　高木　一哉
〈教育委員会・教育研究所の調査研究活動〉
千葉県柏市教育委員会・代表（教育長）　古谷　武雄

■　第 38 回　　1989 年（昭和 64 年／平成元年）
〈国語教育〉
島根県桜江町立川越小学校・教諭　山田　澄子
〈算数・数学教育〉
岩手県一戸町立小鳥谷中学校・代表（校長）　野里　　広
〈理科教育〉
広島県世羅町立西大田小学校・代表（校長）　井上　右三
〈社会科教育〉
神奈川県川崎市立向丘中学校・教諭　永島　正雄
〈障害児教育〉
東京都練馬区立旭丘中学校・教諭　永野　佑子
〈学校の指導・運営〉
福岡県北九州市立山の口小学校・校長　和田　啓子
徳島県那賀川町立那賀川中学校・代表（校長）　稲飯　　章
〈社会教育活動〉
山梨県ボランティア協会・代表（事務局次長）　岡　　尚志
東京都世田谷区「自然の教室」・主宰　秋山　元冶
〈教育委員会・教育研究所の調査研究活動〉
栃木県足利市教育委員会・前教育長　中村　　章

■　第 39 回　　1990 年（平成 2 年）
〈国語教育〉
静岡県立藤枝北高等学校・教諭　田中　宏和
〈理科教育〉
愛知県名古屋市立猪子石小学校・教諭　中野　光孝
工学院大学高等学校（東京都八王子市）・教諭　後藤　道夫
〈社会科教育〉
三重県伊勢市立東大淀小学校・代表（教頭）　塩崎　勝彦
〈幼児の教育〉
長野県保育専門指導員　宮崎　　清
〈障害児教育〉
「直方に小規模通園施設をつくる会」
（福岡県直方市）・代表（会長）　中島　康男
〈学校の指導・運営〉
福岡県北九州市立曾根中学校・校長　品川　洋子
宮城県栗原郡築館町立築館中学校・代表（教諭）　鈴木　信勇
〈社会教育活動〉
東京都多摩市立北豊ケ丘小学校
ゆりの木会課外活動委員会・代表　早川たか子
少年少女文化財教室（大阪府箕面市）・代表（主宰）　辻尾　栄市

■　第 40 回　　1991 年（平成 3 年）
〈国語教育〉
茨城県阿見町立竹来中学校・教諭　中根　瑛子
〈算数・数学教育〉
山口県岩国市立通津小学校・代表（校長）　藤田　梅二
〈社会科教育〉
東京都荒川区立第二日暮里小学校・教頭　望月　公子
〈外国語教育〉
東京都豊島区立朝日中学校・校長　石川　英子
〈児童・生徒指導〉
盈進高等学校（広島県）・代表（教頭）　杉原　耕治
〈幼児の教育〉
東京都中央区立京橋朝海幼稚園・教諭　宇井　靖子
〈障害児教育〉
鳥取県立白兎養護学校・代表（校長）　徳永　好三
〈学校の指導・運営〉
静岡県静岡市立安東小学校・代表（校長）　山本　良苗
〈社会教育活動〉
広島県広島市中央公民館・代表（館長）　松原　明二
〈教育委員会・教育研究所等の調査研究活動〉
新潟県中学校教育研究会・代表（会長）　梅山　郁雄

■　第 41 回　　1992 年（平成 4 年）
〈国語教育〉
青森県立五戸高等学校・教諭　川上　信子
〈算数・数学教育〉
愛知県知立市立知立中学校・教諭　三浦　祥志
〈理科教育〉
山口県防府市立牟礼小学校・校長　城　　成治
福島理科の会・代表（会長）　大室　幹男
〈社会科教育〉
岐阜県美濃加茂市立山手小学校・代表（校長）　渡辺　　均
〈外国語教育〉
福井県立武生東高等学校国際科・代表（教諭）　内田　勝夫
〈体育の教育〉
山口県阿武町教育委員会・派遣社会教育主事　新川　美水
〈障害児教育〉
ダウン症児の早期療育を進める会「ひまわりの会」・代表　岡部　伊子
〈児童・生徒指導〉
長野県中野市立高社中学校・元校長　竹内　隆夫
〈学校の指導・運営〉
茨城県石岡市立関川小学校・代表（校長）　入澤　　薫
〈社会教育活動〉
岩手県三陸町立甫嶺小学校・代表（校長）　高橋　　淳

■　第 42 回　　1993 年（平成 5 年）
〈国語教育〉
神奈川県藤沢市立滝の沢小学校・教諭　阿部　直久
群馬県桐生市立東中学校・教諭　四分一　勝
〈算数・数学教育〉
山形算数・数学評価研究会・代表（会長）　山本　正明
〈社会科教育〉
東京都立秋留台高等学校・教諭　村野　光則
〈体育の教育〉
神奈川県藤沢市立小学校体育研究会　南　　英毅
〈幼児の教育〉
静岡県磐田市立東部小学校附属
南御厨幼稚園・代表（副主任）　角皆　恵子
〈障害児教育〉
愛知県名古屋市立平田小学校・非常勤講師　堀田喜久男
〈学校の指導・運営〉
山口県美祢市立重安小学校・教諭　井上　葉子

東京都北区立北中学校内不登校児童
生徒訪問指導室・嘱託員　島田　葉子
〈社会教育活動〉
群馬県生涯学習センター・代表（館長）　千吉良　覺

■　第 43 回　　1994 年（平成 6 年）
〈国語教育〉
奈良県立添上高等学校・教諭　矢尾　米一
〈算数・数学教育〉
千葉県立船橋豊富高等学校数学科・代表　滝沢　洋
〈理科教育〉
栃木県宇都宮市立若松原中学校・教諭　南木　義男
〈社会科教育〉
千葉県市川市立第八中学校・教諭　竹澤　伸一
〈生活科の指導〉
東京都江戸川区立大杉東小学校・教諭　宮原千香子
〈体育の教育〉
静岡県浜北市立新原小学校・代表（校長）　大石　修司
〈外国語教育〉
財団法人津田塾会 津田英語会・講師　股野　儷子
〈児童生徒指導〉
神奈川県大磯町立大磯中学校・代表　吉田　文彰
〈障害児教育〉
東京都立墨東養護学校・教諭　渡辺美佐子
〈社会教育活動〉
川崎市ふれあい館（神奈川県）・代表（館長）　裵　重度
岐阜県高山市農業委員　谷口いわお
〈学校の指導・運営〉
佐久島の教育を育てる会・代表　安井　克彦

■　第 44 回　　1995 年（平成 7 年）
〈国語教育〉
兵庫県神戸市立湊小学校・教諭　鹿島　和夫
大阪教育大学附属平野中学校・教諭　辻井　義彦
〈算数・数学教育〉
東京都大田区立道塚小学校・教諭　横山美登里
〈理科教育〉
千葉県立船橋高等学校
リニアモーターカー同好会・代表（教諭）　大山　光晴
〈社会科教育〉
埼玉県飯能市立飯能第一中学校・教諭　福田　英樹
〈生活科の教育〉
三重県四日市市立常磐西小学校・教諭　宮沢知可子
〈体育の教育〉
福島県大信村立信夫第一小学校・代表（校長）　鈴木　紳一
〈児童生徒指導〉
長野県佐久市立中込小学校・前校長　木内　保敬
〈学校の指導・運営〉
広島県深安郡神辺町立神辺小学校・教諭　妹尾　敬士
〈障害児教育〉
東京都立小金井養護学校・前教頭　前迫美知子

■　第 45 回　　1996 年（平成 8 年）
〈国語教育〉
盈進中学校（広島県）・代表（校長）　杉原　耕治
〈算数・数学教育〉
広島県福山市算数教育研究会・代表　紺谷　光男
〈理科教育〉
富山県立大門高等学校 理科部・代表（教諭）　藤井　修二
〈社会科教育〉
東京都目黒区立田道小学校・教諭　望月みどり
〈外国語教育〉
茨城県十王町立十王中学校・教諭　大内　富夫
〈学校の指導・運営〉
神奈川県川崎市立南菅中学校・校長　芳野　菊子
千葉県八千代市立米本南小学校・代表（校長）　田中　強
〈地域社会教育活動〉
茨城県総和町立西牛谷小学校・元ＰＴＡ会長　長浜　音一
〈教育カウンセリング〉
大阪府立松原高等学校・教諭　佐谷　力
東京都八王子市立第一中学校・委嘱スクールカウンセラー　黒沢　幸子

■　第 46 回　　1997 年（平成 9 年）
〈算数・数学教育〉
川崎市立中学校数学科図形教育研究チーム・代表（校長）　馬場　英顕
〈理科教育〉
福岡県北九州市立鴨生田小学校・代表（校長）　小山田鈴子
〈社会科教育〉
愛知県下山村立下山中学校・教諭　川合　英彦
〈生活科・総合学習〉
兵庫県教育委員会阪神教育事務所・指導主事　松田　智子
〈体育の教育〉
神奈川県横浜市立南小学校・代表（校長）　安武　寿雄
〈外国語教育〉
白百合学園中学高等学校（東京都）・教諭　桑原　雅乃
〈児童生徒指導〉
高知市立高知商業高等学校・教諭　岡﨑　伸二
埼玉県川越市立寺尾中学校・教諭　山崎　祐一
〈学校の指導・運営〉
千葉県立君津農林高等学校・教諭　宗政　恒興
〈地域社会教育活動〉
千葉県習志野市立秋津小学校・代表（校長）　宮崎　稔
〈障害児教育〉
京都市立新道小学校弱視教室・代表（教諭）　中東　朋子

■　第 47 回　　1998 年（平成 10 年）
〈国語教育〉
大阪府立清水谷高等学校・教諭　清水　直樹
〈理科教育〉
福島県伊達町立伊達中学校・講師　菅野　サチ
〈社会科教育〉
愛知県豊田市立梅坪小学校・教諭　外山記代子
〈生活科・総合学習〉
愛知県蒲郡市立形原中学校・教諭　島内三都子
〈体育の教育〉
山口県防府市立新田小学校・教諭　水野　昭
〈外国語教育〉
愛知県西尾市立花ノ木小学校・代表（教諭）　高橋　正治
〈児童生徒指導〉
岡山県笠岡市立新吉中学校・教諭　池本　文子
〈幼児教育・保育〉
東京都千代田区立和泉幼稚園・園長　佐瀬スミ子
〈学校の指導・運営〉
兵庫県立鈴蘭台高等学校・教諭　青島　成夫
〈地域社会教育活動〉
千葉県松戸自主夜間中学・代表　藤田　恭平
愛知県立港養護学校・教諭　高村　豊

■　第 48 回　　1999 年（平成 11 年）
〈国語教育〉
京北中学校（東京都）・教頭　川合　正
共立女子第二中学・高校（東京都）・教諭　渡辺久仁子
秋田県立能代北高校・教諭　貝田　桃子
〈算数・数学教育〉
お茶の水女子大学附属高校（東京都）　室岡　和彦
〈理科教育〉
滋賀県安土町立老蘇小学校・教諭　西川　伸一
〈生活科・総合学習〉

愛知県碧南市立中央中学校・教諭　金子てる子
〈体育の教育〉
奈良県大和高田市立高田小学校・教諭　西川　潔
〈外国語教育〉
常葉学園高校（静岡県）・教諭　永倉　由里
〈児童生徒指導〉
大阪府立門真西高校・教諭　佐藤　功
〈教育カウンセリング〉
よりよい子供の育ちを考える会・代表　市川　紀史
〈学校の指導・運営〉
愛知県名古屋市立西陵商業高校・教諭　影戸　誠
新潟県十日町市立飛渡第一小学校・代表（校長）　根津敬一郎
〈地域社会教育活動〉
庄内地域づくりと子育て・文化協同の会・代表　塩野　俊治
〈障害児教育〉
障害児基礎教育研究会・代表　水口　浚

■　第 49 回　　2000 年（平成 12 年）
〈国語教育〉
東京都品川区立立会小学校・代表（校長）　長谷川清之
〈理科教育〉
上越教育大学附属中学校（新潟県）・教諭　熊木　徹
〈社会科教育〉
三重県四日市市立日永小学校・教諭　伊藤　浄二
〈生活科・総合学習〉
横浜市教育センター（神奈川県）・専任研究員　鷲山龍太郎
愛知県岡崎市立六ツ美北部小学校・教諭　都築真美子
〈体育の教育〉
徳島県阿南市立橘小学校・教諭　小笠　明寛
〈児童生徒指導〉
福島県立石川高等学校・教諭　庄司　一幸
〈学校の指導・運営〉
宮城県北上町立相川小学校・校長　菅原　義一
長野県塩尻市立片丘小学校・校長　手塚　恒人
〈地域社会教育活動〉
愛知県岡崎市立秦梨小学校父母教師会・代表　鈴木　好彦
〈幼児教育・保育〉
東京都新宿区立戸塚第三幼稚園・教諭　三本　敦子

■　第 50 回　　2001 年（平成 13 年）
〈国語教育〉
滋賀県立甲西高等学校・教諭　猪飼由利子
〈算数・数学教育〉
宮城県立ろう学校・教諭　中村　好則
〈理科教育〉
和洋国府台女子高等学校（千葉県）・教諭　栗谷川　晃
〈社会科教育〉
東京都立町田高等学校・教諭　本杉　宏志
〈生活科・総合学習〉
福島県福島市立清水中学校・教諭　柳沼　宏寿
徳島県上勝町立上勝小学校・教諭　藤本　勇二
〈外国語教育〉
女子聖学院中学校高等学校（東京都）・教諭　山下ルミ子
〈児童生徒指導〉
和歌山県和歌山市立貴志中学校・教諭　小笠原登志美
〈学校の指導・運営〉
愛知県額田町立大雨河小学校・教諭　荻野　嘉美
〈地域社会教育活動〉
栃木県立栃木工業高等学校国際
ボランティアネットワーク・代表（生徒会長）　門澤　美治
愛知学泉短期大学　神谷　良夫
愛知市民教育ネット　毛受　芳高
〈障害児教育〉
マジカルトイボックス・代表　吉澤　千恵
〈音楽教育〉
立教小学校（東京都）・教諭　志村　尚美

■　第 51 回　　2002 年（平成 14 年）
〈国語教育〉
静岡県浜松市立高等学校・教諭　堀江マサ子
〈算数・数学教育〉
東京学芸大学教育学部附属世田谷中学校・教諭　羽住　邦男
〈理科教育〉
埼玉県立越谷北高等学校・教諭　清水　龍郎
〈社会科教育〉
山口県大島郡久賀町立椋野小学校・教諭　桑原　真洋
〈生活科・総合学習〉
新潟県新潟市立真砂小学校・教諭　藤橋　一葉
東京都大田区立矢口小学校・教諭　中村　泰之
〈体育の教育〉
岐阜県下呂町立下呂小学校・代表（校長）　今村　豊
〈外国語教育〉
昭和女子大学附属昭和小学校（東京都）・代表　小泉　清裕
〈児童生徒指導〉
埼玉県羽生市立東中学校・教諭　加藤　昭
〈教育カウンセリング〉
大阪府立松原高等学校・教諭　佐谷　力
〈学校の指導・運営〉
東京都板橋区立金沢小学校・校長　高山　厚子
〈地域社会教育活動〉
東京都立市ヶ谷商業高等学校・教諭　千葉　勝吾
〈幼児教育・保育〉
大阪府立芥川高等学校・教諭　高橋　眞子
〈美術教育〉
東京都品川区立第三日野小学校・代表（教諭）　内野　務

■　第 52 回　　2003 年（平成 15 年）
〈国語教育〉
愛知県北設楽郡設楽町立田口小学校・代表（校長）　藤本　好男
〈算数・数学教育〉
田園調布雙葉中学高校（東京都）・教諭　足立久美子
〈理科教育〉
福井県福井市立明倫中学校・教諭　宇野　秀夫
〈社会科教育〉
埼玉県立所沢北高校・教諭　水村　裕
〈生活科・総合学習〉
長野県小県郡丸子町立丸子北中学校・教頭　小室　邦夫
大阪府立城山高等学校・教諭　中村　和幸
〈学校の指導・運営〉
青森県立柏木農業高等学校・教諭　佐藤　晋也
〈地域社会教育活動〉
千葉県立四街道養護学校教諭 ／
NPO 法人あかとんぼ福祉会理事長　松浦　俊弥
〈障害児教育〉
神奈川県立平塚ろう学校・教諭　佐渡　雅人
〈音楽教育〉
千葉大学教育学部附属小・中学校・講師　桐原　礼

■　第 53 回　　2004 年（平成 16 年）
〈国語教育〉
東京都羽村市立羽村第二中学校・教諭　水野　美鈴
〈算数・数学教育〉
新潟県魚沼市学習指導センター・指導主事　松沢　要一
〈理科教育〉
神奈川県三浦市教育委員会学校教育課・指導主事　益田　孝彦
〈社会科教育〉
東京都杉並区立和田中学校・教諭　杉浦　元一
〈生活科・総合学習〉

福岡教育大学附属福岡小学校・教諭　光延正次郎
〈保健・体育の教育〉
茨城県つくば市立竹園西小学校・教諭　新井　清司
〈外国語教育〉
兵庫県伊丹市立伊丹高等学校・教諭　久保　裕視
〈児童生徒指導〉
沖縄県立北部工業高校・教諭　比嘉　靖
〈学校の指導・運営〉
宮城県七ヶ浜町小・中学校校長会・代表（町教育長）　中津川伸二
〈地域社会教育活動〉
長野俊英高等学校郷土研究班（長野県）・代表（顧問）　土屋　光男
神奈川県川崎市臨港中学校区地域教育会議・事務局長　宮越　隆夫
〈幼児教育・保育〉
学校法人大泉菁莪学園ほうや幼稚園（東京都）・副園長　鈴木　朋子
〈美術教育〉
福岡県福岡市立愛宕小学校・教諭　馬場　真弓

■　第 54 回　　2005 年（平成 17 年）
〈国語教育〉
文部科学省海外子女教育指導員（欧州統括）　富澤　敏彦
〈算数・数学教育〉
東京都中野区立桃丘小学校・教諭　吉田　映子
〈理科教育〉
長崎県立長崎西高等学校・教諭　田中　清
〈生活科・総合学習〉
香川県木田郡庵治町立庵治第二小学校・教諭　佐々木広子
今治明徳高等学校矢田分校（愛媛県）・教諭　藤本　文昭
〈保健・体育の教育〉
岩手県種市町立宿戸中学校・校長　渡邉不二夫
〈外国語教育〉
滋賀県立草津東高等学校・教頭　山岡　憲史
〈児童生徒指導〉
東京都多摩市立多摩中学校・校長　山本　修司
〈教育カウンセリング〉
香川県警察本部生活安全部少年課・課長補佐　香川　雅之
〈学校づくり〉
山形県羽黒町立（現鶴岡市立羽黒）第三小学校・前校長　佐々木勝夫
香川県高松市立仏生山小学校・校長　古沢　博美
〈地域社会教育活動〉
山口県立下関商業高等学校・養護教諭　石田　法子
大阪府立農芸高等学校・教諭　石田　真一
〈障害児教育〉
東京都立城南養護学校・代表（研究部主任）　川上　康則

■　第 55 回　　2006 年（平成 18 年）
〈国語教育〉
茨城県下妻市立豊加美小学校・代表（校長）　堤　光子
〈算数・数学教育〉
岩手県花巻市立八重畑小学校・代表（校長）　三田村幸治
〈理科教育〉
香川県立丸亀高等学校・教諭　川村　教一
〈社会科教育〉
岡山県倉敷市立多津美中学校・教諭　野﨑　洋子
〈生活科・総合学習〉
愛知県名古屋市立東築地小学校・教諭　酒井喜八郎
〈児童生徒指導〉
三重県いなべ市立員弁中学校・教諭　出口　省吾
〈教育カウンセリング〉
埼玉県教育局・南部教育事務所・指導主事　児玉　裕子
〈学校づくり〉
長野県豊科高等学校・教諭　穂苅　稔
〈地域社会教育活動〉
NPO 法人霧島食育研究会（鹿児島県）　千葉しのぶ
〈美術教育〉
埼玉県立浦和高等学校・教諭　波田野公一

■　第 56 回　　2007 年（平成 19 年）
〈国語教育〉
宮城県仙台市立北仙台中学校・教諭　中村　大輔
〈算数・数学教育〉
山梨大学教育人間科学部附属中学校・教諭　清水　宏幸
〈理科教育〉
山口県立厚狭高等学校・教諭　児玉伊智郎
〈社会科教育〉
慶應義塾湘南藤沢中・高等部（神奈川県）・講師　金杉　朋子
〈生活科・総合学習〉
千葉県千葉市立高洲第二小学校・教諭　山嵜　早苗
〈保健・体育の教育〉
奈良県生駒市立あすか野小学校・教諭　前田　香織
〈外国語教育〉
福岡県大野城市立大野南小学校・教諭　上原　明子
〈児童生徒指導〉
高知市立横浜小学校・教諭　汲田喜代子
〈学校づくり〉
東京都港区立港陽小学校・校長　角田美枝子
〈地域社会教育活動〉
阿波木偶人形会館（徳島県）・館長　多田　健二
〈障害児教育〉
鳥取県鳥取市立浜坂小学校・教諭　鈴木　伝男
〈音楽教育〉
埼玉県さいたま市立本太中学校・教諭　森角由希子

■　第 57 回　　2008 年（平成 20 年）
〈国語教育〉
兵庫県三田市立けやき台小学校・教諭　伊崎　一夫
〈算数・数学教育〉
東京学芸大世田谷中学校・教諭　山崎　浩二
〈社会科教育〉
青山学院高等部・教諭　松本　通孝
成蹊中学・高等学校・教諭　日髙　智彦
〈生活科・総合学習〉
愛知県西尾市立寺津小学校・校長　高橋正治
〈保健・体育の教育〉
埼玉県越谷市立鷺後小学校・教諭　岩本　利夫
〈外国語教育〉
岩手県一関市立一関中学校英語科代表　教頭・千田幸範
及川　千佳
佐藤　久美
小野寺明子
富山　彩
〈児童生徒指導〉
滋賀県長浜市立西中学校・教諭　澤　豊治
〈学校づくり〉
東京都練馬区立豊玉南小学校代表（研究主任担当）　遠田　公博
〈地域社会教育活動〉
青森県立八戸第二養護学校・教諭　西里　俊文
〈美術教育〉
川崎市立はるひ野小中学校教諭　川合　克彦

■　第 58 回　　2009 年（平成 21 年）
〈国語教育〉
千葉大学教育学部付属小学校教諭　大木　圭
〈算数・数学教育〉
山口県立岩国高等学校教諭　西元　教善
〈理科教育〉
青山学院高等部教諭　池田　敏
〈社会科教育〉
本郷学園本郷中学高等学校教諭　横山　省一

〈生活科・総合学習〉
兵庫県篠山市立大山小学校教諭　酒井　達哉
〈教育カウンセリング〉
徳島市立上八万小学校カウンセリング研究会代表徳島市立上八万小学校教諭　辻　映子
〈学校づくり〉
静岡県立磐田農業高等学校代表　塚本行博校長
〈地域社会教育活動〉
大森学園高等学校 生徒会ボランティア教諭　安達　毅
〈地域社会教育活動〉
NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター　辻英之代表理事
梶さち子会長
〈特別支援教育〉
吹田市立教育センター主幹　森田　安徳
吹田市立吹田第三小学校指導教諭　辻本　裕子
〈音楽教育〉
川崎市立藤崎小学校総括教諭　志村　恵子

■　第59回　　2010年（平成22年）
〈国語教育〉
岡山県赤磐市立吉井中学校・教諭　北川久美子
〈算数・数学教育〉
高知県土佐教育研究会　久保　博行
松下　泰三
室戸市立吉良川小学校・教諭　矢田　敦之
〈理科教育〉
石川県立翠星高等学校・教諭　宮下正司
〈社会科教育〉
大阪府高槻中学・高等学校・教諭　楊田　龍明
〈生活科・総合学習〉
新潟県長岡市立上組小学校・教諭　水谷　徹平
〈外国語教育〉
ノートルダム学院小学校（京都市）・教頭　行田　隆一
〈児童生徒指導〉
東京都府中市立府中第三中学校・元教諭　高橋　芳宏
〈教育カウンセリング〉
東京女学館中学高等学校・教育相談室長　渡邉　正雄
〈学校づくり〉
学校法人明晴学園・教頭　樫　陽子
〈地域社会教育活動〉
鹿児島市立清水小学校・前校長　池田　昭夫
清水小学校水泳同好会・前会長　有薗　良一
〈幼児教育・保育〉
社会福祉法人高原福祉会・理事長　高橋　保子
〈美術教育〉
東京都多摩市立北豊ヶ丘小学校・主任教諭　柴﨑　裕

■　第60回　　2011年（平成23年）
〈国語教育〉
埼玉県立浦和第一女子高校・講師　長島　猛人
〈算数・数学教育〉
大阪教育大学付属池田中学校数学科代表・（副校長）　上原　昭三
（教諭）　山戸　正啓
〈社会科教育〉
興南学園興南中学校（那覇市）・教諭　門林　良和
〈生活科・総合学習〉
茨城県水戸市立稲荷第一小学校・教諭　池田　裕子
〈外国語教育〉
愛知県豊橋市立青陵中学校・教諭　桃野己恵子
〈学校づくり〉
静岡県浜松市立光明小学校・元校長　河島　秀夫
〈地域社会教育活動〉
宇都宮市立旭中学校・教諭　田崎　透
〈特別支援教育〉
福岡県久留米市立小森野小学校・教頭　山田　俊之
〈幼児教育・保育〉
福井県教育庁地域サイエンス博士　山田　儀一
〈音楽教育〉
千葉市立院内小学校・教諭　桶田　加代
〈美術教育〉
新潟県阿賀野市立笹岡小学校・教頭　青木　善治

■　第61回　　2012年（平成24年）
〈国語教育〉
栃木県日光市立落合西小学校・教諭　見目　宗弘
〈算数・数学教育〉
志の算数教育研究会（東京都）・代表　盛山　隆雄
加固希支男
山本　大貴
松瀬　仁
〈理科教育〉
出雲科学館（島根県）・名誉館長　曽我部國久
〈生活科・総合学習〉
鹿児島県奄美市立伊津部小学校・教諭　中島賢太郎
〈外国語教育〉
大阪女学院中学・高等学校（大阪市）・教諭　中藤　優子
〈児童生徒指導〉
福井県鯖江市・立待小学校・教諭　岩堀　美雪
〈学校づくり〉
大阪府立東百舌鳥高等学校・教諭　稲川　孝司
〈地域社会教育活動〉
ウーマンズフォーラム魚（東京都）・代表　白石ユリ子
〈特別支援教育〉
神奈川県立金沢養護学校・副校長　渡邉　昭宏
〈音楽教育〉
リトミック・ピアノ教室（名古屋市）・主宰　浦浜　麗名

■　第62回　　2013年（平成25年）
〈国語教育〉
神奈川県大和市立西鶴間小学校・教諭　山根　幸一
〈算数・数学教育〉
福井県越前市立吉野小学校・教諭　宮脇　真一
〈理科教育〉
岡山県倉敷市立多津美中学校・教諭　難波　治彦
〈社会科教育〉
千葉市立有吉小学校・教諭　江崎　広章
〈保健・体育の教育〉
石川県加賀市立錦城小学校・代表（教諭）　釜親美和子
〈外国語教育〉
鳥取県立鳥取西高校・教諭　辻中　孝彦
〈教育カウンセリング〉
愛知県碧南市立大浜小学校・教諭　長田　洋一
〈学校づくり〉
神奈川県立綾瀬西高校・総括教諭　竹本弥生
〈地域社会教育活動〉
神奈川県立中央農業高校・草花部顧問　高橋晋太郎
〈幼児教育・保育〉
愛知県豊田市立平山こども園園内研究会・代表（保育士）　渡辺　紫乃
〈美術教育〉
佛教大学教育学部特任教授　橋本　忠和

■　第63回　　2014年（平成26年）
〈国語教育〉
岐阜県加茂郡白川町立白川小学校・代表（校長）　宮内智鶴子
〈算数・数学教育〉
長野県屋代高等学校・附属中学校・教諭　横澤　克彦
〈理科教育〉
福島県福島市立渡利中学校・教諭　菅野　俊幸

〈生活科・総合学習〉
教育研究グループShinka（兵庫県）
代表　兵庫県三田市立武庫小学校・教諭　荒井　隆一
教諭　縄手　良孝
教諭　谷口　雅子
〈外国語教育〉
徳島県美馬市立江原中学校・教諭　福田　恵
〈児童生徒指導〉
群馬県高崎市教育委員会・教育長　飯野　眞幸
〈教育カウンセリング〉
新潟県燕市立燕中学校・教諭　吉澤　孝子
〈学校づくり〉
横浜市立白幡小学校 平成23・24・25年度ＰＴＡ会長　藤川　優
〈地域社会教育活動〉
公益社団法人群馬県助産師会
代表　同会会長　助産師　鈴木助産院院長　鈴木せい子
〈特別支援教育〉
福井県立嶺南東特別支援学校・教諭　伊藤ゆかり
〈音楽教育〉
千葉県鎌ケ谷市立西部小学校・教諭　鈴木　智恵

■　第64回　　2015年（平成27年）
〈国語教育〉
茨城県結城市立江川北小学校・代表（研究主任）　小倉　康雄
〈算数・数学教育〉
東京大学教育学部付属中等教育学校・教諭　小張　朝子
〈社会科教育〉
北海道函館市立亀田中学校・教諭　川端　裕介
〈生活科・総合学習〉
広島県福山市立常金中学校・代表（校長）　和田　啓介
〈保健・体育の教育〉
岐阜県大垣市立綾里小学校・代表（校長）　前田　和典
〈地域社会教育活動〉
千葉県立成田西陵高等学校・教諭　清水　敏夫
認定特定非営利活動法人ふじみの国際交流センター・代表（理事長）　石井ナナエ
〈幼児教育・保育〉
学校法人あけぼの学院認定こども園武庫愛の園幼稚園・代表（園長）　濱名　清美
〈美術教育〉
福井県観光営業部文化振興課・主任　牧井　正人

■　第65回　　2016年（平成28年）
〈国語教育〉
兵庫県立神戸甲北高等学校・教諭　荒川　稔
〈算数・数学教育〉
広島大学附属中・高等学校・教諭　橋本　三嗣
〈理科教育〉
慶應義塾幼稚舎・教諭　相場　博明
〈社会科教育〉
埼玉県立いずみ高等学校・教諭　華井　裕隆
〈生活科・総合学習〉
栃木県小山市立福良小学校・代表（校長）　中島　利雄
〈児童生徒指導〉
大阪府堺市立三原台中学校・代表（教諭）　木田　哲生
〈地域社会教育活動〉
認定特定非営利活動法人NPO高知市民会議・代表（プロジェクトマネージャー）　尾崎　昭仁
〈特別支援教育〉
千葉県立特別支援学校流山高等学園・主幹教諭　野尻　浩

■　第66回　　2017年（平成29年）
〈理科教育〉
秋田県由利本荘市立大内中学校・教諭　佐藤　由美
〈社会科教育〉
宮崎県立宮崎農業高校・教諭　川末　修
〈健康・体力づくり〉
岡山市立西大寺中学校・代表（校長）　梶原　敏
〈外国語・異文化理解〉
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校・教諭　田中　里美
〈児童生徒指導〉
茨城県立水戸工業高校・教諭　金澤　容子
〈カリキュラム・学校づくり〉
ノートルダム清心学園清心女子高校（岡山県倉敷市）・代表（南九州大学教授）　秋山　繁治
〈地域社会教育活動〉
大阪府立堺工科高校定時制の課程・代表（堺工科高校首席）　保田　光徳
〈NIE〉
まわしよみ新聞実行委員会（大阪市）・代表（観光家／コモンズ・デザイナー）　陸奥　賢
〈幼児教育・保育〉
社会福祉法人峰悠会おおぞら保育園（群馬県桐生市）・保育士　小林真理子
〈美術教育〉
「地域の色・自分の色」実行委員会（大分市）・代表（委員長）　照山　龍治

■　第67回　　2018年（平成30年）
〈算数・数学教育〉
茨城県立竜ヶ崎第一高等学校・代表（教諭）　小林　徹也
〈理科教育〉
ＮＰＯ法人日立理科クラブ・代表（代表理事）　瀧澤　照廣
〈社会科教育〉
千葉県立白井高等学校・教諭　小島江津子
〈健康・体力づくり〉
熊本県山鹿市立大道小学校・教頭　百田　止水
〈外国語・異文化理解〉
京都府城陽市立北城陽中学校・教諭　内貴真美子
〈カリキュラム・学校づくり〉
福井県立武生高等学校・代表（教諭）　辻﨑　千尋
〈地域社会教育活動〉
茨城県立取手第一高等学校・教諭　大滝　修
〈NIE〉
熊本県八代市立郡築小学校・代表（校長）　中野　聖規
〈特別支援教育〉
東京都立川市立第七小学校・代表（特別支援教室担当）　菅原　眞弓

読売教育賞に関するお問い合わせ、募集要項のご請求は、読売新聞東京本社編集局「読売教育賞」係（TEL03-6739-6713）にお願いします。
また、ヨミウリ・オンライン（https://info.yomiuri.co.jp/contest/edu/kyoiku.html）にも募集期間中には要項を掲載しています。